メートルを鯨尺に換算した表

一糎 .3分	二糎 .5分	三糎 .7分	四糎 1.分	五糎 1.2分	六糎 1.5分	七糎 1.7分	八糎 2.分	九糎 2.3分	一〇糎 2.5分
一粍 2.5分	二粍 5.分	三粍 8.分	四粍 10.分	五粍 13.分	六粍 16分	七粍 18.5分	八粍 21.分	九粍 24.分	一〇粍 26.分
一糎 29.分	一二糎 32.分	一三糎 34.5分	一四糎 37.分	一五糎 40.分	一六糎 42.分	一七糎 45.分	一八糎 47.5分	一九糎 50.分	二〇糎 53.分
二一糎 55.分	二二糎 58.分	二三糎 60.分	二四糎 63.分	二五糎 66.分	二六糎 68.5分	二七糎 71.分	二八糎 74.分	二九糎 77.分	三〇糎 79.分
三一糎 82.分	三二糎 84.5分	三三糎 87.分	三四糎 90.分	三五糎 92.分	三六糎 95.分	三七糎 98.分	三八糎 100.分	三九糎 103.分	四〇糎 106.分
四一糎 108.分	四二糎 111.分	四三糎 113.5分	四四糎 116.分	四五糎 119.分	四六糎 121.分	四七糎 124.分	四八糎 127.分	四九糎 129.分	五〇糎 132.分
五一糎 135.分	五二糎 137.分	五三糎 140.分	五四糎 143.分	五五糎 145.分	五六糎 148.分	五七糎 150.5分	五八糎 153.分	五九糎 156.分	六〇糎 158.分
六一糎 161.分	六二糎 164.分	六三糎 166.分	六四糎 169.分	六五糎 172.分	六六糎 174.分	六七糎 177.分	六八糎 180.分	六九糎 182.分	七〇糎 185.分
七一糎 187.分	七二糎 190.分	七三糎 193.分	七四糎 195.分	七五糎 198.分	七六糎 200.分	七七糎 203.分	七八糎 206.分	七九糎 209.分	八〇糎 211.分
八一糎 213.分	八二糎 217.分	八三糎 219.分	八四糎 222.分	八五糎 224.分	八六糎 227.分	八七糎 230.分	八八糎 232.分	八九糎 235.分	九〇糎 238.分
九一糎 240.分	九二糎 243.分	九三糎 245.分	九四糎 248.分	九五糎 251.分	九六糎 253.分	九七糎 256.分	九八糎 259.分	九九糎 261.分	一〇〇糎 264.分
一米 264.分	二米 528.分	三米 792.分	四米1056.分	五米1120.分	六米1584.分	七米1848.分	八米2112.分	九米2376.分	一〇米2640.分
一一米2904.分	一二米3168.分	一三米3432.分	一四米3692.分	一五米3760.分	一六米4224.分	一七米4488.分	一八米4752.分	一九米5016.分	二〇米5280.分

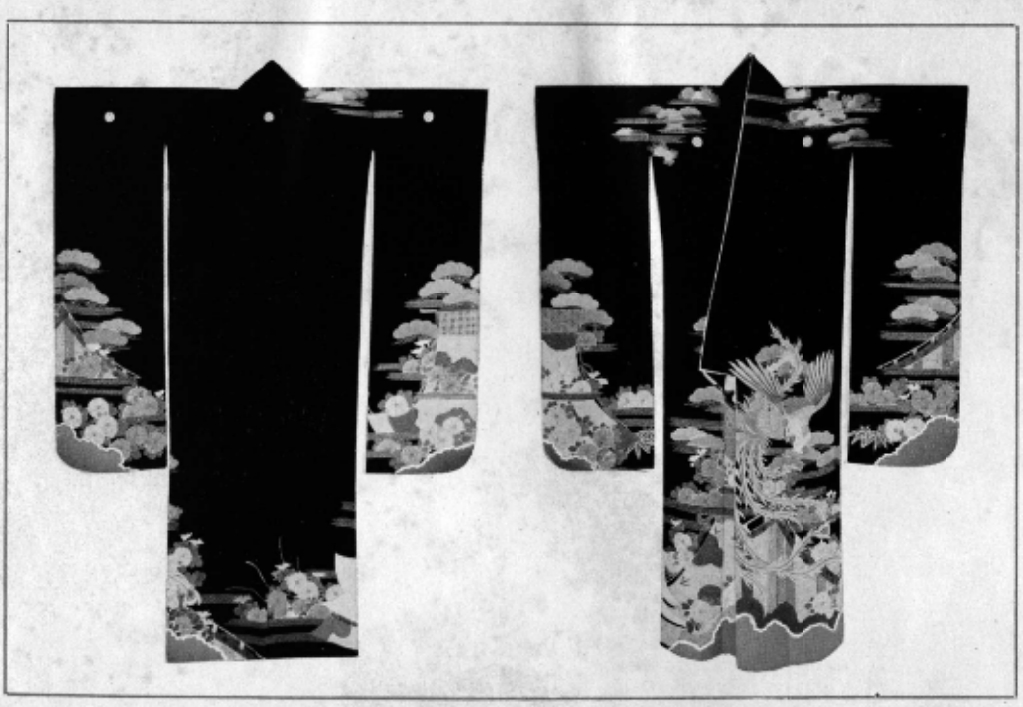
593.11
089-Z

現代裁縫全書

大妻技藝学校
大妻高等女学校 校長 大妻コタカ著

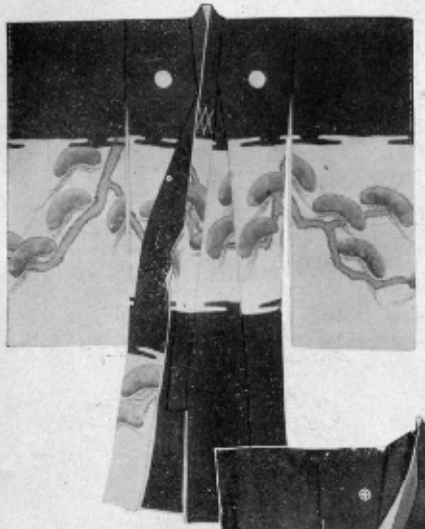
東京 研文書院

国立国会図書館
東京本館
昭和十九年四月
5525
図書



（後）　振袖島原模様　（前）

繼々羽繪　　樣模褄戸江袖留



宮詣着覽斗目模樣

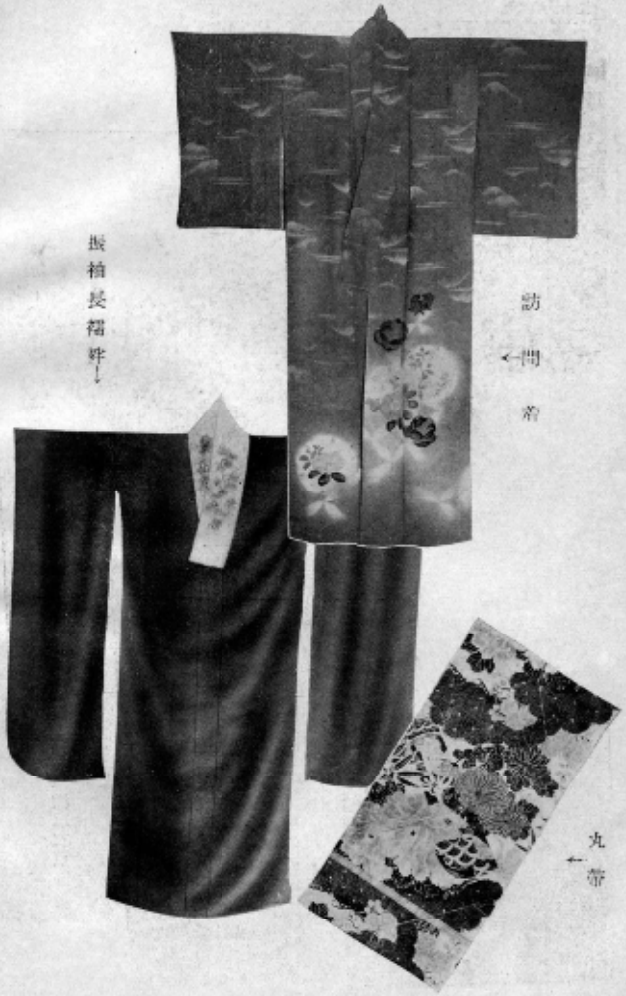
留袖江戶褄模樣單衣重

紗袱小

七五三祝着用
友禅模様上着

改良帯

同上　鹿の子模様下着



振袖長襦袢

訪問着

丸帯

はしがき

一、裁縫に熟達すると云ふことは、我國では古くから婦徳の一として數へられて居りまして、苟しくも婦人の一日もゆるかせにする事の出來ない業とされて居りました。憶ふに裁縫を學び、また其の技に長ずると云ふことは、婦人自らの容姿を整へるばかりでなく、家族全體の風格を整へ、高尚にして端正な姿の美を保たせる爲めに必要缺くべからざる事であります。古の諺に「馬子にも衣裝かみかたち」と申します通り、服裝が整つて居りますと、自ら人品も上り一段と奥床かしさを增すものであります。

一、本書は和服裁縫の基礎から現代用ひられてゐるその全般に亘つて、詳細に丁寧に、而も秩序的に、説明し、讀めば直ちに了解出來るやう多數の挿畫を入れましたので、どんな初學者でも本書に依つて容易に裁縫の知識を修得することが出來ます。

一、從來の裁縫書に於て、一度も試みられる事のなかつた繰廻しものにも充分の注意を拂ひました、日本の裁縫は新らしい反物のみを裁縫することよりは、寧ろ古いものゝ仕立替へに其の必要を感ずる場合が多いのでありますから、各種の場合に應じた手際のよい繰廻しの方法を知つて置くことは、特に必要であらうと思ひます。

一、昨今私共の用ひて居る服裝は我國在來のものばかりでなく、各種の新案改良ものが著しく用ひられるやうになつて居りますので、本書はその方面にも考へを及ぼしまして、材料と時間の節約を主とした、そして現代人の要求にぴつたりと會ふやう工夫した、これらの新案改良衣服の裁縫を多數に加へて置きました。此の方面の參考として亦重寶する所が多いと思ひます。

一、本書は多年の、教授上の實際的體驗によつて得た和服裁縫の急所に就て丁寧に圖解し、又各人の體格に就ての一々の研究を發表いたしましたから、どんな體格の人の着物をも直ちに立派に仕立て上げることが出來ます。

一、着物を仕立てるのみでなく、其の保存に必要な各種の常識、及び着

物の着方に至るまで、周到な注意をもつて、記述いたしましたから、各種の儀式などの場合に用ふる禮裝の參考にもなります。

一、全巻を通じてメートル尺を用ひましたが、鯨尺との換算の便宜を思ひまして、メートルを鯨尺に、また鯨尺をメートルに換算した表を附して置きました。而し將來は必ずメートル尺に統一されるのでありますから、可成メートル尺を使用せられることを望みます。

著者識

現代裁縫全書　目次

一、基礎の部

基礎縫

基礎縫について……一
運針……二
糸の結び方……三
糸の留方……四
糸の継ぎ方……五
縫方の種類とその方法……六
襞のかけ方……一〇
綴方……一二

仕立てる前の準備

布しらべ……一六
總丈を調べる……一六
積り方……一六
尺度のあて方……一七
縫代の見方……一七
裁ち方……一八
布の注意……一八
縞、柄による裁方の注意……一九

標の附け方……一九
標附の種類……二一
縫方ときせ……二三

仕上げ方の注意

針と糸の始末……二二
寸法あらため……二二
仕上げ……二三
歪のおき方……二三

一般の心得

布地の幅……二四
布地の丈……二五

二、襦袢の部

布地の大切な整理法……二五
用具について……二六

衣類の疊み方

着物の疊み方……二六
羽織の疊み方……二八
長着の夜具疊み……二九
長襦袢の疊み方……三〇
コート類の疊み方……三一
帶の疊み方……三二
袴の疊み方……三四
衣類の藏ひ方……三五

肌襦袢について……四七
本裁女物肌襦袢……四七
小裁、一つ身襦袢の裁方積方……五二
中裁、四つ身襦袢の裁方積方……五四
本裁肌襦袢の裁方積方……五五
大人物改良肌襦袢（その一）……五六
同（その二）……五七
本裁女物單衣長襦袢……五九
本裁女物袷長襦袢……六九

三、單衣の部

本裁女物單衣……九八
本裁男物單衣……一〇七
四つ身單衣……一一四
三つ身單衣……一二一
本裁男物袷長襦袢……一二二
四ツ身袷長襦袢……一二四
振袖袷長襦袢……一二六
女物長襦袢の上手な仕立方急所……一二五
下着の上手な仕立方急所……一二五
改良長襦袢……一二六
美容衿（その一）……一二二
同（その二）……一二五
一つ身單衣……一二四
薄物單衣……一二九
セルの仕立方……一三四
單衣重ね……一三六

單衣半重ね下着……一四一

四、袷の部

本裁女物袷……一四五
本裁男物袷……一五二
四つ身元縁袖袷……一五七
三つ身袷……一六二
一つ身綿入……一六五
小袖……一七四
小袖について……一七四
裾廻し附のもの……
紋附及裾模様附のもの……
重ね物……一七六
下着寸法のつめ方……
無垢の裁ち方……
無垢小物の裁ち方四種……
標附の注意……
振袖の標附け方……
裾廻し無垢の標附……
袖、振袖、身頃模様の縫ひ合せ方……
胴抜物……一八四
裾廻し布の裁ち方……
胴抜の裁ち方……
標附……
縫ひ方……
口綿本比翼……一八六
附比翼……一九四

男物丹前……一九七

五、羽織の部

羽織について……一九九
本裁女物袷羽織……一九九
本裁男物袷羽織……二〇七
紋について……二一四
四つ身筒袖袷羽織……二一五
四つ身元縁袖綿入羽織……二一九

六、半纏の部

半纏について……二二五
もぢり袖(鯉口)半纏……二二五

七、被布の部

負半纏……二四〇
一つ身袖無羽織(綿入)……二二五
改良袖無綿入(その一)……二三一
同(その二)……二三二
本裁男物單衣羽織……二三五
本裁女物單衣羽織……二三三

本裁女物綿入被布……二五五
四つ身綿入被布……二六〇

八、合羽、コートの部

女物單衣合羽……二六六
女物道行袷給半コート……二七二

九、帶の部

帶について……二八八
腹合帶……二八八
輕裝帶（その一）……二九四
同（その二）……二九七
同（その三）……二九九

一〇、袴の部

小裁被布……二六四
本裁長コート……二七七
ヘチマ袷コート……二八五
女物丸帶……三〇一
子供帶……三〇四
男帶……三〇六
伊達じめ……三〇八
男縞無袴……三二八
中裁、小裁男袴……三四二

女袴……三一〇
男袴（大人物）……三二四

一一、夜具の部

綿の種類……三三六
布地……三四七
夜具一組の仕立方……三四八
掛蒲團及敷蒲團……三五〇
敷布及カバー……三五二
鏡型蒲團……三五四
改良夜具……三五六
座蒲團の仕立方……三七〇
折り疊み式藁蒲團……三七三
膝蒲團（その一）……三七七
同（その二）……三七八
夜具の手入と保存法……三八〇

一二、赤ちやん物の部

肌襦袢（その一）……三八一
同（その二）……三八二
長襦袢……三八五
綿入胴着（その一）……三八七
同（その二）……三九〇
綿入產着……三九二

改良一つ身袷（その一）……四九四
同　（その二）……四九七
涎掛け……五〇〇
掻巻型おくるみ……五〇二

一三、子供用小物の部

一二歳用寝冷え知らず……四一七
二三歳用寝冷え知らず……四一八
三四歳女児用寝冷え知らず……四一九
四五歳用和洋兼用のコンビネーション……四二二
一二歳用夏着……四二六
二三歳用エプロン（その一）……四二七

一四、雑の部

割烹前掛……四四六
鈎鐘型おくるみ……五〇七
赤ちゃん夜具一揃……五一一
改良夜具……五一二
おむつカバー……五一四
同　（その二）……四二九
三四歳用エプロン……四三一
四五歳用エプロン……四三四
六七歳用エプロン……四三六
七八歳向男女児の上被……四三九
子供の食事用エプロン……四四四
サロンエプロン……四四〇

婦人事務服……四五三
防寒用下着（その一）……四五六
同　（その二）……四五八
同　（その三）……四五九
真綿の防寒肌着……四六二
袋真綿の襦袢の作り方……四六三
角真綿の羽織下……四六二
足袋下……四六四
パンツ……四六六
防寒用長胴着……四六六
汗よけ兼用のお乳おさへ……四六八
襦袢裾除け……四七〇
腰引……四七二
単腰引……四七七
半腰引……四七七
江戸腹掛……四七九
脚絆……四八二
足袋……四八六
琴の袋……四八九
山田流の琴袋……四九〇
生田流の琴袋……四九二
稽古琴の袋……四九三
琵琶の袋……四九四
三味線の袋……四九五
鏡掛……四九六
暖簾……四九八
水引暖簾……四九八
日除暖簾……四九九
鴨足暖簾……五〇〇
裙紗……五〇一

鯨幕……五〇二
幟……五〇三
國旗……五〇四

一五、繰廻しの部

上手な繰廻しの仕方について……五一四
羽織を長着に……五一五
長着を羽織に……五一七
古帶皮の利用法……五一九
羽織を袴に……五二一
馬乘袴の布の取り方……五二一
襠無袴の布の取り方……五二二
上手な布の繼ぎ方、接ぎ方について……五二二
片返し接ぎ……五二四
人形着物の寸法割り出し方……五〇五
蚊帳……五〇七
改良裁ねまき……五一〇
割り接ぎ……五二四
掛け接ぎ……五二五
突合せ接ぎ……五二六
色紙繼ぎ……五二七
刺繼ぎ……五二八
穴繼ぎ……五二八
をり繼ぎ……五三〇
ふせ繼ぎ……五三〇
かゞり繼ぎ……五三一

附、衣服仕立方の急所と秘訣

羽織について……五三三
丈の定め方……五三三
前身の皺の取り方……五三四
衿の返りをよくする仕方……五三四
着物について……五三六
肥えた男物長着……五三六
痩せた男物長着……五三八
肥えた女物長着……五三九
痩せた女物長着……五四〇
袂丸味の上手な作り方……五四一
表裏の色が極端に違ふ時の袵綴……五四一
男長着の衽にも揚を……五四二
繰越をつける着物の衿肩明……五四二
一つ身綿入の衿附を具合よくする仕方……五四二
無双織袴の仕立方……五四三
上手な揚の仕方……五四三
作法上から見た着物の着方……五四六
汚點拔の仕方……五四八

——目次終り——

現代裁縫全書

大妻コタカ著

一、基礎の部

基礎縫

基礎縫について

お裁縫の仕上げを綺麗にするのには、その基礎となるべき縫方の練習が充分出來てゐなければなりませぬ。昔の仕立屋さんはお弟子に教へるのに「付紐一年、袖一年」とか申して初めのうちは座蒲の付紐ばかり縫はせたりまた着物の袖ばかりを縫はせたりしたものです。これは要するに運針の稽古のためでありまして、紐や袖の練習によつて基礎縫をしつかりさせられたもので、丁度現今の運針用布を用ひて基礎縫の練習をするのと同樣であります。どんな方法を用ひるにしても、基礎縫がしつかりと出來なければ綺麗な裁縫は出來ません。

運針

用布　練習用布は初め晒木綿一〇〇糎位を用意し、練習の進むにつれて三河木綿、紅絹等各種の材料を用ひどんな種類の材料でも容易に縫ふことの出來る準備が肝要です。

素縫と本縫　運針の練習順序として先づ素縫から初めます。

素縫と申しますのは、針孔に糸を通して二重になし、二〇糎位の長さとして糸の終りを結ばずに縫つてゆく方法です。

本縫は用布よりも一〇糎位糸を長くして糸の終りを結んで縫ふ仕方を申します。

縫方　まづ姿勢をよく正しく座つて下腹に力を入れ、眼から布までの距離は三〇糎、胸からは一五糎位を離し、兩手の開きは一五糎位にして縫ふのがよろしい。この態度がきちんとしてゐないと針目がゆがんで千鳥足のやうになります。

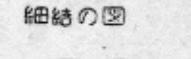
先づ右手の中指に指貫をはめて、食指と拇指で（針は指先から三粍位出る程度の長さのものが適當であります）から指の長さによつて適當と思はれる長さの針を選ぶ）糸の通つた針を持ち、針のめどの方を指貫にあてゝ針の先を食指と拇指の間に挟み針の先を布の上へ下へと刺して用布を縫ひます。針目の大小、縫目の曲直等に注意しながら針を平に押します。この場合手は左右平均に動かし、針は用布に出來るだけ直角に刺す樣に注意いたします。針が左の指さきで來ましたらは糸をこいてまた前と同樣の要領で縫ひます。縫ひ終つたら針を抜いて全體に耳り糸こきを充分にします。そして馴れるに從つて段々に早く縫ふ練習をいたします。高等女學校一年生を標準として一分間に一〇〇糎乃至一五〇糎位の早さ迄は縫へるものです。

糸の結び方

細結　糸の兩端を取つて圖のやうに結び合せる仕方で、これは袷、綿入等の袖口、八つ口、袖附などの留をする時、及び襞などの中途で糸を繼ぐのに用ひます。

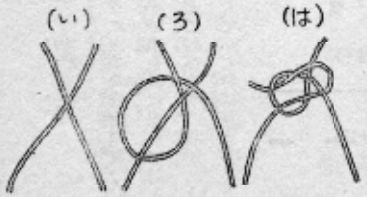
留結　糸の端を食指の先に卷いて拇指の腹でその糸を捻り乍ら結ぶ仕方で、圖のやうに結ぶと玉になりますから玉結とも云ひます。これは縫ひ初めに使ひます。

機結　糸の兩端を取り、右を下に、左を上に交叉させて（い）圖に、左の食指の上におき左拇指で押へ、右の糸を廻して左の糸の下から右端の糸の上に出し（ろ）圖、右端の糸を輪の中に入れます。（は）圖、そしてその先を左の拇指で押へ、右の糸を引き締びます。縫、平縫等中途で糸をつなぐ



第一圖　細結の圖

第二圖　留結の圖



第三圖　第四圖　機結の圖

時に用ひます。

糸の留方

打留　圖のやうに左手の指の腹で針を布に押へつけ、右手で糸を針に巻いて針を引出し、左手で引締めて結びます。場所によつては一針縫ひかへしてから打留をすることもあります。抄留、返留以外の場所には全部この留方を用ひます。

第四圖　打ち留の圖

抄留　縫ひ終りで、縦か横か又は斜に布を極く僅か抄つてその針へ打留のやうに縫糸を針にからんで針を抜き出して三、四糎位縫ひかへしておく仕方を申します。單衣の袖口、袖附、衿先、身八つ口などにはこの留めかたを用ひます。第五圖は縦留のしかた、六圖は横留のしかた、七圖は斜留のしかたです。

第五圖　抄ひ留の圖（縦）

第六圖　抄ひ留の圖（横）

第七圖　抄ひ留の圖（斜）

返し留　縫ひ終りを一針返して三糎程縫ひ戻して留める仕方で、これは背縫、脇縫、衽附などの裾に用ひられます。

門留　縫糸または少し太目の糸を兩方の布にまたがせて（い）圖のやうに糸を二回ほど抜き出し、（ろ）圖のやうに兩布に跨つた糸の幅だけになるまで糸をくらせては（は）圖のやうに最後の糸を裏に出してしつかりと留めるしかたで、（に）圖はその仕上りの圖であります。この方法は單衣やコートの身八つ口、袴の脇などの綻びを防ぐために用ひます。

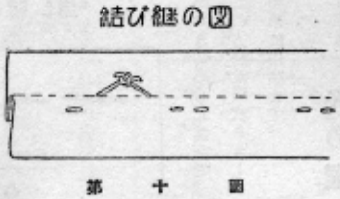
第八圖　返し留の圖

第九圖　門留の圖

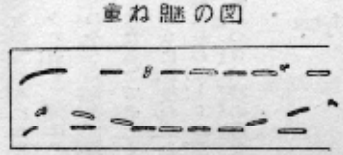
糸の繼ぎ方

結繼　縫糸に繼ぐ仕方で、これは主に耳絎や襟の中途で糸を繼ぎ足す場合に用ふる方法であります。

重縫　縫ひ合せの中途で糸の無くなつた時その糸は折曲として更に新らしい糸の端を留結びとし、六、糎位戻つた處から前の糸に割り込んで縫ひ重ねる仕方です（第十一圖の上）。又圖下のやうに縫ひ終りや、縫ひ初めの糸を縫代へ寄せて一目割にすることもあります。背縫、脇縫、衽附、衿附等の中途で糸の終つた時に用ひられる縫ぎかたです。



第十圖



第十一圖

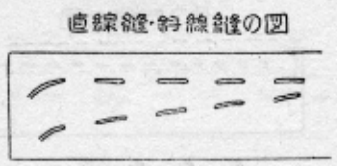
第十二圖

撚縫　獨がうとする糸の端を二つに割り、割つた糸の一方に元の糸を四、五糎程撚り合せ、更に他の一方に撚り合せて用ひます。主に絹物の縫ひ合せや紐つけの場合の糸縫ぎに用ひられ、非常に具合のよいものであります。

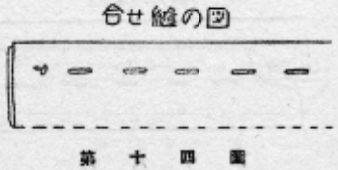
縫方の種類とその方法

直線縫　布目に對して眞直ぐに縫ふ場合に用ふる縫ひ方で、衣類の大部分にこの方法が用ひられて居ります。文字の通りキチンと針目を揃へ、裏表同樣に縫ひ、針は出來るだけ直角に布に刺してゆきます。以下針の運びに對する注意はどの縫ひ方に對しても同樣です。

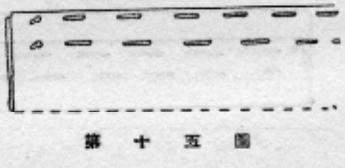
斜線縫　斜に縫ふ仕方で、着物の衽附、衿附、袖附、羽織の繰附等に用ひられます。衣服の大切な部分にはこの縫方が割合に多く用ひられて居るのであります。



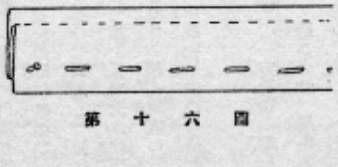
第十三圖



第十四圖



第十五圖



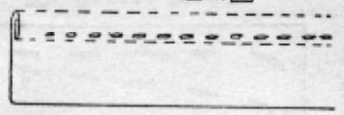
第十六圖

合せ縫　布を中表に二枚合せて縫ふ縫方で、直線縫と同にやうに廣く應用されて居ります。

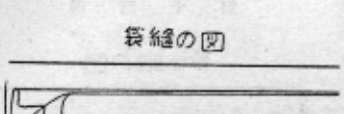
二重縫　合せ縫ののち縫目の開かないやうに本縫にならつて端の方を縫ひ合せる仕方で本裁單衣の背縫などにはこの縫方が用ひられます。

摘み縫　布を切らずに摘んで縫ふ仕方で、四つ身の衽、大幅物の背縫などに用ひます。

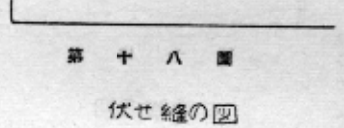
三つ折縫　布の端を二度折つて裏折り代の端を普通に縫ふ仕方で、風呂敷の周圍などのやうな處を縫ふのに用ひます。


第十七圖　三つ折縫の圖

袋縫　初めに外表に布を合せて、五粍の縫代に縫ひ、淺くきせをかけて裏返し、更に普通の縫代で裏を見て縫ふ仕方で單衣物の袖下、絹布單衣の背縫、小裁、中裁物單衣の背縫等に應用されます。


第十八圖　袋縫の圖

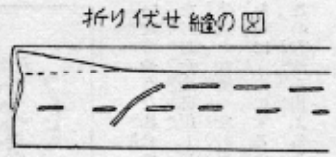
伏せ縫　一方の布の端を三粍位控へて縫ひ合せ、縫込みの狹い方へ折つて裏には一糎位の針目を出し、縫込みの端を伏せておく仕方で、風呂敷、幕などの接ぎ合せの耳等に用ひられます。

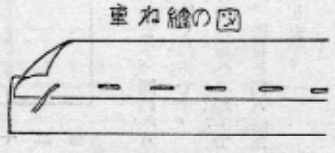

第十九圖　伏せ縫の圖

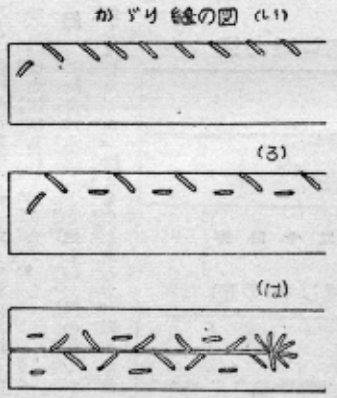
折伏せ縫　布の一方を五粍位控へて縫合せ、縫込みの少ない方へ折を付け、長い上の布を折つて控へた布一杯にその上を伏縫の時と同樣に縫ひます。裏のつかないもの、縫代を綺麗に見せる場合ことに布の裁目の場合

時などに用ひます。

重ね縫　裏袖の幅の足りない時に袖口の布の下になる方へ足す時、又縫の芯が足りないやうな場合により用ひられる縫ひ方で、裁目のまゝ縫代を一糎位重ねてブツ〳〵と平縫ひする仕方で、二度位ひ縫ひますと丈夫になります。見えない所のはぎ合せ目などに應用しますと、縫ぎ目が厚くならないでよいものです。


第二十圖　折伏せ縫の圖


第二十一圖　重ね縫の圖


第二十二圖　かがり縫の圖　(イ)　(ロ)　(ハ)

かがり縫　裁ち目のほつれを防ぐために、裁ちめを巻きながら縫つてゆく方法で、毛織物の縫ち目には必ず使用ひられます。その他着物の袷肩明、鉤衽、などのやうに縫目のほつれ易い所に用ひられます。

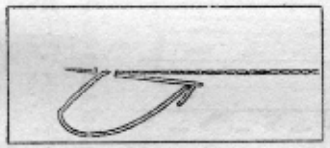
突合せ縫の図

第二十三圖

突合せ縫　裁ち目のまゝ布を双方から突合せて四粍の深さに針を交互に布の端にかけて縫ひ合せる方法で、帶芯や衿芯等短い時の接ぎ合せに用ふる仕方です。布地が重りませんから殆ど一枚のやうな手ざわりがして接いだ感じがありませんので、一般に用ひられて居ります。

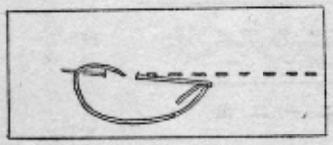
返縫　これには本返しと半返しの二種の縫方があります。本返しはまたミシン縫とも申しまして、洋服などを手縫ひでいたすやうな場合に用ひられます。圖のやうに縫つた針目を全部返して縫つてゆく仕方です。半返しは縫つた針目を半分だけ返へす縫方で、縫目を特に丈夫にする場合とか、縫目を割る時などに、この方法を用ふることがあります。

本返し縫の図



第二十四圖

半返し縫の図

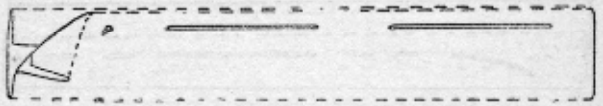


第二十五圖

躾のかけ方

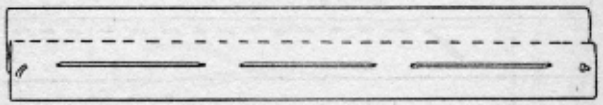
すべて躾をかけますのには、縫針又は絎臺を使用いたします。

平躾の図



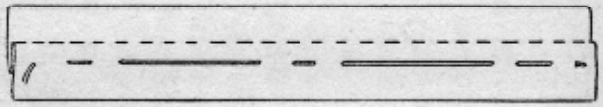
第二十六圖

一目落しの図



第二十七圖

二目落しの図



第二十八圖

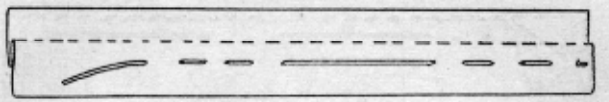
平躾　圖のやうに表裏とも三糎位の針目で、かけた躾を申しますが場所によつては抄ふ方の針目を少し小さくすることもあります。羽織の衿などに用ひたり、帶の躾などはこれであります。

一目落し、二目落し、三目落し

小針の數によつて呼ばれて居ります。きせ山から凡そ五粍の處に、小針を五粍、大針を三糎位にします。

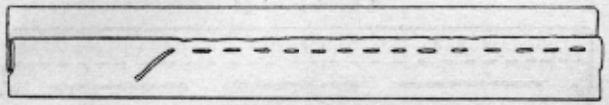
一目落しは地厚ものゝ時に用ふる掛け方で、裏へ出る針目は小さく、表へ出る方が大きくなります。

二目落しは主に木綿ものに掛け、三目落しは絹物や薄地ものなどに用ひます。



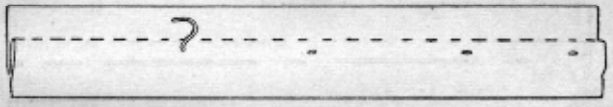
三目落しの図

第二十九図



縫ひ躾の図

第三十図



隠し躾の図

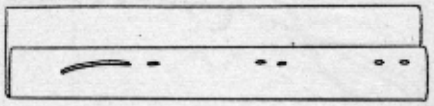
第三十一図

縫躾　ぐし躾とも申しますもので平縫の針目で躾をかけます。これは縮緬ものやモスリン類の如き、折のきかないものに主にかけられ、ことにとらずにそのまゝ着られるものですから、ぞべ糸などで叮嚀にいたします。

隠躾　折が反對にならないやうにするために用ふるもので、仕上げて後も取り去りませんから、布地と共色の糸を用ひ、表にはなるべく針目を小さく出し、裏は二糎位にします。褄先、胴接ぎなどに使はれて居ります。

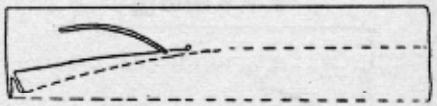
絎方

縫方に各種の方法がありましたやうに絎方にも亦、その用ひ場所によつていろ〳〵の方法があります。然しすべて懸針又は絎裏を使用していたすことには相違ありませぬ。



耳絎の図

第三十二図



三つ折り絎の図

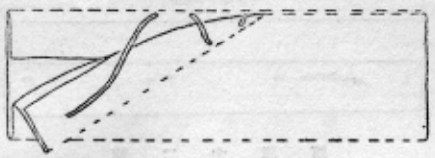
第三十三図

耳絎　布の耳を絎けつける仕方で、小針に表に一つ、裏に二つづゝ出し、布と耳との間を通る針目は二糎位にして、耳から三粍位入つた處を絎ける仕方で、木綿單衣などに用ひられます。絎代の幅によつて、多い時には針目を荒く、少い時には細くと云つたやうに多少の手心が必要であります。

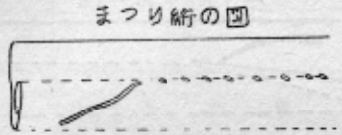
三つ折絎　布の端を二度折つて表には極く小さく針目を出し、裏の折山の中には一糎五粍位の針目を通して、絎けてゆく仕方で、單衣の袖口や衿下、裾絎等に使はれます。針目の大さは絎代の幅によつて又布地によつて加減いたします。

本絎　二枚の布の端を折り合せて針目を八粍位とし、折山から二粍内にはいつた處を手前と向ふとを同じ針目に針を運んで絎ける仕方であります。この絎方は綿入の袖口、八つ口、衿下、紐など應用の範圍が大層廣いものであります。

從つて針目などもその場所によつて適宜に加減しなければなりません。綿入れの袖口や身八つ口、裾下など隨分使用の範圍が多いものです。



第三十四圖



第三十五圖

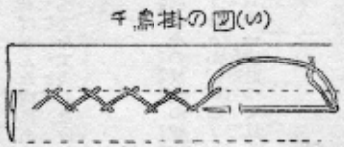
まつり絎　これは、布を三つ折り絎の時のやうに折り、右の端から糸を掛け、まづ表の布を少し抄ひ、その針先を裏折代の端に通し、二粍位左の方へ斜に進め、前のやうに表を抄つて又裏へ通す、この方法を繰りかへし乍ら進めてゆきます。主に毛織物などの如き折目の自由になり難いものに用ひます。又ミシン仕立の絎ける場所などにも用ひます。

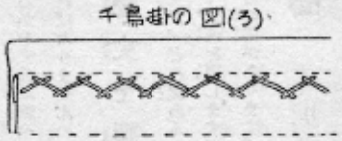
千鳥掛　布の端を折つてその左の方から糸を掛け、まづ表の布を少し抄つて、次に五粍斜に裏折り代の端から五粍の處を抄ひ、再び前のやうに表地を抄ひ、交互にこれを繰り返して進みます。

その時斜にかゝる糸はあまり直立にならない方が山形の格恰がよろしいやうです。(い)圖

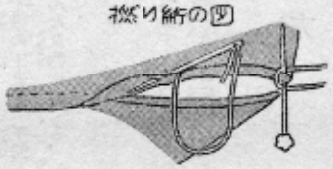
これは毛織物、又は地厚物の單衣で伏せ縫か耳絎又は三つ折絎をしなければならない處に應用されます。

又地厚ものにはろ(ろ)圖のやうに、表の地一枚にだけ針を通すのみでなく、三つ折にした處の極く端を表まで抄つて、奥の針は表に出さない事もあります。又大變地厚のものは二つ折にしてどの針も二枚を通して表には二列に針目を出すこともあります。場合場合によつて適當な縫方を適宜に應用いたします。





第三十六圖



第三十七圖

撚絎　布の耳を紙撚を撚るやうに撚つて右から小針にまつり絎をする仕方であります。ものによつては木綿糸を芯に入れることもあります。上仕立の薄物單衣の袖口、夏のコートの竪衿、又はコートの飾紐絎などこの方法を用ひます。

仕立てる前の準備

布しらべ

新らしい反物を裁つときに、先づ第一に布しらべをしなければなりません。反物に染疵や織班がないか、もしあればどんな處にあるかを充分に調べ、これを帶の下とか、下前とか一見目にふれないやうな處に廻るやうに、裁ち方を工夫しなければなりませんので、どんな反物にしても、先づ第一に布檢べをいたします。

總丈を調べる

次はその反物の總丈が、どれ程あるかを調べます。その反物の長短によつて、袵を棒袵にするとか、又は釣袵にするとか、いろ〳〵工夫を要します。木綿物浴衣などには、往々非常に總丈の短いものなどがありますから、必らず一度計つて見る必要があります。

積り方

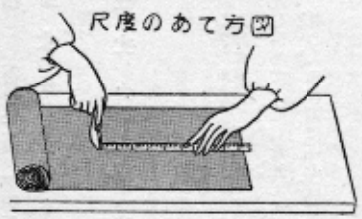
用布による積り方　普通の反物で、本裁長着を裁つ場合などには、用布を主とした積り方が用ひられます。まづ用布の丈を二つ折にして、端から袖を二丈とり、殘りを三つに折り、三つ目は丈を一九糎（袵下りの分）短くすると大體の身丈がわかります。その身丈が丁度背丈に合ふ位でしたらば本式に裁ち初めます。

體による積り方　前とは反對に、若い人達の着物などは、多少の無理をしても、袖丈を充分に欲しいとか、或は男物などで振袵だけ普通を殘しておき度いといふ、特別な場合もあります。こんな場合には、先づその所要の丈だけを先に除いて、殘りの部分で其の他のものを工夫しなければなりません。若い娘さんたちのものになりますと、袖丈だけでも可成の丈になりますので、袵を釣にしたり、袵を三つ割にしたりしなければならない事もありますので、場合々々によつて積り方も一樣にはゆきません。

尺度のあて方

實際に裁つ場合には、持尺で計ることは一番危險です。すべて置尺にいたします。

第十八圖



尺度のあて方

布を裁板の上に平におき、その上に尺度をあて〳〵計つてゆきます。耳がたるんだり、縮まつたりしてゐる布は、巾の中程の平らな處で計るやうにすると狂ひが生じません。

縫代の見方

裁ちものには縫代を見ることが肝心です。今その標準を記しますと、

袖　単衣二糎、裏附二糎乃至四糎

身丈　単衣三糎五粍（内掛紬二糎、衿附及びきせ一糎五粍）袷二糎五粍（紬合せ一糎、衿附及びきせ一糎五粍）

袵丈　三糎、丈のない時は二糎。

裁ち方

正確に見積つて、正しく寸法を定め、袖、身頃、衿、袵と寸法通りに正しく布を折り、誤りが無いかを叮嚀にたしかめて、布目を正しく裁ち始めます。

昔の人の言葉に「七度計つて一度裁て、」と申すことがあります。布を切り離さない間は、誤りを見出せばすぐに直すことが出來ますが、一度裁つたものは、假令誤りが發見されてもどうすることも出來ませんから、着物でしたら、「袖丈と縫代」のものが四枚、「身丈と縫代」四枚、「袵と縫代」が二枚といふ風に充分念入りに調べてから鉸を入れます。

布の注意

裁ち終つた布は袖は袖、身頃は身頃として重ね、山を八糎位ずらして中表にたゝんでおきます。中央の山で畳むと標附の時いやな折目が付いて標附がしにくゝなります。

又衿と袵は間違ひ易いので、袵は先に二つに切つておきます。着物の時は、あまりありませんが、羽織などの場合になりますと、衿丈と袖丈が同じやうですから、間違へて衿を袖のつもりで切つて終ふことなどよくあることです。故に衿はすぐに幅を二つ折にして、袖との區別をしておくといふ注意は必要です。

裁目のかどり　又ほつれ易い地質の物は、衿肩明、その他の要所を裁つと直ぐにかどつておくことを忘れてはなりませぬ。

縞、柄による裁方の注意

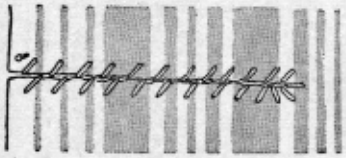
縞に獨特のある物は、強い色合の縞の方を背にした方がよく、絣の模様物は右の肩から左下へ流れるやうに裁つた方が着た時に優美に見えます。然しまた柄によつて左右同じやうに釣合をとつたり、又模様を合せるやうにすることもあります。

大模様の友禪等で小裁物を裁つ時は、特に模様の配置、色の配合などに注意しなければなりません。

標の附け方

仕立上げ寸法　いくら縫方が上手でも、身體にぴつたりと合つた寸法でなければ折角の着物も大變見苦しく

図　方りかの明高衿



第三十九圖

見えます、と同時に着心地もよくはありません。それですから、着る人々の體格によつて、肥痩、長短をよく考へ、適度の寸法を工夫して仕立上りの寸法を定めます。

布の置き方　標附に際しては、先づ布の置き方を一定します。すべて布地は、中表に重ね、身體の上部になる方を左にし、裾の方を右に置いて標をつけます。そして、

袖　は袖口を向ふに、袖附を手前に置きます。

身頃　は衿肩明を左手前にして、前身頃を下に後身頃を上に重ねます。

衽　は裾を右に衿下の方を手前に置きます。この場合、新らしい布地ならば必ず耳目を衿下とします。

衿　山を左に、裁目を衿附にして手前におきます。

標附　標はいつでも仕立上げ寸法に、きせの分を加へた寸法をつけます。きせの多少は場所によつて適當にします。

標附は明瞭で正確に、あまり大きくせず、一視内外を適度とします。骨標幅を出來るだけ細く、下の布までよく通るやうにして置かないと、仕立の中途で消えるおそれがあります。と申しまして、布地が損むほど強くつけることは禁物です。初心のうちには、乗角一生懸命に附けて、表の布は損じてゐるのに、下に通らないやうなことがよくあるものですから、注意が肝要です。

筥あとはいつまでも消えないものですから目標になるのを程度として、仕立上つて後に標の目立たないやうにと心懸けたいものであります。

筥標のつけにくいものには、糸標、チョーク、鑞筆等で標を附けます。

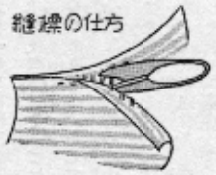
標附の種類

チョーク　これは多く毛織物のときに用ひますが、色がなか〳〵消えないことがあつて、縫直しの時など困ることもありますから、たるべく和服には用ひないやうにいたします。

糸標　厚地のものや、毛織物或は筥の見にくい布の場合に用ひます。布を二枚重ねたまゝ縫標をし、糸をゆるめて二枚の布の間を圖のやうに縫糸を切りますと、上下の布に同じやうにつきます。

ぼつ　初め上の布に標をしておき、その通り何枚でも布を重ねたまゝ一緒に針を通し、次に一枚々々縫して、間の糸を結べる位の長さに切り、一寸結んでおく方法で、袖山や合標に便利なものです。

鑞　絹布類に多く用ひるもので、鑞を熱いて、先の丸みで標を附ける方法です。又とくに、絹布用の鑞筥もあります。これは充分注意しないと、布を焼くことがありますが、上手に用ひますと、非常に正確にしつかりした標附が出來ます。



第四十圖

第四十一圖

縫方と、きせ

標と標とを合せて待針を打ち、針目を正しく縫ひ、充分に糸をしごきます。糸のこき方が悪いと、縫目が縮んで布に皺が出來、仕立榮えが悪い上に綻び易いものです。

よく「糸こきは三度」と申されます。それは初め縫目の上を拇指と食指の腹でしごき、次に同樣に下をしごき、最後に縫目をしごけと申す位で、つまり叮嚀に縫目と布地とが平になるまで糸こきをよくせよと敎へられたものであります。そして、縫ひ初めと、縫ひ終りとの糸留をしつかりしておく事を忘れてはなりません。これが充分でないと、留めの處が笑つてすぐに綻びがきれてしまひます。

また糸こきを充分にすると同時に、糸の引き縮しのないやうに注意することも必要です。きせは、多過ぎると着崩れを生じ易く、少過ぎると仕上げが見苦しくなりますから、普通の縫目には二耗、袖口、身八つ、褄合せ等には特に多く三耗位が適度であります。

仕上げ方の注意

針と糸の始末

衣服を仕立終りましたらば、先づ第一に針を注意しなければなりません。縫入れものや布團の中から針が出ることなどがあつて思はぬ怪我をすることがあります。殊に乳幼兒の衣類は特別に注意しないと、取りかへしのつかない事になります。針の本數に不足のない事が判りましたならば、糸屑や塵埃を拂ひます。

寸法あらため

次に仕立上りの寸法を一應しらべます。そして、更に左右の寸法が合つてゐるかどうかを見ます。つまり衿下を左右合せて見るとか身幅、袵幅、或は衿丈、袖丈、褄などあらゆる處を檢査いたします。裏附の場合には更に丈、幅共裏表が合つてゐるかをあらためることも必要です。

縮緬とか、羽二重とかの裏附でしたらば、衣紋かけに掛けてふきの出を調べることも大切です。特に重ね等のときには一層叮嚀にいたさなければなりません。そして寸法の合はない箇所を見出しました時には、仕上げの前に直さなければなりません。

仕上げ

すべて具合よく上りましたらば、地質によつて（木綿物、毛織物の類）霧を吹き、火熨斗又はアイロンで仕上げます。火熨斗やアイロンを使用いたす時には直接布地にあてぬやう、布片を被せてその上から當て、初め裏からかけ後で表にかけます。但し木綿類は直接あてゝもよろしい。

また霧を濛山吹いたり、アイロンをきつくかけることはあまり巧な仕上法ではないのですから、縫ふ時から注

意して、綿り仕上に手數のかゝらないやう、叮嚀に取り扱つておきます。
たゝみ方は縫目を通して叮嚀に折り品物によつて適當な壓をいたします。

壓のおき方

帶のやうなものは、出來るだけ重い壓をおきます。萬力などがありますと一番よろしうございます。
綿入れの裾、袵、袖口はつぶさぬやうに、壓す場合にも壓板から出すやう注意いたします。疊んで藏よ時にも崩れないやうに工夫いたします。
また、寢おし、座り壓なども物によつてよいものですが、たゞ疊みめが崩れないやうに注意いたさなければなりません。壓は仕上げの最後のものですから、一層入念にして出來上りを美しくするやうに注意いたします。

一般の心得

布地の幅

並幅物　三六糎を普通とし、地質によつて三二糎から三八糎位までであります。
中幅物　四五糎を普通として、地質によつては四一糎から五三糎位までであります。
大幅物　七五糎を普通として、地質によつては六〇糎から一〇〇糎位までであります。

この外に倘三幅物、四幅物等の種類がありますが和服には餘り使ひません。

布地の丈

並幅物　一反は凡そ一一〇〇糎で、二反を一疋と云ひます。地質によつては、一反が一〇六〇糎から一一四〇糎位あるものもあります。
中幅物　反物に切つてはありませんが、凡そ八五〇糎を一反といたします。
大幅物　着尺物は凡そ五五〇糎を一反とします。

布地の大切な整理法

新らしい布地は仕立てる前には、必らず布の整理といふことをしなければなりません。即ち伸びてゐる部分は縮ませ、吊れた耳は伸ばして平にするとか、また水分に過つて縮むおそれのある布地は初めから水分を與へて、縮むだけ縮ませておくなど、その地質によつてそれ〴〵の手當が必要であります。かういふ仕事を總括して布地の整理と申します。
よく反物の中には、整理ずみといふ檢印のあるものを見かけますが、あれは只今申しましたやうな仕立るための整理ではなくて、反物として市場に出すのに見苦しくないやうに手當を濟してあるといふ印でありまして、決して買つた人達がすぐにそのまゝ仕立てよいといふ印ではありませんから、整理濟とあるものでも仕立る前には

その布地に適當な手當をしなければなりません。

更にまた近頃は「湯通し濟」といふ印のあるものも見受けます、これはお客樣へおつとめとして呉服店などで特に「湯通」をしてあるものですから、そのまゝでもよろしいのです。

かうして整理してから仕立てますと糊氣のために硬ばつてゐるものは軟くなり、伸びちゞみもなく、鹽の溫みや、雨などのために狂ひの出ることもなく、一寸位では汚點などもつき難く、また布地に艶が出て、保ちもよくなつて來るものです。

以下地質による整理法について申述べませう。

木綿ものは水を通す　木綿ものは、そのまゝ仕立てることが多いやうですが、地質によつては（絣紬など）餘分、耳がたるんで中がちゞまつてゐるものがあります。それを引張つたりして平にしても、仕立てからすぐにまた伸び縮みが出來て來ますから、是非一度水を通すことが必要です。

まづ盥に、反物が充分浸るだけの水を入れ、その中へ反物を片端から順次に繰り入れて暫らくそのまゝにしておきますと、布地の灰汁や、不必要の糊氣もおちて、布がしなやかになり、伸び過ぎてゐた部分は自由に縮みますから引き上げます。

盥から出した布地は普通のお洗濯ものゝやうに捩り搾りをしますと皺になります、このとき出來た皺は何時までたつても容易に消えませんから、捩り搾りはいたしません。この場合は布を一方の端から第四十二圖のやうに、洗濯板の半の方に、疊み重ねて兩手でよく壓しながら水氣を切ります。即ち壓搾りにいたします。

第四十二圖　壓搾りの圖

水氣がきれましたらば、風通しのよい所へ蔭干にして、すつかり乾いた所で霧を吹き、布幅を適當に出しながら兩耳を揃へて棒に卷くとか、又はアイロンで布目を正しながら仕上をいたします。棒に卷く代りに叮嚀にたゝんで壓をしてもよろしいのです。

これだけの整理をいたしますと、仕立も綺麗に上ります。よく紬絣などの新らしい着物ですと、顏や手足まで絣が落ちて青くなるのを見ることがありますが、そんなことはなくなります。

縮と薄地ものはアイロン　同じ木綿ものゝ中でも、縮やボイルのやうな薄物は前のやうな方法をとりますと一寸あとの始末が素人には困難になりますから、アイロンで疊み皺や布目の歪みをなほします。

尙縮ものには耳のひどく虫んだものがありますが、そんな時には水霧をその部分にだけ吹いて縮ませて置きます。またその反對に耳の非常につまつてゐるものは耳に鋏を入れておくことも必要です。

絞りは水を通す　絞りの浴衣などは、普通の木綿ものと同樣に、やはり水を通して蔭干にし、乾いた所で霧を吹いて叮嚀にたゝんで壓をいたします。

人絹類はアイロン　近頃は人絹織物が非常に多く、また加工も上手になつて居りますので、略分用ひられるやうになりました。然しこれはまた、非常に伸びて縫ひ難いものですから、最初によく整理しておくことが必要です。けれどもこれは水に弱いものもありますから、水には浸けずに、たゞアイロンで布目を正して伸びるだけ伸ばしておきます。

毛織ものは湯通しか霧吹き　毛織ものは特に縮みのはげしいもので、セルなどそのまゝに仕立ますと、一度雨に逢ひますと身丈がちゞむばかりでなく縦にも縦がよつて實に見苦しいものになります。毛織物も厚地、薄地によつて違いますが、ものによると一反で十糎位も縮むことがあります。専門家に出す場合には、湯通しですが家庭の場合には、水通しをいたし、壓搾りして蔭干にし、すつかり乾いた所で、片端から霧を吹いて疊み、圣盤に温りを與へて後裏表からアイロンを叮嚀にかけます。

絹織ものは湯通し　絹ものは出來るだけ専門家の手によつて、湯通しをするのがよろしい、糊氣のあるものをそのまゝ仕立ますと、一寸水が飛んでも直ぐに汚點になります。然し糊氣のないものでしたら、家庭で手輕に火熨斗をあて、縦や折目をよく伸し、布目を直します。アイロンや火熨斗は必ず裏から當てることです。殊に黒羽二重などの場合には注意して、白金巾か手拭の上から當てます。直接に當てると、火熨斗のあとが光つて見苦しくなります。

縮緬、お召も同様に　縮緬やお召は、どうしても素人には無理ですから専門家にまかせます。

銘仙類は糊抜き　銘仙類にはぜひ湯通しが必要です。専門家の手にかけますと、微温湯に通しますが、色合や品物によつてお湯の濃度の加減がありますから、家庭では一寸無理かも知れませんので、水通しといたします。

先づ反物を解いたら、布の兩端を縫ひ合せて、輪にしておきます。これを盥の水の中に繰り入れて、暫らく水につけておいて、壓し搾りにすることは木綿ものと同樣です。そして水氣を切つたら輪になつてゐる兩端へ棒を通して、兩方へぴんと引張つて蔭干にします。丁度伸子張のやうにいたします。

乾いたなら輪をといて、布の兩耳を二十糎位の斜にもつて、引くやうにして幅を出し縦のある所へは霧を吹いて裏からアイロンをかけます。

アイロンは、裁縫臺の上にアイロン布團（なければ毛布二三枚）を敷いて、その上に布を置き、最初横にかけて幅を出し、次に縦にかけて丈を出すやう、交るがはるにかけます。

お召銘仙のやうに縮のあるものは、矢張り水につけると一寸素人の手には仕上げが困難ですから、家庭ではアイロンで布目を直す位にいたします。湯通しに出せば一番無難です。

その他、帶地、袴地、或は裏地にもせよ、最初は一度専門家の手にかけることが無難です。素人の生兵法で取りかへしのつかない事をすると、反つてあとの始末に困ります。

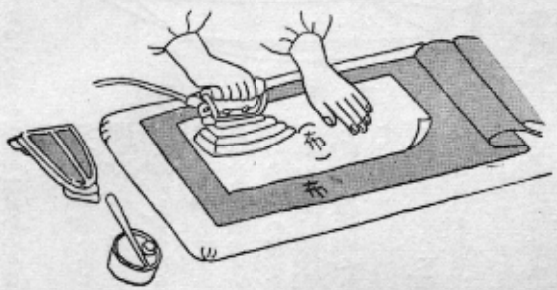
圖の干蔭

第四十三圖

麻類は霧ふき　麻類はすべて霧を吹いて、掌で伸しながら暫らく棒にまいて置いて直します。澤山皺のありますときは、アイロンをかけるのもよいでせうが、必らず霧をふいて濕りを與へた上でなくては火熨斗もアイロンも利きません。

麻は地伸しの場合のみでなく、仕立たものをたゝみますのにも掌で伸ばすやうにしてたゝみますと、よく皺がのびます。

アイロン掛の図



第四十四圖

特別に耳のつれたもの

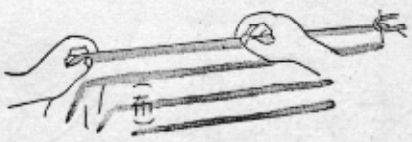
耳のつれたものを、そのまゝ縫ひますと、いくら針目が揃つて、眞直ぐに、また糸こきがよくても、縫目が縮んで仕上りがきたなくなります。

前に申しました各種の方法でも耳のつれが直らないやうなひどいものには、特別な方法を講じなくてはなりません。

第一の方法　先づ布の右端を掛針か絎棗にかけて、左手で引張り、右手の指尖で耳をギュー〳〵としごいて鏝をかけます。

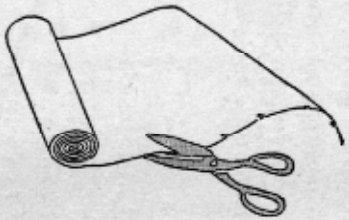
第二の方法　それでも吊れて居ります時は、更に二三寸おきに耳に淺く斜に鋏を入れ、その上を鏝で伸します。大抵のものはこれで充分伸びます。

耳つれ直しの図



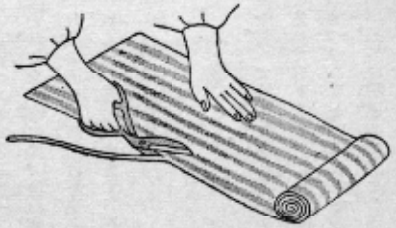
第四十五圖

耳に鋏を入れる図



第四十六圖

耳の切り落し方



第四十七圖

第三の方法　以上の方法でも、まだ充分でない場合、また布幅の廣いものゝときには、耳を切り落すこともあります。

大妻圖

図 耳に霧を吹き掛ける

第四十八圖

特別に耳の弛んだもの

これも吊れ過ぎたのと同樣に始末の惡いものです。これは、前にも一寸申しましたやうに、耳にだけ刷毛か濡タオルで濕を與へ、その上からアイロンをかけます。また霧を吹きます時には、他の部分に水氣が附かないやうにするために、反物を卷いて耳だけを出し、その他の部分は紙かタオルですつかり包んで、霧をふきます。そして手早くひろげて、順々にアイロンをかけてゆきます。

用具について

どんな仕事に限らず、一つの仕事をきちんと仕上げるのにはそれに必要な道具を整へて置かなければなりませぬ。昔の人の諺にも、「よい仕事をする工人は屹度よい道具をもつてゐる」と申されて居ります。これは高價な贅澤な道具を揃へてゐるといふ意味ではなくて、仕事をするのに使ひよい道具が整つでゐるといふことでありまして、手頃なよく使ひならされた道具があればきつと思ふ存分な心地よい仕事が出來るに相違ありません。

それと同じやうに、お裁縫を上手に仕上げますのにも矢張りそれ相應の道具が一通り必要であります。今そのお道具の一通りについてお話いたしませう。

第四十九圖

針箱　携帶を便利にする樣にといふ點から考案されて折疊み式のものや、小箱形のものやいろ〳〵の針箱がありますが、家庭用としては矢張り在來からある抽出し付の木製の針箱

が一番便利であります。三つ衿とか衿芯のやうな小切や糸類なども相當澤山に藏つておくことも出來ますから調法です。

針　木綿、絹、紬の縫針、及び絎針、躾針、待針などその用途によつて太さ長短を撰びます。大體に於ては各自の指を標準にして使ひ易い長さのものを撰ぶのが最もよいのですが、木綿の縫針でしたらば「三の二」「三の三」絹針ならば「四の二」「四の三」位が適當とされて居ります。絎針は木綿物には「三の五」、絹物には「四の五」を用ひます。躾針は絎針よりも稍短いものがよく、場合によつては絎針を代用してもよろしいのです。待針は便宜上絎針を用ひてもよろしいのですが、特に待針專用のものが便利であります。

すべてお裁縫をする時には初めに針の總數を數へ、最後に再び調べて見ることが必要です。針一本はお金に見積れば僅かな代價に過ぎませんが、その一本の針を粗末に扱つたために飛んだ間違ひを惹起すことが尠くはありません。幼兒のある家庭などでは格別この注意を忘れてはなりません。

以上の外に最近ではメリケン針と申しまして針孔(めど)の長い糸の通し易いものも隨分使用されて居ります。

糸　木綿糸、瓦斯糸、絹糸、小町糸、絹小町、カタン糸、躾糸、絹躾糸(ぞべ糸)、羽二重糸、綴ぢ糸、繼ぎ糸などの種類があり、色合も非常に豐富になつて居りますから、用布に適當な色糸を自由に求めることが出來ます。

糸巻　紙製、木製とあります。

鋏　大小及びその形狀もいろ〳〵ありますが、糸切り鋏としては普通の握鋏(日本鋏)、裁物用として西洋鋏の二種あれば充分です。

指貫　金屬製の物、布製、眞綿製などいろ〳〵ありますが、皮製のものが糸をいためないで一番よろしい。

箆　象牙、角、などありますが、いづれにしても布を損じないやうに正確に標附けをすることの出來るものを選びます。時によつては燒箆、クレオン等を用ふることもあります。

尺度　竹製の兩面目盛のもので眞直ぐな薄手のもの、長さは五〇糎のが使用に便利です。

絎臺　折疊み式の絎臺の外に裁板に取りつけられるものや、掛針式のものもあります、いづれでも適當なものを選びます。絎臺に針山をつけて置けば一層便利です。

鏝　先きの細いさし鏝と、箆代りに用ひる三德鏝の二種類がありますが、普通の場合には先の細いさし鏝が使用に便利です。いづれも金性のよいものを選び、燒くときは直接火にあてずに、熱灰の中に深くさし込んで、鏝の背中から燒きます。燒け過ぎた時には冷たい灰の中で冷まして用ひます。水の中などに入れて冷ましますと忽ちに鏝は惡くなつて使用に堪えなくなります。

鏝板　長さ五〇糎、幅二二糎位が手頃です。尙布張よりも日本紙張の方が鏝のすべりがよろしい。

アイロンと火熨斗　今迄は仕上げには必らず火熨斗を用ひたものですが、只今では大抵アイロンを用ひます。電氣アイロン、瓦斯アイロンなどがあります。家庭用としては三封度か四封度位が適度です。

火熨斗蒲團　白のキヤラコにどてら綿を一枚位を入れた長さ一五〇糎、幅キヤラコ幅一杯位のものが適當です。

霧吹　圓のやうなものが一般向で使ひよくまた安價ですが、口の取りかへられるものならなほよろしい。

袖型、袖型　金屬製のものか厚紙製のもの一揃をとゝのへておくと非常に便利です。

衣紋竹　普通のものより少々長目のものゝ方が仕上げを見るのに便利です。近頃は二つ折に出來る重寶なものも安價であります。

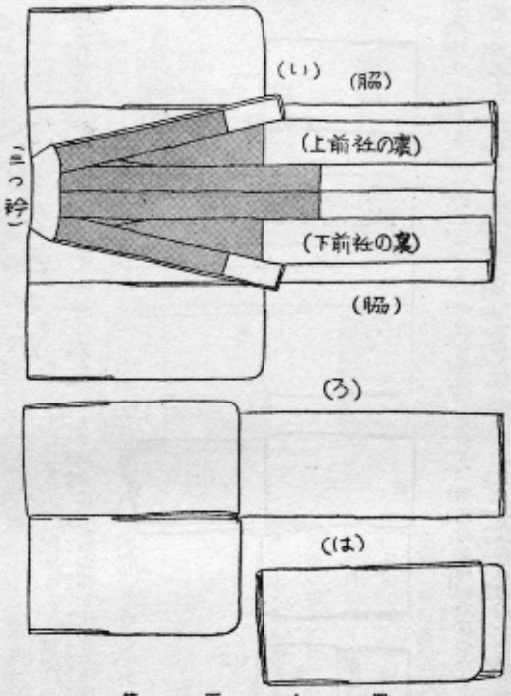
裁縫板　出來るならば膝の置入る位の高さの足付で長さ一五〇糎、幅四二糎位の一枚板のものがよろしうございます。近頃は家庭用として折疊むことの出來る便利な裁板もあります。然し輕便たのは折疊みの出來る厚いボール紙製であります。

衣類の疊み方

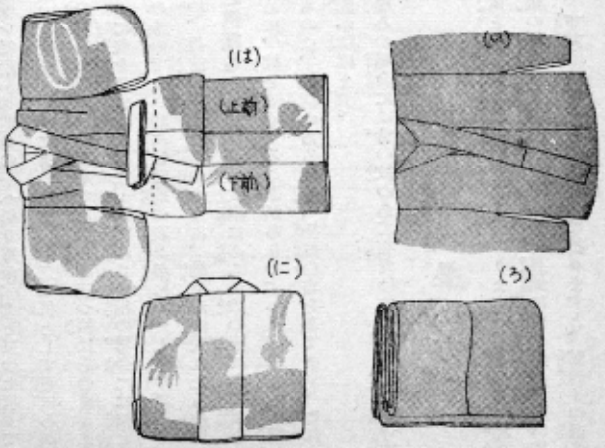
着物の疊み方

着物を長く保たせるのには、仕立方、着方等に注意することが必要なのは勿論でありますが、一つはその扱ひ方にもよります。どんな上仕立のものでも、疊み方が惡く、藏ひ方に無理があつたり、出す時に、下からひき出して、外の着物を皺くちやにしたまゝ置いたりいたしたのでは、どんな結構な品物でも忽ち惡くなつて終ひますから、着類の扱ひ方には充分の注意を要します。

本疊み　特別なものを除いて、本裁の長着は全部この疊み方を用ひますので、說明する迄もなく御存じとは思ひますが、肩の方を左に、裾を右に置いて平に伸し、腋、三つ衿、左右の衽と各々縫目を通して折り、上前と下前とがきつちりと重なるやうに背縫ひから折ります袖は附の縫代できちんと折つて身頃をはさむ樣にたゝみますと、袖口の出だけが身頃から出ますので、袖口をつぶしません。そして裾口を少々出る樣に丈を二つに折り疊みます。男物の場合は袖附の縫目を二糎ほど袖の方へ寄せて折りたゝみます。衽を潰さないやうに、裾口を肩山から一寸出すやうに丈を



第十五圖　本疊みの疊み方



第五十二圖　長着の夜具畳み方

が出来るだけ袖を折らないやう注意します。たとひ長い袖でも袖に折り目を附けることは避けたいものです。

振袖、紋附等の特別のものは、折り目に新聞紙を巻いて、その上を白い布で一巻きして入れ折目のつくのを防ぎます。

男物の場合には、背縫と袖口とを合せるやうにしますから袖附よりも、少々内側で袖幅を折ります。

長着の夜具畳み

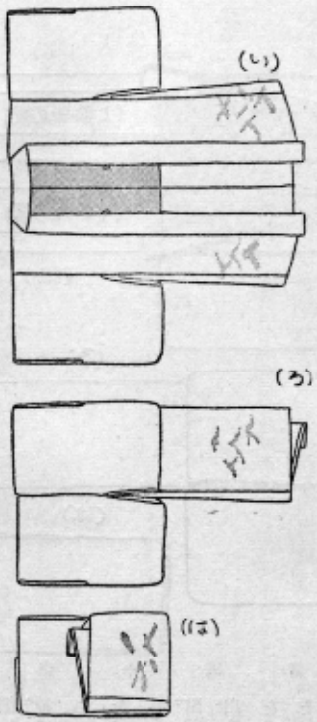
木綿の重ねものや、禮服などは重ねたまゝ夜具畳にいたします。これは中裁、小裁などの夜具だゝみと同樣ですが、本裁の場合は(い)圖のやうに三つ衿を縫目から裏の方に折りこみ、衿、褄下など上着、下着を叮嚀に合せて

折ることは前と同樣です。(第五十圖參照)

羽織の畳み方

大體は長着の本畳みと同樣ですが、左右の脇を折ります場合に、左右の褊を上下とも幅を眞二つに折ります。

羽織の畳み方



第五十一圖

その他は長着のやうに、三つ衿を折つて、背縫を眞直ぐに折り、兩前身を内側でぴつたりと重ねます。

袖は前と同樣に、左右とも後身の上に袖附から折りたゝみ、丈は身丈の三分の一を折り返す位が、着たときの折目の工合がよろしい。然しこれは藏ふ入物をも考へて、丈の短いものに藏ふときには短く畳むことも必要です

左右の袖を袖附から前身の上へ折り重ね、丈を二つに折りて裾口を肩山から四糎ほど先に出し、もう一度二つ折りとします。また場合によつては丈を二つ折として更に(ろ)圖のやうに、三つ折の屏風だゝみに折り疊みます。

三つ身、四つ身などの長着でしたら、三つ衿はそのまゝにしては(ろ)圖のやうに前を合せ、附け紐のあるものは、圖のやうに紐を二本合せてたゝみ、小さい袖の場合には袖をかぎりに丈を三つ折の屏風だゝみにいたします。然し特別のものでない時には普通の夜具疊にいたします。

この他、丹前、夜着などのやうに、綿を澤山入れたものにはすべて夜具疊みを用ひます。

紋附と模様ものゝ注意　紋附は必らず紋の上にあて紙をすることは在來行はれて居ることですが、紙の灰汁のために、紋を赤くすることがありますから、白布か眞綿を當てがふやうにいたします。

模様ものは、模様のある部分へ全部白布をあてます。これも紙よりは糊氣のない白布を當てた方が糊汚點や灰汁汚點が防げます。

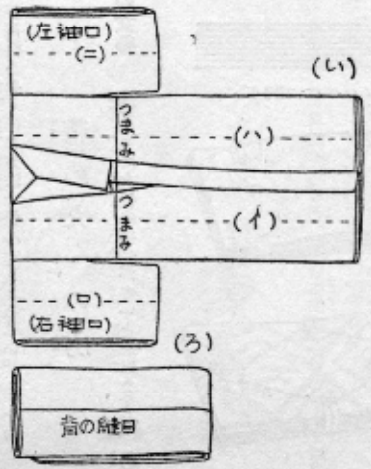
夜具疊みの場合には背の紋のあて布だけは、細い糸で一寸綴ぢつけて置きます。

長襦袢の疊み方

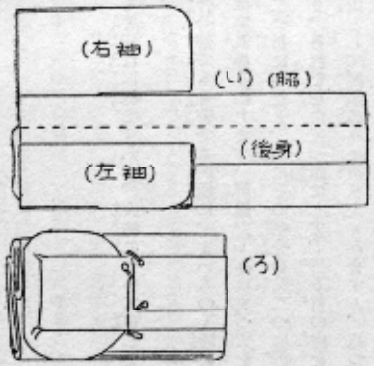
東京風と上方風の二種の仕立方がありますが、どちらの場合でも、(い)圖のやうに前身を合せて平らに置き、半衿が廣幅の場合は圖のやうに三つ衿を裏側に折り疊み、細い絡衿のときは折らずにそのまゝ前だけを合せます。そして、下前身の脇を脊縫に合せて折りますと、點線(イ)の處が折山になります。その折山に右袖口を合せて折り返します。左も同様に折疊んで、(ろ)圖のやうに裾口を肩山から少々出して丈を二つ折にします。

コート類の疊み方

第五十三圖



第五十四圖



半ゴート、長ゴート、合羽、被布等すべて、同様な疊み方といたします。

これ等のものは、今迄とは反對に、左に裾口を、肩を右手にして平に置きます。そして前を普通に合せ、左手

で袷肩を持つて、右手で前を加減しながら、後身が上側になるやうに置き直します。そして、長襦袢と同じやうに、背の方で折りたゝみます。これを前に向けかへますと(ろ)のやうになります。

又、長襦袢と全く同じ方法で疊んでもよろしい。

帶のたゝみ方

普通の女帶　帶は主に女物の場合が多いと思ひますが、男帶でも要領は同樣ですから、女物について申します。

合せ帶でも丸帶でも同樣に、よいものゝ時には屏風疊みにします。屏風だゝみはまづ丈を二つ折にいたし、次にその半分を又二つに折り、それを更に二つ折にして、折り目の處を山として屏風疊みに折りたゝみますと、八つ折になります。これが大人ものゝたゝみ方です。

子供物でもこの要領で六つ折といたします。

合せ帶は地質の薄い方を表側としてたゝみます。併し繻子と他のものとの合せの時には繻子地の方を中側にいたします。

圖五十五第　帶の疊み方

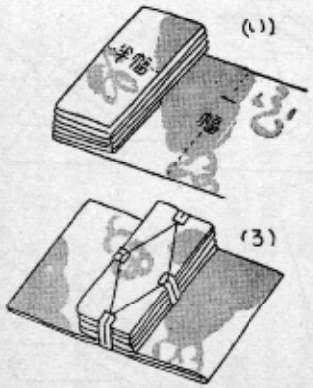
繻子地は埃やごみが附き易く、その爲め布地をあらしますから、なるべく內側にいたします。

飾りとぢのしかた　仕上げたゝみの場合でしたらば飾紐をいたします。その場合は、巾一糎五粍、丈六糎位の當紙を四枚用意します。そして大人物は圖のやうに、折山の角から一二糎位入つた處に、當紙を上下にまたがせて當て、白の絹糸四本位でしつかりと綴ぢます。これは同じ寸法にして四ケ所へ綴ぢつけます。紐糸は結び目から四糎の長さを殘して切つて置きます。

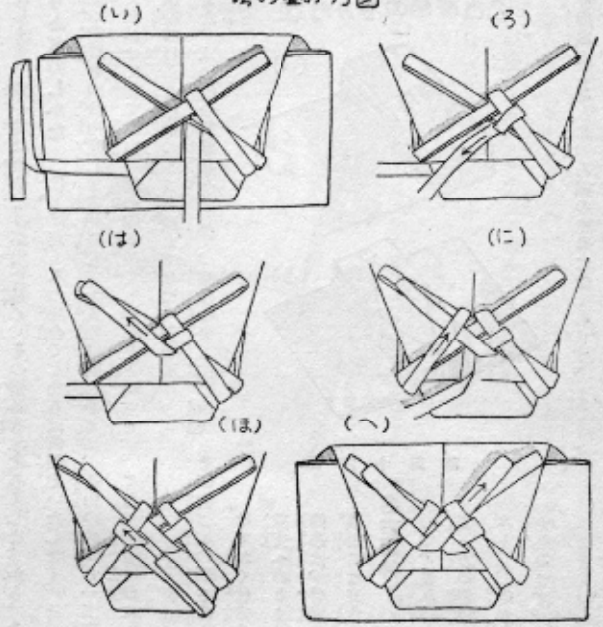
また、八つ折の屏風疊みにして、幅の中央と丈の中央とを四邊づゝの深さにとぢ、その綴目に絹糸を菱形にかけておく仕方もあります。どちらを應用しても差支へありません。

飾糸は、普通は紅白二筋の糸を用ひますが、記念用には五色の色ですることもあります。

名古屋帶　名古屋帶は半幅と一幅の處とがあつて、疊みにくいものですが、先づ半幅の處を廣い方の帶幅に合せて、(い)圖のやうに屏風だゝみとし、壇が半端になりました時は、內側へ折り込みます。次にこれを中心として、一幅の方を屏風だゝみとし、(ろ)圖のやうにたゝみます。



圖六十五第　名古屋帶の疊み方



第五十七圖

飾綴は、前と同じやうにかけて仕上げをいたします。

袴の疊み方

男、女ともに後の襞からきつちりと折疊み、そして前にかへして、前の襞を折り、腰板が上になるやうに三つ折りだゝみとします。

紐の結び方　袴を(い)圖のやうに置き、先づ前紐を適當な長さに折つて、圖のやうに十文字に重ねましたらば、右の後紐を矢印のやうに、前紐の下を通して引きぬき、更に同じ紐を矢印の處へ卷いて引き出すと(ろ)圖のやうになります。その殘りの先を(は)圖のやうに左向に折り曲げて置き、左の紐も右と同樣に前紐を卷いて、終りを右向の前紐に重なるやうに、矢印から引きぬきますと(へ)圖のやうになります。男女とも同樣に疊みます。

衣類の藏ひ方

仕立ものを藏ひますには、箪笥でも行李でも、すべてぎつしりと詰らないやうに工夫いたします。箪笥の深い抽出しや、行李に澤山に詰められたものは、着ないうちに、藏ひくづれがして、折角のよい仕立も臺なしになつて終ふことがあります。平常着などは止むを得ないとしても、上等の衣類は、出來るならば一揃ひづゝの入れ物に藏ひ度いものです。近頃は紙製などで、濕氣や蟲を防ぐやうな便利なものも考案されてゐるやうです又、昔からの物ですが、疊紙は非常に重寶なものです、防蟲の疊紙などもありますから、そんなものを利用することもよいと思ひます。

とにかく適當な藏器を撰ぶといふことと、も一つには長く藏ひ放なしにして置かないで、度々風を通したり、目に當てたりすることが必要です。そしてその度毎に疊みかへして、折山をかへておきますと保存もよく、蟲害にかゝることもありません。

毛織ものは、防蟲劑を布か紙に包んで、着物の間に二つ三つ入れ、ハトロン紙又は新聞紙にてその着物を石鹼包（石鹼が包んである紙の包み方）のやうな包み方にして二重位につゝみます。

その他藏器の中には、處々に防蟲防濕劑を入れておくことは必要ですが、金銀糸を用ひてある織物の藏器へだけは樟腦を入れることはさけます。藥品のために、金糸が變色いたします。

着物を藏ふときには衿垢、その他の汚れを必らず落すこと、又アイロンをかけること（毛織ものなどは殊にその必要がありますが）が肝要です。この注意を怠りますと、藏器の中で衣類を悪くしてしまひます。また着物を出す場合に下の方から引つぱり出さないやう注意しなければなりません。

二、襦袢の部

肌襦袢について

肌襦袢は、男女、大小の違によつて、寸法に多少の相違はありますが、仕立方は殆ど同一ですから、代表的な女物本裁について細かく說明し、あとは、要點だけを述べることにいたします。

地質

晒木綿・賀岡木綿・麻・綿・綿ネル等、季節によつて適當なものを用ひます。又近頃は、肌ざわりがよくて、衛生上、取扱ひ上の便利なために、ガーゼが非常に用ひられ、年々その需要が增して參りました。

本裁女物肌襦袢

用布

身丈によつて總用布の丈が定りますが、肌襦袢はあまり長くない方がよろしい、まづ五五糎から六五糎位で普通は充分です。袖は裁切二六糎として、總用布は並幅で四〇糎内外で出來ます。

仕立上げ寸法

	丈	二四、〇糎
袖		

本裁女物肌襦袢

袖附	一九、〇
袖幅	半幅いつぱい
身丈	六五、〇
身八つ口	一二、〇
後幅	二八、〇
前幅	二六、〇
衿肩明	上着より二粍つめる
衿幅	五、〇
馬乗	一二、〇

裁方と積方

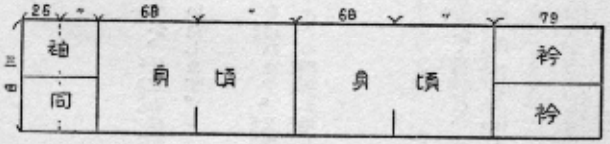
用布並幅四〇三糎

裁ち切り袖丈二六糎、同身丈六八糎

第一圖の寸法によつて、先づ用布の片端から第二圖のやうに折り疊みます。初めに、袖丈二六糎を二つ、次に身丈六八糎を四つ、次に衿丈七九糎を折り、右側の布の揃つてゐる方へ鋏を入れて、袖、身頃、衿とそれぞれ切り離します。

第一圖

本裁肌襦袢の裁ち方



公式　袖丈×2＋身丈×4＋衿丈＝總用布

26×2＋　68×4＋　79＝403

公式　(總用布－袖丈×2－衿肩明及衿先縫ひ代)÷5＝身丈

(403　－　26×2－　　11　　)÷5＝　68

公式　身丈＋衿肩明及び衿先縫ひ代＝衿丈

68 ＋ 11　　＝ 79

次に上の布から、衿は中表に布幅を縦に眞二つに切り、身頃も中表に二枚合せて、衿肩明を切ります。袖は布幅を眞二つに折つて切り離し、中表に二つ折にして、兩袖を重ねて疊みます。

標附け方

袖　二つ折して重ねてある袖を、袖山を左に、布の耳を向ふとして、これを袖口とします。耳を口にすることは、口を結ける必要がなく具合がよいものですから、すべて肌着類はかういたします。

次に第三圖(い)のやうに、袖丈、袖附、袖幅、と寸法通りに標を附けましたらば、袖山の兩端に小さく山標をします。

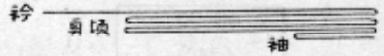
袖下は、袋縫になりますから、丈標の先きへ、裁目から八粍として、袋縫の淺縫標をします。袖幅は、袖附縫代を一糎にします。

身頃　中表に二枚重ね、衿肩明を左手前におきます。丈、背縫、袖附、身八つ口、馬乗、後幅、肩幅、山の順に(ろ)圖の如く標をつけます。

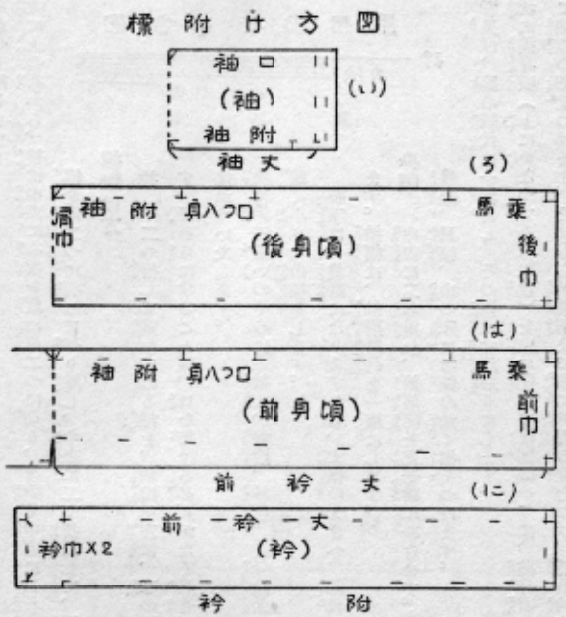
背及び、脇の縫代は一糎とし、その他は寸法通りにします。

次に後身頃(上に重なつてゐる二枚)を左に開いては(圖)のやうに、前身頃に後身頃の標をはつきりうつし、裾に前幅の標をつけます。それから衿肩明まで斜に衿附の標をつけ、前の衿丈の寸法を計ります。

圖方り折の布用



第二圖



第三圖

衿　二枚重ねたまゝ、裁ち目を手前に置きます。(に)(圖のやうに、左端から山接ぎ(縫代一糊)衿肩明(裁切り寸法から縫代、きせ代を引いた寸法)前衿丈と標を附け、次に手前へ縫代一緒として衿附の標をつけ、それから衿幅(衿幅の二倍の標)を標します。

縫ひ方

袖　外表にして袖下の縫目を袖附の方の端を二糊程殘して縫ひ、折をつけて裏返して、今度は兩端一ぱいに標通りに縫ひます。これを袋縫ひと申します。袖口は布の耳を用ひますからそのまゝにして置きます。袖口にレースでも附けますのならばこの時につけます。

身頃　背は二重縫にします。初め標の通り待針をして背縫をし、次にその先きを耳から三糎内をもう一度縫ふ方法で、これはすべて單衣の背縫に用ふる仕方であります。縫ひ終りましたらば、衿肩を右にして手前に折りつけます。

脇縫は左右ともに身八つ口から馬乘の標の間を縫ひ、上下共に抄留をして前身頃に折り、縫代を上下共斜に割つて袖をかけます。次にこの縫代を裾から袖附まで身頃に耳紐に紐けつけます。

裾は一糊幅の三つ折縫とし、馬乘の下の角は三角に折つて紐けつけます。地質の厚いものゝ時は、すべて千鳥掛にします。

衿附　衿は先づ二枚を細かく接ぎ合せて縫ひ目を割り、隱し襞をかけておきます。

衿山を背縫に合せて待針をし、これから下前の方へ衿肩廻りから順々に標を合せて片身宛けに待針を打ちます。そして下前の衿先から衿布の方を見て縫ひ上げます。衿肩廻りは細かく縫ひ背の中央まで縫ひましたらば、針を一針返し、前と同樣に標を合せて、上前へ縫ひ廻します。縫代は衿に折り返します。

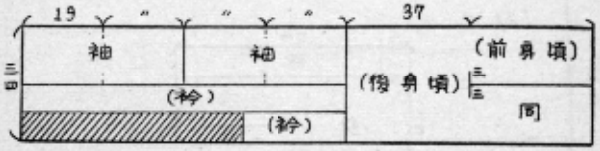
この場合身頃の縫ひ代は背の處で一糊、衿肩明の處で四糎とします。

肌着類は、度々洗濯するものですから、衿の中の縫ひ込みを丁寧に、但し目立たないやうに綴ぢつけ、三つ衿には布(三つ衿芯)を入れてこれも前縫込に綴ぢつけます。

小裁、一つ身襦袢の積方裁方

（一二歳乃至五六歳迄）

一つ身襦袢の裁ち方積り方



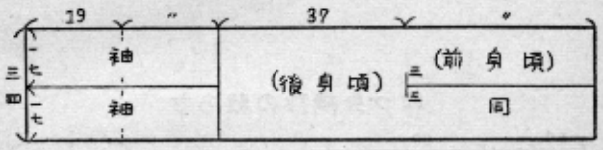
第　五　圖

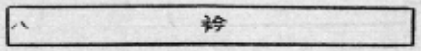
用布　並巾一五〇糎

公式　袖丈×4＋身丈×2＝總用布

（總丈－袖丈×4）÷2＝身丈

一つ身襦袢別衿の裁ち方





第　六　圖

用布　並巾一一二糎、衿布として別に並巾四つ割八四糎

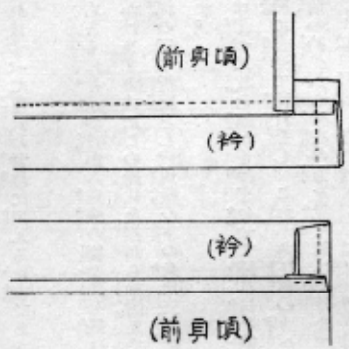
公式　袖丈×2＋身丈×2＝總用布

（總用布－袖丈×2）÷2＝身丈

衿先は、衿幅を二つ折にして標を合せ留から四糎先を縫ひ、折は留際からきちんと裏の方へ折り、縫込を衿附縫代にとちつけ表に返します。左右共同様にいたします。

衿幅標の通りに折つて處々に待針をし、下前から縫けてゆきます。この時布を心なしに扱ひますと伸びて衿付けにくくなりますから布を伸ばさないやうに注意します。

衿先きの縫ひ方



第　四　圖

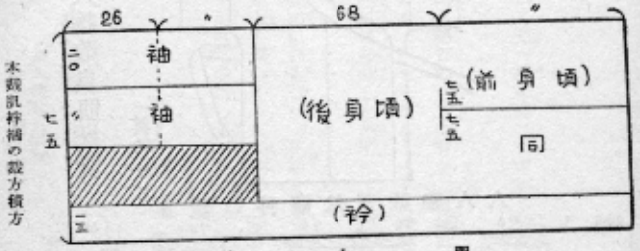
袖附　先づ袖山と肩山とを合せ、その他の標を合せて待針をし、袖の方を見て縫ひます。袖附の縫初めと終りとは抄ひ留をし、山で一針返し折は袖の方に折つて身八つ口と振八つ口を耳綴にします。

附　肌襦袢は男物も子供物も寸法に相異があるだけで仕立方は同様ですから、以下いろ〳〵の裁方と積方を示すことにします。

前にも申したやうに肌襦袢は度々洗濯する爲めに並巾でも巾したやうに肌襦袢は度々洗濯する爲めに並巾でも巾したやうに肌襦袢は度々洗濯する爲めに並巾でも巾

本裁肌襦袢の裁方積方

本裁肌襦袢の裁ち方



第九圖

公式　袖丈×2＋身丈×2＝總用布
(總用布－袖丈×2)÷2＝身丈

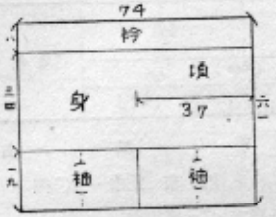
標準寸法

	男物	女物	中裁(大)	同(小)	小裁
袖丈	二六	二四	二二	二一	一七
袖幅	一七	一七	一五	一五	一五
袖附	全部	一九	一七	一六	一三
身丈	七五	六五…六八	五五	五〇	三八
身八つ口	—	一二	一〇	一〇	八
馬乘	一五	一二	一〇	一〇	八
衿肩明	上着より二耗つめる	上着より二耗つめる	七・五	七	三
後幅	三〇	二八	二八	二六	一六
前幅	二五…二六	二六	二三	二二	一五
衿幅	五	五	三・五	三・五	二・五

中裁、四つ身襦袢の裁方積方

(六七歳より十二三歳まで)

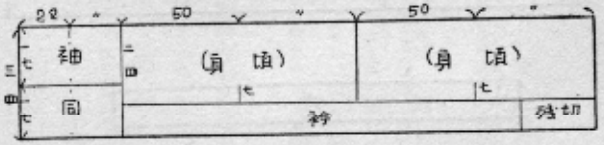
四つ身廣幅物の裁方



第七圖

用布　大幅七四糎

四つ身襦袢の裁ち方

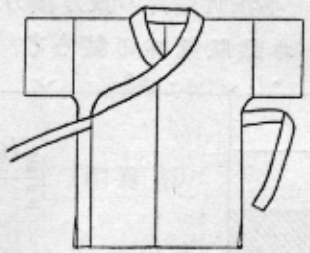


第八圖

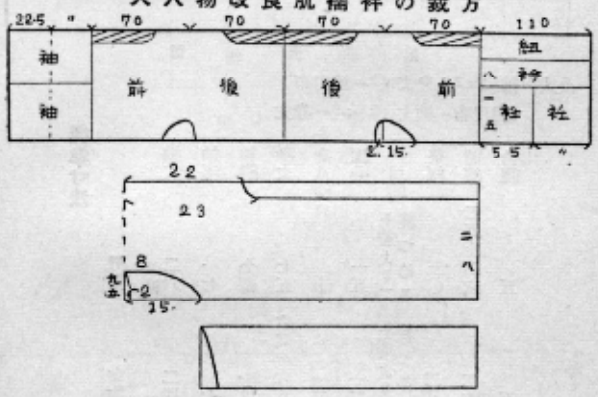
用布　並幅二四四糎

公式　袖丈×2＋身丈×4＝總丈
(總用布－袖丈×2)÷4＝身丈

大人物改良肌襦袢（其の一）



大人物改良肌襦袢の裁方



第十圖

用布　晒木綿　四三五糎

裁方　圖のやうに袖は半幅袖にして丈を二二糎五粍の二倍を取り、次に身頃の七〇糎の四倍をとり、殘りから衽と衿と紐を取ります。身頃は分部圖のやうに前劍は肩明を丸圖五粍切り込んで肩山から前へ八糎の間は眞直ぐにそれから一五糎の所へ斜めの線を引いて中央で二糎ほと割つて切り落し、後は二糎縫越を割ります。脇は袖附を二二糎にし後幅を二八糎にして殘りをずつと割り落します

標附け方　どこもかも布一杯に縫ひますから別段標附の必要はありません。

縫方

袖　普通の襦袢のやうに背を二重縫にして、それから兩袖をつけ、袖下からつゞいて脇を縫ひます。袖口は耳ですからそのまゝにしておきます。

身頃　脇には紐通しを袖附の下五糎位のところから一〇糎ほど明け、褄は馬乘を矢張り一〇糎位あけておきます。

次に前身頃に衽をつけ、褄取をし、紐通しの始末をしてから衿をつけます。

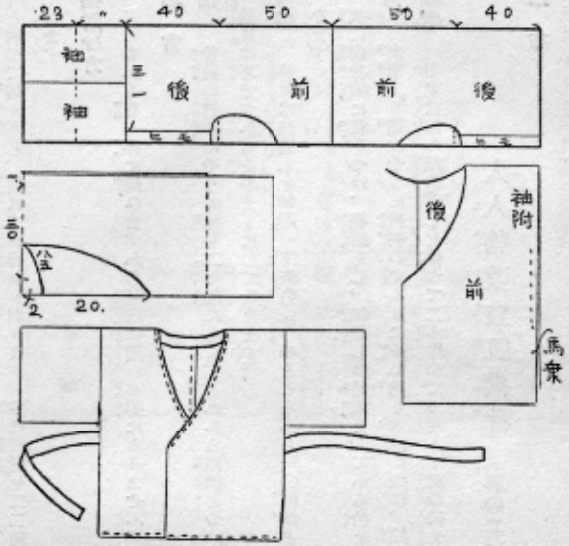
衿　出來上り圖のやうに衿劍のぐるりに少し釣り加減につけ、幅は出來上り三糎にして縫け上げます。

紐附　不足は脇の裁ち落しを使つて二本作つて上前と下前の衿先下につけて出來上りとします。

大人物改良肌襦袢（其の二）

用布

晒木綿　二二六糎



第十一圖

裁方

これは主に汗除けに着る襦袢ですから丈を短くして後に紐をつけて前で締めるやうにします。圖のやうに袖は半幅にして後身頃を四〇餘に前身頃を五〇糎丈に取ります。そして前衿剥は部分圖のやうに背幅を定めてそこから八寸五分と標して前へ剥ります、後は二糎の剥にします、そして背の縫代の深い分は裁ち落して紐布に使ひます。

縫方

袖　耳を袵口にして袵下は袋縫にしておきます。

身頃　背を袋縫にして脇を縫ひます脇は袖附のところは一糎の縫ひ代にしますが、馬乘の方は自然に縫ひ代が消えてなくなるやうに浅く斜に縫つておきます。さうしますと馬乘の耳綺をする必要がありません。

紐は三つ折縫にしておきます。

衿廻りにはバイヤスをつけて裏側できつり綺にしておきます。

袖附　普通の襦袢と同じやうに附けます。

紐附　後から裁ち落した布を二枚接ぎ合せて紐け、それを背の中央で袖附より少し下つた位置に一つ身の背紐のやうにかゞりつけておきます。

本裁女物單衣長襦袢

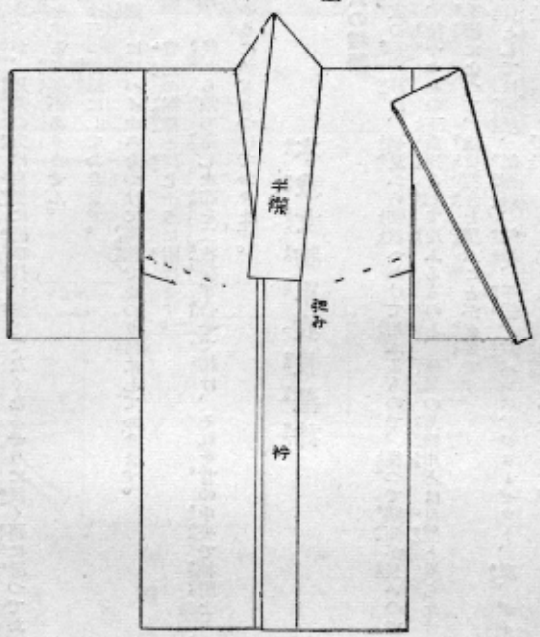
地質の種類

單衣の長襦袢は、初夏から初秋へかけて用ふるもので、從つて期間が長いので、用布の地質の種類も非常に多く、袷やセルの下着用として用ふるものと、極暑の薄物用とは自然と異らなければなりません、故にその用ふる季節によつて、地質柄合を撰ぶことが必要です。

地質としては絽縮、絽縮緬、錦紗、平絽、紋パレス、ジヨーゼツト、麻、ボイル、メリンス等が用ひられます。仕立るときには、地質によつて、それ〴〵地直しいたします。

また反物には型つき、染疵等がありがちですから、注意して、なるべく見えない所へ廻すやうにいたします。

仕立上りの圖



第十二圖

仕立上げ寸法

袖丈　着物より一糎つめる
袖口　濶袖
袖附　着物より一糎つめる
袖幅　着物より四粍つめる
身丈　着丈
後幅　着物と同寸或は肩幅と同寸
前幅　着物より四糎廣く
身八つ口　後一二糎　前一六糎
衿肩明　着物より四粍つめる
衿幅　廣衿　一一糎　紬衿　上五糎五粍、下七糎五粍
前の弛み　四糎
裄　着物より四粍つめるか又は同寸

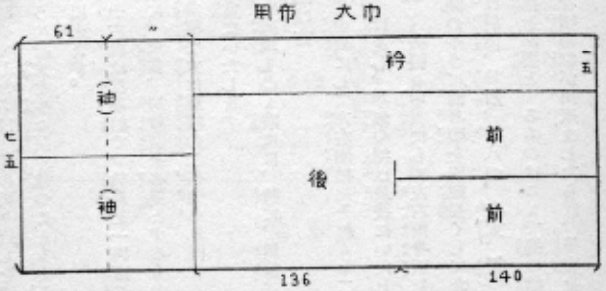
以上は普通寸法を示しましたが、身丈を少し長目に裁つて内揚をして置きますと、裾の切れた時にそのまゝ切り下げることも出來ます。

又袖附を前後で二糎の附け違ひ、即ち後を普通の袖附より二糎少くしておきますと、着心地のよいものになります、然しこの附違ひは襦袢だけでなく、着物も羽織もすべて同樣でなければ袖の振が合ひませんから反つて見苦しいものになります。

裁方と積方

總て用布は、公式の示す通り、袖丈の四倍と、身丈の四倍へ、衿の用布を加へたものが全體の用布になるものですが、長襦袢の衿は、着物と違つて、裾まで附けなければなりませんから用布も非常に澤山要します。故に衿の總丈を見ますには、身丈に衿先縫代と衿肩明、前の弛みを加へたものの二倍が總丈となります。又山の接代を豫め見積つておきます。

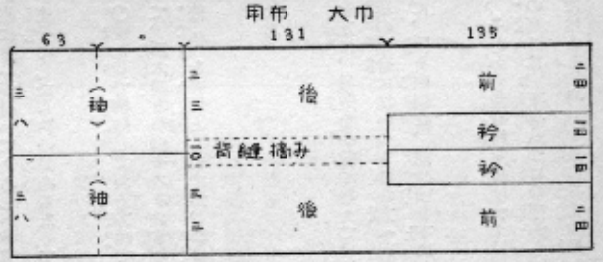
第十三圖は別衿仕立で充分な用布をもつて仕立てる場合に用ひますが、用布の都合によつて、別衿に出來ない



第　十　五　圖

公式　袖丈×2＋後丈×2＋前の弛み－總用布

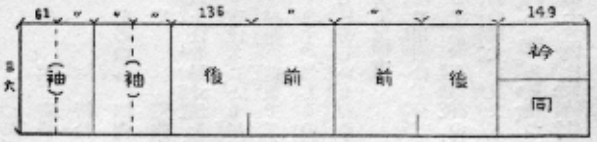
{總用布－(袖丈×2＋前の弛み)}÷2＝後丈



第　十　六　圖

公式　袖丈×2＋後丈×2＋前の弛み－總用布。

{總用布－(袖丈×2＋前の弛み)}÷2＝後丈

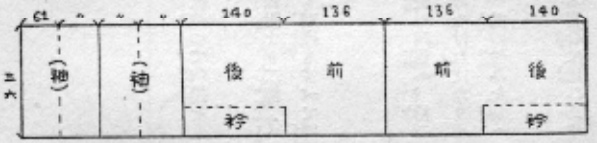


第　十　三　圖

公式　袖丈×4＋身丈×5＋前の弛み×2＋衿肩明及び衿上下の縫代＋前の弛み－總用布

{總用布－(袖丈×4＋前の弛み×2＋衿肩明＋上下の縫代＋前の弛み)}÷5＝後身丈

後身丈＋前の弛み－前丈



第　十　四　圖

公式　袖丈×4後丈×4＋前の弛み×2＝總用布

(總用布－袖丈×4－前の弛み×2)÷4＝後丈

場合、或は痩せた體格の人には摘み衿を用ひます。用布も少く從つて輕い襦袢を作ることが出來ます。第十四圖はその裁方を示したものです。

以上並幅物の裁方二種によつて、廣幅に應用しますと次の第十五、第十六の兩圖となります。

第十五圖は後幅を肩幅に足りる丈け取つて、殘り幅を衿としたものです。然し衿丈がこのまゝでは不足しますから、衿下に足し布をします。然し用布が充分あ

る場合でしたらば、裾の折り返しを深くするやうにすると裾に重みが付いてよろしい。或は内揚げをして置くやうに身丈を少々長く裁つこともよろしい。従つて用布が充分でしたら衿の足布もなくてすむやうに裁つことも出来ます。

第十六圖は摘み衿で、衿肩を一四糎に切り、廣い部分の一〇糎を背で摘縫しておく方法です。別に、肩當、居敷當を必要とするものには表の地質によつて、晒木綿とか白モスリン等を用意します。肩當布は並幅で丈は肩幅の二倍強あればよく、居敷當は並幅四〇糎位を普通としますが、都合によつては幅も丈も適當にいたします。

また薄地ものゝ時には、特に、肩當、居敷當などを用ひません。

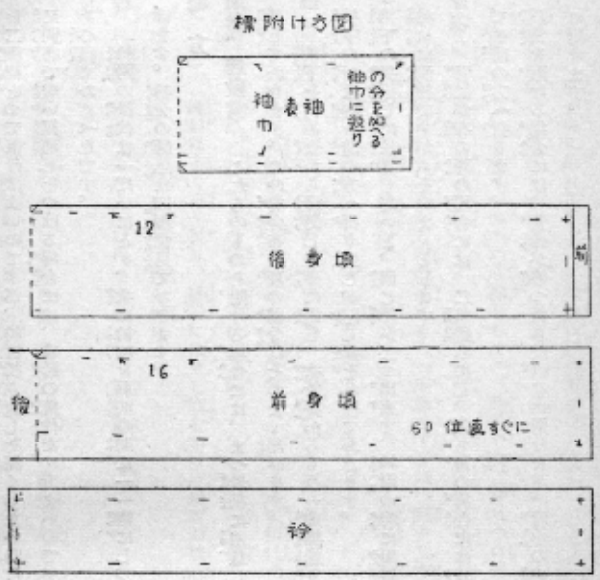
標附け方

袖　中表にして左右兩袖をそれ〳〵二つ折にして重ね、輪を左に、袖附を手前に据えて、袖山、袖丈、袖附と標つけをし、袖幅の標は最後にいたします。但し布の耳は單の場合にはいつも口の方へ廻します。

身頃　矢張り中表にして左右兩身頃を合せ、衿肩を左手前に、脇を向側に、前身頃を下にして据えます。この時圖のやうに前身頃を四糎長くしておきます。

標は肩山、袖附、身八つ、身丈、裾の新代、背縫、と標し、それから後身幅を付けます。

内揚を必要とするものはこゝで揚の標をいたします。揚標の高さは、下身八つ口の標から四糎下に付けます。後身頃の標が出來ましたらば、後布を左に取り除けて前身だけとし、身八ツ及び身丈の標を四糎下へつけ直し



圖第十七

前幅の標をつけます。寸法は、裾から五〇糎位眞直ぐに、それから上は衿肩から糸を張り、肩から一二糎の處に心持ち丸味をもたせながら斜に衿附の標をします。その他の標は、先の後身の標づけと同樣ですから、標を明瞭につけて置きます。

尚注意すべきは、背縫の耳の場合は普通の縫代で間に合ひますが、斷ち目の場合には、袋縫になりますから裁分縫代を多く要します。又場合によつては、背縫だけを豫め縫つておいて、後から標附をするのもよい方法です。

又裾を三つ折縫とする場合は縫代

を二糎程とつて置けばよいのですが、特に折り返しを深くしたい時には、その分だけ餘計に見込んで置くこと又別布で短い裾廻しをつける場合には、背通の縫代だけでよいのですから、各々の場合によつて變化することを心得ておくべきです。

衿　衿附の縫代は一ぱいにとり、次に衿幅を肩明の間は二糎にし、裾では十五糎の幅にしてその間に標をつけます。衿先の縫込は四糎位見ておきます。

縫　方

肩當、居敷當　これらのものを附ける場合には、まづ最初に用意して、周圍を裏側に伏せて一目落しに隱し縫しておきます。この場合布の耳の部分はそのまゝ用ひます。

袖　袖下を初め表から澁縫して裏に返し、次で裏からもう一度標通り縫つて袋縫とします。

袖下の折は各々前の方へ折り返し、縫し襞をかけておきます。

袖下の折返しに注意しないと、同じ袖が二つ出來て、袖附の時に面倒になりますから、この點に注意します。

袖口は潤袖ですからそのまゝとします。

身頃　背縫が布の耳の場合には、二重縫ひにし、裁ち目の場合には袋縫とします。折は衿肩を右に裾を左にして手前の方へ折ります。

肩當を附ける場合には、背縫が終つたらば直ぐに附けます。背中の中央を背縫に合せて、單衣物の肩當と同樣に附けます。

居敷當も亦同時に附けて了ふ方が扱ひに便利です。

次に內揚げの必要なものは揚を縫ひます。

內揚げをしないものは、直ちに脇縫をします。脇縫では、身八つ口の標が、後と前とでは四糎違ひますが、これは前身の摘みの爲めの弛みですから（この弛みの分は後で摘みます。）標通りに待針して縫合せます。そしてその脇縫の縫目の先四粍か五粍の處をもう一度縫ひ下身八つ際で二本の縫目が一緒になるやうに、四糎位の處から斜に初めの縫目の方に寄せて縫つてゆきます。そして最初の縫目を前の方に返し、二度目の縫目は別つて、二本の縫目の眞中あたりへ疊襞で押へておきます。

この時注意しないと、袖附の耳がつれます。肩山の處では肩幅より四粍廣く折をつけ、身八つ口まで耳のつれないやう斜に、布裏に折を返し脇縫まで平に削り、耳を一糎の折代で伏せ、身頃へぐるつと綴付けます。

內揚げの仕方は、男物單衣の揚と同樣に、背縫をしてから、揚を摘みます。この時脇縫より外の縫込は縫はずにおいて、縫目は下の方へ折り、縫目にはぐし襞をかけ、揚げの縫込の峰を表へ細かく針目を出して身頃へ綴付けます。そして、脇を縫つて揚を開きます。

裾は標通りに三つ折にして綴けますが、背や脇の縫目の處では必ず表へ針を抜き出して一針返ししつかりと留めて綴けます。

メリンスなどで堅裂しやすいものには、この三つ折ぐけの中へ芯としてメリンスの横切れ或は薄地木綿の細い端切を入れますと、堅裂を防ぐことが出來ます。

衿附　衿は、衿先を四糎位の縫込みと見てありますから、衿丈に接ぎを入れる必要のあるものは、その積りで衿丈を大體計つて接ぎあはせます。接ぎ目は出來るだけ小針に縫ひ、割鐵をかけて壓搾をしておきます。別に新モスの衿芯を表衿と同寸位用意して表衿の上につれないやうに重ねてぐし襞をかけておき、二枚一緒に衿附の標通りに合せて一緒の縫代で縫ひます。

縫代は衿の方へかへし、衿先を縫ひ、標の通り折をつけ、申が強んだり、つれたりしないやう注意いたします。三つ衿はよく衿肩の切れ目をそろへて三つ衿布を緩ぢつけ、褄から絡けてゆきます。絡けをはりましたらば、絡目と峰へ平鐵をかけます。これは衿の中へ折込みを平らに落ちつかせるためでありますから丁寧にかけておきます。

衿先は衿幅を二つ折にして、衿幅標を合せ留から四糎先きを縫ひ、折は衿の縫留の處から折つて縫込を衿附にとぢつけ、表にかへして絡けつけることは、本裁肌襦袢と同樣です。

袖附　先きに身頃を縫ひますときに、四枡だけ廣く殘伏せしてありますから、袖を着ける場合にはそのまゝ肩の山標と、袖の山標とを合せ、袖を手前にして中表に合せて縫ひます。折は袖の方に返します。

袖が着きましたらば、振を袖幅標から折つて、絡けつけます。その時袖附の縫込みも同樣にくけ附けます。最後に身八つ口の下際で、前の強みの四糎長くなつて居る分を掬んで表身頃に針目を出してとぢつけておきます。

この仕立方は、前衿先きが後よりも長くなつて居りますから、着た時に前が吊り上がらずに大變着工合のよい襦袢であります。

半衿　同じ丈の芯と裏衿とを用意して三枚一所に一方の端を縫ひ、芯布は半衿に重ねて、普通掛衿のやうに本衿へ絡けつけ、裏衿も同樣に衿の裏へ絡けつけます。

本裁女物袷長襦袢

大體は單衣長襦袢と同樣ですから、異る部分だけを說明することにします。

袷物ですから、表用布の外に裏用布を用意して置きます。裏用布は胴裏と、裾廻し、袖裏ですが、袖は無雙にすることもあり、又裾廻しを引返しにすることもありますので、一樣ではありませんが、一般に袖裏は表布につりあつた地質の色柄を用ひます。また、裾廻しは普通の着物よりは少なく二五糎位を普通とします。又平常着用のものには、並幅もの半幅の横切を用ふる場合もあります。

裁方

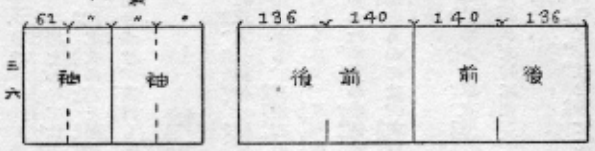
表布の裁ち方は單衣襦袢と同樣です。

裏布は胴裏だけに用ひ、袖裏、裾廻しは別布を用ひます。

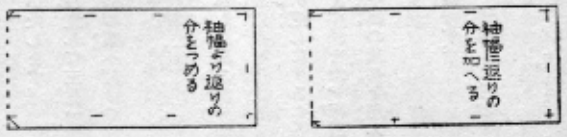
標附け方

袖　袖口を毛抜き合せにする場合には表裏共に同じ標附にします。又表布を裏の方に折り返した（大名袖）

方ち裁の裏胴



第十八圖



第十九圖

袖には、表袖幅の縫代をいつぱいにして、その中から仕立上げの袖幅を引いて裏へ返す寸法を定めます。裏袖幅は仕立上りの袖幅から、表袖の返りを引いた殘りが裏袖幅となります。裏幅の縫込みは八つ口の方へ入れ、袖丈、袖附、山の標をつけることは、單衣と同樣です。

身頃 單衣と違ふ處は、裾が三つ折りでありませんから、裾の普通縫代だけをとつて置きます。

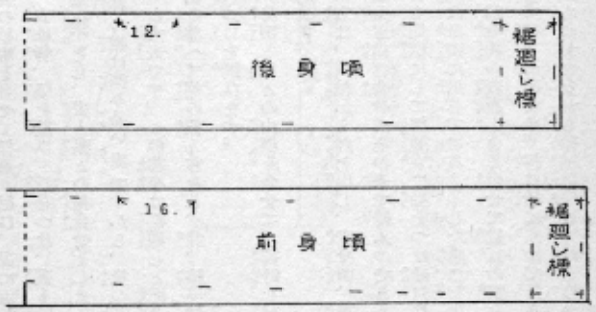
裏身頃 總丈は表身頃より枇の二倍だけを長くします。裾廻しは、着物の場合と同樣ですが、横布を用ふる時は、背から二つに折り、背の縫代、後幅、脇の縫代、前幅の標附の順序に標をつけます。又縫目を入れずに横布をそのまゝ用ひてもよろしい。

衿 單衣と同じであります。

縫方

袖 表袖と裏袖との袖口を縫ひ合せ、裏袖の方へ折をかへして、きせ山から五粍の處に二糎五粍の針目で隱躾をかけます。毛抜き合せのときは致しません。次に袖下を縫ひ合せます。袷の袖下と同樣に四つ縫ひとしますから、袖口の折山から（大名袖のときには表布の方に、毛抜き合せならば表裏の合せ目が折山となります。）二つに折つて表裏を合せ、ずれないやうに待針を打つて縫ひます。このとき注意しないと、同じ袖ばかりが二つ出來ますから、一方は表を見て縫ひましたら、片方は裏を見て縫ふといふやうに注意いたします。袖下の四つ縫は、振の方一〇糎位手前迄縫ひましたらば一と針返して、表、裏別々に縫ひます。折をつけて一旦表に返し、袖口の方を整へ、更に振の部分だけを裏返して

図方け附標頃身裏



図方け附標し廻裾

第二十圖

表と裏の袖幅を合せて標通り縫ひ、表に返して袂をかけます。

身頃　表は背、脇を縫ひ、折をつけ、裏も同様に脇、裾廻しを縫つて胴接きします。接ぎ目は裾廻しの方へ折つて疊縫をし、表と裏との裾合せをします。表に返して四糎ほどきせをかけて袂をかけます。（長襦袢の裾は縮み易い處ですから、袵の芯に細い四糎位の薄地の布を一枚通り縫代にとぢつけて入れて置きますと丈夫です。この芯布は裾廻しと同系の色合でしたら一番よろしい。）

袵の出を整へて裾の假とぢをし、背、脇の縫目を裏表とぢ合せ、身八つ口の留を女物袷のやうにして、前後の身八つ口を縫ひます。

袖附　身頃と袖との山標を合せて、待針を打ち、表身頃の縫代を留の際から斜に折り出し、袖附の標を合せて留をします。

留の仕方は、表袖から針を出し、表身頃、裏袖へ出し、次に裏身頃を縫に抄つて、裏袖表身頃、表袖へ返つて初めの糸と結び合せてその糸で綴ふのであります。この留は前後とも同様です。

前後とも同様にして標通りに袖をつけ縫目は袖にかへします。あまり折目が厚くなるやうな場合には、表は袖に、裏は身頃に返してどろ〳〵した感じをなくします。

衽附　前身頃の表裏をよく合せて縫目の際を襞糸で假とぢをし、衿と芯布を重ねて身頃の標を合せて三枚一所に縫つて衿をつけます。折は衿に向けて折り次に衿先を縫ひ、三つ衿を入れて衿の中がどろ〳〵しないやうに平におちつかせながら衿幅を定めて針を打つて紐けます。

裾とぢ　裾とぢは後身頃の裏に五針を、前身頃の裏には四針を出し表はその間々へも出します。

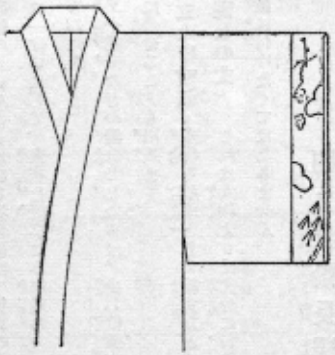
前の弛み　前身の身八つ口の處で四糎の弛みを作つておきましたから、これを摘みます。摘み方は、單衣と同様に、身八つ口の下で表身頃に針目を出してとぢて置きます。

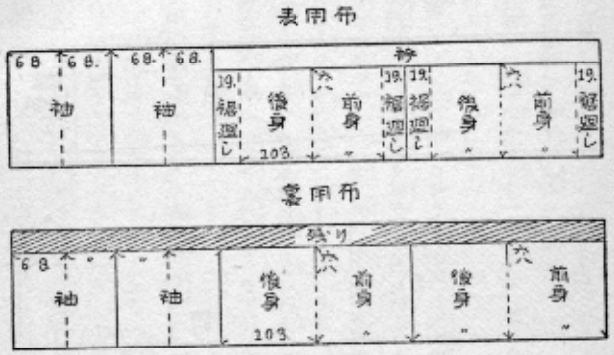
本裁男物袷長襦袢

男物は、單衣長襦袢の項でも書きましたやうに、大體に女物と同様ですからたゞ注意すべき點のみを揚げることにします。

前身頃の摘みのないこと、袖の振八つがなく人形をつけることなどで、その他は女物と同様です。

袖　男物の袖で注意すべきは、多くの場合柄のある方が裏で、無地の方が表になります。これは、男物は袖口が廣いので、人目に見えやすい處は、表よりは反つて裏の方がよく見えるものです、從つて、表は無地でも裏には變抜きの模様を用ふることが多いのです。ですから、別袖でなく有合せのものを附けますのにも、その心掛けで、裏の方へ却つてよいものを付けるやうにいたします。





第二十二圖

袖附	一一・五糎
袖幅	二八・五
身丈	一〇〇
後幅	二四・五
前同	同
衿幅	四・五
身八つ口	一一・五
衿肩	五五
衿	五・七

裁方

表身頃　圖のやうに、仕立上りの袖丈に縫代を加へた六八糎の四倍を先づとり、殘りの用布の幅から八糎の衿をかきとつて、身頃と裾廻しをとります。この裾廻しは身頃の丈が充分である時に取るのでありますから勿論短い時には別布を用ひます。

子供ものは、背丈がすぐに伸びますから、なるたけ身頃を

布幅の狹いものを用ひる場合には、袖口の處を毛抜き合せにいたしますが、幅の十分なものでしたらば、裏布は一ぱいにして、表布を縫ひこみ表袖の方へ裏布を引返して來ますと第二十一圖のやうに別袖のやうな感じのものになります。

又平常着などの場合でしたらば、少し位袖丈が短くても差支へありません。着物の袖附だけの丈があれば、間に合せることも出來ます。

仕立上げ寸法　着物を標準として裄丈などは女物と同じ割合位につめればよろしい。

裾廻しの丈　これは女物よりは充分に付けるやうに習慣づけられて居ります。平常着でも二八糎乃至三〇糎位は付けなくてはなりません。

四ツ身袷長襦袢

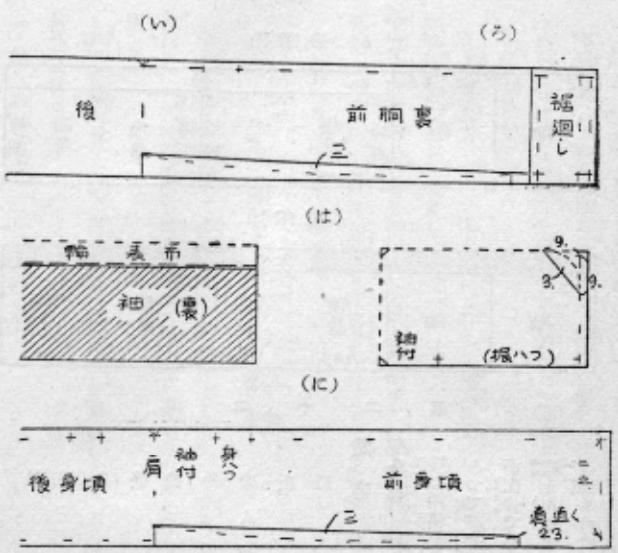
今迄大人ものについて各種の仕立方を揚げましたが、子供ものも、裁方に多少の相異はありますが、大體は、大人ものと同樣ですから注意を要する點だけを說明することにします。

用布

表用布並幅七五七糎、裏用布六八二糎位を用意します。

仕立上げ寸法

袖丈	六六・五糎



第二十三圖

充分にとつておいて、揚をして置き、伸びるにつれて揚をおろすやうにしますから、寸法にも餘裕を見ておくことが必要です。

裏身頃　裏身頃は用布全體から先づ六糎の衿をかき、袖と、身頃を圖のやうにとります。

袖を一幅でとらないのは、表袖を丸幅でとりましたから裏はなくてもよいからです。然し表衿も充分ある場合や、裏袖を切るのが惜しい場合には廣いまゝで用ひます。

標附け方

袖　表布を裏へ見返す袖は第二十三圖(い)のやうに裏と表の幅を接ぎ合せ、縫代を裏側へ片返しにして隱躾をし、中表にして幅を眞二つに折り表袖を上にして(ろ)圖のやうに丈を二つに折つて据えます。山標、袖丈、附、袖幅などを標して袖下の丸味をつけます。

裏袖が一幅の時には表を一杯に用ひ、裏の余分は縫ひ込みます。この縫込は痛まない爲めに表幅との接ぎ合せの方へ入れておきます。

身頃　(は)、(に)の兩圖のやうに、大體は大人物と同樣な順序にいたします。

衿附の標は、前身幅を裾で二五糎と標し、それから二三糎位は眞直ぐに、こゝから肩へ斜に標を通しますが中央で圖のやうに一糎二粍のふくらみをつけてこの線を縫ふやうにします。胸が開かないで着よくなります。

裏身頃は、裾の出の二倍を丈に加へること、裾裏布をつけること以外は表と同樣です。

衿　出來上りの身丈に衿肩明、及び衿先の縫込みを加へたものゝ二倍が衿丈になります。

この襦袢は充分表布で丸衿になりますが、表の足りない時には裏の殘布を足します。

縫方

標附の通りに縫ひます、順序縫方注意など大人物と同樣です。

四つ身には前の摘みはありませんから、袖附、身八つ口等前後同樣に縫ひます。また身丈は着丈にかまはず裁切一杯に縫ひ上げます。そして仕立上てから着物に合せて腰揚げをします。腰揚げは着物と重ならないやうに身八つ口より四糎位下つた處で内揚にしておきます。

附

經濟的には、衿を身頃全體からかゝずに前布からだけとつて、後は背で縫ひ込んでおきます。この場合には衿は裏衿をつけます。また共裾でない時でしたらば衿肩へ外の切を入れて衿丈をのばします。

振袖袷長襦袢

振袖長襦袢は普通の長襦袢と略同樣ですが、たゞ袖丈が長く、袂に丸味をつけること、及び多くは無雙のものですから表布を多く要するといふ點に多少の相違はありますが、根本的な仕立方には大した違ひありません。

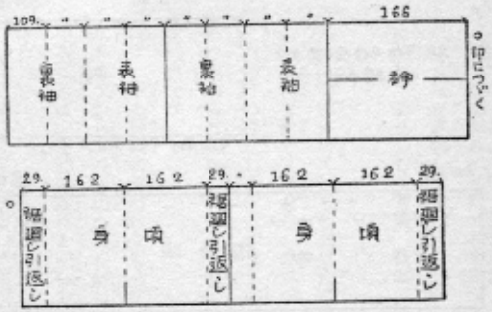
用布

振袖を用ひますことは一般には婚禮などの場合又は婚禮でなくても若い人が用ひますので、大抵は緋の紋縮緬を用ひます。表用布は一反半、裏用布は紅絹五三〇糎、半衿は白の羽二重或はそれに白、金、銀糸の刺繡などのあるのを用ひます。

仕立上げ寸法

着物に準じて左のやうに增減します。

袖丈	八粍つめる	袖幅	四粍つめる
袖附	四粍つめる	衿	着物と同寸
後幅	二糎增す	前幅	四糎增す
衿肩明	四粍つめる	身八つ口	着物と同寸
前のつまみ	四糎		
衿	旋衿の時上五糎五粍、下七糎五粍 廣衿の時は十一糎		
裾	四粍		



第二十四圖

裁方

圖のやうに裁ちます。即ち表布で、裏袖、裾廻しも同時に取ります。次に、裏用布では、身頃の裏だけを取ります。裏身頃の丈は出來上り身丈に出裾の分八粍を加へたものになります。

標付け方

袖　振袖ですから、袂の丸味を七糎五粍として付けることだけが、普通の場合と異るのみで、その他は袷の長襦袢と同樣であります。

表身頃　中表に合せて、肩から折つて前身頃を下にし、衿肩明を手前にして、山標をつけ、身丈に內揚げ寸法を加へた丈だけの標をつけ、裾の引返しは摘縫にしますから、摘縫の縫代一糎五粍をとり、殘り一ぱいを裾の引かへしとします。

（勿論豫め裾引返し布の寸法は定めておきますし、身丈も定つて居りますので、殘り全部は内揚となりますから、標つけの初めに凡の寸法を當つておかないとまごつきます。内揚げはなるべく多く取つておく方が縫ひ直しの場合など好都合です。）

次に袖付、身八つ口、背縫、後幅、肩幅と順次に標して、最後に身八つから四糎下つた處に内揚げの標をします。

身八つ口の標は輕く、その他は前身までよく通るやうに標をします。

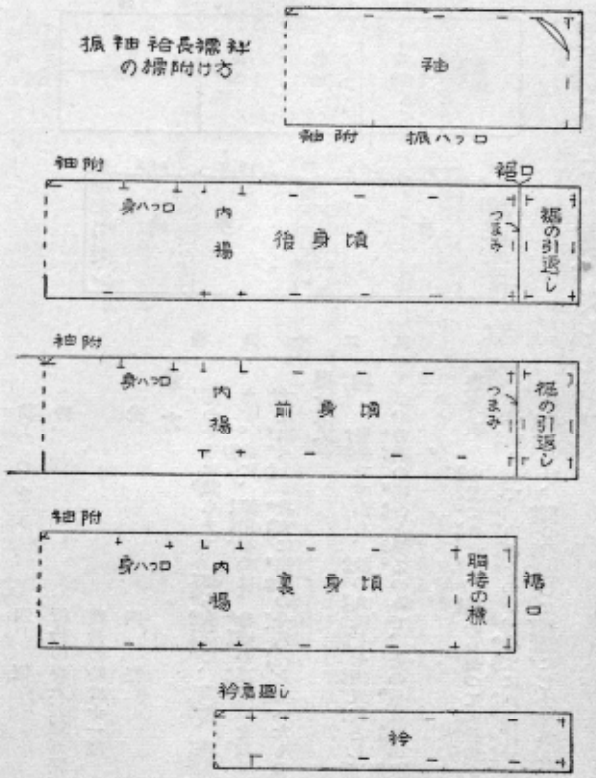
次に後身頃を除いて前身の、身八つ口に四糎の摘みの分をも加へて身八つの標をし、これから更に四糎下つた處に内揚げの標をします。つまり前の内揚げは後よりも摘みの四糎だけ少くなることになります。

前幅は袖から五〇糎位まで眞直ぐに、袷肩明から一二糎までの處に心持ち丸味をもたせながら袷肩まで斜に標をつけます。

裏身頃　表と同樣に標づけをします。たゞ裏にも内揚げのある場合には、表と同一個所ですと、布が幾重にも重なりますから表の折山へ裏の縫目がゆくやうに裏の標を下げてつけます。身丈を表布より出來の二倍だけ長くすることは、普通の襦袢と同樣です。

縫方

袖　袖は大名袖（表布を裏に見返へす）ですから、袂の丸味までは普通の筒袖のやうに縫ひ、丸味から標の通りに袂に縫ひます。袖下振り八つは普通襦袢の袖と同樣です。



第二十五圖

裏袖は振の方では心持つらせ加減にし、幅も表布が心持裏の方へ見返る位がよろしい。縫ひ上りましたらば振り八つへぐし襟をかけます。

身頃　先づ表身頃の背縫をして、後身頃の内揚を縫ひ裾の方に折つてぐし襟をかけて置きます。前身も同様に内揚を縫ひましたらば、脇を縫ひ合せます。背、脇ともに裾の引返しの分は縫はずに置きます。前布は身八つ口に摘みの分だけ弛みがありますことに注意しないと裾が合ひません。裏身頃も表と同様に縫ひ上げます。そして胴接ぎ櫛の歯へ、裾廻しの引返し布を付け、折は裾の方に折つてぐし襟をかけ、裏布と共に背、脇を縫ひ合せます。

裏、表の身頃が縫ひ上りましたらば、裾を摘縫ひして合せ四耗のきせで折目は表にかへして襟をかけ、出衿を四耗にして仮とぢします。

以下普通長襦袢と同様な方法で縫ひ上げます。

衿　縮緬物でしたら新モスか金巾の衿芯が必要です。表と同じ色合のものを撰びます。また衿布が長い時には衿先に縫ひ込まずに、中央の割接ぎの方に多く縫ひ込んで置きますと、衿先の縮んだときに容易に直せますから必要以外の縫込みは衿先にはとりません。

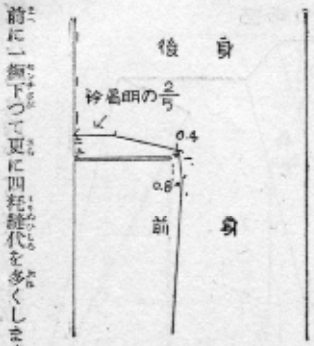
割接ぎの中央を背にあてゝ、あとは前身頃の標通りに裾口から附けてゆきます。衿は三つ衿の處は普通五褄七耗に共れから下は七褄五耗幅に自然に幅を出しますが、肥つて頸の短い人は心持せまくして置きます。

裾とち、前の摘み、その他仕上げ方法は普通の襦袢と同様です。

半襟は別に廣衿のやうに別衿をつくつてかけることにいたします。（第二十七圖參照）

女物長襦袢の上手な仕立方急所

着丈を長目に　長襦袢の丈は多くの場合に、着丈寸法だけに仕立るものですが、着丈よりも少し長目に仕立てておいて、自由に長く着たり短く着たりすることの出來るやうに仕立ておくと、天気の悪いとき、また室内だけの立居で、着物を長目に着る時など加減するのに都合であります。又裾が汚れたり切れたりした時には他の部分はそのまゝにしておいて、痛んだ所だけを縫ひかへすことも出來ます。然しこの仕立は着付のときに腰紐をきちんと締め伊達巻をまいて置かないと着くづれがいたします。又、腰の處に身丈のゆとりがありますから、着物の衿より長襦袢の衿が引込むこともありません。



第二十二圖六

衿のつけ方　衿はすべて芯を入れて置かないと衿にならないやういたします。この芯は腰から下は衿巾だけ入れて餘り厚くならないやうにしないと、歩く度に裾が開いて見苦しいものです。衿附は三つ衿縫代を二褄三耗にして、衿肩の五分の二は直ぐに衿肩まわりは四耗の縫代で衿布をゆるくします。肩から前に一褄下つて更に四耗縫代を多くします。

肥つた人、鳩胸の人の仕立　前幅をゆつくりといたしますには、裾から七、八〇糎までは前身の幅を真直ぐに、それから上を衿肩まで斜につけます。鳩胸のやうな人ならば前身の裾から七、八〇糎上つた所から衿肩までを一つ身の衿付のやうに丸く裁らせて縫ひますと胸幅が廣くなります。また圖のやうに別衿をつけたものも着よいものです。

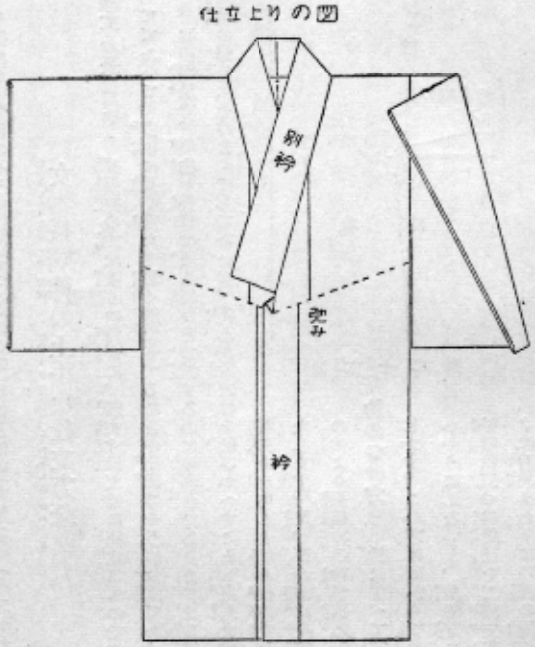


圖　第二十七

半襟のかけ方　半襟芯には、帶芯用の三河木綿を三つ割にして半衿の長さより一九糎程長くしたものを用ひます。これは、襦袢の腰紐で半衿先がきちんと押へられますので、着くづれがしないためです。

下着の上手な仕立方急所

肌襦袢　肌につくものは、皮膚の分泌物をよく吸收させるために、木綿類を用ひます。圖、ガーゼ、メンネル等の植物性纖維のものが適して居ります。近頃毛糸類の編物、メリヤスのやうなものを用ふる向もありますがこれらは皮膚を刺戟したり、皮膚の分泌を防ぎますから直接肌につけますことはなるべくさけたいものであります。

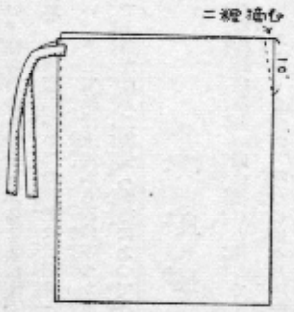


圖　第二十八

仕立方は、在來襦袢を三つ折にしましたが、この方法は裾だけが厚くなりますから、薄物單衣などの場合には、この折目の厚味が着物の上にまで現はれて着物に横段がつきますから、裾廻を廣し裁目をかゞつて糸のほつれないやうにして切ります。

衿肩明は長襦袢より四粍せまく、（着物よりは八粍せまく）繰越しは一糎に、衿幅は四糎以上にならないやうに、また衿の中に入る前身の繰込みは切りすてゝ衿を薄くいたします。衿附の注意は着物と同樣ですから省略いたします。

掛衿は、外出用には白絹、又は富士絹、平常用にはキヤラコ、人絹の白、夏向には絹麻の白などがよろしい。他の色のものを用ふることは下品に見えます。

腰巻　用布についての注意は肌襦袢と同様です。両端の裁目は三つ折縫にするよりは、三つ折縫の方がよろしい。そして紐は上端から四糎下つた所につけます。これは前が開くのを防ぐためです。又圖のやうに後の中央で上部だけを二糎位（體格によつて各々加減します）つまみますと、躰にぴつたりと合つて樂に着られます。

改良長襦袢

長襦袢の痛み易い處は袖口と裾口ですが、袖口の痛みは、レースなどを付けて裝飾をも兼ねて痛みを防ぐことに致して居りますが、裾口の痛みは手輕に防ぐ方法もなく、また紐ひにも不便を感じますことが多いので、裾だけを取りはづして綴ふ改良仕立を書きませう。これは平常着用の長襦袢には最も便利な經濟仕立であります。

材料

裾廻りと袖を無双として九四二糎、これは並幅ですが、袖を無双にする爲めには廣幅の方が便利のこともありますので、廣幅ものを用ふるときにはその約半分で充分です。胴抜分は三二八糎、裏地用布は六二五糎を用意します。

出來上り寸法

背通裕長襦袢と同樣ですから省略いたします。

裁方

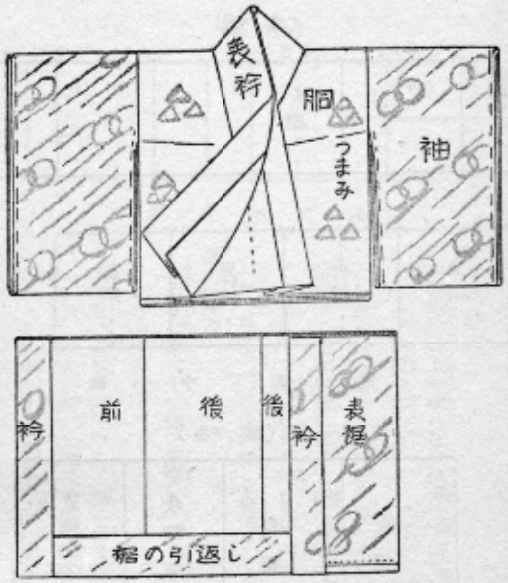
並幅ものゝ場合は、第三十圖のやうに、袖と表裾から裁ち初めます。

袖と表裾の裁方

袖丈に縫代を加へた寸法を裁切り寸法として六〇糎の八倍を切ります、これは裏表とも同じ布で作る無双の袖になります。

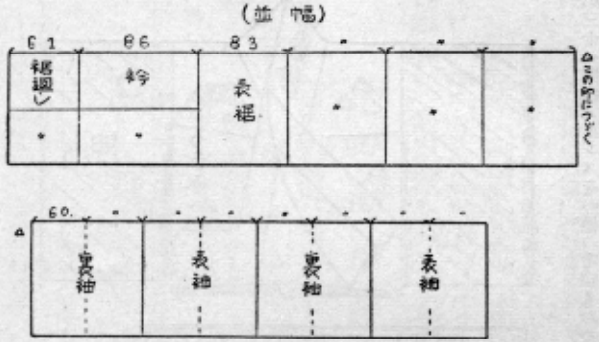
表裾　八三糎を表裾の丈として四枚分を切り取ります。

衿と裾廻し　八六糎を中央から眞二つに切つて衿とし、裾廻しも六一糎を二つ割にして横布の裾廻しとします。

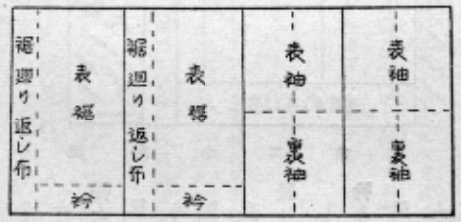


第三十一圖はメリンスその他の廣幅ものの場合の裁方圖であります。

第　二　十　九　圖



第三十一圖

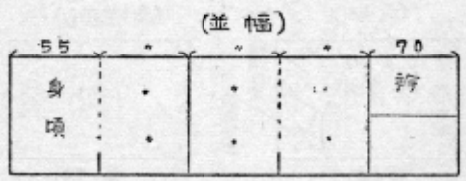


第三十一圖

袖　袖は無双ですから袖口は輪になつてゐる方がよいので、切りはなしません。廣幅のまゝ袖丈の四倍を裁切ります。

表裾と裾廻し　並幅のときには各々切り離して取りましたが、これは表裾に裾廻し布を加へたもの丈として、二丈とります。そして縫ふときには摘み縫ひして置くといたします。

衿　は廣幅の場合には、摘衿で充分間に合ひますから、別に取りません。



第三十二圖

胴抜の裁方

普通袷衣の上半身になる部分ですから、着丈から表裾丈を引いた殘りの寸法が上半身、胴抜の丈になります。裁切り丈はこの出來上り丈に縫代及び、下半身との接ぎ目の重なる寸法とを加へたものが實際に必要な裁切寸法となります。第三十二圖は胴抜の裁方を記しました、衿は七〇糎を幅二つ割として繼ぎ合せて用ひます。身頃は五五糎として四枚を取つて衿肩明を切ります。

（以上は身丈一三七糎位を標準といたしました。）

裏の裁方

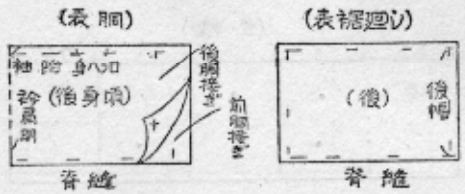
上半身は第三十二圖と同樣ですが裏衿は要りません。但し摘衿の場合には裏衿の用布が要ります。

下半身は表裾と同寸の八三糎に出衿の二倍を加へたるのを用意いたします。然し部合によつて多少は短くても、裾廻し布の下になりますから差支へはありません。その場合は、適當た足布を用ひます。

標の附け方

袖　普通袷長襦袢と同樣です。

表身頃　先づ表裾布に第三十三圖のやうに布丈一ぱいに丈の標をつけます。次に胴抜き用布に圖の如く、仕立上りの身丈から表裾丈を引き縫代の三糎を加へた寸法を胴布の丈として、肩山から計つて標をします。このとき前布の方で胴接標の下に四糎出して前の胴接標をしておきます。これは前の摘みの寸法だけを長くするためです。以上のやうに兩方の接合せ標が附きましたらば、標と標とを合せて、普通の長襦袢と同樣に、背縫ひ、袖附、身八つ口、肩幅と標をつけます。



第三十三圖

衿　表裏とも中表に重ね、縫代一糎とつて、接ぎの標をし、こゝを衿山として、衿肩明、前胴丈、衿肩廻りのゆるみ四粍を加へて丈の標をします。衿幅は一〇糎五粍として標をつけます。

裾衿は同樣に二枚中表に合せて、表裾丈に出衿の分四粍を加へたものを衿丈として標をつけ、幅は、下の方は衿幅を七糎六粍、上は六糎八粍といたしますからその二倍の標をつけます。

裏身頃　表と同樣ですが、たゞ裏裾の丈は出衿の二倍八粍丈け長くして、裾に引返し布をつける標をつけます。

裾廻し布は横布を用ひましたから背接にして脇は縫つても縫はなくてもよろしい。後幅と前幅との標附をいたします。

縫ひ方

袖　普通の袷長襦袢と同樣です。廣幅ものゝときには袖口の方は縫はないで輪にして置きます。

胴抜　身頃の上半身は、表身頃の背を縫つて左へ倒し、脇は身八つ口で前の摘みの分四糎を入れて脇縫をし、衿を附けます。

衿は背、肩等標通りに合せてつけますが、胴接ぎの縫込みは縫はずに丈標の處までにとめて置きます。裏も同樣に縫ひ上りましたらば、袷のやうに背、脇を綴ぢ、(これも縫込みはとぢ付けません)身八つ口を縫つて袖をつけます。

衿とぢは胴接ぎの縫込みの折返る分だけ殘して切ります。

裾　表裾の背、脇を縫ひます。裏裾も同樣に縫つて、裾廻しをつけます。縫目は裾の方へ折つてぐし躾をかけて置きます。

次に表と裏の裾を合せます。背、脇の縫目が裏表とも正しく合ふやうに待針して縫目の處では返し針をすることは着物の場合と同樣です。そして四粍の出衿として躾をかけ、裾とぢをいたします。裾とぢは前の袷襦袢と同樣です。

衿は左右の前身につけ、衿先きをとゝのへて、標通りに幅を折り、紡けつけます。そして、胴接ぎ標の上は縫目を揃へて縫躾をかけておきます。

胴接ぎ　最後に胴接ぎをします。これは上の胴抜き布で下の裾をはさみますので　先づ胴の表と裾二枚とを合

大妻圖

せて三枚一緒に縫ひ合せます。そして縫目は上に折りかへして、胴裏を細くくけ附けます。このとき胴の方の衿は開いたまゝにしておき、その他の部分は全部縫ひつけます。

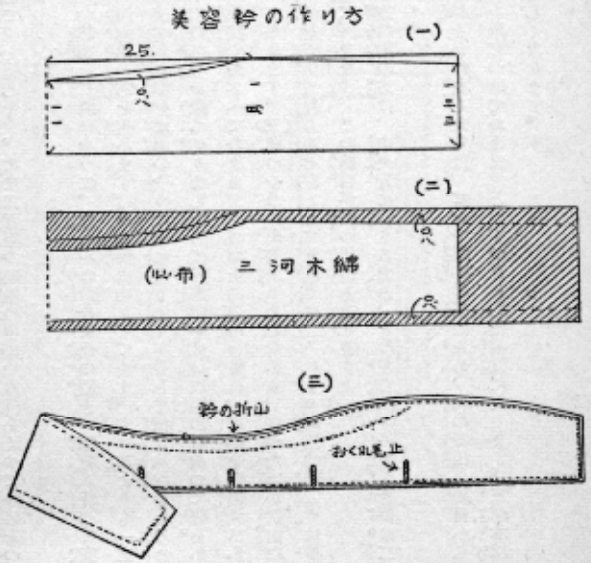
唐衿は普通の着物の衿のやうに、縫ひのこしてある部分で、衿先をつくり、三つ衿を平に入れて一一糎五粍の幅に折つて縫けます。

又別法として、一層簡單化するために、胴と褄との接ぎ合せをスナップ附とすることもあります。スナップにするには、胴の方の褄を丈標より一糎程伸して（スナップ附の重ね代）あとは裁目を中に折り込んで縫けつけておきます。廣衿もきちんと作つて置きます。裾の方も丈標の處から折つてきれいに縫けておきます。そして、背、脇、衿の縫目の上、及びその間々に數個のスナップをつけてこれで止めます。裾のとりはづしが容易に出來ますから、平常着や、外出勝ちの方々の長襦衿としては裾の綴ひが簡單で便利なものであります。

單衣に應用　同樣な方法を單衣の長襦衿に應用して、胴を晒木綿で作り、袖と褄を適當なものを用ふることもよい方法です。汗で汚れても取りはづして胴だけを自由にお洗濯することも出來、また、暑中など、肌膚なしで用ひることも出來る便利なものです。

美容衿（其の一）

着物の色合と、半衿の色合とを、いつも調和させるために、近頃は美容衿を用ふることが多いやうです。これは圖のやうに半衿だけのもので、ピンで取りはづしが自由に出來るやうになつて居りますから、どの長襦衿にも直ぐに付けることが出來ます。これを用ひますと、一ヶ半衿をかけかへる手數が省けます。四五本用意して置きますと、同じ縞衿でも衿元は色々變りますので、いつも着物との配合のいゝものを着ることが出來ます



第十三圖

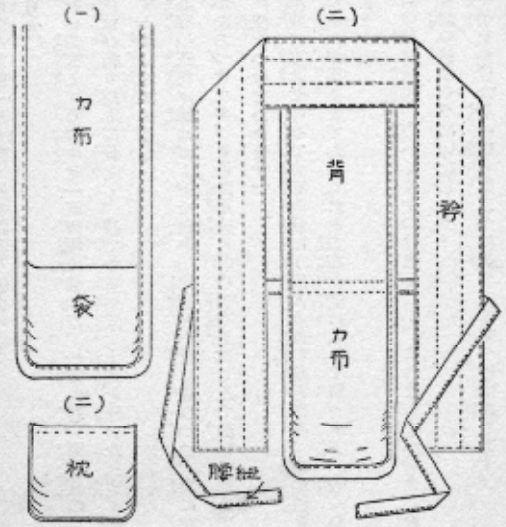
用布其の他

金巾、白ネル各一五糎五粍幅のものを一四四糎、三河木綿一三糎五粍幅で一〇〇糎、おくれ毛止（長さ四糎位）五本。

作り方

三河木綿の丈を二つに折り、輪の方を衿山として幅一一糎に標をつけ、山から下へ二五糎下つた處へ幅一四糎、一番下を一三糎三粍と

美容衿（其の二）



第三十五圖

長襦袢へのとりつけ衿として、前項のものは便利な衿ですが、暑い時分には、長襦袢を用ふることは容易ではありませんので、下は肌襦袢一枚だけで長襦袢を着たのと同様な衿元に見えるやうに工夫したのがこの衿であります。

圖のやうに衿肩明に相當する位の力布を背につけて、それに前の美容衿と同様なものをとりつけたもので、ことに、力布の下部に腰紐をつけておきますと、帯を結んだ恰好がよくなります。

用布其の他

ガーゼ衿布分として、一三六糎三河木綿幅一一糎、丈一三六糎背の力布

襦袢の部

して標を通します。次に二五糎の斜線の中央で八糎をくつて好格をつけて、周圍を落します。第三十四圖(一)を參照して下さい。

この芯布を(二)圖のやうに、白ネルの中央に平に置き、幅を八糎づゝ廣くして（これは折代になるもの、これで三河木綿の芯を包みます。）その他は切りすてます。丈は芯よりも一二糎長くなりますが、幅は八糎場の方でつめますから縫付は圖のやうな形になります。そして折代八糎をとることは他と同樣です。

不用の部分を裁ち切りましたらば、芯幅一ぱいに金巾を折つて襞をかけておき、芯のない處も標通りに折つて同樣襞でおさへておきます。この上に金巾を重ね、周圍を四糎程ひかへてぐるりとミシンをかけるか細かく縫つておきます。(三)圖のやうに出來上りましたらば、刺つた方が折山になりますから、中央で衿肩明の寸法だけ衿幅を五糎五粍乃至七粍として眞直ぐに、それより約三〇糎位は自然に斜になるやうに標をつけて細針で縫つておきます。この縫目が衿の折山となります。

一方衿附の方は、中央背に合さる處と、その左右へ一一糎おき位に二本づゝおくれ毛止めをさし込んでおきます。

半衿をかけましたらば、ピンで襦袢の衿に止め、衿の折山の縫目から折つて襦袢の衿にかぶせます。そして衿肩を緩ちつけておきますと、すつきりした衿元になります。三河木綿の芯が長すぎると、胸元があつく、重くるしくなります。

に金巾並幅一三五糎、白の斜布、總少々。

作り方

背の力布とする金巾を一五糎幅に切つて、一方の端し（圖中袋の口となる方へ）へ斜布で緣をとり、これを一一糎位ひ折り返して袋とし、襞でおさへて、上部を除いた三方に斜布で緣をとります。兩角に少々丸味をつけますと着心地がよろしい。

芯布の三河木綿はガーゼで包み、周圍を小針に縫ひつけ、更に中を二通り粗細縫ひしておくと、ガーゼと芯とがおちつきます。この時中央に背の力布をはさんで縫ひつけます。衿つけから一六糎位下つた處へ圖のやうに紐をつけておきます。

最後に有合せの布で力布の袋に丁度入る位の袋を作り、中に綿を少々入れて口を縫ひますと、（二圖）の枕のやうなものが出來ますからこれを力布の袋に入れて着ますと、帶のかたちがくづれずにきちんと恰好よくしまります。

前の衿は折山の方へくりをつけましたが、これは力布が附き、更に後經が長襦袢のやうにつきますから、芯は普通の衿のやうにいたします。

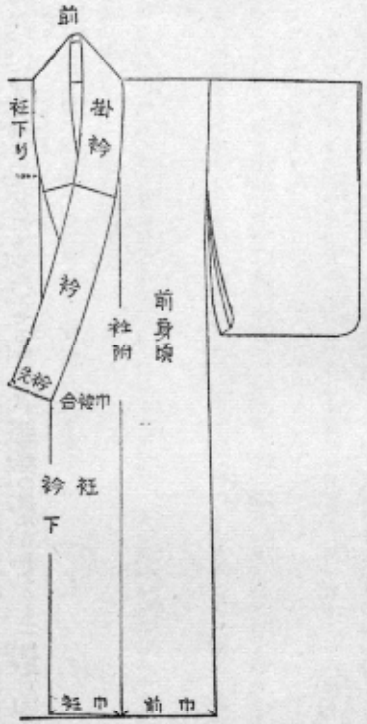
半衿をかけた肩の處を眞二つに折つてとぢつけておきます。

夏分でしたら肌襦袢の上に紐を締めその上にこの衿を着ますと衿元が美しくなります、また長襦袢を着た時には、長襦袢の衿をこの衿で包んで同樣に着ます。或はまた衿元を美しく何枚も重ねたやうに見せるために、長襦袢には無地の衿をかけておき、丁度下襦袢の衿のやうな感じに見せかけて、その上にこの衿を着ることもあります。こんな場合のためにも赤かぶせる時にも、長襦袢の襟は普通よりも一糎ほど狹く仕立ておく方が便利です。

三、單衣の部

本裁女物單衣

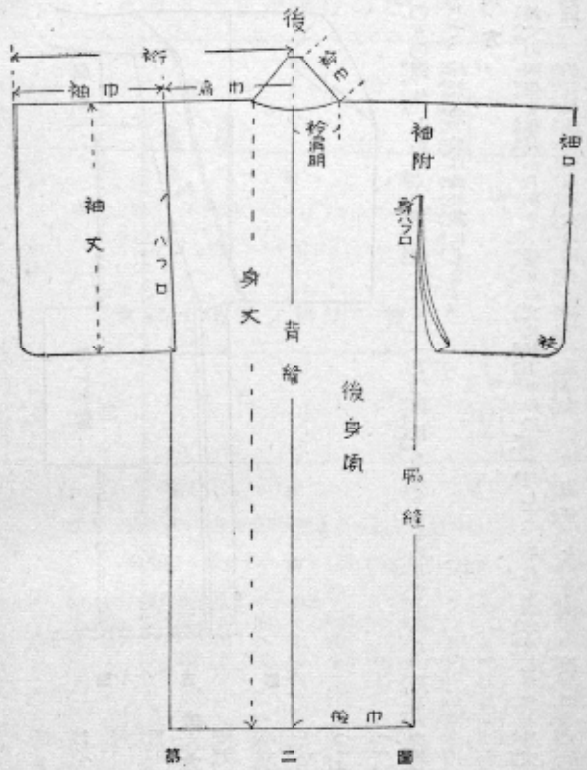
單衣物として用ひられる織物の地質は、木綿縞、眞岡木綿、縮、織絣、染絣、等の木綿物の他、絹織物、毛織物、麻織物の各種であります。



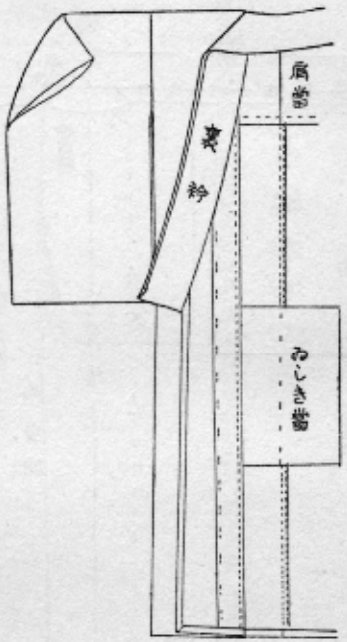
第一圖

仕立上げ寸法

袖丈	六〇・(割)
袖幅	三二・
袖口	二三・
袂丸み	二・
袖附	二三・
身丈	一五〇・
身八つ口	一三・
合褄幅	一三・
後幅	二八・
衿肩明	八・
前幅	二三・
衿幅	



第二圖



第三圖

衽下り	二三・
衿下	七〇・—七五
衽幅	一五・
裄	六二・

裁方

本裁は一反の布で裁つのでありますが、一反といひましても品によつて幾らかの長短があつて、浴衣地などは一〇五〇糎位しかなく、絹布類などは一一五〇糎位あるものもありますから、着る人の體格と布の長短に應じて、捧衽裁或は鈎衽裁にします。

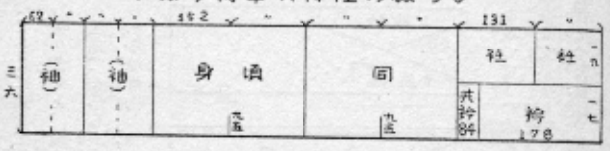
積方

袖丈の四倍を總尺から引き、殘りの丈に衽下りの二倍を足して、それを六等分しますと身丈が出ます。

鈎衽

鈎衽は總尺から袖丈の四倍と衿下の裁切丈（八五糎位）を引き去り、殘りの布に衽下りの寸法

本裁女物單衣棒衽の裁ち方

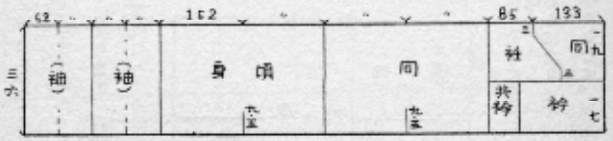


第四圖

公式　袖丈×4＋身丈×6－衽下り×2＝總用布

（總用布－袖丈×4＋衽下り×2）÷6＝身丈

本裁女物單衣鈎衽の裁ち方



第五圖

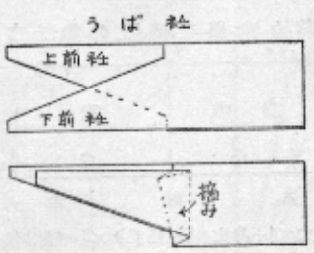
公式　袖丈×4＋身丈×5－衽下り＋鈎下＝總用布

（總用布－袖丈×4－鈎下＋衽下り）÷5＝身丈

（鈎衽の衽先の縫代は棒衽より少し長く取つておかなければなりません、これは仕立直しの時、棒衽のやうに上下が出來ないから裾のいたんだ時の切り捨てる分として普通七、八糎位長くしておきます。なほ裁ち切衿下寸法も同樣に普通寸法より長くしておかなければなりません。）を加へて、これを五等分しますと身丈が出ます。

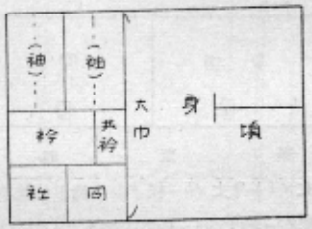
鈎衽の裁ち方は、衽布の丈を中表に眞二つに折り、衿下を手前に裾を右におき、次に上側の一枚だけを一つねぢつて二枚とも布の表が上になるやうにして前と同じやうに手前の衿下をよく揃へ、裾から裁切衿下寸法

を計つてそこに鈎を二糎五粍だけ切り込みます、そしてこれを伸して切り込みから切り込みまで斜に標をつけて裁ち切りますと、圖のやうな鈎衽が二枚出來ます。かうして裁ちました物は下になつてゐた方を上前衽にしますと仕立てゝから上前に布表が出るやうになります、鈎衽はどうしても一方は裏が出ますから、裏表のハツキリわかる地質物の時は用ひられません、裏表のハツキリわかる地質で然も總尺の短い時は止むを得ませんからうば衽といふ仕方にします。



第六圖

大幅物の裁方



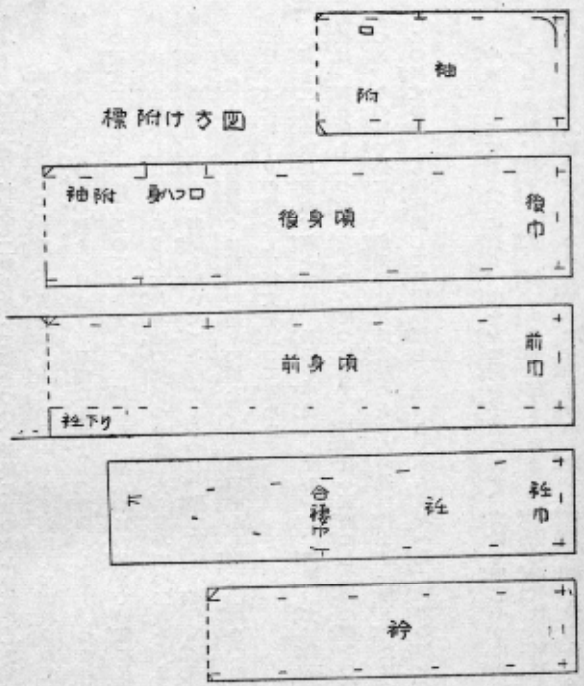
第七圖

公式　袖丈×4＋身丈×2＝總用布

(總用布－袖丈×4)÷2＝身丈

うば衽　裁ち方は鈎衽と同じであります。前のやうにして裁つた衽を上前を下に、下前を上に中表に第六圖上圖のやうに重ね、下圖のやうに鈎のところに一つ襞を取つて下の布に斜が摘ふやうに重ね、そこに鍍をかけてその折通りに摘み縫にしておきます。すると下前の衽は丈が少し短く、附の方が摘はぬことになります。

他に肩當、居敷當、裏衿、三つ衿芯などが要ります。肩當は並幅で一二〇糎位、居敷當は四〇糎位を普通とします。裏衿は半幅布で衿丈分だけ三つ衿は半幅布で二二糎位要ります。



第八圖

標附け方

袖　左右別々に、中表に二つ折にして兩袖を正しく重ねて袖山を左に袖口を向ふにおいて袖丈、袖口、袖附、袖幅、山の順序に標をつけます。袖口下の縫ひ代は八粍位とし、袖幅は

出來上り幅に二粍、袖丈も二粍を加へて標をつけ、最後に袂の丸みの標をします。

身頃　両身頃を中表に二枚重ね、後身頃を上に衿肩明を左手前にして四枚重ねておきます。そして丈、背縫、袖附、身八つ口、後幅の標をつけます。肩幅は後幅より二厘廣くします。つまり袖幅と肩幅とを合せて出來上りの裄丈になるやうにするのでありまして、肩幅から身八つ口の留までの間に尺度をあてて斜に袖附の標をつけ、次に山標をします。かうして後身頃の標がつきましたら後身頃の二枚を大きく卷いて左の方に取り除け、前身頃に後身頃の標を（背縫を除いて）そのまゝうつし、褄で脇縫の標から前幅を計つて標をつけ、それから二〇糎位上までは眞直ぐに前幅の通りに標をつけ、衿肩明から極二〇糎までの間へ糸を渡して斜に衽附の標をつけ、次に衽下りの標をして衽丈を計つて置きます。

衽　衽を二枚中表に重ね、褄を右に、衿下を手前にしておいて、褄縫、丈、衿下などの標附をします。衿下の縫代は一糎五粍を二つ折になるやうにつけます。衽幅は一五糎にして褄に標をつけ、合褄のところで一糎五粍をつめ、この間で斜にし、鋸先ではなほ合褄のところの縫ひ代より一糎五粍だけつめて斜に標をつけます。次にこの衽丈の標から四粍出して衿附の標をつけ、こゝから立褄へ斜に衿附の標をつけまして、この衿附の寸法を計つておきます。

衿　中表にして丈を二つに折り、山を左に附を手前におき、裏衿も同じやうに折つて表衿の下に重ねておきます。そして衿附、衽下り、丈、幅、山の順に標をつけます。衿附の縫代は八粍にして、次に衿肩明に衽下りを足し、それに五粍ほどのゆるみを加へた寸法を山から計つて鋸先の標をつけます。又念のため衿肩明、衽下りの寸法を標しても宜しくあります。それから先きに計つておいた衿附の寸法を衿先まで計つて標し、最後に幅の標をつけます。

縫方

袖　表を出して袖下を合せ、四粍位の縫ひ代で袖下の滾縫をします。但し丸みと幅の縫ひ代の二倍だけは縫はずにおきます。折りをつけて裏に返し、今度は標の通り待針を打つて袖口明に抄ひ留をして、標の通りを縫ひます。その時丸味の間は細かく縫つて糸を釣り加減にします。そしてその二粍外をもう一度細かく縫つて糸をしめて縮め小さく襞を作り、襞の動かないやうに留めておきます。

袖口は、袖口下のきせを通して折りをつけ、更に三つ折にして一糎五粍の針目で袖口明だけ綴けます。

身頃　肩當の背縫をし、衿肩を左にして手前に折をつけ、端を二つ折にして押へ縫をします。次に身頃の背縫をし、衿肩明を右にして手前に折りましたら、そのまゝ肩當を向ふ側に重ねて肩當の背と身頃の背とを一緒に綴ぢつけます。背縫は肩當と居敷當のつく間を除いた他は耳いつぱいに二重縫をし。肩當は兩端を耳綴にして身頃に附けます。居敷當の下の方は折つて押へ縫をし、衿下の高さから五糎位上つたところに居敷當の上を合せて、背縫にとぢつけ二糎位の針目で下端を除いた三方を綴けつけます。

脇は、身八つ口の下を抄ひ留にして脇縫をし、折は前身頃に向けて脇縫後身頃の縫ひ込みは釣れない程度に斜に割つて、折り目を隱し鋏のやうに押へておいて、端は耳綴で身頃につけます。衽附は衽を手前にして縫ひますから一方は上の方から、一方は下から縫ひ、鋸先は一針返して縫ひ込みの方へ斜に四粍縫ひ戻しておきます。

折は紐の方につけ、劍先に襞をかけ、前身頃の縫ひ代は耳綴にしておきます。

袵下綴と裾綴　まづ袵下は出來上り幅を八粍の三つ折にし、裾は出來上り一糎の三つ折りにします。紐の角のところは三角に折り、一糎五粍の針目で三つ折綴にしますが紐附や脇縫、背縫などの縫ひ目のところは折摩の際で表に一度針を抜き出し、小さく針を戻して裏へ針を返します、かうしますと裾綴がきちんと仕上ります。

袵附　袵の山標と背縫とを合せ、袵附の縫ひ代は八粍とし、身頃の縫ひ代は一糎にして針を打ち、二背縫から左右三糎づゝ位の間は眞直ぐに、それからは次第に身頃の縫ひ代を少なくして、袵肩廻のところでは四粍位の縫ひ代で自然に丸味をもたせて待針を打ちます。この時袵の方を殊め加減にし、それから標通りに劍先のところまで平らな調子に針を打ち、次に袵先まで待針をします。袵先二〇糎の間は袵の方を釣り氣味に待針をします。それから裏袵を表袵にならつて兩方の袵で身頃を挟んで同じ調子に待針を打ちなほします。

袵先に抄ひ留をして下前から表袵の方を見て縫ひはじめます。但し劍先のところの上下二糎位の間は細かい針目で縫ふか拔針にして劍先で一針返し、袵肩廻りは細かく縫ひ、背縫のところでも一針返します。上前も同じやうにつけて袵附が終つたら折りを袵の方につけ、兩方の袵先に留をし、袵先七粍のところを縫つて縫ひ込を裏袵の方にとぢつけ、紐下りと劍先の縫ひ込をもよく平らに整へて、三つ袵を入れ袵幅をきめ、裏袵の袵先のところを樓形のやうに作ります。裏袵の幅は表から五粍ほど控へて折り、襞をかけて本綴にします。

共袵掛　第九圖のやうに共袵は本袵より三粍控へるやうに幅を折つて共袵先は一糎裏へ折り更に丈を二つに折り、折り山を合せ、背の縫目にあて、綴目を合せて待針を打ちます。

圖九第

丈の方は一杯の處で本袵に糸標をつけ、その標から上へきせ代だけ上げて待針を打つて裏返し、表袵に下を縫ひつけ、縫を細かに締けつけますが第九圖のやうに端の方は三粍控へます。

袵糸は撚り合せの二本糸を背と、兩肩の三ケ所につけます。まづ表袵の端から針を出し、裏袵附を五粍抄つて表袵の針穴の横へ出しますと、袵の幅に二本の糸が渡るやうになりますから、糸の端に結び玉を大きく作つて切ります。

袖附　身頃の袖附の肩山で、五粍の縫ひ代にして留のところでは標通りにしてその間で自然に斜に身頃を折り出して裏に折ります、そして袖山と肩山とを合せて待針を打ちます。

はじめに抄ひ留をして袖の方を見て縫ひ、山のところ四糎位の間は極く細かに縫つて、縫ひ紛りにも抄ひ留をして袖附を終ります。

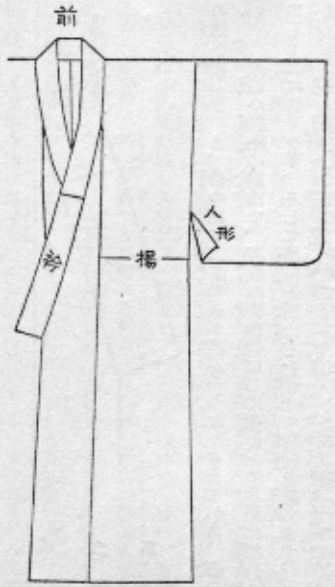
脇袖ともつけましたら八つ口は袖附の五糎上まで耳綴をし、襠の縫ひ込みも前後とも袖附の凡そ四糎上まで耳綴にします。

本裁男物單衣

男物單衣の材料は女物單衣の材料と殆んど同じであります。

仕立上げ寸法

袖丈	五三糎	袖口	二八糎	衽下り	一九
袖附	四四	袖幅	三四	衽幅	一五
袂丸み	二	人形	九	合褄幅	一三・五
身丈	一三六内外	後揚	五一一月から	衿肩明	八・五
後幅	三〇	前揚	五五	衿幅	五・五
		前幅	二五	衿下	六六内外
				裄	六六



第十一図

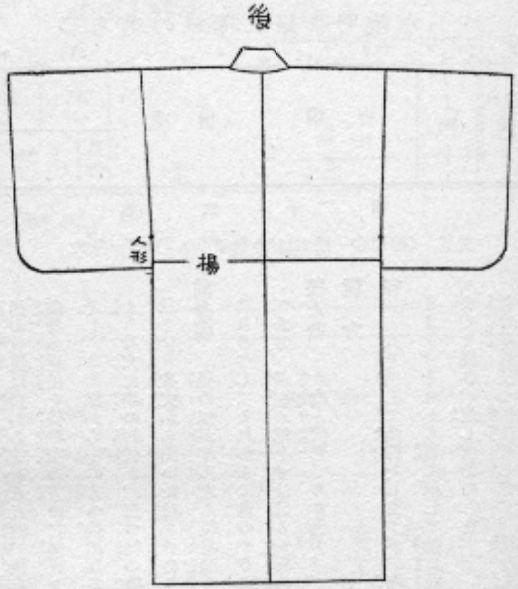
裁方と積方

女物のやうに仕立上げ身丈は長く裁りませんから揚をしておくやうにします。つまり揚の分として一二糎位を加へて裁ち切身丈としますが、まだ布が残る時は居敷當にします。若し川布の短い時は女物のやうに衽裁にします。その他は女物と同じであります。

標附け方

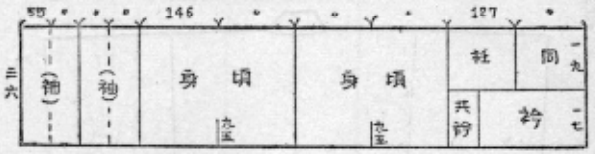
袖　布のおき方や標の附け方は、殆んど女物と同じでありますが寸法だけは違ひます。

身頃　女物と同じやうに両身頃を中表に二枚重ね、後身頃を上に、前身頃を下に衿肩明を左手前にして四枚重ねます。そして丈、袖附、背縫、後幅、



第十一図

本裁男物單衣棒衽の裁ちす



第十二圖

公式　(總用布－袖丈×4＋衽下り×2)÷6＝身丈

肩幅、山などの標をつけてから、第十三圖(は)のやうに揚の標をします。

揚の位置は肩から前を五五糎、後を五一糎下にしますが、そのつけ方は、前身の肩山を後身頃の方に二糎繰り越して、肩山から五一糎のところに標をし、この標から下の方へ揚になる寸法を標します、揚になる寸法は出來上り身丈に裾の絎代と、三つ衿の縫代、それに揚のきせの分を足した丈を裁ち切り身丈から引いた殘りであります。

前身頃　揚の標がすんだら後身頃を左に取り除け、後からつけた標をはつきりうつしてそれから(に)圖のやうに揚の標通り布を折りたゝんで針で留めておき、前幅の標を寸法通り女物のやうにつけます。

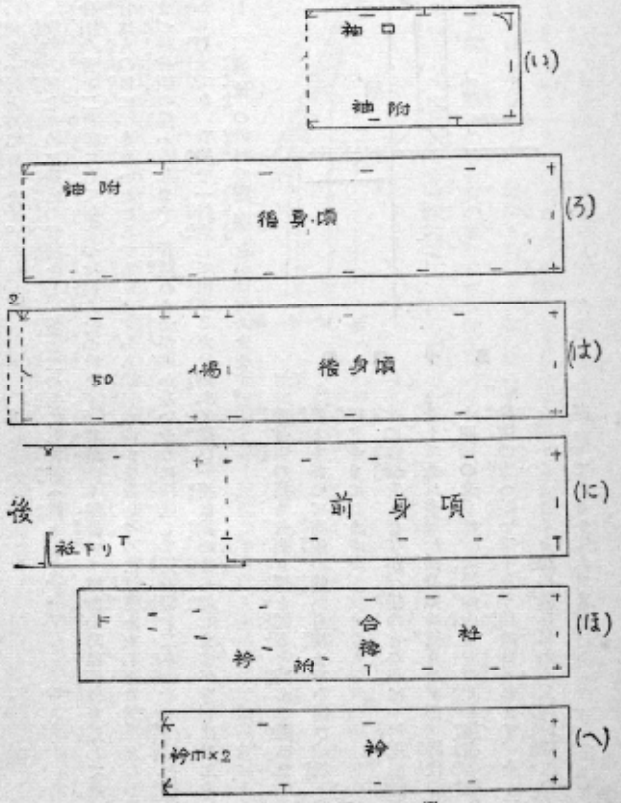
衽と衿　女物と同じであります。

縫方

袖　表を出して淺縫をしますが、幅の兩端二糎五粍ほどの間は縫はずにおきます。それから裏に返して袖口明の下に抄ひ留をして、袖口明から人形までを縫ひ、返し留めにします。

袖口明は三つ折絎にします。袂の丸みは女物と同じやうに二重縫をして縫目に襞を取つて形を作ります。人形の折を先に折り、次に袖下を折つて縫

標附け方圖



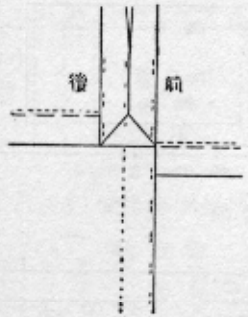
第十三圖

ひ込の角を一針とめておきます。

身頃　女物と同じやうに肩當の背縫をし、端を二つ折にして押へ縫をします。

次に身頃の背を二重縫にして折をつけ肩當をつけます。背縫でも脇縫でも縞物の時は縞目を通して縫ひます。殊に背は人の目につき易いところでありますから縞目のゆがまないやうに注意いたします。

揚　まづ後身頃の揚からします、背縫のきせが開かないやうに注意して揚の標を二本合せて待針を打ち、後幅の標から標までを、背縫で一針返して出來るだけ細かく縫ひ、折は裾の方へ返しますがきせは殆んどかけない位にし、二糎位の針目で隱躾をかけておきます。



第十四圖　内揚の図

前身頃の揚も矢張り標と標とを摘んで縫ひますが、前は後とちがつて布幅の端から端までを縫ひ、折と躾は後と同じやうにします。

次に脇縫をしますが、揚のところは一針返し針をします、そして折は普通に前身頃に折りますが、縫代の始末は第十四圖のやうに、後揚の山までの間を後布の縫ひ込を後身頃の方へ開いて下を三角にひらきます、そして縫ひ目を開いたところを脇の縫ひ目から二粍位離れたところを隱躾でおさへておきます。

居敷當のつけ方は女物とかはりませんが、ただ上部を揚の縫代の下に入れて、揚と居敷當の布とをくけつけておきますから女物のやうに表には三方縮けつけないで兩横の二方だけくけつけます。

次に衽を女物のやうにつけ、裾縮も矢張り女物の時のやうに縫目縫目で針を返して縮け上げます。

衿附、共衿掛　衿山の標を背の縫ひ目に合せて待針を打ち、身頃と表衿との釣合は女物と同樣に合せて全體に待針を打ち、次に裏衿を裏身頃に當てゝ同じ釣合で針をうちかへます、そして衿先に抄ひ留をして下前の衿先から上前の衿先まで縫ひ、折をつけます。それから兩方の衿先に留をして留から七粍位先きを衿幅標の間だけ裏衿を釣り加減に縫ひ合せ、縫ひ込をとぢつけて表に返します。

次に標通りに幅を決めて折をつけ、衿先のところで衿縮の折り目を第十五圖のやうに三角に折つて動かないやうに綴ぢておき、それから衿幅を二つに折つて縮けます。

第十五圖　衿先の折り方図

共衿は女物と同樣にかけます。

袖附　身頃の方は肩幅から五糎縫代を出して布裏の方へ折り、人形の際で四つ留をして斜めに折をつけ標通り待針を打ち、人形の際から四、五糎の間は特に小さな針目で縫ひ、肩山は一針返して縫ひ終りましたら袖の方に折をつけます、四つ留の仕方は、人形の際の内袖から針を出し、前身頃と後身頃とを同時に通し、次に外袖の人形ぎわを小さく竪に抄ひ、元の針目に揃へて内袖で糸を結んでおきます。

四つ身單衣

四つ身はその名の通り身頃が四枚で出來てゐまして三、四歳から十二、三歳までの長い期間着られるものであります。元禄袖や筒袖ですと、一反から二枚とれます。

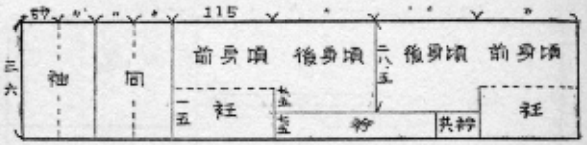
材料の地質は木綿物とあまり變りません、その外に大幅物が多く用はれます。

仕立上げ寸法

袖丈長袖	五五―六一糎	袖丈元禄袖	三八糎
同筒袖	二六	袖口	一八
袖附	一九	袖幅	三〇
身丈	一一五	身八つ口	一〇
後幅	一二七	前幅	一八―いつぱい
衽幅	一三―いつぱい	合褄幅	衽幅より八粍つめます
衿肩明	六・五―七	衽下り	一五
衿下	四五	衿幅	四・五

これは普通の仕立上寸法でありますから、實際には着る子供の年齢や發育の狀態によつて丈や幅など適當に加減しなければなりません。

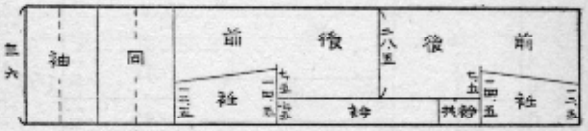
四つ身の裁ち方（袖み衽裁）(い)



公式　（袖丈＋身丈）×4＝總用布

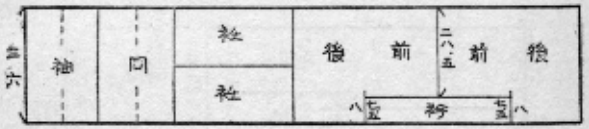
（總用布－袖丈×4）÷4＝身丈＝4

四つ身の裁ち方（逆衽裁）(ろ)



上の裁ち方と同じ

四つ身の裁ち方（衿前裁）(は)



公式　袖丈×4＋身丈×5－衽下り×2＝總用布

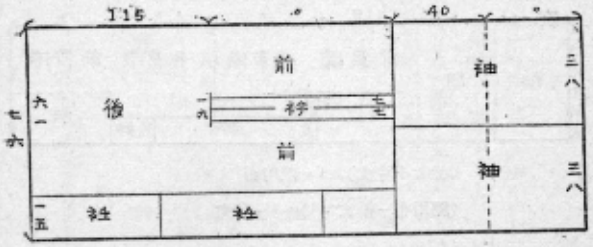
（總用布－袖丈×4＋衽下り）×2・5＝身丈

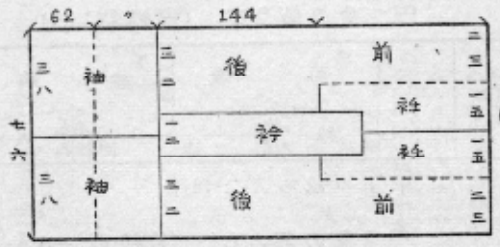
第十六圖

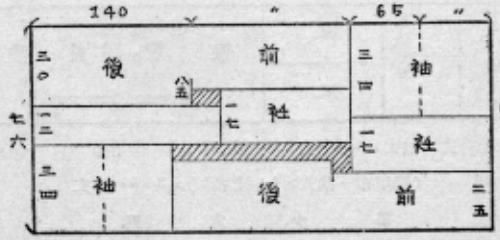
裁方と積方

四つ身の裁ち方は普通第十六圖(い)のやうに袖丈の四倍と身丈の四倍とが總丈になります。袖は並幅で取り、身頃は身丈の四倍を使つて裁ち、後身頃から衿を取り、前身

廣幅物四つ身の裁ち方(兩面物)(い)







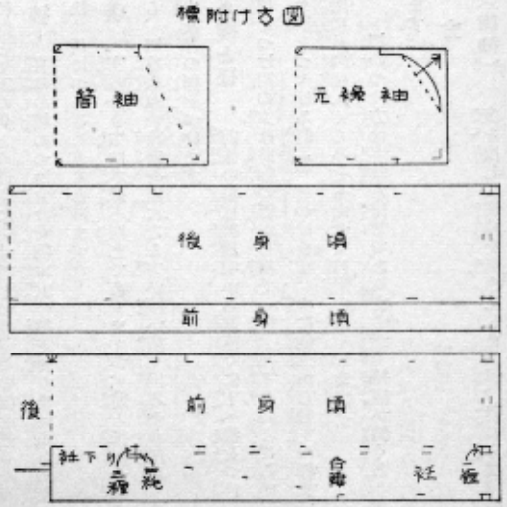
第十七図

頃と袵は一幅のまゝで、袵は摘み袵にするか、(ろ)圖のやうに前幅を裾で廣くなるやうに裁ち切る仕方、所謂逆袵裁にします、その他前衿裁、車裁、大幅裁などいろ〳〵の裁ち方があります。

標附け方

袖(筒袖) 兩袖を別々に中表に二つ折にして重ね、丈、袖口、袖附、袖幅、山の順に標をつけます。口明から丈の標に尺度を當てゝその間にも標をつけます。この袖下に丸味をつけて船底形にすることもあります。又八つ口を明けることもあり袖丈全部をつけることもあります。

元祿袖 用布を重ねておいて、丈、口、附、幅、山の標をつけます。袖の丸みは袖丈の長い短いによつていく分か違ひますが、袖口の標から袖下へ四糎位のところに標をつけ、この標と袖丈の標の間の寸法を計つて、その寸法に二糎を足したものを袖下の角から手前の



第十八図

方へ計つて袖下に標をつけ、この標と袖口下の四糎の標とに尺度を當てゝ、この斜めの線の中央に待針を打ち待針と袖下の角との眞中に一寸標をつけ、この標を通るやうにして袖の丸味をつけます。

長袖　長袖の標のつけ方は女物單衣の袖と變りませんが、たゞ袂の丸味を一〇糎以上の大きさにします、然し袂は角につくることもあります。

身頃　布のおき方は本裁と同じでありますが、前と衽が一幅になつて居つて、後身頃は幅をかいてありますから、四枚重ねた時前身頃になる方が幅が廣く出るやうになります。布が撚ひましたら丈、幅、袖附、身八つ口、衽などの標をつけます。

前身頃と衽　前幅の標は衿肩明から眞直ぐに下へ標をつけ、次に衽の標にうつります、まづ衽下りと衿下の標をつけ附の方は前幅の標から縮で一糎、衽下りのところで三糎、合標では衽幅より八粍つめて標し、この三ケ所をつゞける斜標をつけます。次に劍先から衿下の標まで斜に尺度を渡し、劍先から八糎下のあたりで衿附に八粍位ふくらみをもたせて衿附の標をします。

衿　標のつけ方は本裁と同じでありますが、衿幅が狹くありますから裏衿を先につけておいてから標をつけます。

縫方

袖（筒袖）　裏を出して淺縫を先にしますが、附の方は幅の縫代の二倍より少し多く縫ひ殺しておきます。それから裏に返して丈の標を合せて袖口明の標から幅の標までを斜に縫ひ、内袖の方に折をつけて縫代は内袖に紛けつけておきます。この縫代は地厚のものゝ時は袋縫としないで内袖になる方の布を最初に五粍ほど控へて、袖下を縫つてから折り伏せ紛にします。

それから袖口を三つ折紛にします。

元祿袖　筒袖のやうに淺縫をしますが丸みと幅縫代の二倍は縫ひ殺して、折をつけて裏に返し、袖口明に抄ひ留をして、袖口下から袖下までを縫ひますが、丸みの前後は一針返し、丸みの間は針目を細かに、衿はやゝ釣らせ加減にします。

縫ひ目にきせをかけ、丸味の始末をします、丸みの作り方は縫ひ目から四粍離して一通り縫ひ、又四粍離してもう一通り縫ひ、この糸を引締めて縫ひ込を平らに紛めて、ゆるみのところは襞を取つてその襞のくづれないやうに留めておきます。

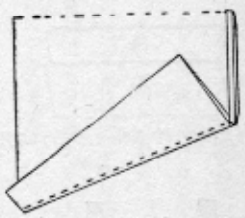
次に袖口明を三つ折紛にします。

長袖　長袖は本裁女物單衣と同じであります。

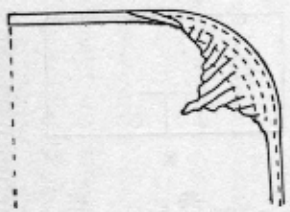
身頃　背は裁ち目になつてゐますから袋縫にします。

扇當布は大抵横布を使ひますから並幅で出來上り身幅の二倍だけを用

第十圖　筒袖の圖



第十一圖　元祿袖丸みの縮方の圖



意して圖のやうに裁つたものを、背縫に當てゝ一目落しの針目でつけ、衿肩廻りと、袖附の部分は假とぢをしておきます。次に脇を背通に縫つて衽附にうつります。

衽附　前身頃を手前にして標通りに待針を打つて衽を摘み縫にします、その外は本裁の單衣と同じやうに衿下や裾絎をしてから衿をつけ、三つ衿を入れて絎け上げます。

共衿　共衿は表側の方は本裁と同じやうに絎けつけますが、衿の幅が狹くて裏側は全部まはりませんから表衿のところだけかけて裏側の方は裏衿との接ぎ目に絎けつけておくか、耳いつぱいに押へ縫のやうにしておきます。

袖附　本裁とちがつて身頃の袖附が眞直ぐでありかつ縫代が少しでありますから、つけ始めと終りで身頃の縫ひ代を斜めに折つてつけ、八つ口は折り山の通りを眞直ぐに折つて耳絎にし、身八つ口も矢張り耳絎にしておきます。

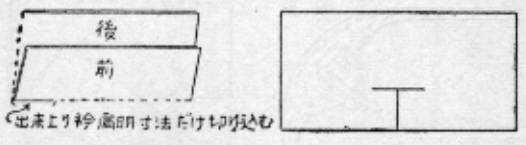
肩揚　肩幅の中央を揚の山にして揚にする分だけの寸法を摘んで二本糸で二目落しの針目で縫ひます。長さは凡そ袖附の邊までにし、幅は、前の方は終りが肩の寸法の三分の二位にし、後の方は下の方で七、八粍淺くします。

腰揚　着丈の六割を衿附際から計つてそこを山にして揚になる分を摘んで二目落しの躾と同じ針目で裏から見て縫ひます。揚山の位置は揚の多い少ないにより、又着丈の長い短いによつて加減しなければなりません。又衽幅のところは下の方が幅が廣くて衿が出ますから、小さく一つ二つ襞を取つて、衿の端の方を揃へます。

紐附　上り幅三糎、長さ五〇糎位の紐を二本絎け、肩から三〇糎位下つたところで、紐の上の端が身八つ口の中に入るやうにつけます。

居敷當　居敷當は肩當をつける時一緒につけても宜しいですが、小裁物中裁物は多く揚をしますから、先きに居敷當をつけますと揚の中に大部分が入つてしまひますから、揚をしてから居敷當をつけますと居敷當の役目を完全につとめます。

肩当布の裁ち方



第二十圖

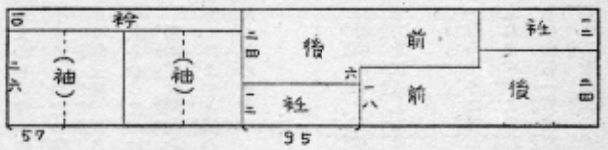
三つ身單衣

三つ身は身頃の布を三枚で取る裁ち方で、前身頃は裁ちちがひになりますから、裏表が出るため、片面物の場合は裁ち方を工夫しなければなりません。

裁方

第二十一圖のやうに袖から衿を裁ちおとし、身頃の用布は丈を三つ折にして、輪になつてゐるところを半幅だけ鋏を入れます。この時鋏の入れ方に注意しませんと片方の身頃の肩を切り離すことになりますから、一方を右から入れたら一方は反對に左から入れ間違ひないやうに切ります、そして後身頃から衽を裁ち落します、この衽の切り方を(は)圖のやうに斜にすることもあります。

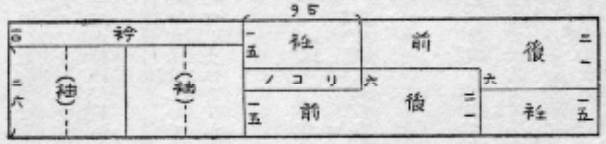
三つ身の裁ち方　(い)



公式　袖丈×4＋身丈×3＝總用布

(總用布－袖丈×4)÷3＝身丈

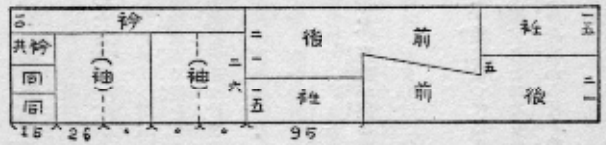
三つ身片面物の裁ち方　(ろ)



公式　袖丈×4＋身丈×3＝總用布

(總用布－袖丈×4)÷3＝身丈

三つ身の裁ち方　(は)



袖丈×4＋身丈×3＋衿足布＝總用布

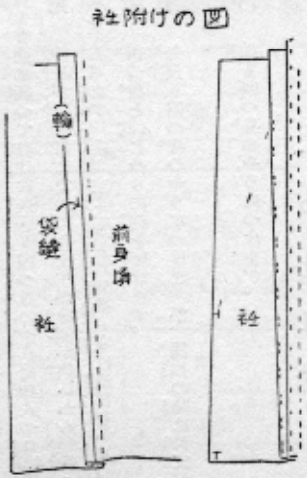
第二十一圖

(ろ)圖は片面物の場合の裁ち方でありますが、この裁ち方にしますとどうしても並幅物では身幅が普通より狹くなりますが止むを得ません。

標附け方

袖　四つ身單衣とかはりませんたゞ寸法が少しつまるだけであります。

身頃　兩身頃を中表に重ね前身頃を下に後身頃を上に重ねることは四つ身と同じでありますが、四つ身は前が廣いため下の二枚が手前の方に出ましたが三つ身は前幅が狹いため上の方が手前に出るやうになります。そして丈、袖附、背縫、後幅、山などの標をつけ、後身頃を左に除けて前身頃にうつります。衽附は衿肩明から眞直ぐにつけます。



第二十二圖　袂の附け方

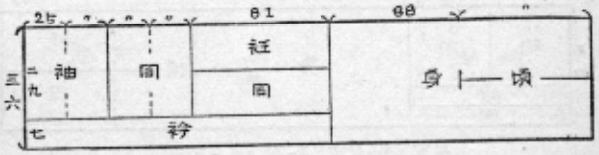
衽　中表に二枚重ね、丈、幅、附、衿下、衿附の標をします。

衿　四つ身と同じであります。

縫方

袖　四つ身と同じであります。

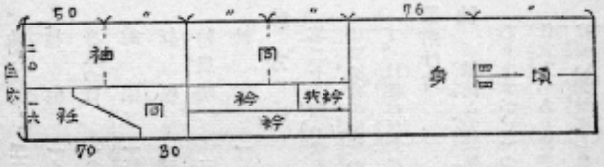
一つ身筒袖の裁ち方 (い)



公式　袖丈×4＋身丈×3－衽下り＝總用布

(總用布－袖丈×4＋衽下り)÷3＝身丈

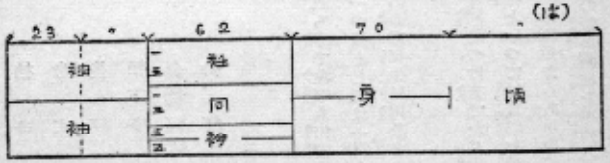
一つ身潤袖掛衽の裁ち方(兩面物)　(ろ)



袖丈×3＋身丈×2＝總用布

(總用布－袖丈×4)÷2＝身丈

(は)



袖丈×2＋身丈×3－衽下り＝總用布

(總用布－袖丈×2＋衽下り)÷3＝身丈

第二十三圖

身頃　肩當は四つ身と同じく一幅物を横布につけます。

衽附　前身が裁ち目になつてゐますが身幅が狭いから袋縫にするよりも裁ち目を糸き縫して普通につける方が宜しくあります。(第二十二圖左は袋縫、右は裁目をかさつて耳衽にする仕方)

背縫は裁ち目になつてゐますから四つ身のやうに袋縫にして肩當をつけます。

脇も普通に縫つて縫代は矢張り四つ身のやうに身八つ口の際は後を斜に折り開きます。

裾廻　四つ身と同じやうに縮を紐けます。

衿附　矢張り四つ身のやうにつけますが、筒袖の時は衿丈が不足しますから足し布を下前の方に接いでからつけます。

袖附　袖も四つ身のやうにつけます。

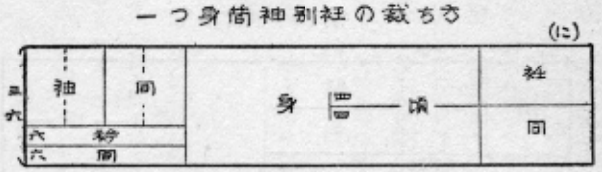
一つ身單衣

一つ身は初生兒から二、三歳位までの子供の着物で、大中小の差異はありますが、概して一反で三枚裁たれます。年齢や體格による身幅の加減は衽幅でします。半幅衽をつけますと殆んど三つ身と同じ廣さの身幅に仕立てられますから、この頃は三つ身の着物を省いて一つ身から四つ身にうつることが多くなつて來ました。

仕立上寸法

袖丈　潤袖　二五割——五〇程　袖丈　元禄袖　二五割

一つ身筒袖別衽の裁ち方



袖丈×4＋身丈×3－衽下り＝總用布

(總用布－袖丈×4＋衽下り)÷2＝身丈

第二十四圖

袖丈筒袖	二三	袖口	一三
袖幅	一八―二四	身丈	七五―八五
身八つ口	一〇	後幅	一杯
前幅	一杯	衽下り	一〇
衽幅	一三 いつぱい	合褄幅	衽幅より五 耗つめる
衿肩明	三―四	衿幅	三・五
衿下	一八―二三		

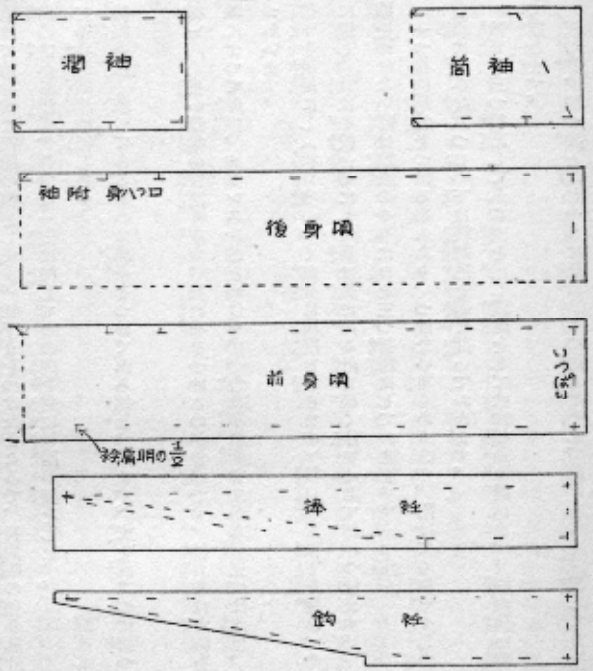
裁方

第二十三圖(い)は最も普通の裁ち方で身幅も相當廣く出來ます。第二十四圖は半幅衽の裁ち方で一つ身としては一番大きく仕立てられます。(は)圖は反對に小さな裁ち方で初生兒用などに適して居ます。

標附け方

袖 袖筒と元祿袖は四つ身と同じつけ方でたゞ方法がつまるだけでありますが、一つ身には濶袖といつて袖口明を袖丈の全部をあける仕立方があります。初生兒などきせよくあります、又お宮參着などは長い濶袖にします。(袖丈の短い濶袖を平袖ともいひます)

標附け方図



第二十五

標は圖のやうに袖下を眞直ぐにつけ、振八つ口をあけます。

身頃 身頃を中表に眞中から二つに折り、前身頃を下にして後身頃をその上に折り重ね背を手前に裾を右におきます。そして後身頃に丈、袖附、身八つ口、身幅、山の標をつけ、後身頃を

左に除けて前身頃に衽附の標をします。衽下りをつけたところで、衿肩明の切り込寸法の二分の一だけの寸法を手前の方から標し、裾では一握に標してこの間を斜に衽附の標をします。

衽　三つ身と同様に標します。

衿　衿幅の狭く裁つてあるものは裏衿をつけてから標をつけます。丈を眞二つに折つて丈と幅の標をします。

縫方

袖（溜袖）　長い溜袖の宮詣り着は、袖口布をつけるのが普通です。袖口布は並幅を四つ割にしたもので、表の布地によつて縮緬、メリンスなどをつけます。色は單衣物ですから男兒には水色、女兒には薄い時色などを多くつかいます。

まづ袖下を後縫にし（袖口布のつく部分は淺縫を省きます）袖口布も袖下を縫ひ、それから袖口明を縫ひ合せて表に返し、口は毛抜合せにして奥は表に出る針を極く小さくして綴けつけます。

袖口布をつけない時は筒袖のやうに口を三つ折綴にしておきます。

脇縫　一つ身は肩當をつける事もあり、つけない事もあります。附けても極く少しであります。

脇を普通に縫ひ身八つ口の下は後縫込を斜に開いておきます。

衽附　衿下を三つ折綴してから表を出し淺縫をして次に標通り縫ひます。幅の狭い時は前身頃の裁目をかぶり縫して置きます。

裾綴　三つ身、四つ身と同じやうに縫目〳〵に返し針をして綴けますと洗濯しても裾綴が狂ひません。

衿附　衿の山と衿肩明の眞中とを合せて待針を打ち、衿肩まはりは身頃の縫代を淺く丸くして順に衽下りから衿先までに針を打つてつけます。衿先の始末をしてから綴けつけ、共衿をかけます。

袖附　身頃を裏返しその中に袖を入れ、肩山と袖山を合せて待針を打ち、袖の方を見て標から標までを縫ひますが、山で一針返し始め終りは少し半返しにしてよく留をしておきます。

袖がつきましたら振八つ口のあいてあるものは八つ口を耳綴にし、ついでに身八つ口も耳綴にしておきます。

背守と紐附　背守は近頃平常着には餘りつけませんが、宮參り着には綿入一つ身に設けてあるやうにつけます。紐は肩山から二五糎ほど下つた位置につけまして表から紐かがりをしておきます。

薄物單衣

薄地物といひます中には紹、紗、絽縮緬、絽綾紗、透綾、明石、上布などありまして、これ等は普通單衣の仕立より念入りに所謂上仕立にしなければたりません。

裁方の注意

裁つ前に地直しをすることは大切な仕事であります、アイロンか火熨斗を裏から平らにかけ（上布はかけません）一方の端から卷棒に卷いて途中に布の折り目のないやうに布を平らにして裁ちます、薄地物は布がすれ易く寸法にくるひが出來易いから注意して折り疊み方を正しくし、要所〳〵に待針を打つて布の動かないやうにして置きます。

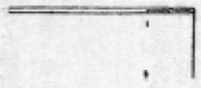
一般に絹布類は一反の丈が充分にありますから、殘り布から背の切り伏せにする布を二糎幅で取り丈は接ぎ合せて身丈になるだけにいたします。若し布幅の廣いものならば衽と衿の幅の間から取つて接ぎ目なしにします。

標附け方

普通に用ひます角篦は地質をいためるおそれがありますから、標附用の燒鏝を用ひます。この方が地質をいためないばかりでなく標が正確に、明瞭につきます。そしてつける時にはなる可く小さくつけます。

極く薄地物の時にはきせ掛を少なくしますから標附もその心算でつけなければなりません。又裁ち方のところでも注意しましたやうに布がずれ易くありますから布地の動かないやうに要所に待針を打つたり躾をかけたりしておきます。

各部分については次のやうな注意が要ります。



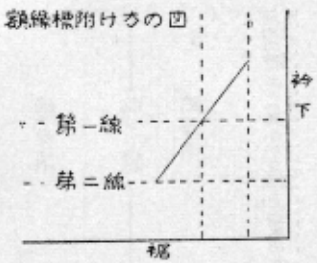
第二十六圖

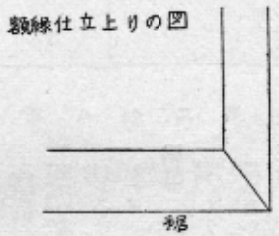
袖　袖下は袋縫にせず、最初外表にして極く淺い縫ひ代で一度縫い、この縫い目を割つて鏝をかけ、第二十六圖のやうにこの縫ひ目の縫ひ代だけずらして裏に返して袖口、袖附、袖丈などの標附をします。

袖口は撚り絎にしますから絎け代は五粍位とします。耳のつれてゐる物や、耳の幅の廣い物は耳だけ或は耳の少しを裁ち切つても差支へありません。

身頃　肩の繰越をつける時は男物の内揚の仕方と同じやうにして後身頃の身八つ口から二糎下に揚の標をします。

衽と衿は普通の單衣のやうに標をつけますが衽の褄先は額縁仕立にしますから、その標をつけておきます。額縁の標は第二十七圖のやうに裾の裁目から絎代だけの寸法を取つて第一線を引き、これを二分して第二線を引きます。衿下の方は一糎五粍の絎代にして矢張り裾と同じやうに第一第二の線を引きます。次に縦第一線に横の第一線と第二線の間の寸法を標し、横第一線には縦の第一、第二の線の間の寸法を標し、この二點をつなぐ線を引き、これを縫合せの標とします。





第二十七圖

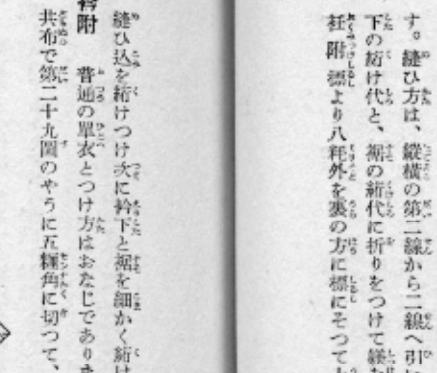
縫方

地が全體に薄い物でありますから、針目は極く細かく三粍位にしますが地質によつてはなほ細かく縫ふこともあります。糸はなる可く途中で繼がないやうにはじめ縫ふべき箇所の寸法を凡そ計つて糸をつけますが、餘り長い所は繼ぐことも止むを得ません、その時は撚り繼ぎが最も宜しいのですが、重ね繼ぎにしても宜しい。

縫ひ目には必ず平鏝をあてますが折り鏝は當てない方が宜しくあります、特に明石縮のやうにしぼのあるものはしぼを伸してしまはないやうに注意しなければなりません。

袖　標附の時も申しましたやうに袖口は細い揩り絎とするか又は極く細かく三つ折絎にします、袖口布をつける物の時には單羽織と同じやうにします。

背縫　耳の變つてゐるものはそのまゝ袋縫にするか、耳を裁ち切つて袋縫にすることもありますが、地薄物は大低肩當や居敷當をつけませんから背縫は切り伏せにします。その仕方は共布か若し共布のない時は同じ色合の薄い布を一糎五粍幅位に細長く裁つて、背の縫ひ目に（絎目を右に持つて向ふ側に）あてゝ三枚を一緒に縫ひ、裾口の裁ち目から一糎五粍上で背伏布を切り、縫ひ目に折をつけて背伏布で背縫ひ代を包み一方の端を絎けつけます。



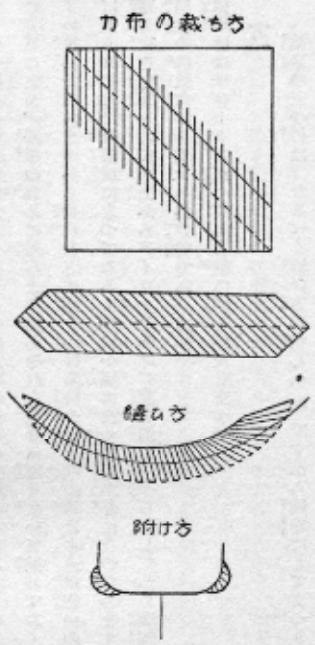
第二十八圖

脇縫　脇縫は寸法通りに一度縫つて、更にそれより八粍程くもう一すじ縫ひ、前の縫ひ目に折をつけ、二度目の縫ひ目から縫ひ込を開いて耳は三つ折絎にします。

衽附　衽はつける前に褄先の額縁を先きに縫つておきます。縫ひ方は、縦横の第二線から二線へ引いた斜の標を合せて極く細かく縫ひ、縫ひ目は割つて銀をあて、衿下の絎け代と、裾の絎代に折りをつけて縫をかけ、それから衽をつけます。第二十八圖のやうにまづ前身頃の縫ひ目から縫ひ込を開いて耳は三つ折絎にします。

衽附　標より八粍外を裏の方に標にそつて上まで折り、衽の標と前身頃の標とを合せて三枚を縫ひ、折をつけ縫ひ込を絎けつけ次に衿下と裾を細かく絎けます。

衿附　普通の單衣とつけ方はおなじでありますが、地薄物は肩當をつけませんで力布をつけます。その力布は共布で第二十九圖のやうに五糎角に切つて、それを三角に二つ折にし、輪の方を充分丸く伸して三ケ月形のものを拵へます。この力布を兩方の衿肩廻りの裏衿附の際につけて、五粍か六粍位の幅に出して一緒に縫ひます。それから表に返して中の布を臺へ平らにして絎け上げ、共衿をかけます。



第二十九圖

袖附　袖は折り附にせず開いたまゝつけ、この縫ひ代から五粍ほど離してもう一度縫ひますが、この時は縫ひ始めと終りは一糎五粍ほど標より上から縫ひます。そして袖の方に折をつけ、二度目の縫ひ目を割つて身頃の縫ひ代は脇縫ひ代とつゞいて絎けつけ、袖の縫ひ代も振り八つについて絎けます。

セルの仕立方

毛織物の中でもモスリンは薄地でありますから給物類と同じ注意で普通に仕立てゝ差支へありませんが、セルやネルは厚地になりますから特別の注意をしなければなりません。

まづ第一に布の整理をいたします。その仕方は最初布の整理のところでも申しましたが、セルは布目を眞直ぐにすること、濕氣の爲めに縮みますからそれを先きに霧を吹いて縮めておくこと、なほセルは非常に焦げやすい地質でありますから折目などに鏝をかける時や仕上げの時など直接強いのを掛けないやうに注意しなければなりません。普通反になつてゐるものは小幅に折つて表が外になつてゐますから、そこを一口縫げて一面に霧を吹き白布をあてた上からアイロンをかけて筋を消し、平らにしてから廣幅物の裁ち方を參照して裁ちます。

肩當や居敷當はメリンスが適當であります。

標附けはチョークを使つてから縫ひ標をいたします。

縫方

袖口　袖口の三つ折は、なるべく細い方が宜しいのですから細巻にしてまつり綿にします、毛織物は大抵耳が廣く織つてありますから袖下の縫代は八粍から一糎位にして袖口はぐるり四粍ほど切り落してこれを巻きます。

居敷當　男物は普通につけますが、女物は全然つけない方が多くありますが、若しつけます時は腰縫の下になるあたりから裾まで凡そ九〇糎位、幅は後二幅一杯にして兩端が脇の縫ひ込の中に這入る位廣くつけます、さうしますと外から見た時居敷當がついてゐるかゐないか判りませんで、然も背の縫ひ目が開かなくて具合がよくあります、布は白のメリンスが適當で大幅を用ひ後幅の二倍を取つて殘りは裁ち落して裏袴先に使用すると無駄なく使へます。

つけ方は、背縫を縫つてから居敷當を縦に眞中から中表に二つに折り、背縫にあてゝ普通の居敷當のやうにつけますが褄は一糎五粍位短くして、端が裾前の中に這入るやうにします。兩脇はそのまゝにしておいて、脇縫をします。脇縫と袖附は全部縫ひ目を割りますから半返しに縫ふのが正式でありますが、極く小針に縫つて二、三糎おきに針を投いて返し針をしても宜しくあります、そして脇を縫つてから縫ひ目を割り、縫ひ込を綴ぢつける時居敷當の端をその下に入れて一緒に綴ぢつけてしまいます。この縫ひ込は丁寧にする時には耳を切つてしまつて三つ折にしてまつりますが普通には耳をそのまゝ折つてまつり綿にします。

裾廻　裾は矢張り綾先を返し針で額縁に縫つてまつり綿にします。

衿　女物は綿けつけ衿、廣衿いづれでも宜しいですが撥衿が着てからの具合が宜しいやうであります。衿附の折目はよくつきませんから衿をつける前に折目を鏝で折つておいて、それからつけます。

撥衿の衿幅は衿肩明の間は普通に五糎五粍にして衿先で七糎か八糎位にしてその間は自然の斜にして折つて綿けます。

用糸　セル地は着てゐる間に縫糸が弱つて綻び易いものでありますから成る可く糸質のよい物を選んで縫ひま

す、普通には質のよい絹糸を用ひます。

注意

お召セルや絹セルの類は大層糸がゆるみ易い物でありますから絎けるところは皆まつり絎にいたします。

そしてセル地のものは皆袖附、身八つ口などの留に閂留をいたします。

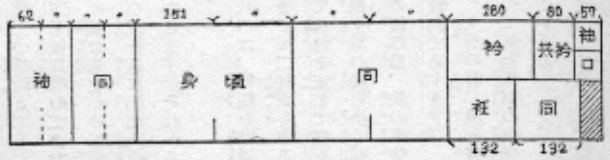
單衣重ね

單衣重ねは襪裝に使ふものでその種類には本重ね、半重ね、八掛附本重ねなどいろ〳〵あります。本重ねといひますのは上着は大抵裾模様で下着は白を一枚分重ねます。半重ねは本重ねと同じやうに見せて周圍にだけ下着を附けて、胴は上着の一枚に仕立てたもので丁度袷の附比翼と同じであります。八掛附本重ねといひますのは、本重ねの上着にも下着にも八掛を附けたもので、正式には上着も下着も八掛もみな同じ裾模様を附けるものでありますが、上着にだけ裾模様をつけることもあります。

この重ねといひますのはもと〳〵袷重ねや縮入重ねのやうに普通の單衣に仕立てたものを二枚重ねて、背や脇や衽の縫目を綴ぢて着るのを、近頃着るのに都合のよいやうに仕立方を工夫して、二枚を一緒に縫ひ合せて重ねたやうに見せるやうに仕立てたものでありますから、その地質や色合などによつては別々に仕立てゝ着る時に綴ぢつけることもあります。

地質　上着には絽、絽縮緬、縮緬、羽二重、麻などを用ひ、下着には白か薄色で矢張り表に用ふやうな物或は

本重ね上着の裁ち方



公式　（總用布－袖丈×4＋裁ち切衽下り×2－袖口布）÷6＝身丈

第三十圖

練絹を用ひます。

裁方

上着も下着も普通女物單衣と同じでありますがたゞ袖口布を共布で取りますからその分だけ布が多く要ります。

下着も矢張り同じに裁ちます。用布の特別長い時は裏衿を取ることもあります。

標附け方

上着は全部普通の單衣物と同じに標し、袖口布は單衣羽織のやうにつけます。

下着は大體上長に準じてつけますが、袖は袷の裏袖の標附と同じやうに八つ口の方で袖丈を三粍つめ、他は同じにつけます。

身頃の丈は地質によつて加減しなければなりませんが同じ地質の時で普通四粍つめます。

衿は上着より二粍丈をつめます。

縫方

袖　上着と下着の袖口布の下を、二つ折にして押へ縫ひをします。物によ

つては三つ折紩とすることもあります。そして上着の袖に袖口布を合せて袖口明を縫ひ、袷のやうに留をして袖口下を袖口布の丈まで四つ縫にし、表に返して袖口を毛抜合せにして襞をかけます、次に下着の袖にも同じやうに袖口布をかけて留をし袖口下をも縫ひ、袖口布の下に切り込みを入れるか縫ひ代を自然に斜に表に折つて縫ひ代を表に出し上着の縫ひ代に合せて、袖口下から袖下の半分まで四つ縫にして、それから先は別々に縫つておきます。それから袖口布の裏を袖に紩けつけ、丸味をこしらへ上着下着を一束にして袖下に襞をかけます。

振り八つは、袖幅を標通り折つて上着と下着の八つ口を中表に合せ、袖下の縫ひ目の兩側で二粁、袖附際のところまで〳〵二粁表をゆるめて要所に待針を打ち、標より凡そ一糎内を縫ひ袖下の縫ひ目で一針返します、表に返して折目を正して襞をかけます。

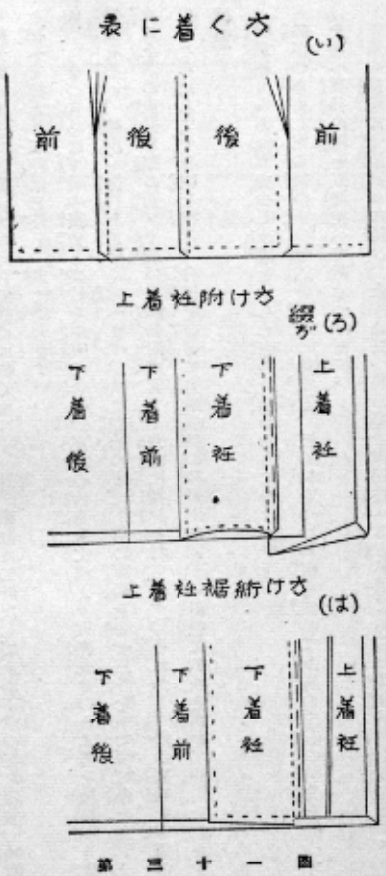
又上着下着の袖を全く別々に仕立てゝ、袖下、八つ口、袖口明下をそれ〴〵四糎位のところを留め、その他袖下の縫ひ目、袂の丸味、袖口下などの要所々々を縫ぢることもあります。かうして仕立てたものは取りはづしに便利であります。

身頃　上着の背、脇を普通單衣のやうに縫ひ、衽附の前に四褄を紩けて前幅を定めます。次に衽の褄先の額縁を作つて裾を衽幅の半分位まで紩け、衿下は三つ折紩にしてそれから前身頃の裾山と衽の裾山とを揃へて衽をつけます。

下着は先きに前身頃、後身頃の四裾を別々に裏の方に折つて三つ折紩をします、それから第三十圖のやうに背と脇を縫ひ、裾口のところは特に細かい針で縫ひ、返し留をして前幅を標します。

背縫は折を上着と反對に折り、背縫、脇縫とも縫込の下の端を第三十一圖（いのやうに三角に折り込んで角をきれいに紩けつけます、次に下着の衽を出して褄先を上着と同じやうに額縁にして衿下を紩け、身頃と外表に衽を合せ裾口を揃へて衽附をします。

上着下着とも衽がつきましたら上着に丈を揃へて背縫、脇縫を綴ぢ、身八つ口を袷のやうに縫ひます。



第三十一圖

袖附　身八つ口に四つ留をして兩袖を袷のやうにつけ上着は折を袖の方につけ、下着は身頃の方につけます。

衽綴　上着下着の衽の裾口をよく揃へて第三十一圖(ろ)のやうに縫目を綴ぢ、(は)のやうに上着の衽裾で前身頃と衽の縫込を包んで三つ折して假躾をします。そして前に縮け殘してあるところを縮け、裾口より凡そ二糎上から衿先標の上まで四糎位の針目で表には極く小さく一針、裏には二針出して上着下着の衽を綴ぢ、衿附の標を揃へて標より五粍ほど外を一束に綴ぢます。

衿附　まづ初めに下着の表衿と裏衿を中表に合せ、左右の衿先を丈標より五粍先きのところを縫ひ引き返して衿先を整へ、衿附の縫代を正しく揃へます、次に表衿の方に上着の裏衿を合せ三枚を躾で綴ぢ合せます。次に上着の表衿を標の通り上着の身頃衿附に當てゝ普通に待針を打ちます、それから下着の裏衿を下着の衿附のところにあてゝ身頃を挾み、合標を合せて上着表衿の待針で留め、一針拔に六枚を重ねて衿附をします。

注意

衿肩廻りのあたりで少し下着をずらし表衿を稍ゆるめにつけます。

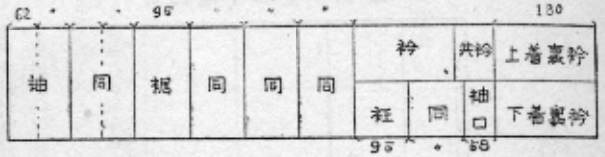
衿がつきましたら衿の中の縫込を平らに始末し、三つ衿をつけ衿幅を決めて上着の左右の衿先を縫つて縫込を整へ裏衿の幅を五粍控へて縮けつけます。

下着の衿幅は寸法通りに縮け、上着は三つ衿の邊で四粍控へる方が着てからの具合が宜くあります。

共衿　上着は普通に、下着は衿附の縫目から五粍離してかけ、次に衿糸を附けます。

單衣半重ね下着

半重ね下着の裁ち方



公式　袖丈×4＋裾丈×4＋衽×2＋袖口布＋衿丈＝總用布

第三十二圖

裁方

上着の裁ち方は普通の本裁の通りでありますが、たゞ袖口布だけを取るやうにすることは本重ねと同じであります。

下着は名の通り下半身と袖と衿を普通につけるのでありますから、その身頃は腰のところまでゝ大抵九〇糎位の丈にします、布が充分にある時でもこれ位の高さで着る時腰紐を締めるところに縮けつけるやうにします。

標附け方

重ねを省いた部分を除く外みな本重ねと同じやうにつけます。

縫方

袖　本重ねと同じであります。

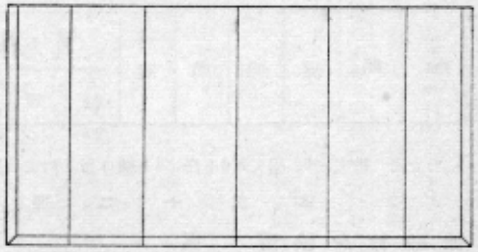
身頃　上着の背縫、脇縫をして衽をつけ、脇の縫代は割つておきます。

衿下と裾絎　上着の衿下、裾絎を全部普通の單衣の通りにします。

衿附　上着の衿附を矢張り普通につけます。

袖附　袖附の留をして上着の袖を先きにつけ、次に下着の袖を標附の通り

單衣半重ね下着廻りの図



第三十三圖

に折つて上着の袖附の縫目に絎けつけます。

下着身頃　下着の背縫、脇縫をして衽をつけ、衿下と裾を三つ折絎にして第三十三圖のやうなものを作ります。

とぢ方　下着の絎け代を折つて蝶をかけ、上着との調子をよく整へて絎けつけます、上着の地質が弱いか、下着の地質の重くて垂れるもの丶時は絎け代は二つ折りにしてその上を耳絎のやうにして絎けつけます。

下着の衿附及絎け方　下着の表衿と裏衿で衽を挾んで衿をつけ衽のなくなつたところからは衿だけを表裏二枚合せて縫ひ、衿先をこしらへてこれを上着の衿の廻りにとぢつけ衿幅を定めて絎け上げます。

共衿　本重ねと同じやうに掛け、掛糸も同じやうにつけます。

四、袷の部

本裁女物袷

仕立上寸法

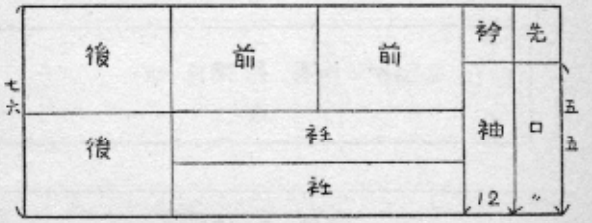
袖丈	六〇糎	袖口	二三糎	袖附	二五糎
袖幅	三二	身丈	一五〇	身八つ口	一三
後幅	二八	前幅	二三	衽下り	二三
衽幅	一五	合褄幅	一三・五	衿肩明	八・五
衿幅	一一	衿下	六五	衿	六二
裾裁	〇・四	袖口裁	〇・二		

裁方

表用布の裁ち方は本裁女物單衣と同じであります。

裏用布は通し裏のものもありますが、多くは裾廻し布と胴裏布とは別布を用ひます。裾廻しには凡そ三五〇糎をつけ、裾廻しの丈は凡そ身丈の三分の一位つけるのが普通であります。但し衽は三分の二位、衿先布は衿丈の四分の一位にします。

裾廻しの裁ち方



第三圖

すべて裏は表にならつて裁つものでありますが、裾のいたんだ時の用意に縫接の所へ少なくも四、五糎の余裕を入れておきます。

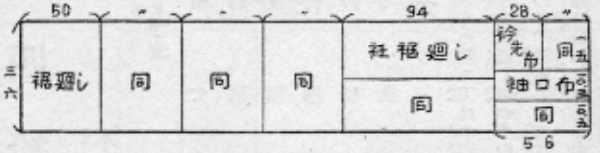
標附け方

表袖　中表にして兩袖を別々に二つに折つて重ね第四圖のやうに、丈、口、附、幅、山、丸味の順につけます。

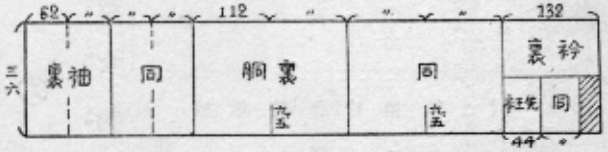
裏袖　表袖と同じやうにして折り重ね、表袖より丈を二粍、袖口を二粍、袖幅も二粍つめ、袖口長や出す爲め袖口縫代は裏の二倍だけ多くします。他は同じに標をつけ、次に袖口布を圖のやうに重ねて袖口幅と袖口丈の標をつけます。若し八つ口布をつける場合は袖口布と同じやうにします。但し袖幅を定めてから八つ口布を一杯の縫代にのせます。

表身頃　女物單衣と同じであります。但し衽は裏

裾廻しの裁ち方

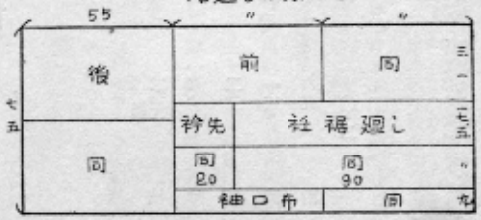


胴裏の裁ち方

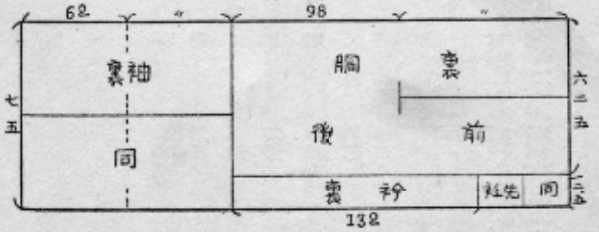


第一圖

裾廻しの裁ち方



胴裏の裁ち方



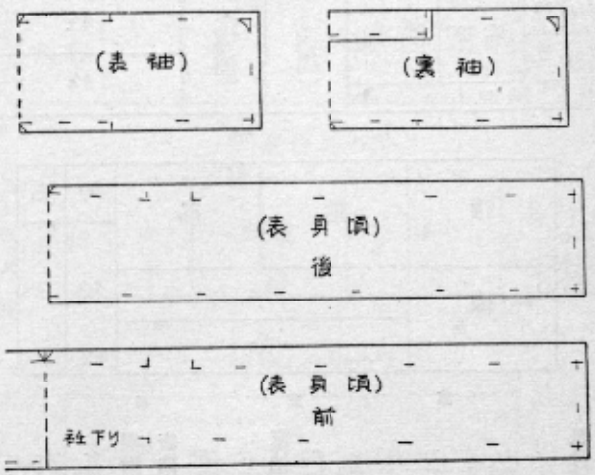
第二圖

と重ねて標します。

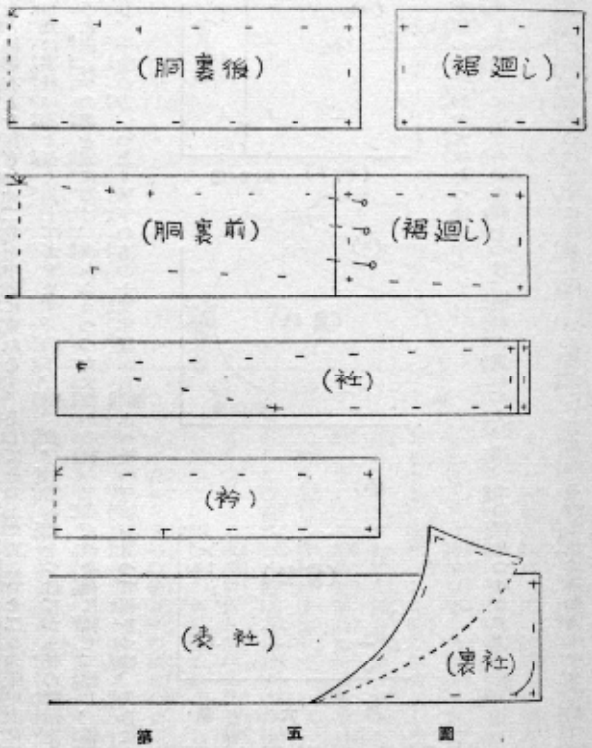
胴裏と裾廻し　すべて表身頃にならつて標をつけます。布のおき方は第五圖のやうに裾廻し布四枚を重ね、裾口を右にして丈、幅の標をつけます。但し幅は表より二粍つめます。

胴裏は表身頃と同じやうにおいて、袖附、身八つ口、背縫、後幅の標をします。丈は表丈より裾廻し丈を減じた寸法に袂の二倍を加へ、なほ胴接のきせ代として心持寸法をゆるくして標をつけます。

次に胴裏の後身頃を左に除けて前の裾廻しと、胴裏の前身頃との胴接の標を合せて待針で留りに丈をつないで前身頃の標附をします。



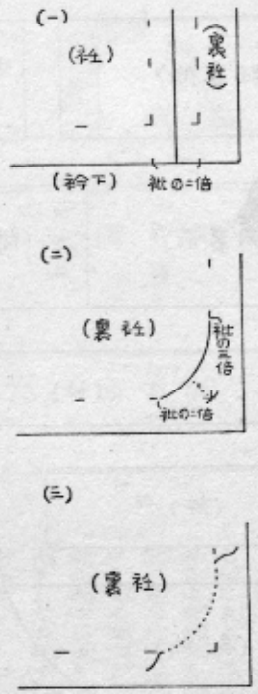
第四圖



第五圖

衽　衽先と裾廻布とを接ぎ合せ二枚を中表に重ねます。そしてその上に表衽を二枚矢張中表に揃へて重ね、被の二倍だけ裏衽の幅を長く出しておきます。衿下、幅、丈、衿附の標をつけてから裾の標附をします。圖のやうに表衽の裾を左に除け、表からうつつた丈標から被の二倍だけを裾に出して標し、幅標を伸して十文字にし、手前の方、つまり衿下の方の十文字標から向ふへ被の三倍を計つて標をつけ、先きに表からうつつた丈標の十文字とに尺度をあて、裾先の角から尺度の縫の中央へ向つて被の寸法だけを計つて點を打ち、この三點を通つて裾形の丸味をつけます。

衿あげと衿附の標



第六圖

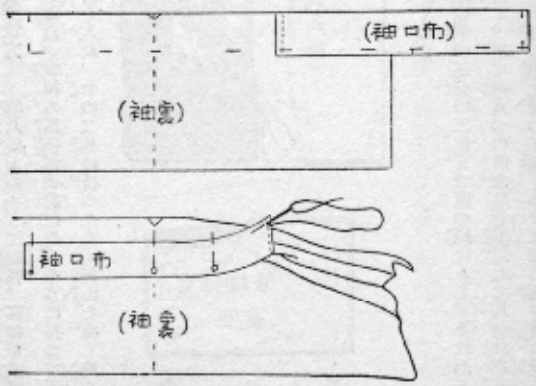
衿　衿先と裏衿とに接ぎ合せの標をつけ、表衿と重ねて丈、幅、山の標をつけます。

縫方

袖　裏袖に袖口布をつけますには廻し附といふ仕方にします。その方法は第七圖のやうに袖口布の丈標を裏の袖標に合せ、まづ丈標から縫ひ始めて角の所で小さく一針返し針にして、標通りに袖口布に折りを附て、今度は下圖のやうに幅に待針をして縫の方を縫ひます。この時袖口布の角を少し斜に抄つて地めておきさして表に返した時のきせとします。左の端も始めのやうにして丈標を合せて縫ひます。ぐるりと縫へきしたら隅角を四角に折つて袖口布へ折をつけて引き返して縫をかけます。但しこの袖口布の掛け方は必ずこの仕方によらなくても宜しく、兩端を折り曲げて後で縫けつける仕方によつても宜しいのであります。

次に表袖と裏袖の袖口明の標を合せて待針を打ちます。この時裏袖の方が少し張り加減にならなければなりません。縫代は、表は直ぐで、裏は留の所は標通りにしますが留から二厘位の間で縫代を凡そ四粍程淺くして褄形に縫ひ出します。

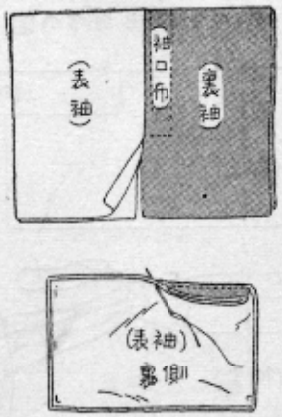
袖口布の掛け方



第七圖

きせを二糎かけて表布の方へ折り袖口の四つ留をします。

四つ留の仕方　第八圖(上)のやうに裏袖、裏袖を攫げ丈を袖山から二つに折り、これを(下)圖のやうに折つて四枚を重ね、表袖の裏側が手前になるやうに持つて手前の一枚は縫代を開いて、口明の縫止りの折山に手前側から針を入れ、中の二枚は折つたまゝ折山を極く淺く抄つて向ふ側へ突抜き、布目二筋ほど下つて、手前側へ戻して前の糸と一緒に結んでしつかり留をします、留が出來ましたらばその糸で袖下を縫ひますが、袖口布のある間は半返し縫又は一針抜にして四つ縫にし、丸味の所は細かに、他は普通の針目に縫ひます。



第八圖

注意

四つ留の下の後袖の縫代は自然に長い間で折り出さないと袖口下に皺がついて見苦しくなります。又こゝにはきせを掛けなくて宜しいから縫代を他より少し深くします。

表身頃　背と脇を縫つて折をつけます、脇の後の縫込を自然に開いて折り躾で押へておきます、若し縫代の多い時は縮まで開いてしまひます。それから衽をつけることは單衣に同じであります。

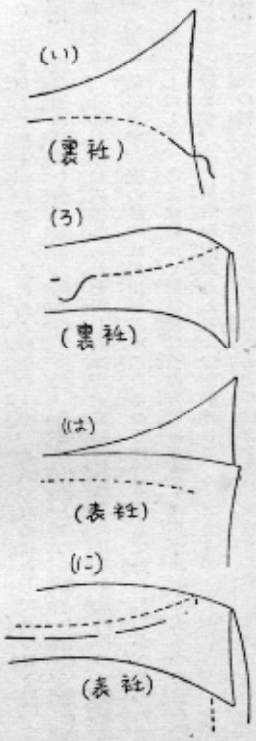
裏身頃　まづ脇接ぎをして折は裏に折つて疊躾をします。

背と脇を縫つて衽をつけそれ〴〵折をつけます。但し背の折は表と反對に向けます。

褄合せ、縦綴　表裏を合せて品し丈比べをしてから褄合せをし、褄をあげてから疊躾をします。

褄のあげ方及縦綴の仕方

第九圖のやうに、裏衽の褄形の標通りを極く小針に縫つて、糸は始め終りとも留め結にして四糎づゝ糸を殘しておきます。(この糸は實綿を細くしたものを用ひますのが宜しくあります。)それから糸を引いて縫目をいせ、(中央にいせを多く兩端は自然に少なく)その縫目の際を左の指で押へ、右の拇指と食指とで引き伸します。大體いせが消えましたら(ろ)圖のやうに出袱の形に折つて形を見ます。次に(は)圖のやうに表衽と裏衽とを重ね



第九圖

て形を整へよく標を合せて待針を打ち、一針毎に表裏に氣をつけながら褄縫をします。そして褄先に二粍、その他に四粍のきせをかけ、きせ山から五粍離れた所に縫躾をかけます、褄先にはきせのくづれないやうに表から躾糸を通して燃つておいても宜しいのであります。

表裏の背縫、脇縫、衽附の縫目をとぢ、次に裏を出して褄先の縫終りから二粍離れた所を一針返して衿下を縫ひ、引き返して躾をかけます、それから脇縫の上部、身八つ口の留をして八つ口を縫つて躾をかけます。

袖附　表身頃の縫代を留の際から斜に折り出し、身頃の山標と袖の山標とを合せて針を打ち、袖附の四つ留をもします、その針順は表袖から針を出し表身頃、裏袖と抄ひ次に裏身を縦に抄つて又逆に元に戻つて結び合せこの糸で縫ひます。表の縫代は肩山が五粍になるやうに折り出して針を打ちかへ折つたまゝ始め終りの少しの間は半返しにして、あとは細かく縫ひ折は袖の方に折ります。裏は身頃を折らずに留の際から縫ひ、身頃の方に折をつけます。次に衿附の表裏をとぢ合せます。

衿附　裏衿の衿先布を接ぎ合せ裏衿の方へ折をつけます。

女物單衣のやうに表裏の衿で身頃を挾んでつけます。そして衿先を縫ひ衿幅をきめて縮けつけ、共衿をかけます。

裾とぢ　表裾の折山から五粍ほど上つた所に、（衽を除いて）前幅の裏に三針、後幅の裏に四針出し、表はその外になほその間にも針目を出して裾とぢをします。

本裁男物袷

仕立上寸法

袖丈	五二糎	袖口	二八糎	袖附	四二糎
袖幅	三四	身丈	一三六内外	後幅	三〇
前幅	二五	衽下り	一九	衽幅	一五
合褄幅	一三・五	衿肩明	八・五	衿幅	五・五
衿	六六	裾袱	〇・四		

裁方

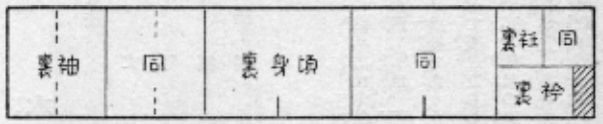
表用布の裁ち方は本裁男物單衣と同じでありますが、居敷當を取る必要はありません。

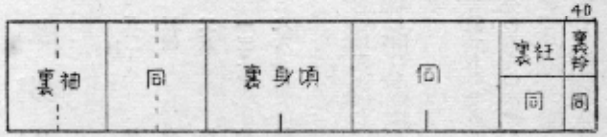
裏用布の裁ち方は、裾廻し附のものは女物袷と同じでありますが寸法だけ違ひます。然し男物袷は通し裏のものが普通であります。

裏はすべて表にならつて裁つものでありまして、後身頃、前身頃、衽とも丈をそれ〴〵袱の二倍づゝ長くしておきますが、總尺の充分あるものは身丈を長く裁つて肩で揚をしておきますと、裾の切れた時に裾を切り取るのに都合が宜くあります。

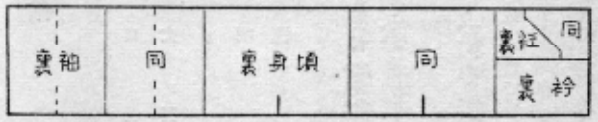
この他に袖口布が要ります。袖口布の地質は黒八丈、瓦斯八、洋八、五日市等であります。

男物裏布棒衽の裁ち方　巾並　用布





男物裏布鉤衽の裁ち方　巾並　用布



第十圖

標附け方

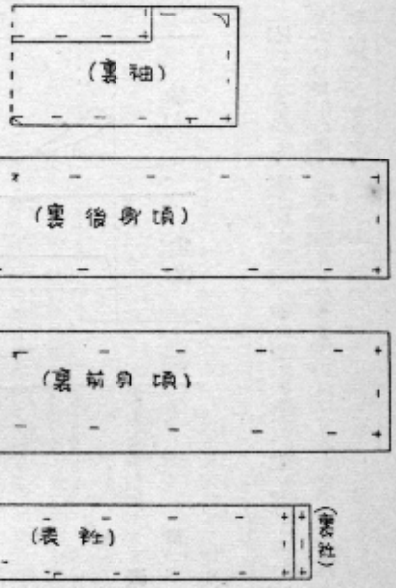
表袖　中表に兩袖を別々に折り重ねておきます、そして女物袷のやうに袖丈、袖口、袖附、袖幅、山、丸味の順に標をつけます。

裏袖　表袖と同じやうに、表袖より丈と袖口明を二粍づゝつめ、袖幅は人形の部分だけ三粍つめて他は表袖と同じやうに標します。次に袖口布を重ねて袖口布掛の標をします。若し袖口布の地質の厚いものはその丈を、縫代だけすらして外袖の方を長くしておきます。

表身頃　本裁男物の單衣と全く同じであります。

裏身頃　すべて表身頃にならつて標をつけます、そして幅のつめ方は女物の袷と同じであります。

標附け方圖

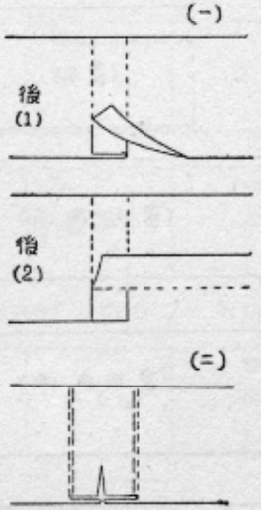


第十一圖

縫方

衽と衿　衽は女物袷と同じやうに標し、衿は裏衿を重ねて男物單衣と同じやうに標をつけます。

袖　裏袖に袖口布を廻し掛につけます、それから表袖の袖口明の標を合せ、山に待針を打つて裏袖が少し張り加減になるやうに全體に待針して縫ひます、縫代は表は標通りに眞直ぐに、裏は女物のやうに留の所は標通りに、留から二糎位の間で縫代を凡そ四粍ほど淺くして裾形に縫ひ出します、但し縫ひ始めと終りは五粍ほどづゝ縫はずにおきますと口がきれいに仕上ります。そして縫目に平鏝を當てゝ表に返し袖口裾を整へます。



第十二圖　裏揚の仕方

袖口の四つ留をして人形の五糎位手前まで四つ縫にし、それから先は表裏を別々に縫つて開いて裾をかけ、丸味を作つて表に返します。

表身頃　背縫、揚、脇縫、衽附などを縫つて、折をつけ、揚の仕末をすることは男物單衣と同じであります。

裏身頃　揚をするものは、肩山を衿肩明の切り込まで標通り摘み縫にして第十二圖(一)のやうに後身頃に折つて疊裾をかけ、衽附の標より八粍程外を折つて裾をかけておきます。又揚の多い時は(二)のやうに縫目を割つて疊裾をかけておきます。

次に背縫、脇縫をして折をつけ、脇の縫代を開いて裾をかけておきます。

裾合　丈比べをして正しく裏身頃を袖の二倍だけ長くして裾合せをし、褄をあげて女物袷のやうに裾の整理をします。それから縦とぢをもして衿下を縫ひます。

袖附　山標を合せて袖附の四つ留をします、表は身頃を折つて袖をつけ、裏は身頃と袖とを合せて女物の時のやうにどちらも折らずに縫ひます、折は表は袖の方に、裏は身頃の方に折ります。

衿附と共衿掛　女物袷のやうに衿附の標を裏表合せて、標より五粍外をとち合せ、表の衿と裏衿とで身頃を挟んで衿附をします。つけさしたら衿先の始末をして衿を縫けつけます。そして單衣物の時と同じやうに共衿をかけます。

裾とぢ　女物袷のやうにしますが、針目は前幅の裏に四針、後幅に五針を出し、表はその余分に倘その間にも針目を出します。これは女物に比べて男物は身幅が少し廣くなつて居りますから針目の數を多くするのであります。

四つ身元祿袖袷

仕立上寸法

四つ身單衣と縫りはありませんが袷でありますから、裾の褄を五粍位にし、袖口の褄を二粍位にします、時には袖口は毛拔合せにすることもあります。

裁方

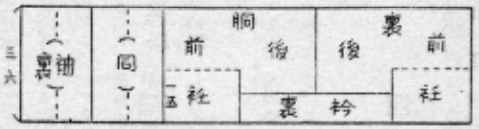
表布の裁ち方は四つ身単衣と同じであります。裏は矢張り本裁袷のやうに通し裏のものと裾廻しをつけるものとあります。裾廻しの丈は身丈の凡そ三分の一位つけるのが普通で、その用布は並幅で一八〇糎位から二一〇糎位要ります。

胴裏の用布は總用布から裾廻しの總尺を引いて、その殘りに袖の八倍と衿代の四倍を加へただけの寸法であります、なほこれに裾の切れた時の用意として全體に二〇糎ほど縫込を加へておきます。

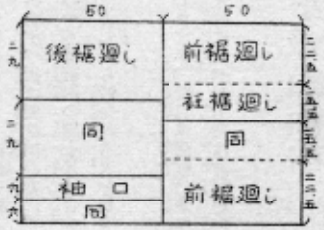
標附け方

袖　表袖は單衣物と同じであります。裏袖は表の標附寸法よりも丈と、袖口明と幅を二粍づゝつめるだけで他の標は同じにします。次に袖口布を本裁女物袷のやうに裁せて口布

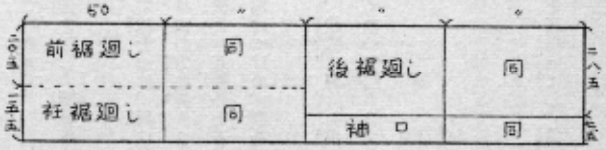
第十三圖　裁ち方の裏胴身つ四



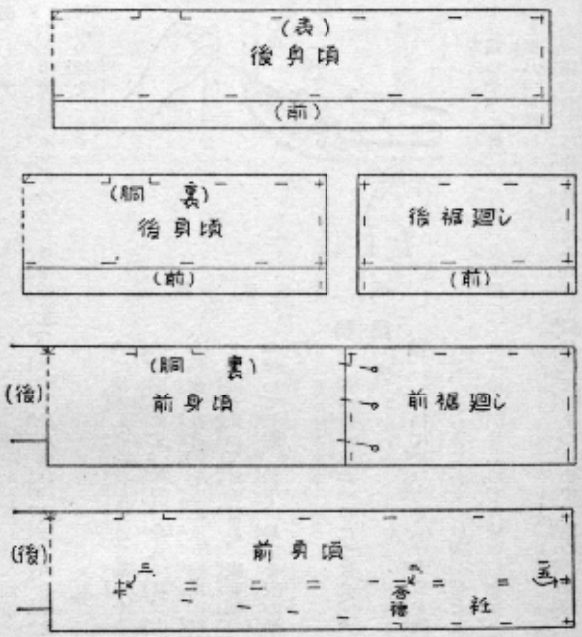
裾廻しの裁ち方



第十三圖　裾廻しの裁ち方

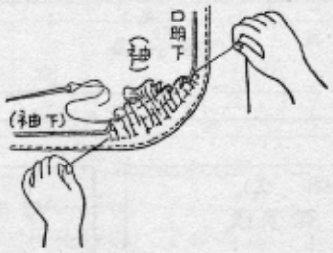


第十四圖　標附け方



附の標をします。

身頃　矢張り表は單衣物のやうに後身頃に丈、袖附、身八つ口、後幅、山の標をし、前身頃は前幅、衽附、衿下、衿附の標をします。



元禄袖丸味の作り方

第十五圖

衿　四つ身單衣のやうにつけます。

縫方

袖　裏袖に袖口布をかけ本裁女物袖のやうに袖口明を裏表縫ひ合せ、表の方に折をつけ四つ留をして袖下を縫ひます、袖の丸味は第十五圖のやうに縫代の外を三通り縫つてその糸を引きしめて丸味の形を整へ縫代を平らに裏取りします。それから振八つを縫ひ合せます。

身頃　表身頃の背及び脇を縫つてそれ〳〵縫ひ代に折をつけます、脇の折は前身頃に倒して身八つ口下の縫込を後身頃の方に斜に開いてとぢつけます。それから衽を摘み縫にします。

裏身頃の胴接の標を合せて縫ひ、折りは胴裏の方へつけ隠縢をかけます、次に背縫、脇縫、衽の摘み縫をして表のやうに折をつけます、但し背縫の折だけは反對にします。

次に表裏を合せて丈を比べて結合せをし、きせを四糎かけて褄をあげます、そして背、脇、衽の縫とぢをしてから身八つ口の留をして身八つ口を縫ひ、衿下をも縫ひます。

袖附　本裁の袖附と同じやうに表身頃の縫代を留の際から斜に折り出し、山標を合せ、留をします、留も同じやうに表袖から針を出し、表身頃、裏袖と抄ひ、次に裏身頃を小さく縫に抄つて、裏袖、表身頃、表袖へ返つて初めの糸と結び合せてその糸で縫ひます。この留は前も後もします。

裏は身頃を折らずに留の際から縫ひ、身頃の方に折をつけます、次に衿附標より五糎外と表裏合せて疎糸でとぢ合せておきます。

衿附　表裏の衿を接ぎ合せて裏衿の方に折りをつけて疊縁をかけ、單衣のやうにつけます、つけましたら衿先の始末をして新衿に仕上げ共衿をかけます。

裾とぢ　裾とぢは表縫の折目から五糎上つたところに後幅は裏に三つ、前幅は裏に二つ表はこの儘に前後ともその間にも針目を出します。

三つ身袷

仕立上寸法

袖丈、長袖	五〇―五三	袖丈、元禄袖	二八
同筒袖	二四	袖口	一四
袖附	一五	袖幅	二五
身丈	一〇〇内外	身八つ口	一〇
後幅	いっぱい	前幅	いっぱい
衽下り	一一	衽幅	いっぱい
合褄幅	衽幅より八粍つめる	衿肩明	五
衿幅	四	衿下	三〇
袖口祝	二	裾祝	六

裁方と積方

三つ身の總用布は袖丈の四倍と身丈の三倍とを加へたものでありますから、長袖と元禄や筒袖の場合とでは自然と總丈にも相異が生じますが、普通は五〇〇糎から五七〇糎位ですから一反で

第十六圖

三つ身の裁ち方

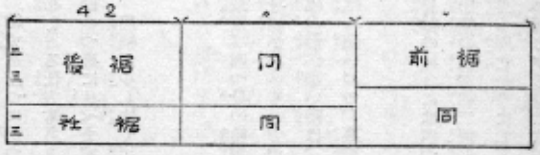
幅八五糎並布用

公式　布用總＝3×丈身＋4×丈袖

丈身＝3÷(4×丈袖－布用總)－布用總

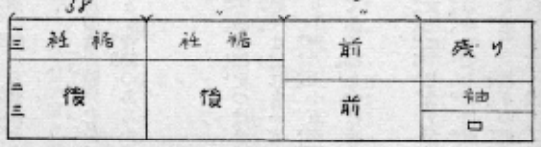
第十七圖

裾廻しの裁ち方



裏の積方

裾廻しの裁ち方



凡そ二枚裁たれます。

第十六圖の如くにまづ袖丈の四倍を切り、その一方の耳から衿布をとり、次に身頃を三枚に折つて輪の一方を向ふから他の一方を手前から布幅の半ば迄切り込み、次に中の布を半幅に裁切ります。次に、身頃を二枚合せて、衿肩をあけ、衽を裁ち添します。これが普通の三つ身の裁ち方ですから片身頃は布の裏が出るやうになりますので、兩面ものでないと具合が惡くあります。

胴裏の裁方　通し裏の時には、表用布に袂の出の六倍を加へたものが裏の總用布になるのであります。

裾廻し　別布でつけます時は、前の總用布から、裾廻し丈を引き去り、殘りの丈へ接ぎ代として多少の總込みを加へたものが胴裏用布の總丈になります。

裏の裁方　通しの場合には表用布と同様ですから省きますが、裾廻しを附ける時には裾廻しは第十七圖上のやうに、總丈を三つに折つて、後褄の幅から衽幅をとり、前褄は二つ折にして半幅にいたします。下圖のやうに袖口布をとる仕方もあります。

三つ身は一つ身に比べますと、總用布は大體同じ位で、又出來上りの大きさも一つ身と大差がありませんが、けれども、肩幅が少し廣く出來ることゝ背縫のあるため裁方がよいので時には用ひますが、余り多くは使はれません。

標附け方

袖　本裁及び四つ身の袷等と同じ方法で標をつけます。

身頃　身幅が狹いものですから、縫代は何れも一ぱいに標をつけます。

衽　衽幅の形が細い時は、劍先より十糎乃至十五糎下つた處に約一糎のふくらみをつけます。

衿　衿幅も狹いので、裏衿をつけてから標をつけます。

縫　方

袖　長袖の場合には四つ身及び女物に準じますが、筒袖の時には、一裏袖に袖口布をかけ、次に表裏の袖口を合せ、山標の左右約二糎の間は袖口布を張り目に縫ひ、袖口際をかたく留め、その糸で表袖を袖幅一針先まで縫ひ、裏も同じやうにして八つ口を縫ひ、袖下の縫目を表裏とち合せて引きかへし、襞をかけます。もし四つ縫にする時には、先づ表裏の袖口を合せて縫ひ、きせをかけて表に返し、縫目を合せて四つ留をします。この糸を切らずに袖下を三、四糎一針抜きに四つ縫とし、幅標の五糎位手前から標の一針先まで表裏順々に縫ひ、表を出して襞をかけ、袖の八つ口を縫ひ、次に袖下の縫ひ込みの端をあらく裏にとおつけます。

身頃　表裏の背、脇を縫ひ衽をつけます。縫合せをして、褄に假とぢをします。

裁とぢ、身八つ口　背及び脇をとぢ、脇縫の上部に四つ留をし、身八つ口を袖附標まで縫ひ、襞をかけます。

袖附　四つ身の袷と同樣であります。

衿附、共衿　衽の縫とぢをし、衿下を縫ひ、表裏の衿附の標から四糎外をとち合せ、衿附、衿衽をし、共衿をかけることは四つ身と同じであります。

裾とぢ　針目は後幅裏に三針、表に七針、前幅裏に二針、表に五針出してとぢます。

附紐、揚　肩から二十三糎位の處に紐をつけ、肩揚、腰揚を着る子供の大さに合せて適當に一つ身單衣の時と同じ方法で揚げます。

一つ身綿入

一つ身は單衣物の頃で申しましたやうに嬰兒から二三歳位までの子供の着物で大中小があります。普通並幅一反で三枚裁つことが出來ますが、近來は改良型が種々出來まして、より少い布で作ることも出來るやうに考へられました。

地質は普通の着物地は殆んど皆用ひますが特に嬰兒用としては皮膚にやはらかく當る地質のもの又清潔の必要

絵の部

上から白地のガーゼ、さらし木綿、綿ネルなどを多く用ひます、そしてだん〳〵大きくなるに従つて色物、柄物を用ひます。

仕立上寸法

袖丈、涎掛	二五―五〇	袖丈、元禄袖	二七
袖丈、筒袖	二四	袖口	一三
袖附	一三	袖幅	一八―二四
身丈	七五―八七	身八つ口	一〇
後幅	いつぱい	前幅	いつぱい
衽下り	一〇	衽幅	いつぱい　一三種位
合褄幅	衽幅より五粍つめます	衿肩明	三―四
衿幅	三―四	衿下	一八―二三
袖口袱	〇・五	裾袱	一

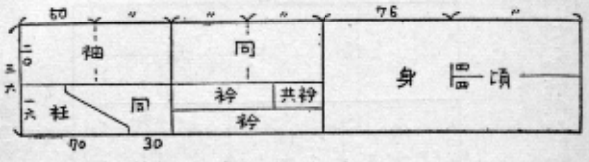
裁方

用布の都合で棒衽裁にする時と、鉤衽裁にする時とがあるが、一般に棒衽裁の方が多く使はれます。第十八圖の(い)は鉤衽でありますから裏面物でないと具合が悪く、(ろ)圖、(は)圖は何れにも使はれる裁ち方であります、又袖も筒袖、元禄袖涎袖とどの袖の裁ち方にも使はれます、(に)圖は大幅物の裁ち方であります。

一つ身綿入

一六七

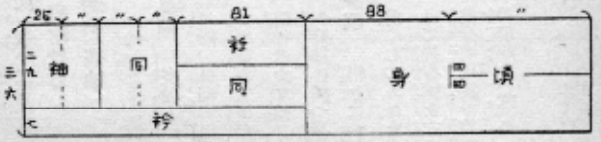
一つ身涎袖鉤衽の裁ち方(兩面物)(い)



公式　袖丈×4＋身丈×2＝總用布

(總用布－袖丈×4)÷2＝身袖

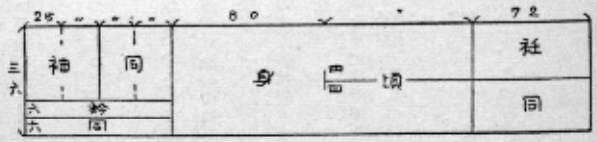
一つ身筒袖の裁ち方　(ろ)



公式　袖丈×4＋身丈×3－衽下り＝總用布

(總用布－袖丈×4＋衽下り)÷3＝身丈

一つ身筒袖別衽の裁ち方　(は)



公式　袖丈×4＋身丈×3－衽下り＝總用布

(總用布－袖丈×4＋衽下り)÷3＝身丈

裏の裁ち方は通し裏の物は、身丈と衽丈を表の二倍だけ長く裁てば宜しいのであります。

標附け方

濶袖（表袖）　兩袖を中表に折つて重ね、袖丈、袖附、袖幅、山の順に寸法通りに標します。

裏袖　表袖と同じやうに折り重ねます、そして表袖にならつて袖丈、袖附、袖幅、山の標をつけますが、寸法のつめ方は丈を四耗つめ、袖口は裾の二倍だけ廣くしておきます。

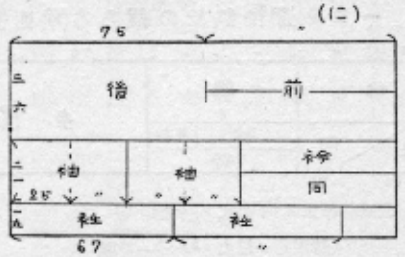
筒袖はたゞ袖口寸法が小さくなる丈で他は變りません。

元祿袖は四つ身袷と同樣であります。

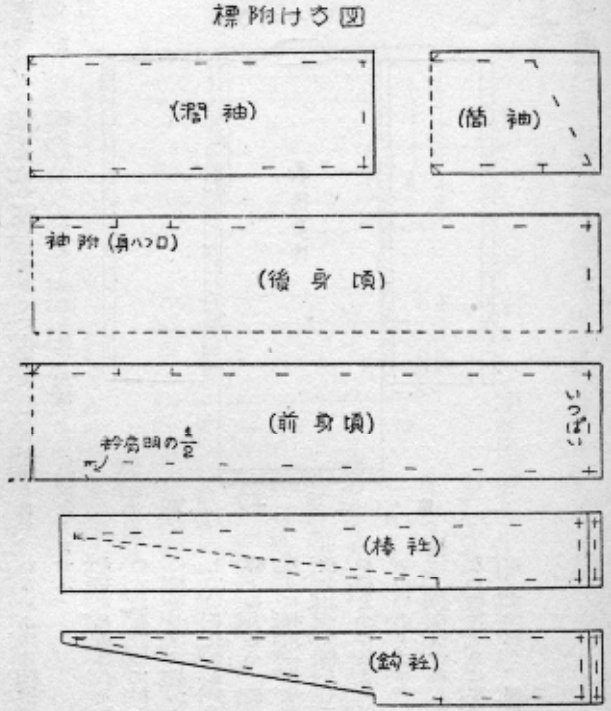
身頃　幅を二つ折にして、前身頃を下に後身頃を上に、衿肩明を左手前にしておきます。そして身丈、袖附、身八つ口、後幅、山の標をつけて後身頃を左に除けます。

前身頃は裾で前幅を一杵に標し、衽下りをつけ此所で裁ち目の方から衿肩明の二分の一だけの寸法を計つて、この標から斜に裾の標までに衽附の標をつけます。

裏身頃は丈を表身頃より裾の二倍長くし、幅は三耗位つめて標します。



第十八圖



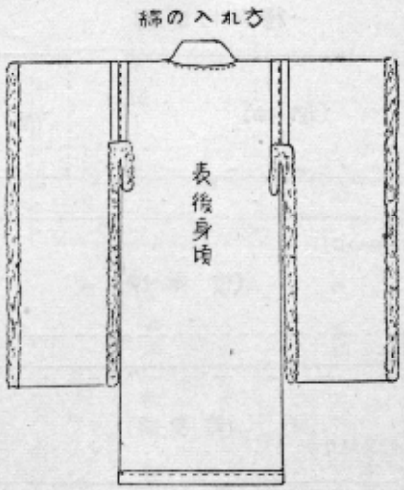
第十九圖

衽　衽は木綿袷のやうに、表衽と裏衽とを重ねて標します。

一つ身は衿下が短いので鋏先が余り細くなりすぎますから、衿附の標は鋏先から凡そ一〇厘位の所で斜線より八耗程の丸みをつけて格好をよくします。

鉤衽も大體袷衽と同じであります

すが、衿下の布目が幅の都合で眞直ぐに出來ないことがあります、かういふ時は衽附の方の曲りをいく分少なくしますが、鍬先のあたりはよく格好を見て加減しなければなりません。



第二十圖

最初に裾縫ひ代を取りつゞいて衽丈、衿下の寸法を計つて標をつけ次に衽幅、合褄幅の標をつけ、裾から鍬先までの衽附の標をして、それから衿附の標をつけます、但し鈎下の長さや、鈎の切り込等によつてこの通りに標附の出來ない時は衽丈、衽下の寸法を計つて標をして次に衿附、衿下の縫代の標をつけ最後に衽附の標をつけても宜しいのであります。

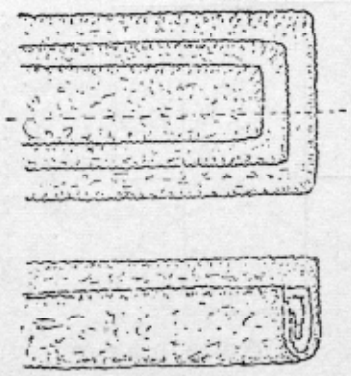
衿　衿は幅のあるものはそのまゝに、足りない物は先きに裏衿をつけておいてから、山、丈、鍬先、幅の標をつけます。

縫方

袖（濶袖）　表袖の袖下を縫ひます。

裏袖に袖口布のつくべきものならば、はじめにつけてそれから袖下を縫ひ、つゞいて八つ口を表裏縫ひ合せて袖口及び八つ口に含み綿をします。

身頃　表の脇縫をしてから衽と衿をつけます。裏身頃は裾廻しのつく物は胴接をして表身頃と同じやうに縫ひ丈を比べてから裾合をして褄を作ります、それから身八つ口も縫ひ合せて綿を含め、袷と同じやうに袖をつけます。



第二十一圖

綿の入れ方

全體を裏返して前身頃を中に表の後身頃を上にして第二十圖のやうにおきます、そして眞綿を引いてその上に綿を入れ袖口、八つ口、裾の綿の整理をして引き返し、前身頃の裏を出して綿を入れ、前の表身頃を被せるやうにして表を出します。

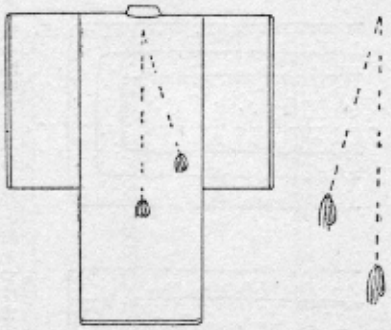
裾綿の注意　裾綿は三枚位を程よく重ね裾幅よりも四糎位長く切つて二つ折にします、そしてこの枇綿の折り山を枇山にあて強く入れて次に胴から續いてゐる綿を折り返して被せます。

絎け上げ　まづ裾の假とぢをしてつゞいて衽の裏側を出して綿をその間に挾み、縫目から二粍ほど上を袷の

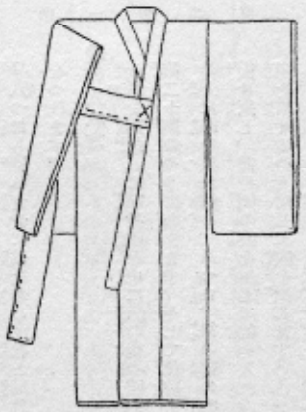
袵綴のやうに綿も一緒に綴ぢます。次に裾先も裏返して袷のやうに先から四、五粍ほどを縫つて綿を含め、表に返し衿下全體に綿を含めて躾で假とぢをします、それから綿を整へて衿附を表裏一緒に綴ぢ合せてから衿縮と袖口縮をします。

男児背守りの図

女児背守りの図

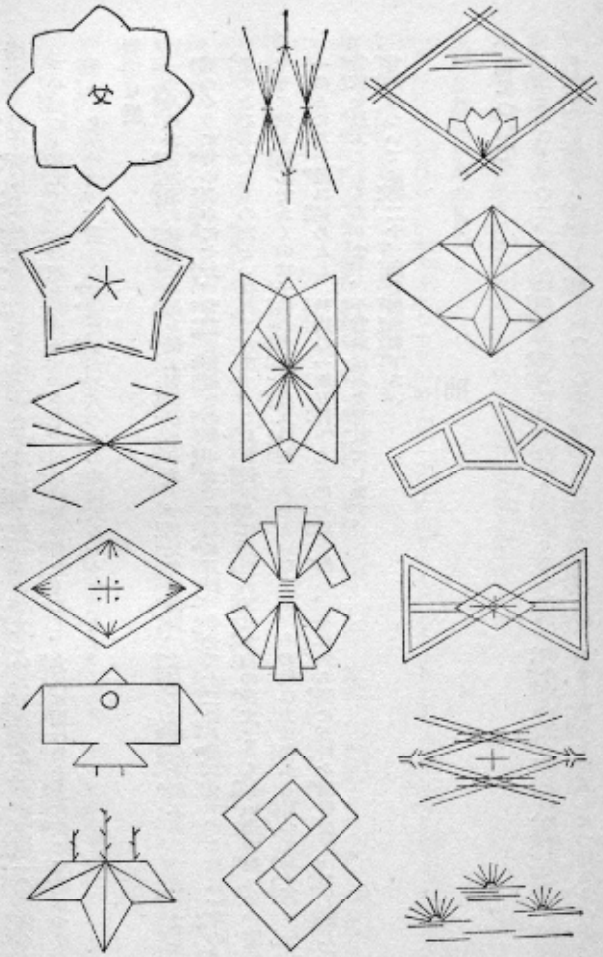


男児附け紐の図



第二十二図

裾とぢの針數は裏の後幅に五針、前幅に二針、表はその外になほその間にも針目を出します。



第二十三図

紐附　附け紐は上に別に兵兒帯をしめさせます時は細く短いもので宜しいが宮詣着などには並幅一〇〇糎の布を半幅づゝにして二本の紐を絎けます、そして男兒は絎け目を下にし、女兒は絎け目を上に向けて縫ひつけ、飾蝶をかけます、附ける位置は紐が身八つ口の中に入るやうにします。

背守り縫

一つ身のお宮詣着には背守り縫を縫ふ習慣があります。男兒には雌針、女兒には雄針を縫ふものでありまして圓のやうに背の眞中に七針、背筋と脇縫との眞中までに斜に五針、合せて十二針を縫ひます、これは一年の月數になぞらつたものだといはれてゐます。これを縫ふ糸は五色か又は赤白の身丈よりも長い糸で縫つて、圓のやうに端を結んでおくのは子供の長命を希ふ緣起であるといひます。その縫ひ方は裾から計つて身丈の三分の一のところを縫ひ始めとし、衿附の一糎五粍下までに七針を縫ひ、それから斜に五針を縫ひます。但し略して背紋を縫ふこともあります、平常着はみな背紋にします。

背紋については第二十三圖を御參照下さい。

小袖

小袖について

小袖といひますのは、古くは絹布の綿入に限つたやうでありましたが、只今では汎く男女の袷綿入にかゝわらず表も裏も絹布の着物を小袖といつてゐます。この小袖には裾廻し附、つまり別布を裾廻しにつけるものと、裾廻し布を共布で引返しにつける場合所謂無垢のものとがあります。

裾廻し附のもの　表布は紋も裾模様もなくて縞物、絣物、小紋などを用ひ裾廻し布には無地物、型附、模様物など表と調和のよい物を用ひ、その仕立方は普通の袷と變りません。

紋附及裾模様附のもの

これは二枚重ねるのが本式でありますが略して一枚物に仕立てることもあります。裾廻し布は多く共布を引返しにつける仕立方、つまり無垢に仕立てます。

地質　小袖に仕立てます地質は縮緬、羽二重、綿紗、綾織、紋織、大島、銘仙、米澤織などのやうな絹織物であります。

模様物

小袖の模様物には大體次のやうないろ〳〵の種類があります。

總模様　全體に模様をつけた物で袖は多く振袖に仕立て、紋はつけない方が多くあります。

島原模様　裾の方は裾模様のやうで、胸の上部の邊りにも模様をつけた物で、袖は振袖で袖にも模様をつけます。

裾模様　衽から前身頃、後身頃へとだん〴〵に模様を低くつけたものであります。袖は振袖にも留袖にもしますが、振袖の時には袖にも模様をつけます。

江戸褄模様　衽から前身頃へかけて模様をつけて、その高さは人々のすき〴〵或は年齢によつて違ひますが

凡そ三五個位から七〇個位までにします。

裾模様　衽にだけ模様をつけるのをいひます。

片袖模様　下前の裏衽にだけ模様をつけたものをいひます。

裄模様　裄にだけ模様をつけた極く地味なものであります。

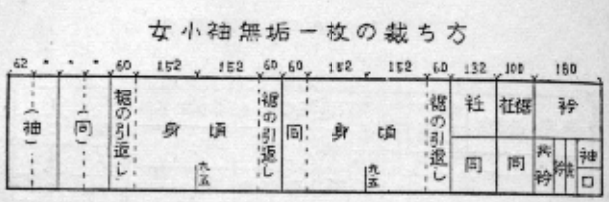
製斗目模様　腰のところと袖とに横に平らに模様をつけたものをいひます。

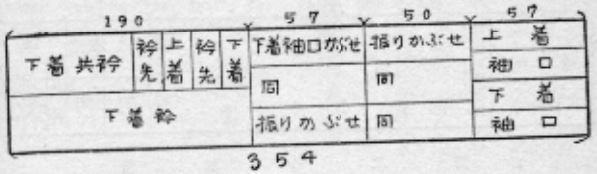
これ等の模様物には凡て三つ五つの紋をつけます。

重ね物

下着寸法のつめ方

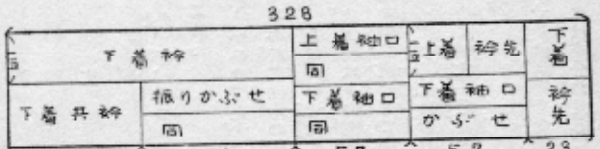
	男物袷重（上着より）	女物袷重（上着より）
袖丈	一糎つめる	一糎つめる
袖口	四粍つめる	同上
袖附	六粍（人形で三粍）つめる	四粍つめる
袖幅	四粍つめる	同上
身丈	二粍つめる	同上
後幅	四粍つめる	同上


女小袖無垢一枚の裁ち方
62
60
152
152
60
60
152
152
60
132
108
180
袖口
袵
袵
袵



第二十五圖

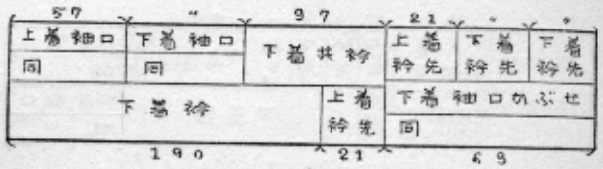
同　328糎の場合



第二十六圖

なりません。模様物はすべて寸法よりも一層模様を合せることが大切でありますから、模様の具合によつては多少寸法を加減しなければならないこともあります。しかし模様物は染め上げる前にそれ〴〵寸法を決め積りがしてありますから、模様や紋の具合と裁ち切の糸印とに注意して鋏を入れれば宜しいのであります。然し二枚重ねになりますと下着の振八つ被せや、袖口被せや衿などを被様のところから取らなければなりませんから、その裁ち合せが少し工夫を要します。この無地の部分は反物の長短や、補丈の違などで一定しませんから裁ち方も場合〳〵で變へたければなりません。次にその二三の例を擧げて見ます。

留袖模様二枚重ね（無地布三五四糎の場合）



第二十七圖

これは上着の表と、裾廻し、それに下着の裏表八掛とを取つた殘りが三五四糎あると假定した場合で、其の用布で振八つと袖口被布を三つ割幅で裁ちます。（第二十五圖）

留袖模様二枚重（無地布三二八糎の場合）

これは川布が前の場合より二五糎も短いので袖口被も振八つも皆幅を狹く裁ちます。（第二十六圖）

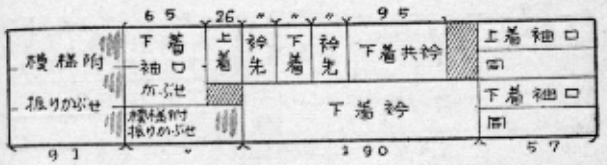
振袖二枚重ね小物の裁方

振袖は留袖と違つて袖にも模様が附いてゐますから、二枚重ねでありますと下着の裾にも袖にも被様がついてゐます、從つて下着の振被せは普通半幅になつて模様が染めてあります。ですから無地のところからは留袖のやうに振八つ被を取る必要がありません。たゞ袖口被せと下着の衿と上着下着の裏衿先だけを取れば宜しいのであります。

無地布二七四糎の場合　第二十七圖のやうに下着の衿を半幅で取りその半分から上着、下着の袖口、下着の共衿を取り、殘りから衿先と下着の袖口被せを取ります。

無地布四二九糎の場合　第二十八圖は振被せに模様はついてゐましても振

合場の種429布地無袖振



第二十八圖

被せを三つ割で取ります爲め、振被せの横から小物を取ります。

標附け方

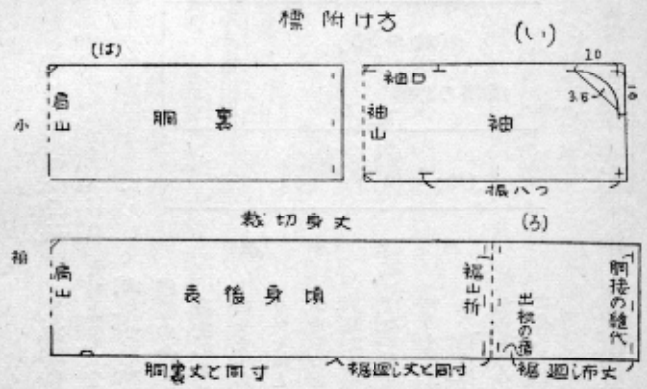
標附の注意　大體一枚物と同じでありますが、裏の結め方は木綿物より少しづゝ少なくします。模様物は裁ち方の時にも模様を合せる事に注意しますが標附の時には一層注意してよく模様の合ふやうにし、殊に模様を合せ糸標をつけてからします。又地質によつて重ねて標のつけにくいやうな物は針でよくとめて、物によつては一枚づゝすることもあります、標附に角籠は地質を傷けるおそれがありますから絹布標附用の錐を使用するのが安全であります。

標附はなるべく上着、下着、表裏とも一度についてするのが宜しくあります。上着を作つてから下着にうつるやうな事をしますとどうしてもいく分の寸法のちがいが出來易いものであります。

振袖の標附け方　左右の表袖を中表に合せて紋の位置を動かぬやうに周りを絲でおさへておきます。紋は向き合せになるやうに兩袖を重ね第二十九圖(い)のやうに袖丈、袖口、袖附を標し袂の丸味は一〇糎位にして斜線の眞中で三種五耗の丸味に標します。袖幅は袖山から袖附の間では眞直ぐにし、袖下では一種窄くして振八つの間で斜に標します。これは袖丈が長く、且つ丸味がつきますので袖下の方の幅がいく分狹く見えますので寸法を廣くするのであります。他は普通袖と同じであります。なほ袖口下の模様を合せる必要のある物は一枚づゝ別々に標付をします。

裾廻し無垢の標附　表身頃の背紋を中表に合せて絲糸でおさへ、ろ圖のやうに裾廻しを摑げたまゝ前身頃二枚の上へ後身頃二枚を肩から折り重ね、表身頃、裁切寸法の裾山を中心にして裾廻し布と身頃の方とへ八耗づゝの縫代で裾合せの標をつけます。裾廻しの方は出袂の二倍を取つてそれから縫廻し丈を決めて胴接ぎの標をつけます。そして(ろ)圖のやうに身頃の方では裾廻し丈と同寸に裾から計つて、それから上の胴裏丈を計つておきます。

次には圖のやうに胴裏布を四枚揃へて先きに計つた胴



第二十九圖

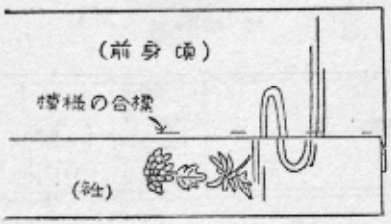
裏丈を標し、（きせの分を二粍加へます）後は普通袷のやうに標附します。

衽　無垢のものでも衽だけは裾を切り離して背通の衽と同じやうに裏表を重ねて標します。どちらも衽先を接ぎ合せなければなりませんから、丈を計つて裏衽の方を出袖の二倍だけ長くして重ねて置きます。

模様の合せ方

身丈の定め方　模様物は前にも申したやうに大抵染上りに糸標がしてありますから、それを目標に裁ち切れば宜しいのですが、裁ち上げて紋下りが七糎として衿肩を明け、四枚を折つて平らに重ねました時褄口の裁切がきちつと四枚揃ふこともありますが多くの場合いく分づゝ違つて四枚が不揃になります。かうなつた場合これを裁ち切つてしまひますと模様が合はなくなりますから、このやうな時には是非とも揚をして加減しなければたりません。

この揚の標は身丈と、模様との關係で四枚一度につけることが出來ません から上部の標をしてから男物の内揚の仕方と同じやうに肩山を二綴づらせて身八つ口の標より二糎下へ各布別々に模様の加減を見て揚になる寸法を計つて標をします。



第三十圖

衽模様の合せ方　普通背を縫ひましたら褄を縫ふのですが、模様物は第三十圖のやうに先に衽布を衽附の標通りに折目をつけて、この折目を前身頃の布表の上に、模様をよく合せて重ねます、そして前身頃と衽の模様の組かいところまでよく褄へ揃へて圖のやうに合標を附け、この合標から前幅を計つて標します。縫ふ時にはきせ代だけ内縫に縫ひますと出來上つてから模様がよく合ひます。

綿袖に模様の出るものも矢張り同じ要領でいたします。

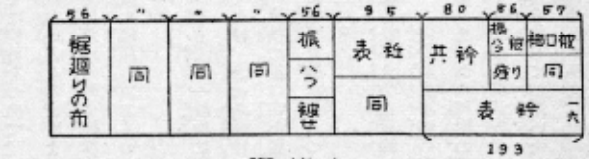
縫方

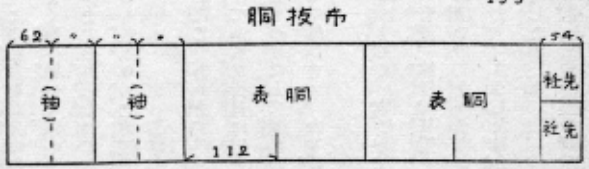
縫ひ方も大方一枚物に同じでありますが、材料の取扱ひ方に充分注意しなければなりません、各部縫目には平鏝をかけ、きせをかけてから又折目に鏝をかけ、地質によつては縫鏝をかけます。

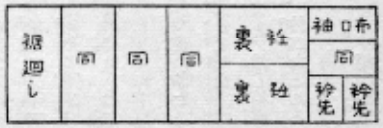
袖　裏袖に袖口布を廻しづけにして表裏の袖口を合せて縫ひ、引き伸した眞綿か、青梅綿を入れて背通袷のやうに袖下を縫ひ振八つを縫ひます、たゞ余り地薄の時は八つ口に裏布と同じ色の薄い心を入れて縫ふこともあります。

身頃　表身頃裏身頃の背縫、區縫、紕附をして綿合をしますが、模様物は模様を合せることが一番大切なことでありますから標附の項で申したやうにいたします。然し模様の細かい部分は伸び縮みがあつてどうしてもうまく合はない事があります、さうした場合には、伸びたところは濕布を堅くあて〳〵縮ませ、縮んでゐるところは鏝で伸して加減いたします。

裾合せがすみましたら褄をあげ、裾に眞綿を少し引き伸してゆるく入れ、表に返してよく綿を袖に含めて鏝を







第三十一圖

かけます。次に縦とぢをして身八つ口を縫ひ、袖をつけてから衿下を縫ひ衿をつけ、共衿をかけ最後に裾廻しをして仕上げをします。胸、衿にかけて模様のある場合は矢張り模様を合せることを主として衿附をいたします。

下着

通し物と胴抜物とあります。通し物は寸法をつめるだけで上着と同じやうに仕立てます。

胴抜物

裾廻り布と胴抜布とで作り、胴抜布は柔かい薄い絹地を用ひ、裾廻り布は掌反物で第三十一圖のやうに裁ちます。まづ表衿の分に丈一九三糎を裁ち切つて幅から一六糎を取りその残りの布で共衿を八〇糎とり、次に袖口被布を五七糎取つて幅を二つに割り残り五六糎の振八つ被布をこゝから一枚取りまして幅は少し狭布にします。

裏袵布は丈九五糎に取つて幅を二つ割にし振り八つ被布は矢張り五六糎丈を三つ割にします、そしてあと二二八糎の丈を四つに切つて五六糎づつの裾廻り布とします。

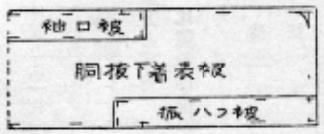
胴布　袖は上着と同じやうに裁ち、袵先は五四糎の丈を裁つて幅を二つ割にし、残り布を両身頃にしますから一一二糎の身丈になります。

標附　上着と下着とがぴつたり重なるやうに寸法を詰めて標すほかすべて上着と同じでありますが、たゞ一布を通しませんから胴の接ぎ合せの標附が変ります。

まづ表袖へは袖口の被布と振八つ被布とを第三十二圖のやうに重ねて標しますが、振り八つ布は袖幅と袖丈とを先に當つて見て誂代が一ぱいになるやうに被せ布を重ね、あとは上着と同じやうに全體の標をつけます。

裏袖も寸法が詰るだけで仕方は同じであります。

身頃　矢張り寸法を詰めることゝ、表身頃も裏身頃のやうに胴接ぎをすることゝが異ふだけであります。



第三十二圖

縫方

大體普通の長着と同じやうに縫ひ上げますが、表袖には袖口被、振八つ被をかけ、裏袖には袖口布をかけて普

通の袖のやうに縫ひます、表裏とも身頃は胴布と裾廻し布とを接ぎ合せて胴接の方へ折をつけて隱躾をかけます、そして後は背縫、臆縫、衽附、衿附、裾合、袖附と普通の袷と同樣に仕立てます。

口綿本比翼

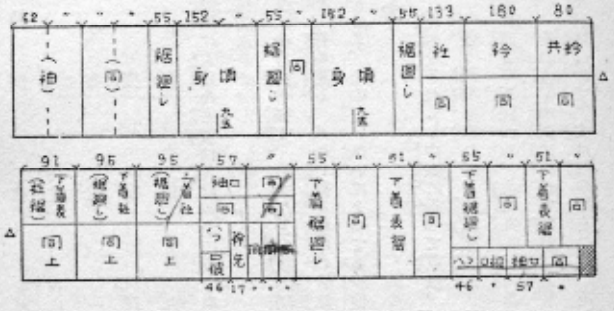
比翼とは一枚の着物で、袖口、八つ口、裾廻しなど廻りを二枚重ねのやうに仕立てたもので本比翼と附比翼とがあります。本比翼は上着を仕立てる時に下着を一緒に縫ひつけたもので、附比翼は普通の着物の下にたゞ下着廻しを附けたものであります、この比翼は袷にも綿入にも仕立てますが多くは口綿にします。

裁方と積方

比翼無垢表の布數と裁切寸法

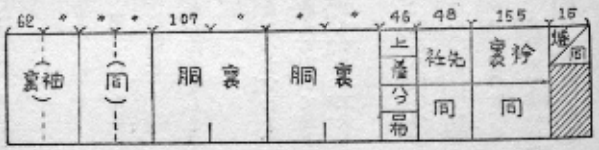
上着					
袖	二枚	一二四糎	身頃	二枚	三〇四糎
衽	二枚	一三三	衿	一枚	一八〇
共衿	一枚	八〇	裾廻し	四枚	五五
衽裾廻し	二枚	九五	衿先布	二枚	一七
袖口布	二枚	五七			
下着					

比翼無垢表の裁ち方　(い)



公式　袖丈×4＋(身丈＋裾廻し)×4＋衽丈＋衿丈＋共衿丈下着衽裾＋上下衽裾廻し×2＋袖口布×2＋(下着表裾＋下着裏裾廻し)×4＝總用布

比翼胴裏の裁ち方　(ろ)



公式　袖丈×4＋胴裏丈×4＋八つ口布＋衽先＋裏衿＋盤＝裏總用布

第三十三回

表袖口被	二枚	五七	袖口布	二枚	五七
衿	一枚	一八〇	共衿	一枚	八〇
衿先布	二枚	一七	表振り八つ被	四枚	四六
表裾	四枚	五一	裾廻し	四枚	五五
表衽裾	二枚	九一	裏衽裾廻し	二枚	九九

比翼無垢に入用な布數は合計四十二枚であります。このやうに布數を澤山要しますから積り方には余程工夫しなければなりません。

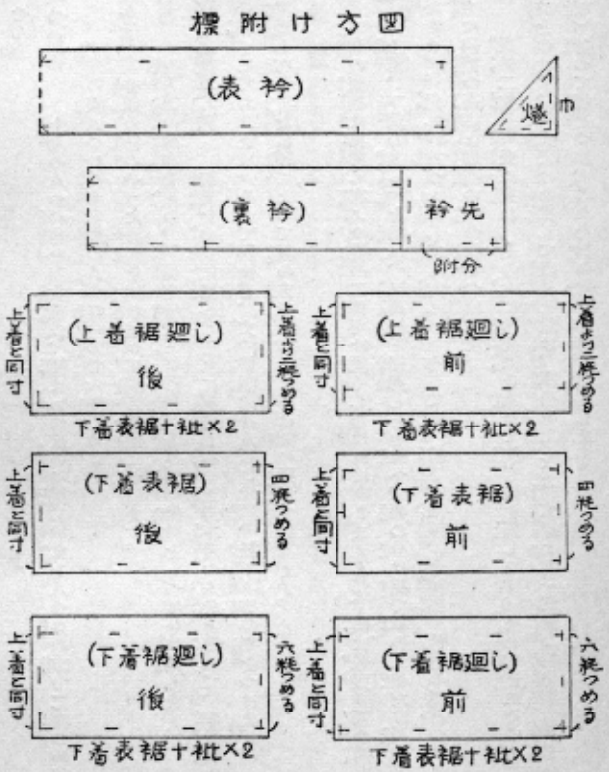
まづ袖丈や身丈、衽丈、衿丈などの裁ち切り寸法は、仕立上寸法によつて定めます。そしてから袖口布、共衿、衿先布、衽裾廻し、八つ口被を標準の寸法に從つてこれ等を總用布から引いて殘りを調べて、それから裾廻しの丈をきめ、その長い短いによつて多少他の寸法を加減したり又裁ち合せる工夫もしなければなりません。

標附け方

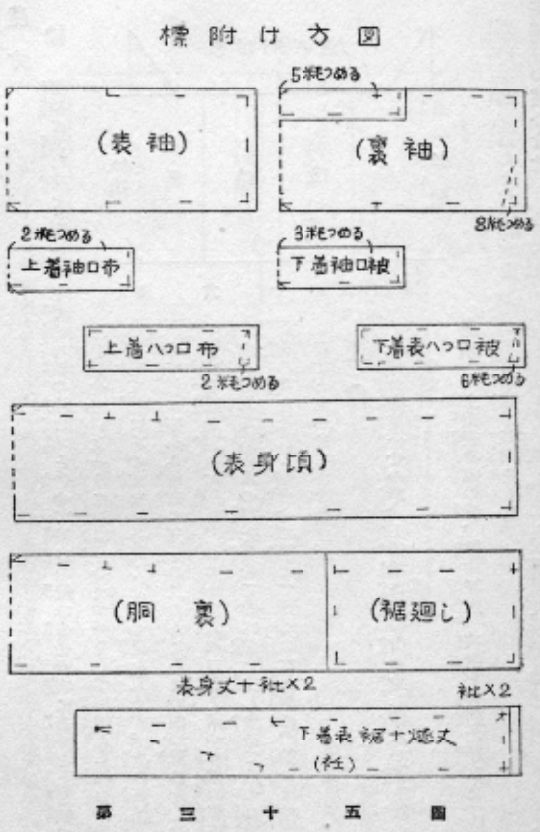
表袖　兩袖をそれ〴〵中表に折つて重ね、袖丈、袖口、袖附、山、丸みの標をつけます。

裏袖　矢張り兩袖を重ねて、袖丈を表より二粍つめ、八つ口の方は一〇糎位の間で斜に八粍つめて標をつけ袖口明は表より五粍つめ、次に丸味、山などの標をつけ、最後に袖口布をのせて袖口布掛の標をつけます。

袖口布　それ〴〵中表に折つて重ね、上着の袖口を二粍つめ、幅、丈をいつぱいに標します。下着の袖口被は袖口を三粍つめて、丈は幅の標をつけ、そして上着袖口布より袖批の二倍だけ幅をつめておかなければなりま



第三十四圖



図方け附標

第三十五圖

せん。

八つ口布　上着の八つ口布を四枚重ね、幅はいつぱいに標し、丈を八つ口の方で二粍つめて斜に標をつけます。下着の表八つ口被も上着の八つ口の方で六粍つめます。

表身頃　普通の袷のやうに身切を四枚重ねて標も普通につけます。

燧布　表と裏の燧布を重ね、胴接ぎ縫代と衽附縫代及び衿の縫代をいつぱいに標します。

胴裏と裾廻し布　胴裏を中表に揃へ、それに裾廻し布の上着下着の八枚を重ねて、表身頃よりも袵の二倍だけ長くしておきます。そして胴接ぎ、丈、燧幅、身八つ口、幅、衽下り等の標をつけます。裾廻し布を重なる順によつて裾の方でつめることは圖の通りであります。

注意

下着の表裾は裾廻し布より袵の二倍だけ短くしなければなりませんが、幅は矢張り圖の通りつめて標します。

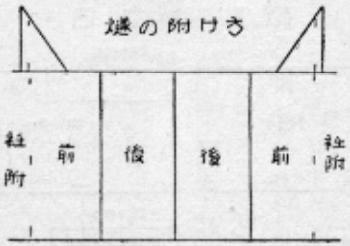
衽　上着、下着の表衽を揃へ、又裏衽と裾廻しとを揃へて裏の分は裾で袵の二倍だけ長くして八枚を重ねておきます。但し四枚づゝにしても宜しい。そして丈、衿下、衽幅、合被幅、衿附の標をつけます。なほ衽附の方に四裾の高さと燧布の丈の標をつけます。

衿　裏衿二枚を中表に重ね、その上に衿先布を重ねて接ぎ代を標します、そして更にその上に上着、下着の表衿をのせて、衿丈だけを標して表衿を除け、裏衿を出して衿丈標より一五糎（衿先裏衿接ぎの標より四糎位下）計つて標をつけ、これを衿の附け分けの標とします。

なほ他に合標をつけます。

縫方

袖　裏袖に袖口布をかけて、下着袖口被の袖口明と合せて袖口を縫ひ合せ、次に表袖と上着袖口布の袖口明を合せて同じやうに縫ひ合せます。そして脇方とも袖口に綿を含めて留をして袖口布の丈までそれ〴〵四つ縫をします。次に表袖と裏袖とを合せて袖口下から袖底の三分の二のところまで四つ縫ひをし、それから先は表と裏を別々に縫ひ、つゞいて八つ口布と八つ口被の袖下をも縫ひます。そしてから八つ口を合せて縫ひ綿を少し含めて八つ口布の奥と袖口布の奥をそれ〴〵合せて縫つて八つ口は裏袖に、袖口は袖口かけの縫ひ目にとぢつけておきます。



第十六圖

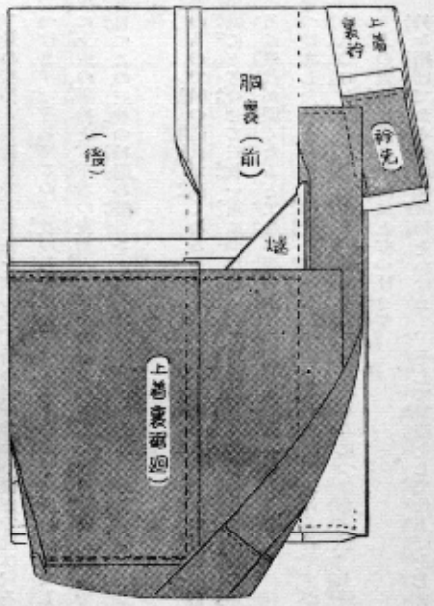
注意

袖口布奥合せの時、上着袖口布の山を少し摘んで襞を取つて丈標を合せます。

身頃　上着表身頃の背、脇、衽附、衿附を普通に縫ひます。

胴裏と下着裾廻しとの胴接ぎをしてから背、脇、衽附をします。

裾廻りの縫ひ合せ　上着裾廻しと下着表裾の背と脇を縫ひ、前裾布の上部に燈をつけます、この時総布の斜のところを伸さないやうに又横布にならないやうに注意して縫ひ、折は燈布の方につけて襞をします。次に下着の表裾と、上着の裾廻しにそれ〴〵衽をつけます。



第十三圖

裾合せ　上着の表と上着裾廻し、下着の表裾と下着裾廻しとをそれ〴〵則に裾合せをして綾を揚げ、綿に綿を入れて假とぢをして衿下を縫ひ、背と脇の縫ひ目をとぢます。

次に上着裾廻しと下着表裾の上部を燈布の端から端まで縫ひ合せて胴接ぎの縫ひ目にとぢつけて表から襞襞をします。それから下着の表裾の衽と、上着衽裾とを縫ひ合せて下着の裏衽附にとぢつけます。

附

地質の重いものは眼擦ぎを四枚一緒にして、折り目には表から縫糸をかけておきます。

衿附　下着の表衿と裏衿とで下着衽を挟んで、衿の附け分けの標まで縫ひ、それから上着の裏衿を附け分けの標までつけます。そしてこの三枚の衿を重ねて、重なりの順序に針を通してしつかりと附け分けのところを留め、次に上着の裏衿と、下着の表衿と、下着の裏衿の三枚で裏の身頃を挟んで衿附をし、折をつけてから表衿附の縫目にこの三枚の衿附の縫目をとちつけます。

注意

地厚のもので衿の縫代が高くなるやうな時には、下着の裏衿は裏の身頃にあてて、下着の表衿と上着の裏衿は中表にとち合せて三枚一束につけます。この時二枚の衿の縫代は身頃の中に漉入りますから、衿肩縫しのところは縫代が深くなると工合が悪いから注意しなければなりません。

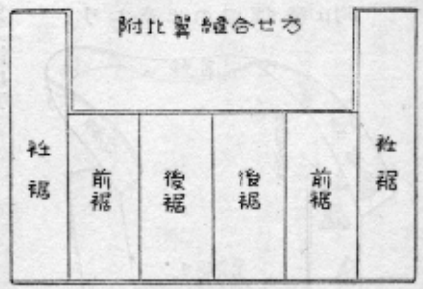
衿をつけましたらそれ〴〵衿先を整へて三つ衿を入れて綰け上げるのですが、その前に袖をつけます。

袖附　身八つ口を縫つて袷を含め、袖附を女物袷のやうにつけますが、上着の八つ口布の袖附より上の部分は裏の袖附にとちつけます。

共衿　衿を綰けてから普通に共衿をかけます、そして衽縫をして仕上げをします。

附比翼

附比翼は上着を普通の小袖に仕立て、別に下着の裾廻り、袖口、振り八つ口を縫つて上着に綰けつけて本比翼のやうに見せるもので婦布をつけません。



第三十八圖

ですから胴は上着一枚で褄や袖口、振八つが二枚着になります。

標附け方

本比翼の標附け方と同じやうにいたします。

縫方

袖口　袖口を合せて四つ留をし、袖口下と奥の二方を裏表綰け合せますが、裏の方を二糎だけ出して合せます。若し口綿の時は口合せをして含み綿をすることは上着と同じであります。

振八つ口　袖底を縫ひ合せ、振り口を表裏合せて縫ひ、表に返して上と奥とを矢張り裏布の方を二糎出して綰け合せておきます。

裾　前、後、衽附と表裏別々に縫ひまして綰合せをします。上着と同じやうに褄を上げ裾の假縫をし衿下を縫つておきます。そして第三十八圖のやうに上部は裏布の方を四糎、衽の幅のところは二糎出して躾をかけて綰けておきます。

衿　身頃は胴がありませんから衿は衿下の標から衽の高さまでの間へ附くことになり、それから上、鎧先、衿

肩縫りなどは身頃なしで衿の裏表だけ縫ひ合せ第三十九圖上のやうに普通に衿幅を決めて縫ひ上げます。

共衿　共衿も矢張り普通にかけます。

比翼の附け方

出来上つてゐる袖口を、上着の袖の中に入れ、上着、下着の袖口を揃へて加減を見て袖口下に待針を打ちます。それから上着の袖を引き返して裏袖を上へ出し、上着袖口布のすぐ際へ比翼の袖口を八糎位の針目で平らにぐるりつと縫つけておきます。

第三十九圖

振八つ口のつけ方　袖口と同様に比翼の振八つを上着の袖の中に入れ、袖下で振の方を八糎ほど短くして袖附のところに待針を打ち、振八つの奥の方は上着の袖下にきちんと合せて袖下の縫目に待針を打ちます。そして比翼の振八つを上着の振八つによく揃へて袖裏へ返し、袖附の上から下着振八つの頭へ廻り、つゞいて奥をぐるつと縫つけておきます。

身頃のつけ方　上着の裏を上へ出し、裾の方を左手にしておき、その上へ下着の裾綴しを袖口で下着の方が四糎引き込むやうにして重ねます。そして上部の各縫目々々へ針を打つて一度釣り下げて釣り合を見てそれから上部を順々に上着に縫つけて行くのですが、この時角や縫目々々で必ず一針づゝ抄留をしておきます。

男物丹前

丹前は地方によつて名前がちがつて關東ではどてらといひ關西では丹前といひます。形は大體男物綿入と同じでありますが、たゞ袖が廣袖で人形なしで袖丈全部を附け、掛衿に共布を使はないで黒の別布を用ひます。

用布

表も裏も一反づゝ使ひ、表地は銘仙、八端、お召、紬などで裏は表に應じて附けます。

仕立上寸法

袖丈	五二糎	袖幅	三四糎
男物丹前			

身丈	一三五(着物より二糎位短くする)	後幅	三〇		
前幅	二七(着物より二糎廣くする)	衽幅	一五		
衽下り	二一	衿下	六六		
衿肩明	八・五	合褄幅	一三・五		
衿幅	六				

綿の分量

全體に眞綿だけを入れる時は凡そ百五十グラム位、青梅綿ならば三袋(九枚)位入れます。又どてら綿として作つてありますのは一枚通り入れます。

裁方、標附け方

裁ち方は男物袷と全く同じであります。標の附け方も殆んど同じでありますが、袖を源袖にして附は袖丈全部を附けます。

縫　方

縫ひ方も袖が違ふだけであります。袖は袂が少し多くなり八糎位だしますから時には裏の袖幅が足りない事があります。その時には袖口布で廣くするか、裏袖に持ち出しをします。

綿の入れ方

綿入長着と同じであります。

五、羽織の部

羽織について

羽織は長着の上に着るもので用ひる時期によつて袷、綿入、單衣などの區別があります。上に着るものですから色合や柄柄などについて着物との調和をはからなければなりません。

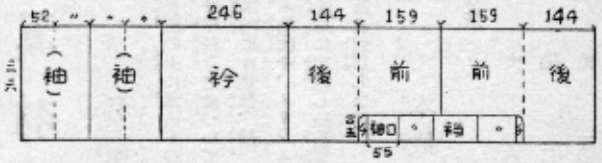
地質　表地には銘仙、紬、羽二重、縮緬、繻子、お召、大島などのやうな絹物から、瓦斯、紡績、繊絆、染絆などの木綿物や、メリンス、セルなどの毛織物、その他レイヨン物や交織などいろ〳〵の物を使ひます。裏地は表地に相應しい地質を選びます。瓦斯、甲斐絹、更紗、羽二重、八つ橋、綸子、平絹、メリンス、レイコン物など使用します。

本裁女物袷羽織

仕立上寸法

袖丈	六〇糎	着物と同寸	袖口	二三糎	着物と同寸
袖附	二五	五粍か一糎多く	袖幅	三二	着物と同寸
身丈	一〇〇内外	着丈の四分の三に四糎を加へる			

女物羽織表の裁ち方



第　一　圖

公式　{総用布－(袖丈×4＋衿用布＋前後の差×2}÷4＝後丈

後丈＋前後の差＝前丈

(身丈＋23糎)×2＝衿用布

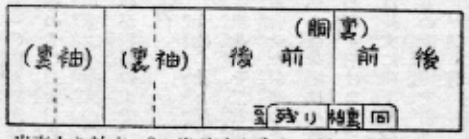
身八つ口　一〇糎
後幅　着物と同寸
前幅　二八　脇縫代は後身頃と同じにして、衿附の方は一糎の縫代にする。
衿幅　一八
上幅　六・五
下幅　二
揚　六・五―七
衿肩明　八・五　着物より七粍位廣くする
前下り　三・五
乳下り　四四　背から
裄　六二　着物と同寸
繰越　一以上

裁ち方と積り方

表　全體の用布からまづ袖丈の四倍と衿布を取り、その殘りを全部身頃にします。

この衿布は衿肩明と前下りと肩の繰越の二倍分とそれに衿先の縫代とを合計した寸法の凡二三糎を出來上り身丈に加へて、これを二倍したものがつまり衿布の長さであります。

羽織裏の裁ち方



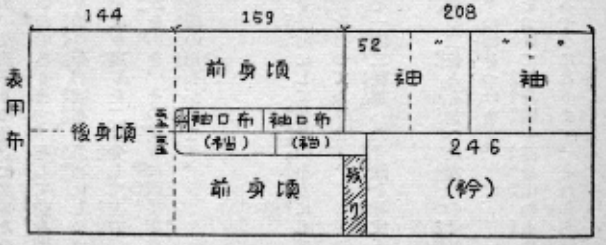
公式　出來上り袖丈×8＋出來上り身丈×10＋總縫代－表用布＝裏用布

總縫代
- 袖縫代……12
- 胴接縫代……12
- 前下り……16
- 三つ衿縫ひ込代…4
- 繰越……16
- 衿肩明及衿縫代…38

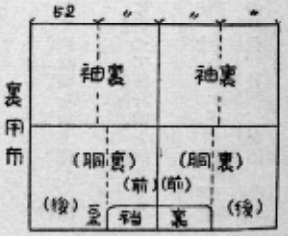
98

第　二　圖

本裁女物袷羽織の裁方　(大巾)



第　三　圖



身頃は前後の差として三二糎だけ前身頃を長く裁つか、又前下りの仕立に必要な分と、繰越の二倍だけ前身頃を長く裁つて、胴裏を前後同じ長さに裁つても宜しいのであります。そして前身頃になる分は衿肩明から眞直に幅を一〇糎五粍だけかき落してその裁ち落した分を袖口布、襠布、乳布にします。その長さは袖口布として五五糎のもの二枚、乳布として一糎五粍のもの二枚を取り殘りを二等分して左右の襠布とします。

裏　出來上り身丈の二倍から表の裁ち切後身丈の寸法を引き、その殘りに胴接ぎに入用な縫代を加へて四倍したものが胴裏の丈で、これに袖の用布を足せば裏の全體の用布が出ます。

標附け方

袖　女物の袷と同じであります。

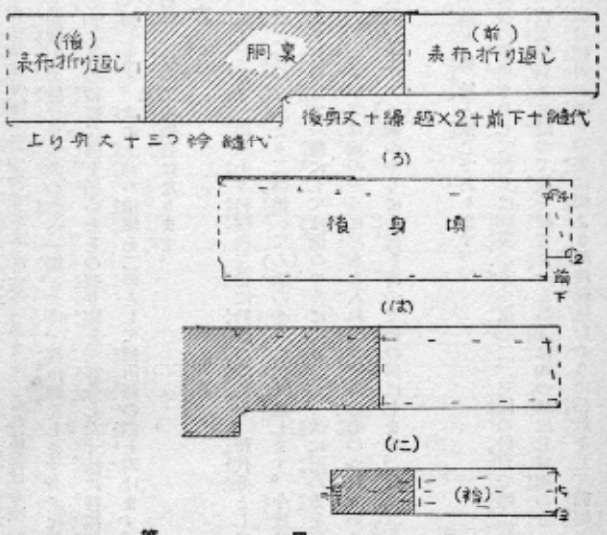
身頃　表身頃を二枚中表に合せ、衿肩明を揃へて肩を手前にして後身頃を左にしておき、その上に矢張り中表に二枚合せた裏布を重ねて肩山に躾をかけ所々に待針を打つておきます。

それから後身頃は出來上りの身丈に三つ衿の縫代分を一糎二粍加へた寸法を身丈として表身頃を折り返し、胴接ぎの標を附けます。

前丈は後丈に前下りの分とその縫代、それに肩の繰越の二倍とを加へただけの寸法に計つて後身頃と同じやうに殘りの表身頃を折り返して第四圖(い)のやうに胴接ぎの標をつけます。

前後の身丈が定りましたら今度は(ろ)圖のやうに繰越をつけて後身頃を前身頃の上に折り重ねます。すると右端の方で前身頃の方が前下りとその縫代分だけ長く出るやうになります。それから背の縫代、後幅、袖附、身八

標附け方圖(い)



第四圖

つ口、肩幅、裾山、前下りの標をつけます。つゞいて襠の丈を計つて後の身頃を左に取り除けます。

前下りの標は、後襠附標の所で後身丈より四粍離して標をつけ衿附の方は襠を二粍にしてその間で斜の標をつけます。

襠　(に)圖のやうに表襠布二枚と裏襠布二枚をそれ〴〵中表に合せ、表襠を下にその上に裏布を重ねて襠上つまり左の端の方を揃へます。そして襠上縫代を一糎取つてそれから襠丈寸法だけ計つて表襠を裏襠の上に折り返して四枚一緒に標をつけます。

（この襠丈寸法は身頃で計つた寸法より二粍つめます。それは襠は身頃の中につくからであります。）

幅は裾で前襠附の縫代を手前の方へ一糎とつけ、裾山標をします。次に裾襠幅の標をつけます。それから裾襠幅（七糎）から上の襠幅二糎を引いたその残り幅を三等分した寸法に後襠附の縫代を加へた寸法を後襠上部の縫代として標します。次に上部の襠幅を二糎として襠附斜の標を附けます。さうしますと襠附標の斜は後が三分の一、前が三分の二の割合になります。

衿の折り方

表側を下にしておき、出來上り衿幅の二倍に衿附の縫代と、絎代分として二糎を加へた寸法で第五圖（い）のやうに折り、次に今の寸法より二糎控へて（ろ）圖のやうに折り返します。今度は附け代を輪の方で一糎二粍、絎代を一枚の方即ち耳の方で一糎にして（は）圖のやうに折ります。次に附の方を二粍出して（に）圖のやうに二つに折つて衿幅を定め、つゞいて（ほ）圖のやうに芯布を入れて、この芯布のつれないやうに鞦糸で綴ぢ（この糸は表に出ないやうに綴ぢます）（へ）圖のやうに全部を折つて衿の形にします。（この芯布には三河木綿を普通に使ひます）

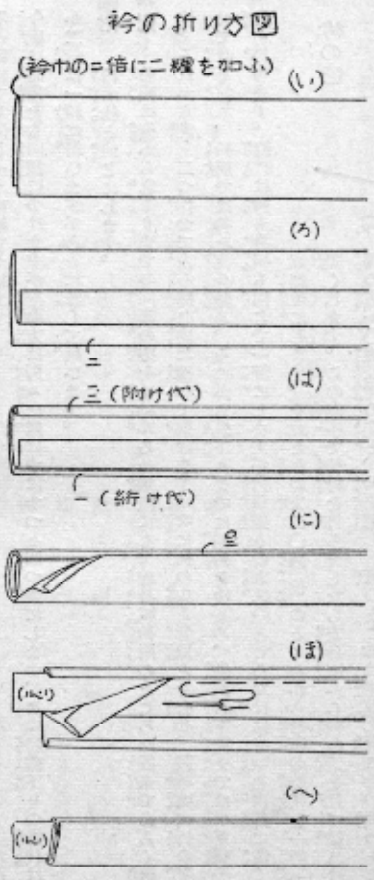
縫ひ方

袖　本裁女物袷と同じであります。

身頃　前後の胴接ぎをして折りは胴裏の方へ返し二、三糎の針目で隱躾をしておきます。それから背縫をしますが、表裏を別々に縫つて後で綴ぢ合せるか或は四つ縫にして裾の方一二、三糎だけ別々に縫ふかします。

前下り　表は標附の通り、裏は標より四粍縫込むやうに待針をして前幅の標の間だけを縫ひます。この時裏側の方を少しゆるみ加減に縫つておきますと衿の返り具合がよくなります。きせは二粍で裏の方に折り返して二、三糎の針目で隱躾をします。すると表が二粍だけ裏の方に見返へるやうになります。

衿の折り方図



第五圖

襠附　まづ胴接ぎをして折りは身頃と同じやうに裏の方に折つて隱躾をします。それから襠の上部の標を合せ標より二粍上を裏表縫ひ合せて毛抜合せにし、襠幅の中央をあらく躾で綴ぢます。

附けは斜の多い方が前身頃につきますから斜の少い方を後身頃の表裏で挾んで四枚一緒に縫ひます。但し裾の

方一二、三糎は二枚づゝ縫ひます。身八つ口は襦附糸でそのまゝ標よりきせ代だけ外を縫つておきます。左右とも後幅がつきましたら裾に心布を入れます。メリンスか何か軟かい地質のもので七、八糎、長さ身幅のものを、幅を少しづらして二つに折り裾に入れて最初に背縫の縫代へ綴ぢつけ、それから左右の身頃へ伸して後襦附の縫代でも同じやうに綴ぢつけます。

今度は前襟をも同様につけますが裾の方は別々に縫はずにずつと四つ縫にします、この時前下りの縫代は一針か二針は一緒に縫ひますがあとは離して縫ひます。

袖附　袷着物と同じにします。

衿附　前幅は裾から乳下りまでの間裏の方を心持ゆるめ加減にして前身頃衿附のところを糸であらく縫ひます。それから乳を二つ作つて左右同じ向に撓へて附けます。次に衿の山と背縫とを合せ、裏身頃に衿の表を合せて針を打ち、衿肩では衿を充分弛め、そこから乳下りまでは稍衿をゆるめ、乳から下裾までは平な調子で待針を打ちます。縫代は衿も身頃も同じで一糎にしますが衿肩廻りの丸味のところだけは身頃を自然に控くして五粍位にします。それと裾の方二〇糎位のところから身頃の縫代を一糎五粍に深くします。この調子で待針を打ちましたら左身頃から衿の方を見て縫ひはじめ裾の方一〇糎位の間と、衿肩廻しと乳のところは半返し縫にし、他のところに一針抜か物によつては拵針で全體に衿をつけます。そして縫目に鏝をかけてきせをかけます。

衿の図

それから衿先は端を二つに折つて、裏になる方を心持つり加減にして一糎先を縫ひます、但し衿附際七、八粍殘して衿先の縫代を表の方へ折つて綴ぢつけ表に返して着けつけます。それから表衿が二粍内見るやうに整へて第六圖のやうに襞をかけ、仕上げをします。

本裁男物袷羽織

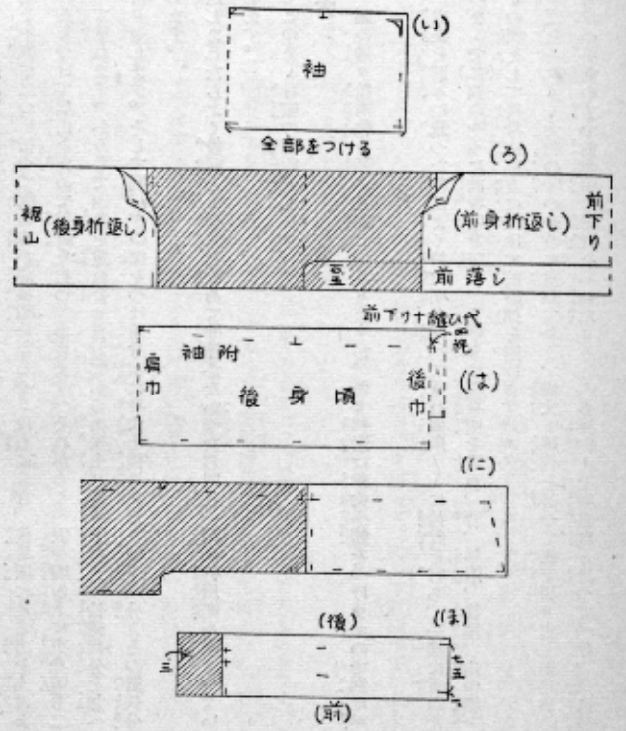
仕立上寸法

袖丈	五三糎	着物と同寸	袖口	二八糎	着物と同寸
袖附	五三	全部つける	袖幅	三四	着物と同寸
身丈	一〇六内外	着丈の四分の三に四糎を加へる			
後幅	三〇	着物と同寸	前幅	一九	
衿幅	七・五		襦幅	七・五	普通衿幅と同寸
衿肩明	九・五	着物より一糎増	前下り	三・五	
乳下り	四五内外	背より計る	衿	六六	着物と同寸
繰越	〇・五	一糎			

裁方

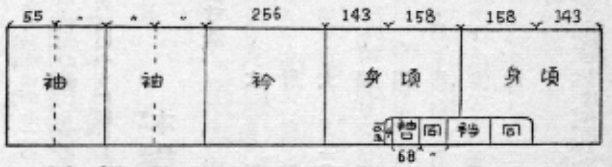
裁ち方と裁り方は女物と大體同じでありますが、袖丈が短く、又肩の繰越が女物より一般に少ないから衿丈を

標附け方図



第九図

男物袷羽織の裁ち方



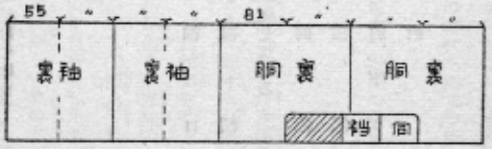
公式 {総用布−(袖丈×4+衿用布+前後の差×2)}÷4=後丈

後丈+前後の差=前丈

(出来上り身丈+衿肩明+前下り+衿先縫ひ代+繰越×2)×2=衿用布

第七図

羽織裏の裁ち方



公式 出来上り袖丈×8+出来上り身丈×10+総縫代(95極位)−表用布−裏用布

第八図

裁ります時はそのつもりにします。

裏布もその割合で少なくなるわけでありますが、余り胴裏の少いのは格好がよくありませんから大低乳下りの下四、五位までつけます。それから身頃の前幅から袖口布や裾布を裁ち落すのに表は表、裏は裏と別々に裁ち落しても宜しいのでありますが、第九図(ろ)のやうにまづ表身頃

の用布を中表に二つに折つて輪の方が前身頃になるやうに右におき、後身頃になる方を左におきます。そして前後の差をつけて肩山を定めて待針を打つておきます。それからこの表身頃の上に裏身頃も二つ折にして肩山を揃へて重ねます。かうして四枚を重ね合せましてから出來上り後身丈に三つ衿縫代分を加へた丈に表の後身頃を折り返します。そして胴接ぎの標をつけ前身頃は身丈を後身丈より前下り分とその縫代分だけ長くして折り返します。

折り返しましたらよく後前とも身丈を改めて間違がなかつたら四枚一緒に衿肩明を切りつゞいて前を眞直にかき落します。

そしてこのまゝ身頃の標附をします。

標附け方

袖　圖の通り袷着物と殆んど同じでありますが、たゞ袖附は袖丈全體をつけますので別に袖附の標をつけません。

身頃　表裏を別々に裁つた物はよく衿肩明を揃へて重ね要所〳〵に待針を打ち、一緒に重ねたまま裁つたものはそのまゝでは圖のやうに前身頃を下に、その上に後身頃を重ね、背、袖附、後幅、山の標を附け、つゞいて前下りの標をして後身頃を左に除けて前の標を附けます。

襠　表裏をそれ〴〵女物の時のやうに重ねておき、襠丈と縫代を計つて表を折り返し胴接ぎの標をします。それから裾の手前の方で前襠附の縫代を一緒取りそこから襠幅を七糎五粍と計つてつけ、次に後の上部の標は、下の襠幅の三分の一に後襠附の縫代を加へた寸法だけに標し、その標から手前へきせ代として三粍に標します そして前後共上下の標の間に斜の標をします。

衿の折り方　衿の折り方は出來上り衿幅が違ふだけで他は同じでありますが、男物は大抵の場合袋附といふ仕方にしますが、この時は所々に合標をしておきます。

縫方

袖　裏袖に袖口布をつけ男物袷着物の袖口のやうに口明を縫合せ、袖口下を四つ留にしまして其の糸で袖口下から袖底へと縫ひ袖幅の凡そ半分位まで四つ縫にします。それから先きの方は表も裏もバラ〳〵に縫ひ殘しておきます。袂の丸味を整へて表に返しておきます。

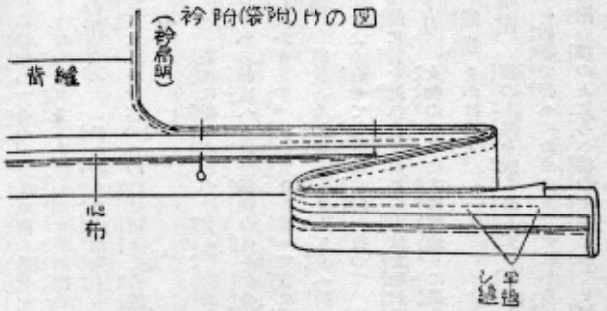
身頃　前後とも胴接をしまして裏へ折つて隱躾をかけます。（隱躾は省くこともあります）それから後の胴接をよく合せて背縫に待針を打つて、衿肩明の裁ち目を表裏四枚をよく揃へて針を打ち、表から見て標通り四つ縫に背を縫ひますが裾の方は女物羽織と同じやうに二枚縫にして裾に芯布を入れます。

前下り　女物のやうに表は標通りに裏は標より四粍縫込むやうに針を打つて、前幅の標の間だけ縫つて裏に返し隱躾をかけます。

後襠附　襠の上部を表も裏も丈の標から縫込を内側へ折つて重ね、標をよく揃へて待針を打ち、襠幅の眞中通りを假躾で押へておきます。それから後襠附を後身頃に挾んでまづ裾のところに針を打ちます。そして今度は袖附の標のところへ襠の上部をあてゝ針を打ち、間にも適當に待針を打つて一針拔に縫つて平鏝をあてゝ表に

返します。左右とも同じやうに後幅をつけます。

衿附　衿の附け方は縫附、又は袋附といひまして衿で前身頃を包んで一度に四つ縫にして裏で結けない仕方にします。その縫方は第十圖のやうにまづ衿肩廻りから前身頃の衿先まで表と裏の裁ち目をよく揃へて、衿附の廻りを八粍の深さに荒く縫をかけてから左右とも乳をつけ、それから身頃の衿附の標と衿の縫代とを合せまして、女物の時のやうに衿肩廻りの部分で充分に衿をゆるめ、それから乳の間までも幾分衿の方がゆるみ加減に待針を打ち、そこから下、裾までは平らにして標通り合せて全體に待針を打ち、次に左身の衿先の方から順に前身頃を衿の中に疊み込むやうにして衿で身頃を包み合標を合せて針を打ちます。そして衿先の方からなる可く一針拔にして糸がつれないやうに縫ひますが乳のところと衿先一〇糎位の間は半返し縫にいたします。かうして衿の附代、身頃、衿の紙代の三枚を一緒に縫ひますが衿肩廻りのところだけは衿の裏側、つまり紙代の方を一枚殘して衿の表と身頃だけで縫つて、ここから左右



第十圖　衿の附(袋附)

の衿を引き返すやうにいたします。

それから又つゞいて右身頃の衿を四つ縫にしていきます。

全部縫へましたら縫目に平鏝を當て、表衿の方に折りをつけ、それから左右の衿先を縫ひ、縫込を折つて少し上げ加減にして表衿附に綴ぢつけます。これが出來ましたら衿肩明のところから鏝の出來ないやうに前身頃を引出して衿を表に返して三つ縫にした衿肩廻りを細かく縮け上げ正しく鏝をかけます。

袖附　袖附は前幅をつけない前に表裏共つけてしまひます。まづ表袖を普通につけますが、たゞ附け始めと附け終りを標より二粍づつ縫ひ殘しておきます。

裏袖は折りが表と反對になるやうに身頃に縫ひ折をつけます。そして前袖附の方は附け始めから八寸だけ縫ひましたら二三糎ほど明けて又そこから後袖附の終りまで縫ひます。矢張り裏袖も表と同じやうに始め終りは二粍づつ殘しておきます。

袖附の八つ留の仕方

裏表の袖がつきましたら留をいたします。まづ袖附の縫の際を持つて表の後袖附の所へ表の前袖附を中表にして重ね、次に裏の後袖附のところに裏の前袖附を重ね合せますと表前袖附、表後袖附、裏後袖附、裏前袖附といふ順序で二本糸で重ねたまゝの順序で、表前袖附を手前にして次の順に針を通します。

表前身頃、表内襠、表外襠、表後身頃、裏外襠、裏後身頃、裏前身頃、裏内襠、この順序にして身頃は膊上の極く際を、袖は二粍の強みをとつて折り山の際をとり、縫りは袖四枚だけを取つてしつかりと留をします。か

うして堅く結んだ糸の、針についてゐる一本を殘して三本を撚り合せ、一本の糸で袖底の縫ひ殘してある部分を縫ひます。この時裏袖の縫ひ込を三角に折つて袖附の折り合のよくなるやうにします。

前褄附　前褄は前身頃で挾んで四つ縫にしてつけます。縫ひ終りましたら裏の前袖附の附け殘してあるところから引き返してあとでこゝを縮けてしまひます。

紋について

紋所の位置と寸法

	背紋下り	袖紋下り	抱紋下り
背裁ち切り	袖山から 一寸	肩山から 一寸	
本裁男物	六・五	八	一五
同女物	七	八	一五
四つ身	六	七	一三
三つ身	五・五	六	一一・五
一つ身	五	五・五	一〇

背紋は背縫の中央に、袖紋は袖幅の中央か、少し袖附の方へ寄つた方になるやうに、又抱紋は鈎肩明を除けた前幅の中央にいたします。

紋の縫方

背縫をする前に紋の部分だけ表から兩身切揃へて出來上りの形に合せて折りをつけます。そして折山の極く際を紋合せのくづれないやうに鉄で押へておき、一針抜きに極く細かく縫ひます。紋の白い部分は白糸で、黒い部分は黒糸で、どちらも羽二重糸をつかい、縫目にはきせのかゝらないやうに注意します。

袷や綿入など裏のつく物は紋の上下四糎位づつ圓のやうに斜に背縫の外へ縫ひ出しておきますが、單衣の時は縫つた糸が透いて見えないやうに紋の部分で白い糸はとめます。

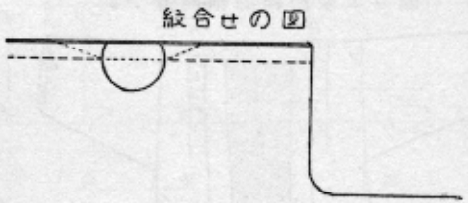


圖　一

四つ身筒袖袷羽織

筒袖の四つ身は丁度半反で出來ますから、一反で着物と羽織をお對に仕立てますと見たところも宜しく、又後になつて二枚を一緒にして大きく仕立てる事も出來ますから大變便利であります。

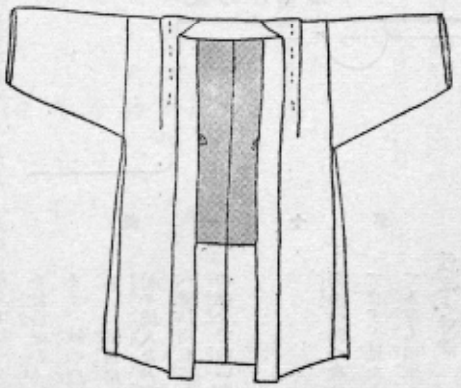
仕立上寸法

長着の寸法によつて加減します。

丈	二六糎
袖口	一八糎
袵	二五

袖附	一九
身丈	九五

四つ身筒袖羽織出來上り圖



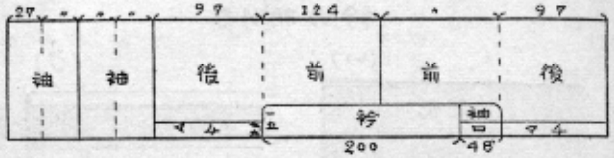
第十二圖

袖幅	三〇
後幅	二七
衿肩明	七
前下り	二・五
襠幅上	〇・三 身八つ口を明ける時は二糎
同下	五
衿幅	五・五
紐	附肩より二五

裁方

第十三圖のやうにまづ總丈から袖丈の四倍を取り殘りを眞二つに折り、輪になつてゐる方を八糎長くして又二つに折り、長い方を前身頃とし短い方を後身頃とします。そして前身頃から衿の十五糎と、後身頃から襠の七糎五粍を標しまして衿肩明の丸味をつけて裁ち落します。

標附け方



第十三圖

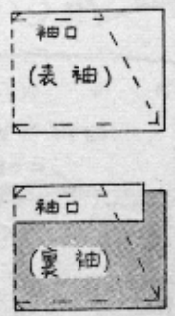
袖　第十四圖のやうに表裏を別々に描へて標します。袖口の裾は袷でありますから二粍位にして表袖幅より裏の幅を四粍廣く標します、袖口は裏の方を二粍ほどつめ、丈も二粍ほどつめます。

身頃　布のおき方、標附けの順序など本裁物と同じでたゞ寸法が違ふだけであります。

衿の折り方

衿幅が狹くなりますから木綿のしつかりした芯布を入れます。芯布の幅は表衿と同じにして第十五圖(い)のやうにまづ裁目の方を描へて外表に重ね、躾で端の方を荒く縫つておきます。それから裁ち目から衿幅の二倍だけの寸法を計つてそこから心布を折り、次に(ろ)圖のやうに二枚重ね合せた端、つまり附の方を一糎に折り、この端に芯の折山を突き合せに折つて芯布を躾であらく押へます。次に表布を附の折山より二粍控へるやうに折つて(は)圖のやうにしますと出來上ります。

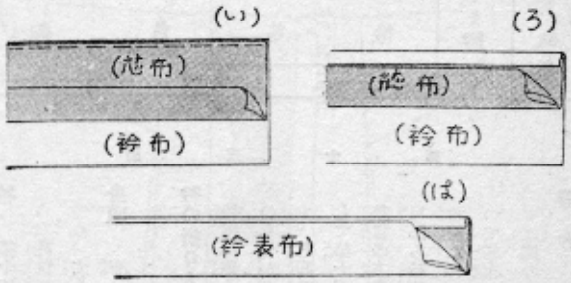
標の附け方



第十四圖

縫方

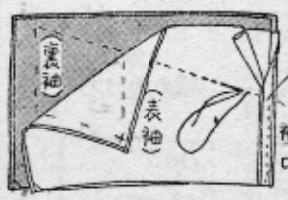
衿の折り方



第十五圖

きづ標通り袖口布を裏袖につけますが、袖口下は縫込になりますからそのまゝ縫はずにおきます。

次に第十六圖のやうに袖口を裏表合せて縫ひ、四つ留をして

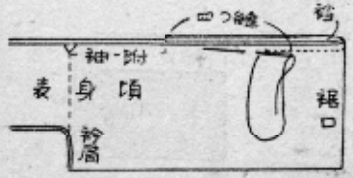


第十六圖

袖の縫ひ方圖

四枚一緒に縫ひ、端の方五、六糎は別々に縫ひ表へ折つて縫込を平らに落ちつかせて表にかへします。

身頃　間接をしたら腰裏をかけ、背を四つ縫します。



第十七圖

衿附の圖

襠附　襠の上を標通り内側に折つて縁をかけ、表裏の身頃で挟んで第十七圖のやうに縫ひます。

袖附　後前共襠がつきましたら、表袖の山と身頃の山と標を合せ、袖下でしつかり留をして表裏共標通り袖をつけ、表は袖の方へ、裏は身頃の方へ折りをつけて返します。

衿附　前身の衿附のところで少し裏身頃の幅をゆるみ加減に躾をかけ、左右共乳をつけます。次に衿の附を裏身頃に合せて、本裁羽織の衿附の要領で針を打ち、掛針にかけて引張りながら一針抜に一二、三糎縫ひ、あとは普通に縫ひます。それから衿先を縫つて表に返し細かに綿けつけます。

四つ身元祿袖綿入羽織（九、十歳用）

仕立上寸法

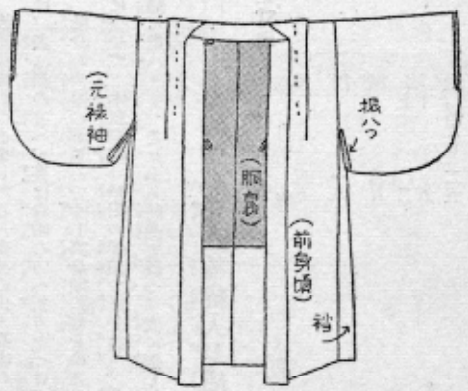
袖	丈	三五糎	袖	口	一六糎
袖	附	一八	袖	幅	三〇
後	幅	二五	身八つ口		九
襠	幅上	二	衿	幅	五
	幅下	五			
紐		附肩より 二五	身	丈	八〇內外

裁方

大幅物、並幅物、又袖の具合、身丈の長短によつて圖のやうに種々裁方も變りますが第十九圖は大幅物の場合

で表用布二七六糎から袖丈七二糎を裁つて幅を二つにして兩袖とし、殘りの二〇四糎を身頃にとります。布幅の眞中で一五糎幅にずつとかき落して衿と袖口布とにします。殘りを身頃の分にして二枚重ね前後の差を八糎（前下りの分）つけて肩山を標しますと後身丈が九八糎、前身丈が一〇六糎になります。それから肩山で衿肩明七糎五粍の中一糎を廻して前身からずつと七糎五粍幅に裁ち落してこれを襠にします。裏用布は袖丈を表用布と同じやうに七二糎とつて兩袖とし、殘りの一四四糎を圖のやうに裁ちますが、裏は前下りをつけませんから前後とも同寸にします。並幅布で裁つ時は下の圖のやうにいたします。

出來上り圖

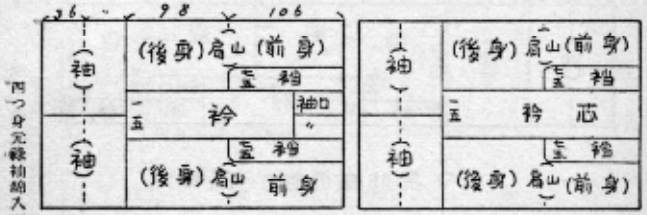


第十八圖

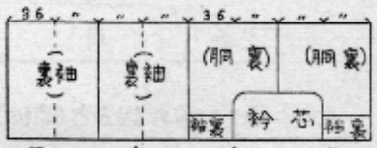
標附け方

袖　表裏共別々に中表にして兩袖を重ね、丈、口、附、幅、山の標をつけます。袖の丸味は、袖口の標から袖下へ四糎位の處に標をつけ、この標と袖丈の標の間の寸法を計り、その寸法に二糎を加へたものを袖下の角から手前へ計つて袖下に標をつけ、

四つ身元禄袖綿入羽織の裁ち方（大巾）



裏布の裁ち方



第十九圖

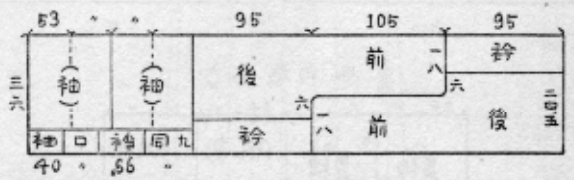
この標と袖口下の四糎の標とに尺度を當てゝこの斜線の眞中に待針を打ち、待針と袖下の角との中間を見て、この中間を通るやうに袖の丸味をつけます。

裏袖は口布の幅を四粍出して重ね、口布の丈と幅は一ぱいに標し、袖丈と袖幅は表袖より四粍つめ、口明と附は二粍つめます。

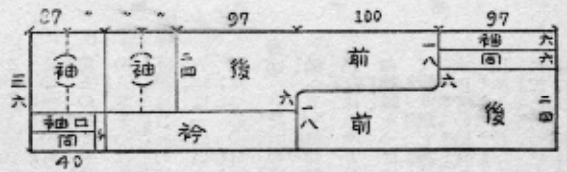
身頃　身頃の裏表を各々中表にして衿肩明を揃へて本裁羽織のやうに四枚重ねておき、布が肛はぬやうに肩に待針を打ち、肩山は七粍の繰越をつけて、先きに後身頃の身丈を計つて折り返し縫代いつぱいに胴接の標をつけ、次に背の縫代を標します。前身は後身丈より出來上り前下り寸法に縫代四粍を加へた寸法に丈を折つて矢張り胴接の標をつまけます。前後とも胴接標が出來ましたら前身の上に後

四つ身羽織の裁ち方（長袖）

三つ身羽織の裁ち方（長袖）

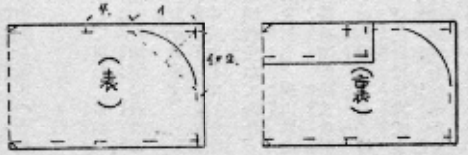


三つ身羽織の裁ち方（筒袖）



第二十圖

衽附け方圖



第二十一圖

身を重ね、袖附、身八つ口、後幅を摺し、それから後身頃を左に開いて前身に前下り、衿下の標をつけます。

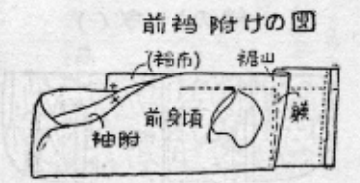
襠　身頃と同じやうに丈を定めて胴接の標をつけ、幅は下は眞中で襠幅を定め、上方は眞中より後へ二糎だけ寄せて標をつけ、前後の斜標をつけます。

衿の折り方

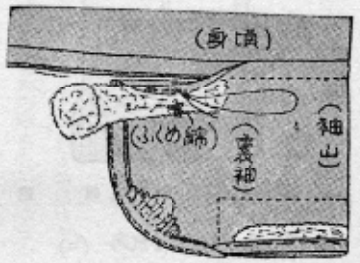
筒袖羽織と同じであります。

縫方

袖　兩袖共裏袖に袖口布を摺通りつけます。筒袖とちがつて口布の端は縫込に入りませんから細し附にします。そして表袖裏袖を別々に縫ひ袂の丸味は一つ身元禄袖と同じやうに盤へて全體に鏝をかけておきます。



第二十二圖



第二十三圖

身頃　前後とも胴接をして鐙鏝をかけ、背を表身頃から裏身頃へとつづけて縫ひ、（衽の山三糎ほどの間は返し針にします）折をつけます。次に襠裏を接ぎ鐙鏝をかけて、襠上を縫ひ後襠をつけます。

前下り　本裁と同じやうに表は標通り、裏は四粍標より縫ひ込んで幅標の間だけを縫ひ、裏の方へ折つて鐙鏝

をかけておきます。

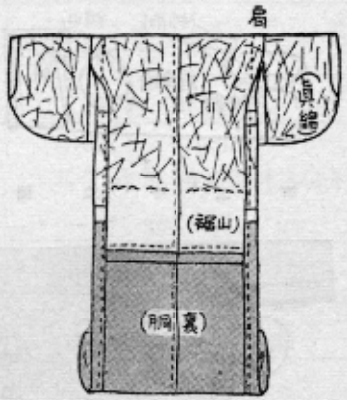
次に第二十二圖のやうに前褄附をします。

袖附　袖をそれ〳〵別々につけて、表袖は袖の方へ、裏袖は身頃へ折つておきます。

綿の入れ方

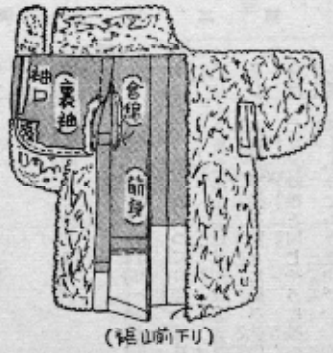
まづ綿を入れる前に第二十三圖のやうに袖口、振八つ、身八つへ含み綿をします。それから全體を裏返して第二十四圖のやうに兩袖を擧げ前身頃を下側にして全體に薄く眞綿を引き、その上に綿をのせて褄の方は二つ

(一) 方れ入の綿



第二十四圖

(二) 方れ入の綿



第二十五圖

三糎綿を長くして褄口に七、八糎幅の芯綿を入れ丈のゆるみを二糎ほど見て褄山から折り返します。この時裏身頃に眞綿を引きながら裁せてゆきます。それから第二十五圖のやうに裏袖もひろげて後身からつゞいてゐる綿を前身頃、袖の上にひろげて全體に入れます。そして眞綿を引いて袖を引き返し、身頃も引き返し、綿をよく落ちつかせ、褄廻り、衿附廻りを縫でおさへます。

とめ方　袖口、袖附、身八つ口をいづれも四つ留にして細針に綴けます。

衿附　袷羽織の衿のつけ方と同じ要領でつけて仕上げとします。

綿入の仕立方に、一つ身綿入のやうにはじめ袖口、振八つ、身八つ口など表裏を縫ひ合せて含み綿を入れ、全體に綿を入れる仕方もあります。

一つ身袖無羽織（綿入）

嬰兒から二、三歳位までの子供に用ふるもので男女の別はたゞ柄合のちがひで仕立方は同じにします。最近衿の型が種々工夫されて襟取りにした被布形のやうな衿をつけたりいろ〳〵の型に仕立られます。

仕立上寸法

身丈	五五	身幅	いつぱい	
衿肩明	四	脇明	二三	
褄幅上	四	衿幅	四	
褄幅下	五・五			

一つ身袖無羽織

紐　幅　三種裁ち切りのものを一杯に縫ふ

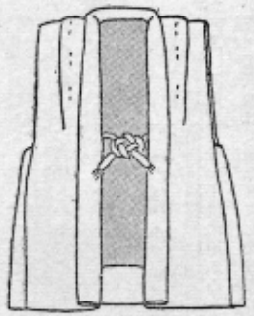
紐　附　二〇

前　下　なし　或は五糎位つける事もある

裁方及積方

用布は表布として二一〇糎位、裏用布として一四〇糎位要ります。そして第二十七圖のやうに衿を寸つとつゞけて取る裁ち方と、三つ衿の所で接ぐやうに取る裁ち方があります。

出來上り圖



第二十六圖

標附け方

身頃　表布も裏布も幅を二つ折にして表を下に、裏をその上に重ね動かないやうに所々に針を打つて留めておきます。肩山の通りは糸で綴ぢておきます。それから前も後も身丈を計つて裁りの表用布は折り返して裏の上に重ねます但し繰越の分だけ前は長くしておきます。そして前にも後にも胴接ぎの標をつけ、後身頃を肩山から折つて前身頃の上に重ね、第二十八圖のやうにして脇明、身幅、山の標をつけます。それから後身頃を左に除けて前幅に紐附の標をします。

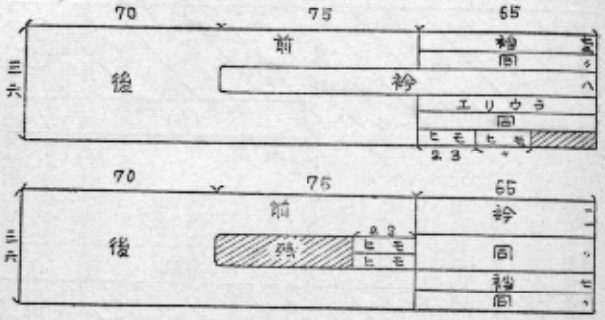
襟　表と裏をそれ〳〵中表に合せ、表襟を下にその上に裏襟を左端を揃へて重ねます。そして襟丈を計つて表の長い分を折つて裏に重ね、胴接の標をつけ、つゞいて丈の標、幅の標をします、後の襟附標は眞直に、前襟附は一糎五粍上が狹くなるやうに斜に標します。

縫方

身頃　前身頃、後身頃、襟の胴接をしてどちらも裏の方に折をつけて隱縫をかけます。

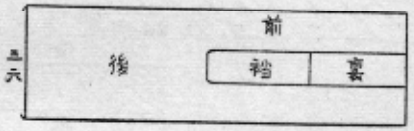
次に標通りに後身頃の表裏をつゞけて襟をつけます。襟をつけます時はいつも身頃を手前に襟を向ふにして針を打つて縫ひ、折は身頃に折ります。次に襟の斜になつてゐる方を上の身頃につけ折は同じやうに身頃に折り、縫ひ目には叄部紐をかけます。

裁ち方の織羽し無袖身つ一

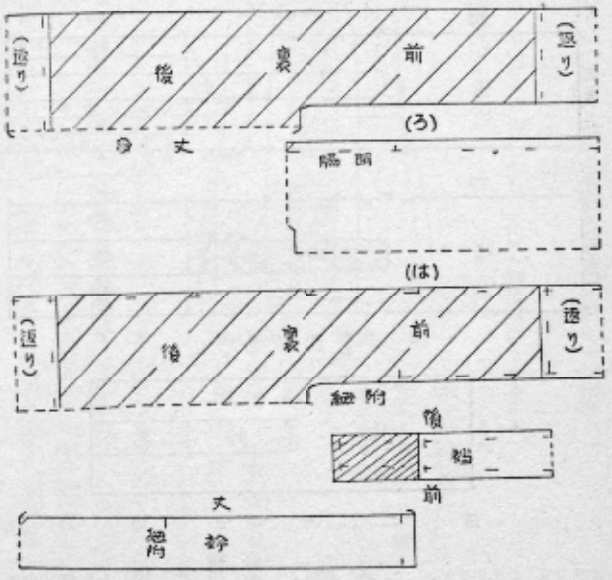


一つ身袖無羽織

裁ち方の裏



第二十七圖

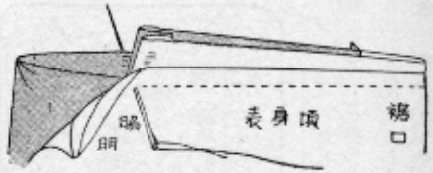


第二十八圖

左右とも前後の襠がつきましたら襠の上部を裏に折り返して裏から四つ留をし、上部を丈標より四粍外側を縫つて含み綿をします。

脇明は、表は標より四粍外を、裏は標より四粍内を合せて縫ふのですが、留から三糎位の間は自然に斜になるやうに縫ひます。折は裏の方につけて隱躾をします。かうして表に返しますと出來上りの幅には變りがなくて、留の所で褄形が出來ます。

綿の入れ方



第二十九圖

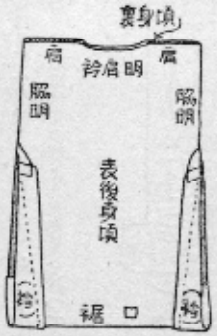
糸屑や塵をきれいに拂つて第三十圖のやうに裏に返し後身頃を外に前身頃を中にして襠幅の眞中から正しく折つて、表布の裏側を出して廣げます。

最初に眞綿をよく延してつれないやうに全體に引き、その上に小袖綿を三枚位の厚さに入れます。第三十一圖のやうに肩や裾は一〇糎位づゝ兩脇は前幅だけ長く綿を出して切ります。次に第三十二圖のやうに裾は一二、三糎幅位に切つて一枚芯を入れ脇明には五、六糎幅位の芯を入れてから折り返しその上に眞綿を引いて、前にまはる分は第三十三圖のやうに襠表裏の間から中へ入れ衿肩明のところから中へ手を入れて引返します。

前身頃も後身頃と同じやうにして左右とも眞綿をひき綿を入れ表に返します。

そしてよく綿を落ちつかせ裏表の釣合を見ながら脇明や裾口に綿をよく含めて假とぢをし、つゞいて衿附の部分で裏の幅を少しゆるめ加減にしてとぢます。

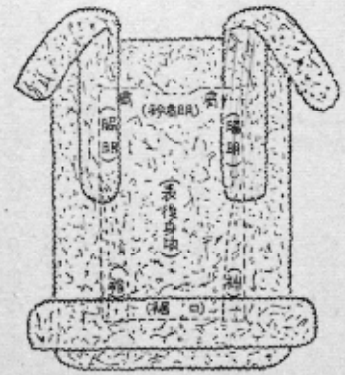
紐附 幅三糎長さ二三糎位の布の中に綿を入れて結けるか、又は縫つて表返して眞綿を入れるかして二本作り、肩から二〇糎下つたところの裏身頃に綿も一緒に縫ひつけます。



第三十圖

衿附　前身頃の裏に衿の表を合せ、まづ背から衿肩廻しつゞいて紐附までは衿を弛め加減にし、それから下は平らな調子に待針を打つて、裾の五糎位の間は半返しに縫ひ、他は全體一針抜きに縫ひます。縫へましたら縫目に平鏝をかけ、身頃に三糎、衿に四糎のきせのかゝるやうに折り、次に衿先の標より五粍先を縫つて衿の

第三十一圖

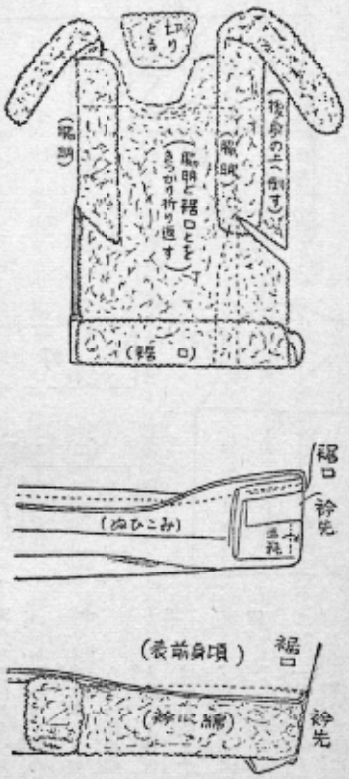


第三十二圖

表に折り裂して圖のやうに留めて芯綿を入れ、表に返して綰け上げます。

それから紐附の少し上まで衿の中央に飾鋲をかけ、兩方の後褄附を綴とぢします。

肩揚　肩幅の眞中を山にして三糎の深さに山から一七糎位、丁度脇明の三分の二位の所まで揚をします。深さは前の方は下へ行くほど次第に淺く、下では凡そ一糎位にします。後は終りの一針を五粍位淺くします。

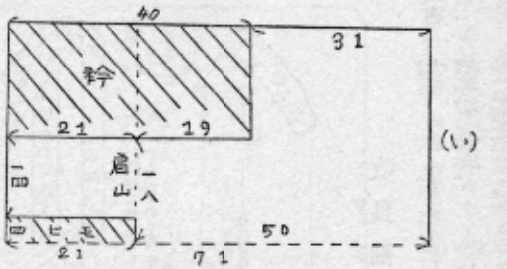


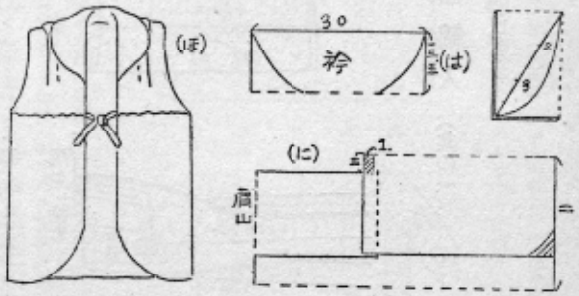
第三十四圖

改良袖無綿入（其の一）

用布　大幅　四角（風呂敷などを利用します）
表裏共同寸法
綿、青梅綿　一枚

改良袖無綿入





第三十五圖

裁方

はじめ第三十五圖(い)のやうに幅を眞二つに折つて襟と前明を寸法通り裁ち落します。次に(に)圖のやうに肩山から上前の前身を寸法通りに折り、それから下前の前身は繰幅の中央になるところ、つまり背から二二糎の通りで折りますと上前と下前とが前明の通りでは幅が狹ふやうになり、丈は二糎重なることになります。そこで裾の上部を一糎繰り、一旦前身頃を擴げて前褄角を八糎の丸味に裁ち切ります。

衿　襟から裁ち落した布の一枚を長さ三〇糎に切り、それを幅二つに折り更に丈を折りろ)圖のやうに標をしては)圖のやうに月形に裁ちます。

縫方

先づさきに表裏共前身頃の接ぎ合せをします。縫ひ目は開いて鏝をかけておきます。次に表裏の裾を丸味から丸味まで縫ひ合せ(裏の方を四、五粍控へて)折は裏の方へ折つて隠縫をかけておきます。そして次は剛方の襟明をそれ〳〵表裏合せて縫ひ、折は裏の方へ折つて隠縫をいたします。

綿の入れ方

綿は羽織衿の袖無の入れ方と同じ仕方であります。全體に綿が平らに入りましたら襟明、裾口、前明などを假綴いたします。

衿　被布の衿と同じやうに芯布を入れて衿を作り、衿の表を身頃の裏に合せ、表身頃だけを殘して三枚を一緒に縫ひつけ、その上へ表身頃をまつります。つゞいて兩方の前身頃を小針に縫ひ合せますが、その前に前から裁ち落した布で紐を二本縫けて前の胴接の通りへしつかりとつけておきます。(ほ)圖は出來上り圖であります。

改良袖無綿入（其の二）

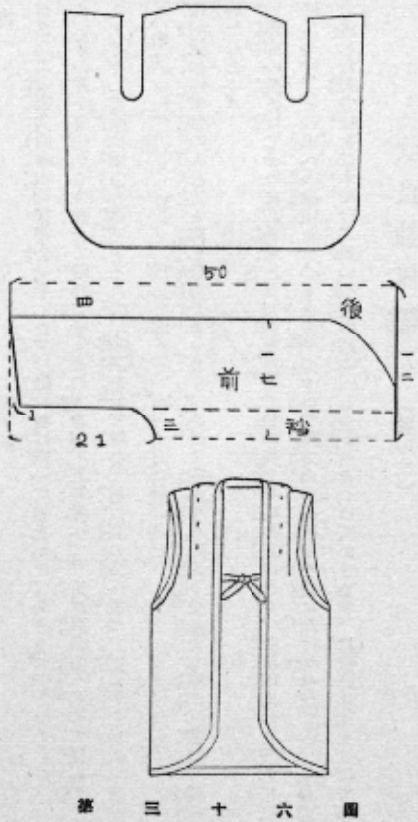
材料

大幅　五〇糎　表裏共同じ
バイヤス　三〇〇糎

青梅綿　一枚

裁方

表裏とも裁ち方は同じてありますから重ねて一度に裁ちます。まづ幅を眞二つに折り、次に輪の方を二一糎に



第三十六圖

耳の方を一七糎にして二つに折ります。すると幅に四糎のちがひが出來ますが、この四糎が衿肩明になるのであります。それから二枚になつてゐる輪の方で脇明を三糎幅二一糎だけ裁ち落し、次に前裾の下を八糎位の丸味に裁ち切ります。最後に肩を脇の方へ向けて一糎斜に切り下げます。

縫方

縫合せるところは肩だけでありますから表裏共前後の肩を接ぎ合せて縫ひ目は割つておきます。

綿の入れ方

裏身頃の裏側を出してそれに布の形なりに適當な厚味に綿を平らに載せます。次にこの綿の上へ表身頃を被せて裏表の身頃で綿を挾みます。そしてよく全體の綿を落ちつかせて脇剝、裾口、前明などのぐるりに躾をかけます。

綿が落ちつきましたら周圍の緣取をします。バイヤスを表側にあて小針に縫つて裏側でまつり絎にしておきます。

紐附　脇明から裁ち落しの布で長さ二〇糎位の紐を二本絎けて脇明の下端の通りの位置にしつかりとつけます。

肩揚は普通の袖無と同じやうにします。

男物單衣羽織

單衣羽織は春の末から秋にかけて着るものであります。從つてその地質は一體に薄地のものが用ひられまして、

男物には紹、紗、透綾、麻などを用ひます。然し春の終り頃、又秋のはじめ頃セル地の着物を着ます頃には羽織もセル地を使ふこともあります。又女物には絽ちりめん、紗、繻お召など用ひます。セル等のやうた地厚の物には甲斐絹、羽二重等を肩の滑りをよくする爲めに肩當につけますが、地薄物には肩當は使ひません。しかし肩廻りのいたみを避ける爲めに斜布を少し肩廻りだけにつけます。

仕立上寸法

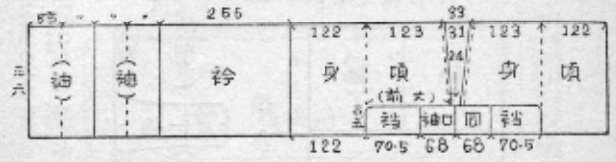
袖	丈	五三糎	着物と同寸	袖	口	二八糎	着物と同寸
袖	附	五三	袖附にする	袖	幅	三四	着物と同寸
身	丈	一五〇内外	着丈の四分の三に四糎加へる	後	幅	三〇	着物と同寸
前	幅	いつぱい		衿	幅	七・五	
襠	幅	七・五		衿	肩明	九	着物より五粍多く
前	下り	三・五		乳	下り	背より四五内外	
裾		六六	着物と同寸	繰	越し	〇・五	
裾の折り返し		一〇内外					

裁方積方

單衣羽織地は普通一〇米内外で一反になつて居ります。用布の短い物は襠を斜裁にしますが充分ある物は横襠に裁ちます。單衣羽織は袷羽織と違つて、裾の折り返しを三つ折り縮にしますから、身丈の出來上りに三つ衿の鯨代と、裾の折り返しの二倍とを加へたものを後身丈の裁ち切りにします。

前丈は後身丈になほ繰越の二倍と、前下りの分と更に凡そ一七糎を加へたものであります。この一七糎を加へますのを繻の補ひといひまして裏身

單衣羽織の裁ち方



男物單衣羽織

公式　出來上り身丈＋三つ山縫ひ代＋折り返し＝後丈

後丈＋繰越×2＋前下り＝前丈

後丈＋繰越＝脇丈

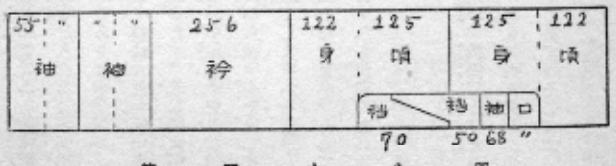
脇丈－袖附＋襠上縮け代＝襠丈

（裁ち切袖口丈－袖附寸法＋繰越し－襠上縮け代）×2＝襠の補ひ寸法

袖丈×4＋衿丈＋後丈×4＋襠の補ひ寸法＝總用布

第三十七圖

袷羽織の裁ち方（衿鉤）



第三十八圖

前丈は後身丈になほ繰越の二倍と、前下りの分と更に凡そ一七糎を加へたものであります。

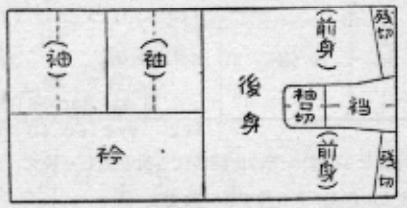
この一七糎を加へますのを繻の補ひといひまして裏身

頃では圖のやうに二倍の寸法を加へることになります。この補ひを入れませんと前身頃から裁ち落した布だけでは袖口布と、襠丈が少し不足します。それで用布が短くてこの補布を入れることが出來ません時は第三十八圖のやうに襠を鉤裁にするのであります。

セル地等で單衣羽織を裁ちますのは大低大幅でありますから第三十九圖のやうに袖の半分から衿をとります、若し袖丈が短くて身丈の長いやうな時は袖の半分だけでは衿布が不足しますから、その時は衿布を充分足りるやうに取りまして袖の横から殘り布を出します。

身頃は背縫をしないのを普通としますから前落しをそのつもりで背縫の縫代分だけ少なく衿肩明を裁ち切ります。そして襠の幅は裾廻の裏にかへるところで幅が廣く要りますから無理のない程度で圖のやうに末廣に裁ち切ります。

大巾にて單衣羽織の裁ち方

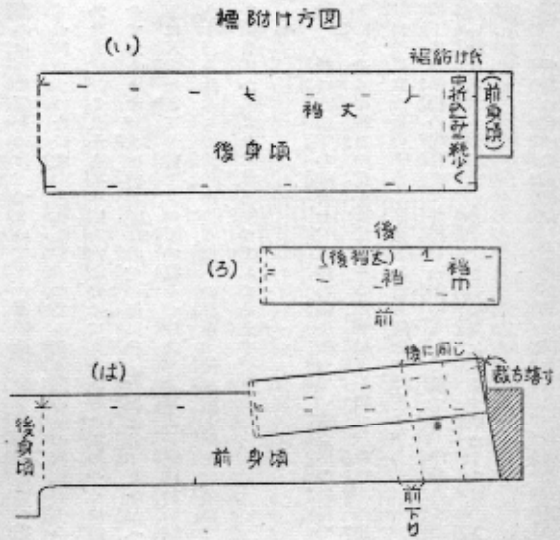


第三十九圖

裾附け方

袖　常の如く置き袖丈、袖口、袖幅、山、丸みの標をつけ、つゞいて袖口布の標をつけます。袖口布も矢張り丈を二つに折つて二つを重ね、袖口明の標は表よりも二粍つめます。そして丈、幅をいつぱいに標します。

裾附け方圖



第四十圖

身頃　左右の身頃を中表に二枚合せ衿肩明と前落しの裁ち目は特に動かないやうによく揃へて針を打ち、肩には假鞝をかけて正しく重ね、前身頃を下に、後身頃を上に、背を左手前にして繰越をつけて第四十圖(いの)のやうにおきます。それから身丈、背の縫代、袖附、肩幅、後幅の標をつけ、次に裾の折り返しを計つて、その寸法の半分より二粍ほど短い寸法を中の折り込にして標をつけます。そして後襠附の丈を計つておきます。

襠　最初襠布の上部を五粍の幅の三つ折り縫にして、左右の襠を中表に重ね、襠の上を左にしておきます。それから襠の上から後襠丈だけを計

つて向ふ側に丈の標をつけます。次に裄布の幅の眞中を中心にして出來上り裄幅の標を裾につけ、裄の上は裄幅の中心に標をつけ、つゞいて上の裄幅の三糎を後裄附の方へ寄せて後裄附の標をつけ、次いで前裄附の標をもつけます。なほ丈の標から下、つまり折り込の所の幅は、上の幅の斜めの線を引延して廣くなるまゝにしておきます。それから後身頃を左に除けてこの裄を（圖のやうに前身頃の脇の標の上に、裄の前身頃附の標を合せておきます。次に前身頃に前丈の標（後丈標に前下りを加へた丈）をつけ、裄の後丈の標と、前下りの標とに尺度を當てゝ前下りの斜の標をつけます。（單衣羽織は袷羽織とちがつて裄と前身頃とで前下りの斜がつきます。）それから裾縮代の折り返しの標を、後身頃と同じに定めて標をつけますと、前布と裄布とに斜の無駄布が出ますからこれは裁ち切つてしまひます。

縫方

袖　袖口布の下の端を七、八粍の幅に折つて一糎位の針目で押へ縫にし、表袖の袖口と縫ひ合せ、袷羽織と同じやうに袖口の留をして、その糸で袖下を縫ひ、袖口布の奥を折つて二糎位の針目にして、表には極く針目の目立たないやうに注意しながら綴けつけます。

袖下は地厚物の場合には外袖を二糎ずらして縫つて、内袖の方に綴けつけます。地薄物の時や、又縫ひ込の少ない物は袖下を袋縫にします。この袋縫にします時は、丸袂のところと振八つの方で縫込の二倍だけは淺縫を省きます。

身頃　背縫は普通二重縫にしますが耳に鋏を入れた場合や、耳の糸の色の異つてゐる物の時は袋縫にします。

又極く薄地の物の時は淺縫を普通の針目で縫はずに、二枚の布の間に少し大針に針を流して兩方へ小さく交五に針を出して縫目の開かないやうな縫ひ方にします。

前裄附　前裄を向ふに、身頃を手前にして裄附の標を合せ、身頃の方を見て裄の出來上りだけを縫ひつけます。

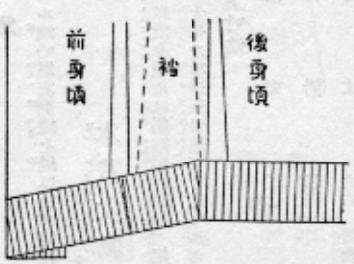
次に裾は一旦形を整へ、標を正して糸標をつけてから又開いて裾の中の折込の標までを縫ひます。そしてきせをかけて表に返し襠を三つ折にして出來上りと同じ形に整へて鏝で押へておきます。

衿附　衿の折り方や芯の入れ方は袷羽織と同じであります。又附け方も同じでよろしいのでありますが、たゞ地薄の物の時は三つ衿のところで綴けないで衿肩を廣し縫にします。なほ地薄物の時は芯地の色や縫糸の色に注意して表地と同色のものを用ひます。

後裄附　衿を表に返してよく整へてから裄の後の裄附をします。

身頃を手前にして後裄と後身頃との丈の標を合せ、身頃は眞直ぐに、裄は標通りに合せて裾縮代の中折り込のところで待針を打つて縫ひます。そしてきせかけをして表に返し、裾縮代を前身頃にならつて折り、一糎五粍の針目で表に目立たないやうに注意しながら綴けます。

袖附　袖附の留は袖下の折り山に、表裄の裏から針を出して、裄の上で身頃の後前のきせ山を突き合せて布を



第四十一圖　裾を返したところ

横に抄ひ、(襠の布は抄ひません) 最初の針にならべて表袖の折り山の際に表から針を入れて糸を結び、その糸で袖附をします。袖をつけ終りましたら襠の縫代を脇の縫代に被けつけ、更に脇縫代の耳を折つて身頃に被けつけます。身頃の縫代の少ない物は襠の縫代を身頃に被けつけ、それから八つ口を結けます。

注意

セル地で單衣羽織を縫ひます時は袖附の縫目は半返縫にして割り、その他の要所も半返し縫にします。

本裁女物單衣羽織

女物單衣羽織には紹縮絹、紋紗、縮しぼなどが主になつて居ります。地質によつて適當な地伸し（二五頁、布地の大切な整理法參照）をしてから圖のやうに裁ちます。

仕立上寸法

袖丈	五七	袖口	二三	割
袖附	二四	袖幅	三〇・五	
身丈	九六	着物より三八糎位短く繰越	二	
後幅	二八	身八つ口	一〇	
前下り	四	裾返り	一〇	
衿幅	六・五	襠幅上	一・五	
		下	六・五	

裁方

近ごろ單衣羽織地は丈が充分になつて來ましたが身丈は余り充分に折り返す要もなく多くすると却つて重苦しく恰好も悪くなりますから必要な寸法だけに裁つてなほ余分の布のある時は他に利用いたします。

前身頃から襠と袖口布を裁ち落しますのに縦の方は折り返りの間位斜に襠布を廣くします。これは衿先へ不用な縫代が入らなくてきれいに仕立てられますのと、襠幅を縦で廣くしても宜いやうにするためであります。

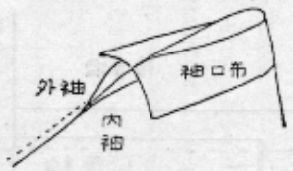


圖　二　十　四　第

衿の折り方

給羽織と同じであります。

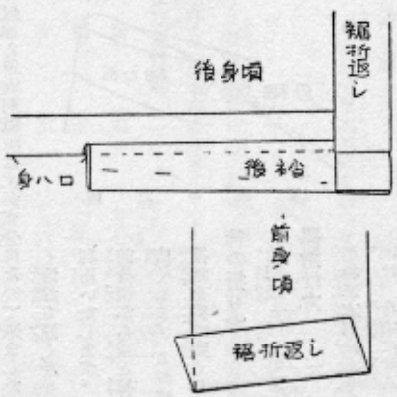
標附け方

男物單衣羽織と寸法が違ふだけで附け方は同じでありますがたゞ袖に振り八つを明け、身頃に身八つ口を明けますので從つて襠上の幅を一糎五粍にします。

縫方

袖　袖口布は襠布より口明の寸法がつまつてゐますから袖口山で割合に余計ゆるませて待針を打つて縫ひ、袖の方へ折をつけておきます。それから袖口下の四つ留をして袖口下は後袖口が釣れないやうに注意し後の縫

ひ代を割り、袖口布は別にしておいて袖口布のつくところだけ返し針で他は普通に縫ひます。袖口布は第四十二圖のやうに袖口下を縫ひ、縫ひ目は割つて端を折り裏へ綴ぢつけます。袖下は袋縫にして丸味を整へ、袖口を毛抜合せにして鏝をかけ、袖口布の奥を折つて袖布に綴けつけます、次に振り八つ口を三つ折にして袖附の二糎ほど手前まで綴けておきます。



第四十三圖

身頃　背は二重縫にして折をつけ、後褄をつけます、褄は上を三つ折綴にして後身頃に合せて縫ひ、褄の縫込は端を一糎ほど折つて身頃の縫込へ綴ぢつけ、縫ひ目は身頃に折つて鏝をかけます。次に前下りの折りをつけ衿附の方で淺く蝶をかけておきます。そして乳をつけます。

衿附　男物給羽織と同樣衿は先に合標をして袋附にします。衿附はこの樣に袋附にする方が早くもあり出來上りも宜しいのですが、綴け衿にしても宜しいのです。

前褄附　標を合せて後褄と同樣に褄の縫ひ込を身頃の縫込に綴ぢ附け、褄を平らにして折返して綴けます。

袖附　單衣長着のやうにして附け、袖の縫ひ込と脇の縫込を綴ぢて仕上げをします。

六、半纏の部

半纏について

半纏は羽織と同じやうに長着の上に羽織るものでありますが、羽織とちがふところは褄をつけない事と、衿を折り返さない事であります、一體に着丈は羽織より三、四糎短かめに仕立ます。

なほこの半纏は改まつた外出着としては用ひませんから地質は多く木綿物で作ります、然し柄向には紬、節御お召などの絹布類で作ることもあります。

衿には黒の繻子、八丈、毛繻子などの掛衿を掛けて着用します。

袖は長袖、筒袖、もぢり袖などいろ〳〵に仕立てますが、長袖、筒袖は前の大人物、小供物の袖と同じですから、もぢり袖の半纏について說明します。

もぢり袖（鯉口）半纏

もぢり袖は仕事着として大層便利なものであります。

仕立上寸法

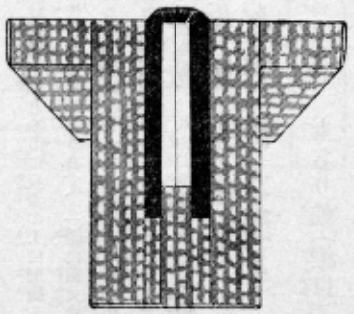
袖口	一五糎
袖幅	羽織に同じ
詳細について	

袷襦袢の部

袖　附　四〇内外
後　幅　羽織に同じ
衿　幅　五・

身　丈　羽織より三、四糎短く
前　幅　一ぱい

出來上り圖



第一圖

裁方

普通の一反で仕立ます時は布が殘ります、裏の折り返る分の多少によつてちがいますが表用布の長さとしては六五〇糎位あれば出來ます。

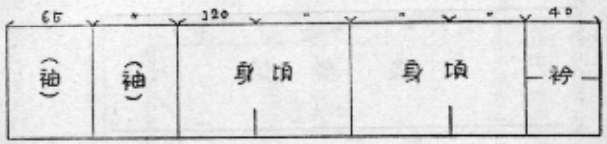
第二圖のやうにまづ袖の二倍と衿布を取り殘りを四つに折り滑物と同じやうに肩明を切ります。羽織の時は前身は肩明の通りからかき落しましたが、半纏はこの分を衿の心にいたしますからそのまゝおきます。

衿布は裾衿の下に出るところだけ凡そ四〇糎表と共布にし、裾衿の下になるところは多くは別布を用ひます。

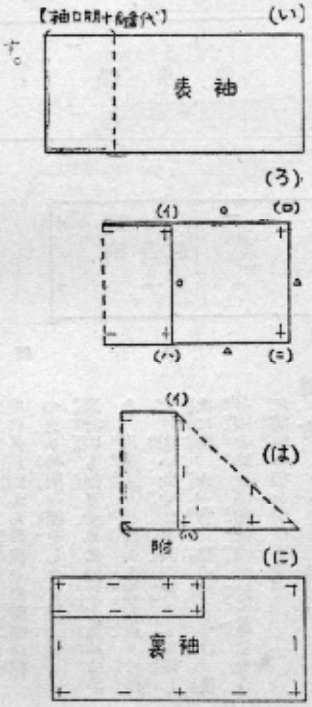
標附け方

袖　表袖を中表に二枚重ね、第三圖(い)のやうに左端から袖口明の寸法に縫代の一糎を加へた寸法だけ折り曲げて(ろ)のやうにおきます、そして向ふ側に袖口明及び縫代の標をつけます、次に幅の標をつけます、それから口明の標から右の方へ袖幅と同寸法に標し、そこから又手前の方へも同じ寸法に標します、次には圖のやうに(ロ)の十文字を(ハ)の十文字に重ねて(イ)(ハ)を通して標をつけます。この折つたまゝで附の標をつけ、附から下の端は眞直ぐに縫込みます。

裁ち裁

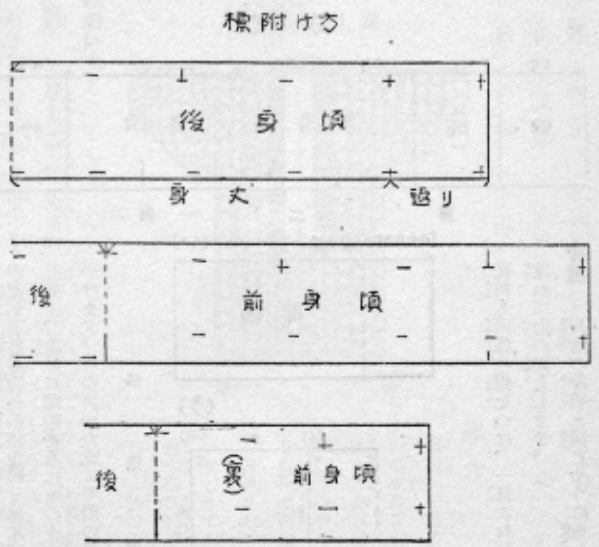


第二圖



第三圖

身頃　長着の身頃と同じやうに布を揃へ、まづ出來上り身丈の標をし、そこから裏袖も同樣に標をつけ、一旦これを元の位置にひろげて(に圖のやうに袖口布を重ねて附の標をします。



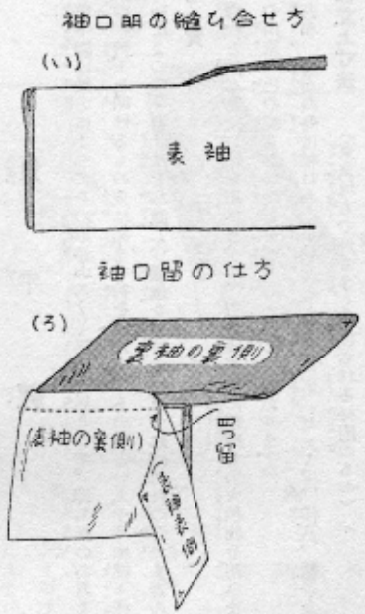
第四圖

ら右に返りの丈を計つて標します。次に附、山、背縫、後幅の標をつけて後身頃を左に除けます、そして今度は衿肩明から眞直ぐに前幅の標、つまり衿附の標をします。

裏身頃も同じやうに四枚を重ねておき、出來上り身丈から表の返り寸法だけ引いた寸法を裏の丈として標し次に附、山、背、脇の標をつけ、後身頃を除けて前身頃に表と同じやうに前幅の標をつけます。

縫方

袖　裏袖に袖口布をつけ（外袖の端は廻し附にします）て、それから第五圖(い)のやうに口明の表裏を縫ひ合せて表に返し、(ろ)圖のやうにして



第五圖

口の四つ留をしてその糸でつゞいて内袖の縫目を四つ縫します、但し附の方一〇糎程は表裏別々に縫ひます。

身頃　表身頃、裏身頃別々に背及び脇を縫ひ、身頃全體をつゞけ胴接をします、折は裏に折り鰹躾をかけます、胴接が出來ましたら長着袷のやうに背及び脇の縫目を綴ぢます。

袖附　筒袖羽織の仕方と同じ仕方で、附の留をしてその糸で表裏とも別々につけ表は袖の方に、裏は身頃の方に折をつけて表にかへします。

衿附　袖がつきましたら衿附の部分をあらく躾で綴ぢておき、次に衿布に丈の不足だけ別布で下衿を接ぎ合せます、この下衿の部分は後に掛衿でかくれてしまいます。衿布が接げましたら着物と同じやうに身頃の表側につけて、裏側で絎けつけます。

掛衿　長着の掛衿の要領でかけます。

附　半纏は用布の都合で衿布を別に取らないで前身頃で摘み衿にすることもあります。其の時には三つ衿の部分にだけ別布をつけ、背を少し深目に縫つて衿幅が普通に出來るやうに腰紐代を浅くします。

貧半纏

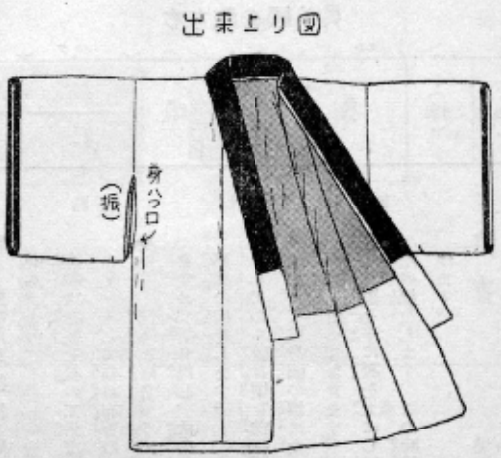
貧半纏は地方によつてその形がいろ〳〵異つと居ります。即ち衽のあるもの無いもの、襠のあるもの、ないもの、衿下を明けるもの或は裾まで衿をつけ下すものなどいふやうに種々様々でありますが、子供の大きい小さいによつてその寸法を加減し、繰廻を充分つけますれば何れの形でもよろしいのであります。

地質　着物と殆んど同じ物を用ひますが、表地は子供に相應しい大柄物を用ひます。又汚れ易いもの故なる可く洗張の出來る色の變らない地質を選ぶことが必要であります。

表布、裏布の外に袖口布、掛衿布として黒八丈、ビロード、洋八、繻子などを使ひます。

仕立上寸法　（東京地方で最も多く用ひられる紐附のもの）

袖丈	五一寸	袖幅	三四糎
袖附	三四	身八つ口	一五
身丈	一〇六―一一〇	後幅	三二



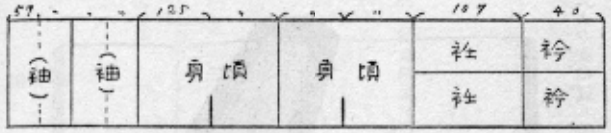
第六圖

衽幅	一五
衽下り	二〇
衿下	三二
衿幅	七
衿肩明	一一・五
繰越	五―七
綿	どてら綿　三枚位

裁方　第七圖のやうにまづ袖丈の四倍を取つて両袖とし次に身頃を裁ち切り一二五糎として四丈分の五〇〇糎を取り殘りから衽を身丈より衽下りだけ短い一〇七糎を取りその殘りを衿にします、繰廻だけ前身頃を長く身頃は四つ折にして衿肩明を一一糎五粍切ります。

裏用布は袖を表と同様に裁ち、身頃は出來上り身丈より表の返り分を引いた殘りに縫代を加へた寸法に裁ち切ります。

負半纏の裁ち方



第七圖

標附け方

袖　表袖は女物袷と同じでありますが、濶袖にしますから口明の標をつけません。

裏袖は袖幅を裾の二倍だけ廣くします、若し布幅の足りません時は持出しをします、そして袖口布をのせて表と同じやうに標します。

身頃　羽織と同じやうに表身頃を下に、裏身頃をその上に重ねておき、後身丈を定めて折り返し、次に前身丈を後身丈より繰越の二倍だけ長くして折り返し胴接の標をします。

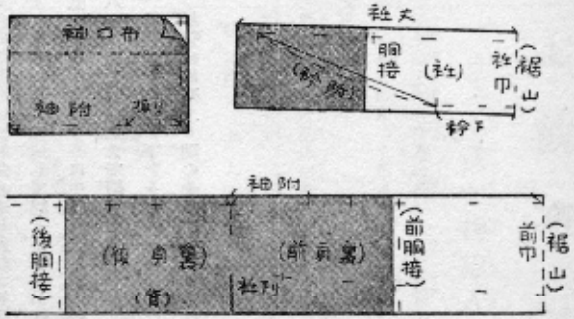
そしてから後身頃を前身頃に重ねて附、幅、背、山の標をつけ、又後身頃を左に除けて前身頃の標にうつります。前身頃には衽下り、前幅、衽附の標をして衽丈を計つておきます。

衽　表を下に裏を上にして丈をきめて裾を折り返し、衿下、裾幅、相褄幅、衿附の標をします、この時衿附では第八圖のやうに中央で二糎ほどふくらみをつけます。

縫方

袖　裏袖に袖口布をかけてから表袖、裏袖の袖底を別々に縫ひ、振八つを縫ひ合せて含み綿をしておきます。

標の附け方



第八圖

身頃　表裏の背を縫ひ、前後の胴接をして隠蔽をかけ、次に脇を縫ひ、衽も胴接をしてそれから衽附をします。次に身八つ口の留をして身八つを縫つて含み綿をしておきます。

衿附　表身頃に標を合せて衿をつけますが衿肩廻りは衿をゆるめ加減に且針目を細かくします。

袖附　袷の袖附と同じやうに表袖、裏袖を別々に附けます。

綿の入れ方

全部裏返して前身頃を中に表の後身頃が上になるやうにおきます、袖も自然裏袖が表袖の下になります。そして眞綿を引きその上に綿を入れますが、身八つ、振八つのところは含み綿がしてありますから、そこだけ切り取つて綿の厚くならないやうに且つ離れないやうに兩方から伸し合つて重ねてつないでおきます。

それから眞綿を引いて肩から手を入れ、裾山を持つて引き返し、前身頃にも入れます。よく入りましたら表に返して綿を落ちつかせ裾、衿下、衿附に假躾をかけておきます。

綴　表に針の出ないやうに中綴（表と裏の縫目を抄つて綴ぢる仕方）を、衽附は裾から八〇糎位上まで、脇は身八つ口まで背は上まで綴ぢます。

絎け附　衿、袖口、衿下をそれ〴〵絎けつけます、但し衿には芯綿を平らに入れます。

掛衿　最後に出來上り圖のやうに掛衿をかけます。

七、被布の部

本裁女物綿入被布

用布は袷羽織と同じやうに表が一反に裏が四五、六〇糎要ります。仕立方も大體羽織と同じでありますが、衿が小衿と竪衿とになつてゐますだけが異つてゐます。

仕立上寸法

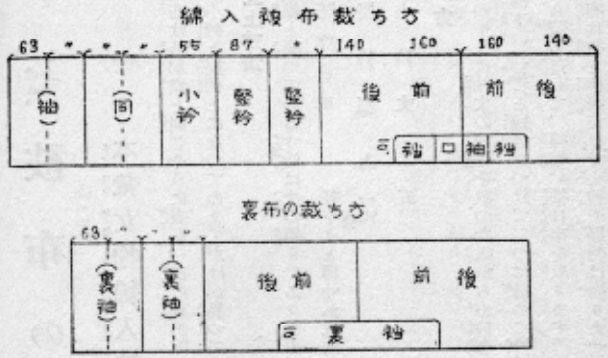
羽織と異つてゐる寸法は次の通りであります。

竪衿下り	衽下りと同寸か或は一、二糎多く			
竪衿幅	上 一四糎	同	下 一五糎	
小衿丈	五三	小衿幅	一三	

裁方

圖のやうに袖丈の四倍を取つた次から小衿布一枚と、竪衿布二枚を取りその殘りを二つに折り、更に前後の差（前下の二倍）と繰越をつけて二つに折つて衿肩明を明けます。そして羽織と同じやうに前身頃は衿肩明の通りから裁ち落して、襠布、袖口布を取ります。

裏布は袖と胴裏だけで小衿や竪衿は要りません。



第一圖

標附け方

袖　袖は袷羽織と殆んど同じでたゞ綿入ですから寸法を幾分加減します。

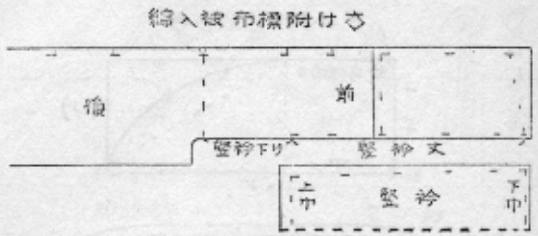
身頃　身頃も羽織と同じで表身頃の丈をきめてその上に裏布を重ね、胴接ぎの標をつけて、それから繰越をつけて前身頃の上に後身頃を重ねて附、身八つ口、背、後幅の標をつけます、次に前身頃に前下りの標と竪衿附の標をつけます。

襠　矢張り羽織と同じやうに標します。

竪衿　左右の竪衿をそれ〴〵中表に幅を二つに折つて二枚を重ね、輪の方を手前に、裾を右にしておきます、そして上部の縫代を一糎とし、次に丈の標をし、つゞいて裾幅を一五糎二粍、上の幅を一四糎二粍に標し、この二つの標をつなぐ斜の標をします。

縫方

袖　裏袖に袖口布をかけ、表袖裏袖を別々に縫つて八



第二

つ口の表裏を合せて縫ひ含み綿をしておきます。

身頃　全部の胴接ぎをして背を縫ひ、襠をつけることは綿入羽織と同じであります。

竪衿　裾の表は標より二粍外を、裏は標より二粍内を縫ひ、折は裏へ返して隱躾を掛けておきます。次に表前身頃の竪衿附の標に合せて身頃の方を手前に竪衿を向ふ側にして縫ひます。

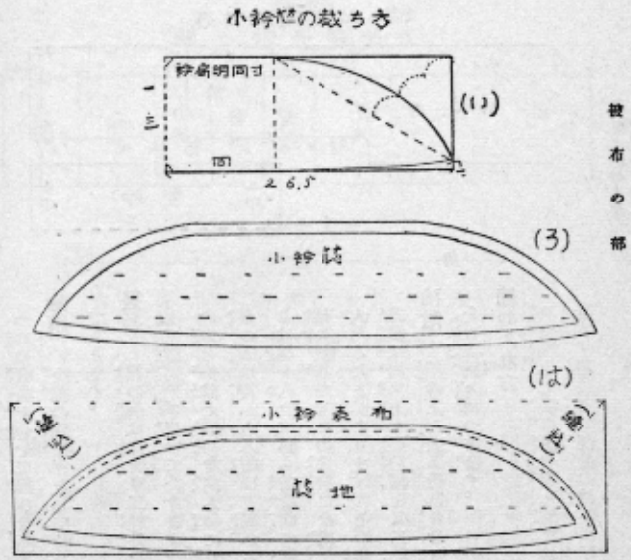
裏の方は裾から八糎ほど表からつゞけて縫ひ廻しておきます、そして殘りは綿を入れてから前身頃に縮けつけるのであります。

綿入被布でもこの竪衿には綿よりも布芯を入れる方が宜しいので芯布を入れることがあります。その時は、斉物の三つ衿芯を入れる要領で入れ芯幅は出來上り竪衿幅より二粍せまく裁ち切ります。

袖附　襠の上を表裏縫ひ合せ留をして身八つ口を縫ひ、含み綿をして袖を表裏別々につけます。

綿の入れ方

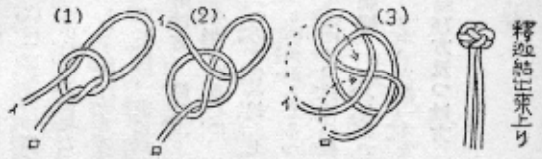
全部裏返し表の後身頃を上にして平らに綿を入れます。竪衿にも綿を入れます時はこの部分の綿がにげて引き返し難いですから、衿先二、三ケ



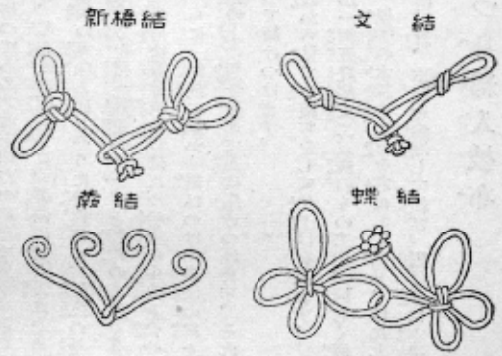
第三圖

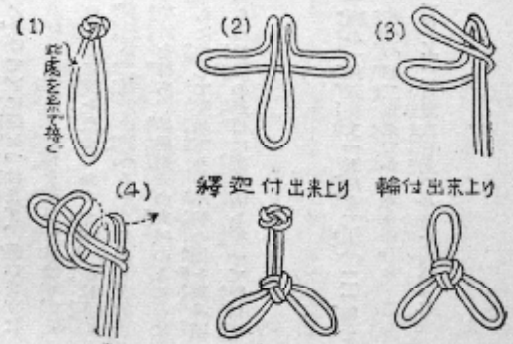
所に引糸をつけて返します。全部綿が這入りましたら表返して裾に假綴をし竪衿附の縫目を中から綴ぢつけ竪衿山を縫ひます。

小衿　先づ芯布を第三圖(い)の寸法に二枚裁ち、その中一枚は周りを一掬だけ小さく裁ち落しこの二枚を重ねて(ろ)圖のやうに假綴をします、次に小衿布の裏側を上に平らにおいてその上に芯布を耳の端を揃へて重ね、芯布と表布とを平らに假とぢして、それから表布の幅を中表に二つに折つて耳を揃へます、表幅の廣い分は衿山の方で縫ひ込むや



第四圖





第六圖

うにします。附の方は芯布と揃へ一杯にします。

次に二枚芯の中廣く裁ち切つてある芯布を四枚の縫代で廻り（附の方を除けて）に標をつけます、縫ひますに小衿の裏側になる方と、芯布とは標通りに、裏側になる方はぐるり八枚づゝ標より内側を縫ひ合せます、そして丸味のところは元縁袖の丸味と同じやうに縫縮めて、縫込の皺みは平らに裏を取つておきます。折は裏の方に向け、表に返して附の方を揃へ軽をかけますと縫代の方はぐるり裏衿が二枚だけ揃へるやうになります。

附け方　縫ひ上りました小衿は裏身頃の背縫に小衿表の中央を合せて待針を打ち、衿肩廻りの丸味のところは小衿をゆるめに、他は平らに一針抜に細かく縫ひつけ、身頃の綿を平らに伸して竪衿下りと小衿の間を裏身頃の方に含み綿をして竪衿の上の角を留めて裏は綿けつけます、それから小衿附の縫目に表身頃を被せて竪衿下りの角からぐるつと廻つて綿けつけます。

次に背、前褄の縫目を裏から見て中綴ぢをして仕上げをします。

飾紐　表と共布で一幅か一幅五糎幅丈二五糎のもの二本、同じく幅一糎か一幅五糎丈二五糎を二本、二一糎を一本、六糎一本を裁ち、似寄の木綿糸二本を芯にして撚りぐけにして共色の羽二重糸でかゞります。

結び方及つけ方　第四、五、六圖を參照して結び、附け方は本書二百七十二頁單衣合羽のやうに附けます。

仕立上寸法

四つ身綿入被布

袖丈 長袖	六〇糎	袖丈 元禄	三五——四〇
袖口	一七	袖附	一九
袖幅	三〇	身丈	九〇
後幅	二七	竪衿幅	一二
竪衿下り	一五	衿肩明	七
褄幅 上	二・五	小衿幅	八——九
褄幅 下	六		
前下り	三	竪衿と小衿の間	三

裁方

第七圖のやうに表は前身頃から下前竪衿と小衿を取り、後から褄と袖口を取ります。

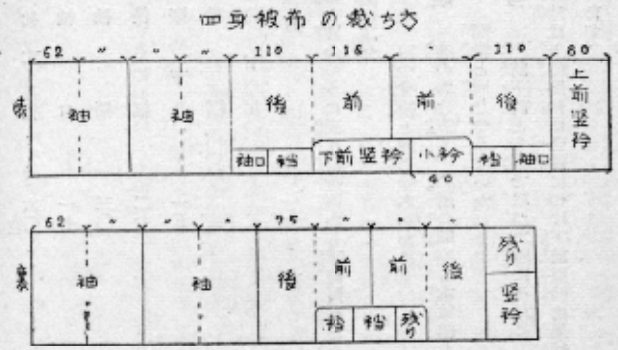
標附け方

四つ身袷と同じであります。

身頃　布のおき方も、標附の順序も本裁綿入被布と同じやうにしますが、たゞ寸法をつめます。

褄　羽縫と同じやうにいたします。

竪衿　上前下前とも幅で取つた時はそれ〴〵幅を二つ折にして重ね丈、幅の標をつけますが圖のやうな裁ち方の時は上前竪衿は普通につけ下前竪衿は裏衿を接ぎ合せ、丈を二つ折にして輪の方を縦にして、丈幅の標をつけます。



第七圖

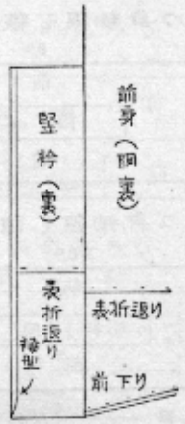
縫方

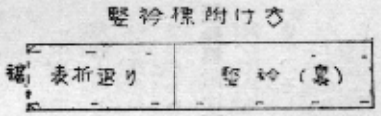
袖　綿入羽織と同じであります。

身頃　胴接ぎの仕方、背の縫ひ方、襠のつけ方、前下りの縫ひ方、袖附など皆羽織と同じであります。

竪衿附　竪衿の丈を標通り縫ひ合せ、裏の方に折りて隱躾をかけます、そして上前身頃の竪衿附の標に合せて縫ひます、裏側は全部を縫はずに裾から一〇糎位のところまで〻縫ひ留めておきます。この明きは綿を入れてからの返し口になるのであります。

下前は裾が輪になつてゐますからこゝを前下りの山に合せるのでありますが第八圖のやうに先きに竪衿幅の山を表裏縫ひ合せておきます、この時表は標より四粍淺く、裏は四粍深く縫ひ裾の方一糎五粍の間で丁度本裁女物の廣衿の先のやうに褄形にしておきます、かうしますと、裾の方は褄形になつてそこから上は裏衿が表衿より八粍だけ見返へることになります、かうしてから丈を縫ひ合せ上前竪衿と同じやうにつけます。次に身八つ口、振八つ口に含み綿をしておきます。





第八圖

綿の入れ方

身頃の布裏を外に出し、表身頃の後と裏身頃の後との間へ前身頃を疊み込み、表の後身頃を上にして平らにおきます。

入方は本裁と同じ要領で入ます。

絎け方と仕上げ

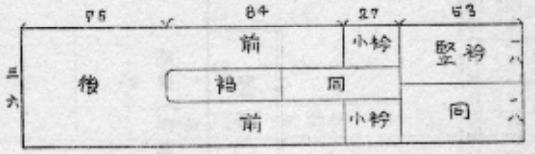
全體に綿が入りましたら平らに綿を落ちつかせ裾を荒く假綴しておきます、それから、背と、前襠の竪綴ぢをし、次に裏竪衿の縫ひ殘しを縫ひます。

次に竪衿の上部を着物の衿先を縫ふ要領で縫ひ表に返して竪衿附の際を四ツ留して小衿下を絎けつけます。

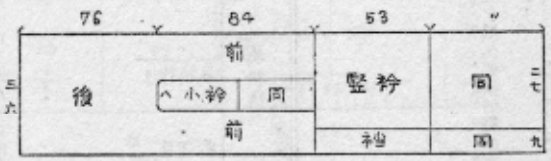
袖口明もつゞいて絎けつけます。

小衿附　寸法が小さくなるだけで小衿の縫ひ方、附け方は本裁と同じ方法で縫ひ上げます。

一つ身袖無し被布の裁ち方



一つ身袖無し被布の裁ち方



第九圖

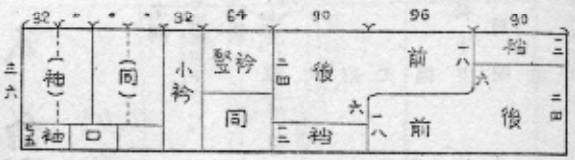
飾　上前は竪衿先の端と、竪衿附の端口につけ、下前は附の端のところに輪を一つ、幅の端に蹲踞結を一つつけ、上前竪衿附の端の裏へ輪を一つ附けます。

小裁被布

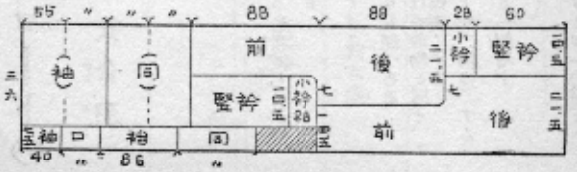
一つ身、三つ身などの小裁被布はその仕立方は大體本裁物と同じでありますが、竪衿を一幅布を用ひませんので裏をつけることゝ、上下の幅の違ひの斜を附の方でつけないで紐けの方でつけるのが異つて居ります。

竪衿標附け方　表の竪衿布二枚を中表に揃へ裾を右に附を向ふにおきます、そしてその上に裏衿布二枚を矢張中表にして衿の上部になる左端の方を揃へて四枚重ねます、それから上部の縫代を一緒に標し、竪衿丈を計つて余分に折り返して裏に重ね胴接のやうに接ぎの標をつけます、次に幅標は附になる方は眞直ぐに一糎の縫代をつけ、

三つ身被布の裁ち方（袖線元）



三つ身被布の裁ち方（長袖）



第十圖

縮の方で裾幅と上の幅との差をつけて斜に標します。

竪衿縫ひ方　表裏の接ぎをして、表の竪衿下りから裏の竪衿下りまですつとつけ、ぐるつと縫ひつけ、折は竪衿の方に折り、全體の縮入がすんでから竪衿下りを衿先の留と同じやうに留めて、表布を出來上り幅の標通り裏へ折り返し、裏布は標より四粍控へて折り、竪衿の上を裏布の幅の折まで縫つて表に返し、竪衿の裾の方は裏幅を控へただけ裁形にして丁度女物廣衿衿先のやうに紐け上げます。

八、合羽、コートの部

女物單衣合羽

各部の名稱

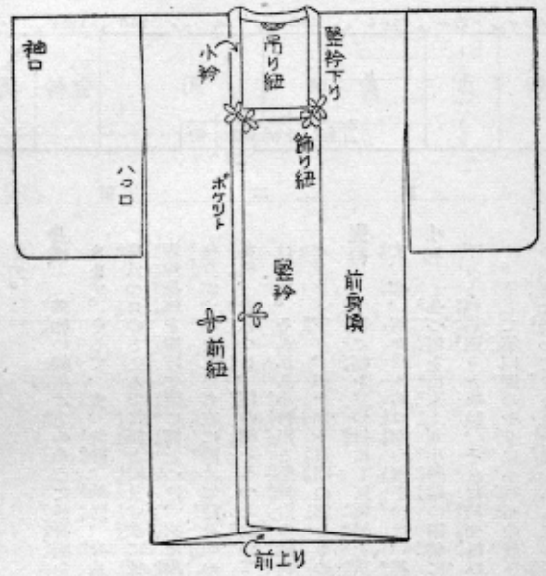
第一圖を御參照下さい。

仕立上寸法

長着の寸法をもとにして次のやうに增減します。

袖	丈	五粍增す
袖	附	一糎多くする
身	丈	着丈より五粍つめる
後	幅	身八つ口で着物と同寸、裾は二糎廣くする
竪衿下り		衽下りより二糎多くする
衿	肩明	着物より一糎增す
繰	越	一糎
ポケット下り		竪衿下りより一〇糎下へ
袖	口	五粍增す
袖	幅	四粍廣く
身八つ口		九糎五粍
竪衿		衽幅と同寸で一五糎
小衿幅		一六糎
衿		二糎
前上り		長着より四粍廣くする
ポケット口明		二糎
		一四糎

第一圖　女物單衣合羽各部の名稱



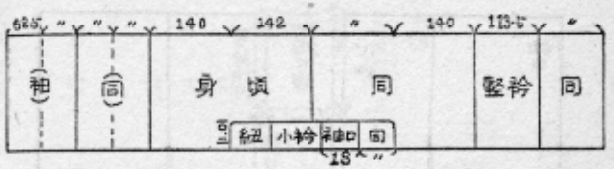
裁方

第二圖のやうに羽織の裁ち方とよく似てゐて、衿を二つ取つて兩前の竪衿とします。

標附け方

袖　袖下を袋縫にしますが、地厚物の時は折縫にしますから、袋縫の時は普通の單物の袖と同じに、折り縫の時は袖を五粍づらして中表に折つて兩袖を向ひ合せに重ねておきます。そして寸法通りに袖丈、袖口、袖附、袖幅、山、丸味の標をつけます。

本裁單衣合羽の裁ち方



第二圖

袖口布は袖と重ねないで別にしておいて、丈、袖口明、幅、山等の標をつけます。

身頃　着物の標附け方のやうに後身頃を上に衿肩明を左手前にして重ねておきます。そして、丈、背縫、袖附、身八つ口等の標をつけ、つぎに幅の標は身八つ口のところで後幅と同じ寸法に標し、それから裾までの間で自然に二糎程身幅を廣げて斜に標をつけ、次に肩幅、裾裕の標をつけます。

後身がすみましたら左に除けて前身頃の標付にうつります。

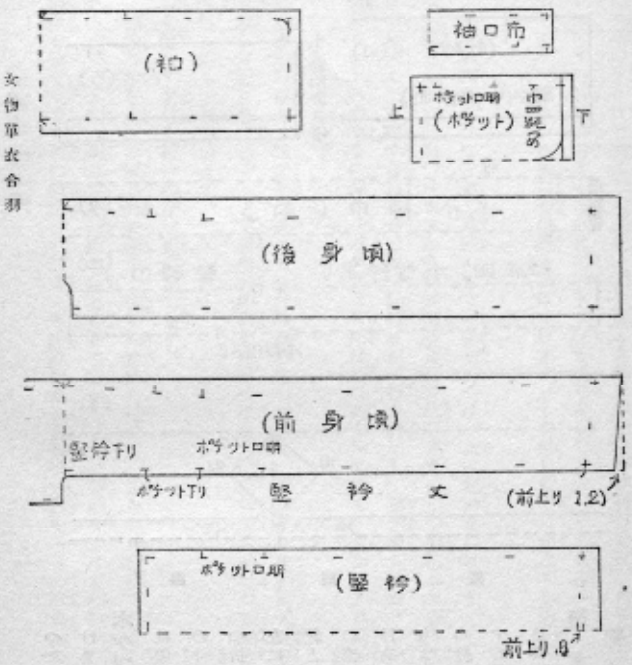
袖附、身八つ口、幅の標をうつし取つて裾に一糎二粍の前上りの標を斜につけます。それから小衿附と竪衿附の縫ひ代を一糎に標し、つゞいて竪衿下りポケット下り、ポケット口明の標をもつけます。

竪衿　中表に幅を二つ折にして兩衿を重ね輪の方を手前におきます。そして丈、幅、ポケットの口明の標をつけ、裾に八粍の前上りの標をつけます。

小衿　先づ幅を出來上り小衿幅の四倍に正しく裁ち切り、丈は竪衿幅に竪衿下りと衿肩廻りと繰越、それに衿先縫ひ代とを足して二倍した寸法に切ります。そして第四圖のやうに小衿布の縫ひつける方を一糎に折り、次に小衿幅の二倍に折つて又それを眞中から二つ折にして出來上りの小衿幅にたゝみます。かうして疊みました物の丈を二つに折つて(に)のやうに山、丈、額縁の標をつけます。

額縁の標は山から衿肩廻りと竪衿下りの寸法だけを計つて中央に假に標をつけその標から左右へ小衿の幅だけを計つて斜に標をつけます。若し下の方に標の

標附け方圖

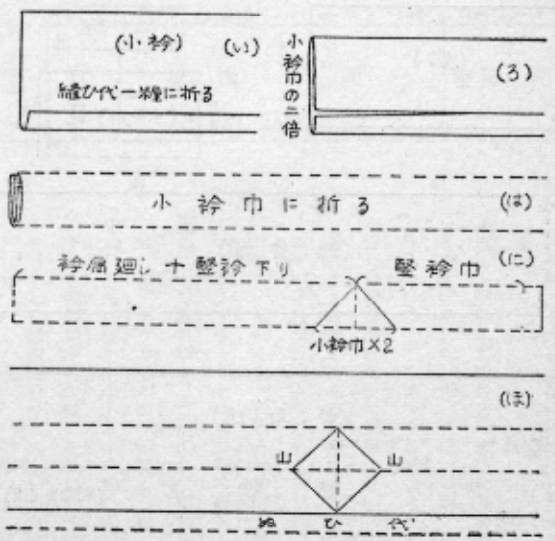


第三圖

つき苦い時は左右を別々につけます。

ポケット　長さ三〇糎、幅は竪衿幅に縫代を加へただけの寸法に裁ち切つて、幅を二つ折にして輪を手前に上部を左におきます。上の縫代は八粍として、次にポケット下りの標とポケット口明の標をつけます。幅は竪衿幅の出來上りより四粍狭く標します。下の縫代は八粍の深さに平らにするか、或は丸味をつけるかします。

第四圖



縫方

袖　單衣羽織の袖と同じやうに袖口布の下を伏せ縫にし、表袖と袖口布とを袖口の明きだけ縫ひ合せ、袖裾のやうに袖口の留をして、袖下を袋縫にする時は浅縫をして次に袖口留の下から袖を縫ひます。この時袖口布の表までは四つ縫にして縫代は自然に折り、それから袖口布の裏を縮けつけます。この針目は表に出ますから出來るだけ小さく出すやうに注意します。

身頃　本裁單衣のやうに背を二重縫にして肩當布をつけ、次に竪衿をつけます。

竪衿は脇縫をしない前につけますから前身頃の褄縮け代を先きに三つ折にして假りに鉄で押へておいて、竪衿で前身頃を挟んで丈標や合標を合せて一針抜きか、抄ひ針にして竪衿をつけます。次に下前は縫からポケットの口明までを上前のやうに縫ひ、ポケット口明は縫ひ殺しておいて、口から上は竪衿の表と身頃と二枚を縫つてポケットをつけます。

竪衿の下は丈の標より四粍先を縫つて縫代は裏の方へ折つて、縫ひ込を竪衿附の縫ひ目にとぢつけます。そして引き返して折りを正しくし、下前竪衿の裏を縮けつけます。竪衿上の縫代は表裏とも竪衿下りの標から三角に内へ折り込んでしまいます。

次に脇を縫つて縫代を縮けつけ、褄縮をします。

小衿　縫線の角を先きに返し針で細かく褄の間だけを縫つて、縫ひ目は割つて鋏をかけておきます。それから縫代を折つて、小衿の角と、竪衿附の角を合せて留をします。留の仕方はまづ竪衿下りの角から針を出し、小衿の縮線を極く小さく布の繊糸一、二本とも思はれる位を抄つて針をもとの穴の直ぐ近くへ出して裏で結んで

切ります。額縁のところは中から縫ふことは困難ですから額縁のきわ二糎ほどの間は掛け接ぎの仕方のやうに接ぎ縫にします。（然し普通木綿の合羽地などの場合は額縁を先きに作らないで小衿を全體縫ひつけて、後から角を作る仕方にもします。）全體に待針を打ち、衿肩の丸味のところは羽織衿附と反對に小衿の方を釣加減にして、下前竪衿先から縫ひ初め、地質によつては一針拔か又半返しに縫ひます。

折は小衿の方へつけて吊紐をつけ、小衿の裏を絎けつけます。

次に袖附の始め終りに抄ひ留をして袖を附け、つづいて身八つ口を絎け、終つてから各留のところに閂留をしておきます。

飾紐の附け方

上前の左小衿角に玉附の飾紐を下にしてつけ額縁を中心にしてそのまわりは表に針の見えないやうに絎けつけます。

下前も上前と同じやうにします。内側は下前竪衿角に玉ばかりついた紐をつけ、上前小衿裏に向ひ合せてこれをかける輪をつけます。

腰紐は上前竪衿丈の二分の一よりも四糎上つたところに玉附の飾紐をつけ、下前身頃に之れと同じ高さの竪衿附から四糎離れたところに輪の紐をつけます。

裏紐は下前の竪衿端と上前脇の縫ひ込とに腰紐よりもまた四糎上つたところに幅二糎、丈三〇糎ほどの絎紐をつけます。

女物道行衿袷半コート

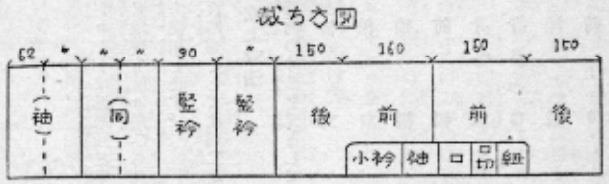
半コートは近來殆ど年中着られるやうになりまして、時期により、着用の場合によつて袷にも、單衣にもし、又地質も種々用ひられます。銘仙、お召、紬、錦紗、紋バレス、金波など羽織地として用ひられますものは大方使用します。

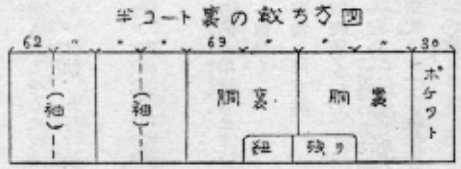
裏用布としては羽二重の紋、友禪物、甲斐絹、八つ端などを選びます。

仕立上寸法

着物の寸法を元として次の通り增減します。

袖丈	一糎長く	袖附	一糎多く
袖口	着物と同寸法	後幅	身八つ口の所では着物と同寸にし裾で二糎廣くする
袖幅	四粍廣く	肩幅	着物と同寸
前幅	一ぱい（脇縫の方は裾で二糎廣くなる）		
身丈	着丈より二〇糎位短目にし、羽織よりは七糎位長く。普通一一〇糎位		
身八つ口	一〇糎	小衿幅	二糎
繰越	二糎	衿肩明	着物より一糎增す
前下り	三糎	竪衿幅	一五糎





第五圖

竪衿下り　衽下りと同寸
ポケット　竪衿下りより一二糎下
ポケット口明　一四糎

裁方

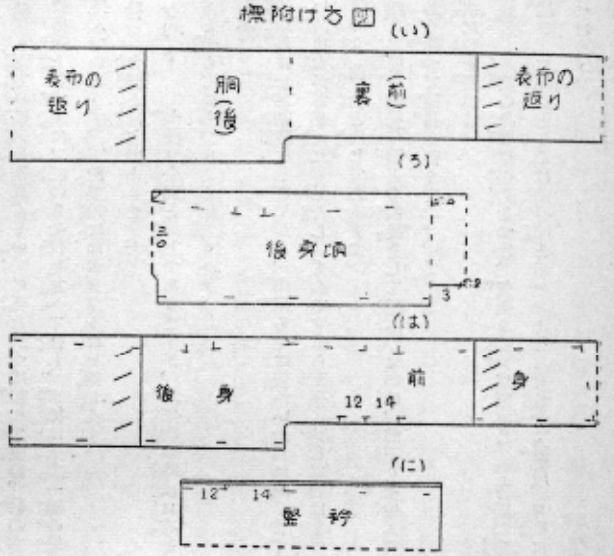
表布の裁方は大體羽織の裁ち方と同じで、羽織の衿が竪衿にかはつたと見てよろしいのであります。けれども羽織のやうに襠布は要りませんから、前身頃から裁ち落した物は小衿、袖口布、ポケット口布等にして、薄地物などの時はその殘りから飾紐を作ります。

第五圖のやうに袖丈の四倍を取つて次から竪衿を出來上り身丈より二〇糎ほど長く二枚取り殘りを二つに折り前後の差を一〇糎位つけて又二つに折ります。

胴裏の用布は普通羽織より三〇糎位長く要ります。しかしポケット布は別布でも宜しいのであります。

標附け方

袖　本裁女物袷と同じでありますが、地質によつて



第六圖

幅の増減をいく分加減しなければなりません。

身頃　表用布を中表に二つに折つて羽織のやうにおき、胴裏をこれに重ねて肩の通りに假躾をかけ、丈を計つて表身頃を胴裏に折り重ねます。そして矢張り假躾をして第六圖(ろ)のやうに後身頃を前身頃に重ねます。それから背、袖附、身八つ口、後幅の標をします。このコートの後幅は寸法の所に記しましたやうに裾で二糎廣くなりますから、身八つ口から裾の間は斜めに縫の標をつけます。

前身頃に前下り、竪衿下り、ポケット附の標をつけます。

竪衿　前方の竪衿をそれ〳〵中表に幅を二つに折つて重ね、輪の方を手前に裾を右にしておきます。そして幅は出来上り寸法に二粍のきせ代を加へて標し、丈標は上で一糎の縫代を取り竪衿丈を標して長い分は衿で縫ひ込んでおきます、下前竪衿にはポケット口を標します。

小衿　合羽と同じであります。

ポケット　矢張り合羽と同じでありますが、堆厚物の時は口布を同じ幅、同じ丈に切らずに少し差をつけきすと平らにおちつきよく仕上ります。

縫方

袖口外は全部割縫にしますから、出来るだけ細かい針目に縫ひます。なほ余がつれてゐると縫目が縮み、ゆるい時は穴があき何れも見苦しいものですから充分注意して縫はなければなりません。

袖　女物袖と同じであります。

身頃　前身頃後身頃とも調接をして醼襞をかけ、前下りを縫ふことは羽織と同じであります、次に背縫を細かく縫つて縫目を割ります。

次に脇を縫ひます。

竪衿　上前の身頃に竪衿をつけ、矢張り縫目は割ります。下前の方は身頃と竪衿とを合せポケット口を明けて縫ひ、口明のところは前身頃とポケット布とを合せて縫ひ、口明に留をしてポケットの底を縫つて縫目を縫ぢつけます。

縦とぢ　背と脇の縫目をとぢて、脇の上に四つ留をして身八つ口を縫ひます。

袖附　袷のやうに表裏の袖をつけ、縫目は割つておきます。

次に竪衿の下を縫つて、地質によつては芯を入れ竪衿幅を身頃の縫代にとぢつけ、裏身頃をその上に細かく綴けつけます。

小衿附　角の額縁を作つてから身頃に合せてつけ、角は返し針にして直角になるやうに縫ひ、縫目を割つて若し角の落付の具合の悪い時は角に切込を入れて正しく整へ、裏の竪衿上部と、裏身頃をくけつけます。

紐附　前身裁ち落し布で幅二糎、丈三〇糎位の紐を二本新けて、竪衿丈の中央から四糎上つた位置で裏の方に紐の縫目を下向にして一本をつけ、もう一本は上前の前幅三分の一だけ脇によつたところで、高さは下前と同寸につけます。

飾紐は共色の打紐か表地の裁り布を細く裁り縮にして好みの形に結んで合羽のやうにつけます。

撚り新は一糎か一糎五粍幅位に切つた布を、紙撚のやうに撚りながらまつり縮にするのであります。

本裁長コート

仕立上寸法は袷半コートと同じでありますが、身丈は着物と同寸か或は四糎位まで短くします。

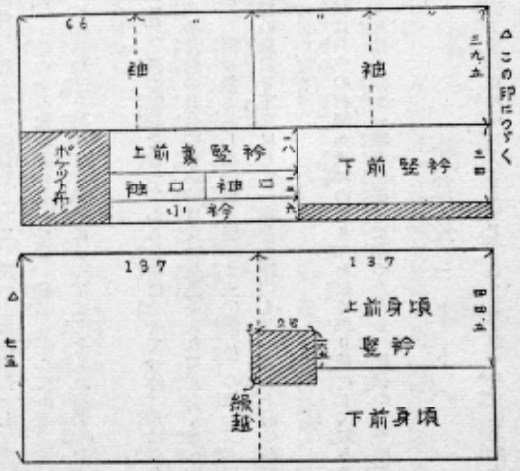
裁方

コート地は普通二幅物が多くありますが、ラシャ、サージの類になりますと四幅物などで裁つこともあります。

二幅物の時は袖丈の四倍と出来上り身丈の二倍と裾の折り返し分を用意いたしますが、四幅物になりますと出来上り身丈と裾の折り返し分の二倍あれば足りることになります。

第七圖のやうに二幅物の時は布の端から袖丈の四倍をとり縫りを身頃にします。身頃はまづ幅を二つに折り更に丈を二ツに折つて肩山のところに一寸印をつけ、一旦これを伸して(一回だけ二つ折のまゝ)第八圖上のやうに衿肩を九糎五粍と印し次に前身頃に竪衿下りを二五糎と標し、後身の方に繰越を三糎と標し肩の丈味を剥つて胸明だけを裁ち落します。羽織ですとこゝから眞直ぐに裾まで前を裁ち落しますが、毛織地のコートは上前の前幅と竪衿とはつゞけておきますから胸明だけを切り落しておきます。

第七圖



次に二つ折にしてある幅を第八圖下のやうに擴げて上前の表竪衿の一六糎五粍を前幅につゞけて、それだけに胸明から裾まで眞直ぐに裁ち分けます。すると上前の幅は四四糎五粍になり、下前は三〇糎五粍になります。但しこの寸法は布地によつて多少のちがひがありますが、竪衿幅だけはこれよりつめることは出來ません。

次に第七圖上のやうに袖を取つた殘りから下前竪衿、上前竪衿裏、袖口、小衿、ポケット布などを取ります。第九圖(いろは大幅物の裁ち方で、(は四幅物の裁ち方であります。

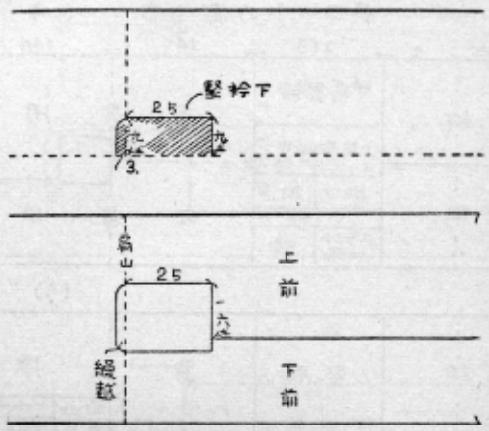
肩當布　普通の羽織裏と同じ裁ち方にして、六〇糎位つけますから並幅物で二四〇糎位用意します。

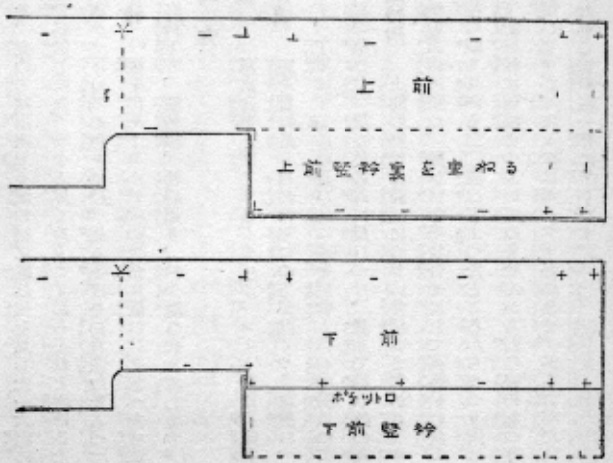
なほ袖に裏をつけることもあります。

標附け方

表にして裁ち目、袖口になるやうに、外袖を一糎長くしてそれ〳〵折り重ね、單衣合羽と同じやうに標

第八圖





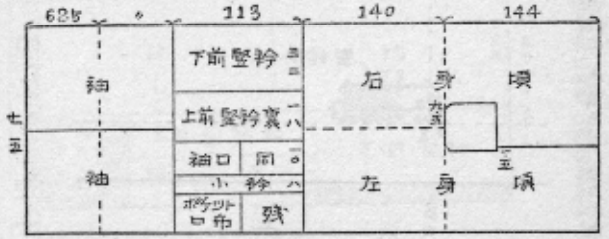
第十図

をつけます。

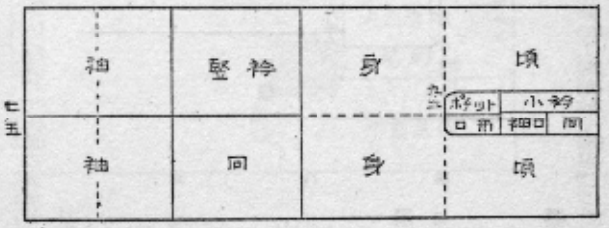
身頃　着物の標附のやうに後身頃を上に裾を右手において正しく重ね、山、丈、袖附、身八つ口、後幅などの標をつけます。脇の標は身八つ口のところから裾（丈の標までの間で自然に二銅程身幅を廣げて斜につけます。次に褄の折込み標をします。それから後身頃を左に取り除けて前身頃に袖附、身八つ口、脇の標をうつし取ります。次に第十圖上のやうに上前竪衿に上前竪衿裏を重ねて竪衿幅と上の縫ひ代の標をつけ褄の標にうつります。裾は脇から二糎の切り上げをしますから、その標をつけます。

今度は下圖のやうに上前を除けて下前に下前竪衿附の標をつけますが下前竪衿は三四糎幅に裁つてありますから幅を倍二つに折らない

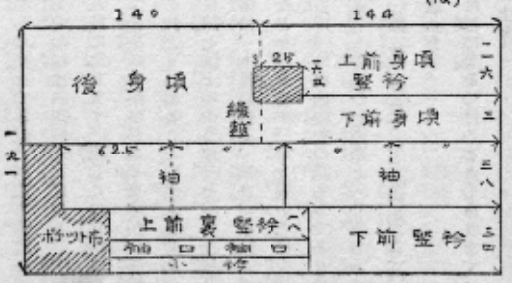
長コートの裁ち方　(い)



(ろ)



(は)



第九図

で、表の方は出來上り竪衿幅に縫ひ代を足した一六糎にし、裏になる方を一八糎にします。これは竪衿の縫ひ目が同じになりますと厚くなりますからそれを避けるために少し幅を違へるのであります。さうして幅、丈、ポケット口明の標をつけ、切り上げを前身頃にならつてつけます。

小衿　幅を出來上り小衿幅の二倍に縫ひ代を加へた寸法か、又は小衿幅の四倍として標し、丈は二つ折にして竪衿下り、竪衿幅、衿肩廻り、衿先縫ひ代を標します。

縫方

袖　單衣合羽と同じでありますが、コートには毛織物が多い故丁寧に仕立てます。

身頃　脇を標の通り自然に裾口の方が開くやうに縫ひ、裾縫をかけて縫ひ込を身頃にまつり裏に伏せておきます、丁寧にするには縫ひ込の端を肩當と共布で縁取つておきます。その仕方は縁布を幅二糎に裁つてこれを四枚の縫ひ代で縫ひ込の端に縫ひつけ、縁布で縫ひ込の端を包むやうにしてまつり附けるのであります。

竪衿附　上前の竪衿は前幅につゞいて居りますから、すぐに裏の竪衿を縫ひつけます。そして裏の竪衿を表竪衿の裏側に重ね、縫ひ目を毛抜合せにして裏竪衿の奥の方の端を身頃の布裏へ細かくまつり附けます。こゝは縫の裁ち切から二〇糎ほど上つたところからまつり附けます。

下前竪衿は前幅とつゞいてゐませんから別の竪衿をつけるので、まづ前幅と竪衿布とを合せて一糎の縫ひ代で縫ひますが、こゝにはポケットがつきますから口明だけ殘して附けます。そして縫ひ目を割つて鎧をかけ、それから竪衿幅一杯に折ります。

ポケツト附　ポケット布の口明だけを殘して他を縫つて袋にし、口の一方を前身頃に、一方を竪衿に合せて縫ひつけ、竪衿の方の縫ひ目は毛抜合せに、身頃の方は割つておきます。そして口の上と下を内側から縫ひ目の通り縦に一針抄つて結んで留めます。それから袋の縫ひ目を竪衿の縫ひ代に綴ぢつけ、上と下は表に針目が出ますから表と同じ色の糸で見えないやうに綴ぢつけておきます。

小衿附　下前の表竪衿の端から附け始めます、要所〳〵に待針を打つて縫ひ始めますが、小衿附は縫ひ目を割りますから出來るだけ細かい針目で竪衿附の角まで縫ひましたら針を抜いてよく糸をとき、小衿の方から竪衿と前身頃の角へ針を通して繊糸二、三本を抄ひ、又小衿の方へ針を返して一針抄ひ留をしますとこゝの角がきつちりと出來ます。それから胸明のところは竪衿附の眞直を通して割縫にし、衿肩の丸味は縫ひ代を淺くしますが、羽織の衿のやうにゆるみをつけますと、出來上つてから小衿がゆるくなりますから平らに合せて縫ひます、そして上前の方までつゞけて縫ひますが、上前の竪衿は前身頃とつゞいてゐますから角のところに前の切り込を入れておきます。そして下前と同じ要領で縫ひ、縫ひ目を割つて鎧をかけ、裏竪衿の縫ひ込を折り角は三角に折つておきます。

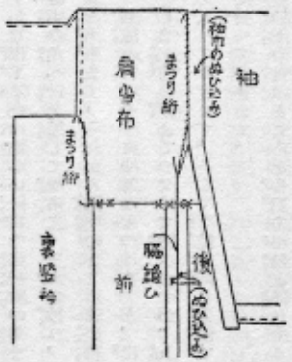
表に竪衿附の角のところを合羽の小衿と同じやうに三角に縫ひます。

表に小衿を縫けるのは後にして袖をつけ、肩當をつけます。

袖附　普通の着物のやうに折り附にせずに開いて割り縫にし、袖の方は、振八つから袖附の縫ひ込までをすつかりまつり伏にしておきますが、身頃の方は肩當布の下になりますから別に伏せる要はありません。

肩當　背脇を縫つて縫ひ代は割つて裾は細く三つ折縫にしておきます。

それから衿脇の縫ひ代を綴ぢ合せ、身八つ口を縫ひます、次に衿肩から胸明のところを表裏よく平らに揃へて小衿の縫ひ込の上に假縫をし、胸明から下の肩當布前幅の裁ち切は竪衿附の縫ひ目の上にとぢておきます。それから袖附の廻りを袋にならないやうに平らにして綴ぢつけ、丈を揃へて脇縫、背縫の下を千鳥にかがつておきます。



第十一圖

裾絎　身丈を寸法通りに折つてまつり絎にします裾絎は表竪衿の幅一杯まで絎け、裏竪衿の先は裏竪衿を絎ける時つけて絎けます。下前の裏竪衿は表竪衿より幅が二糎だけ廣くなつてゐますから絎け目がそれだけ身頃の方へ寄ることになり、自然竪衿の縫ひ目が隱れることになります。

吊紐　肩當の共布を斜布で三糎幅に取り、これを四つに折つてまつり、七、八粁位の細い紐を拵へます。まつりながら三日月形に伸して、これを輪にしてまつつた方を内側にして小衿の縫ひ込で肩當、背縫の上へ縫ひつけ、上から小衿を絎けつけます。仕上げをして飾紐をつけて出來上りとします。

ヘチマ衿コート

裁方

第十二圖の如く大幅のまゝで袖を袖丈の二倍だけ取り、次に竪衿、小衿、袵口等を取り殘りを身頃とします。身頃の布は幅を二つ折にして肩山の印をつけ、それから胸明を二五糎（衽下りより二糎位多く）と印し、肩山の通りで衿肩明を九糎としてそこから前へ胸刳をつけます。後へは繰越を三糎つけておきます。

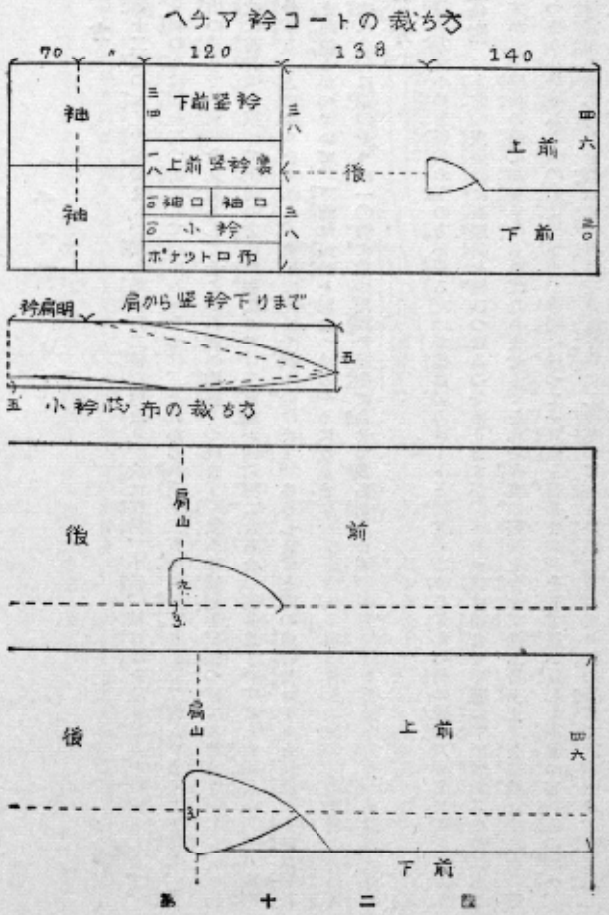
次に前身頃を拔げて上前の方は胸刳につゞけて前幅が四六糎になるまで刳ります。すると大抵肩から三八糎内外下ることになりますから、こゝで裾まで裁ち分けます。さうしますと前の道行衿コートと同樣に上前は竪衿と前幅とがつゞいて、下前は竪衿を別につけるやうになります。

次に小衿は圖のやうに一〇糎に裁つた物を芯型に合せて裁ち切ります。

縫方

縫ひ方は小衿と竪衿の上の方が異るだけで他は前のコートと同じでありますから衿の說明だけします。

竪衿附　上前の表竪衿に裏竪衿を縫ひつけるのでありますが、ヘチマ衿は前合せを疊針で留めるやうにしますから、竪衿の端に細掛を作らねばなりません。それで表裏の竪衿を合せて縫ふ時上まで全部縫はずに上の方つまり小衿先から四〇糎位下まで普通に縫つて一旦糸を留めます。そして縫ひ殘した表裏の竪衿布の間へ、肩當布の裁ち落しを幅六糎、長さ三八糎位に二枚切つて各々外表に重ねて八糎の縫代で縫ひ附け、裏に返し



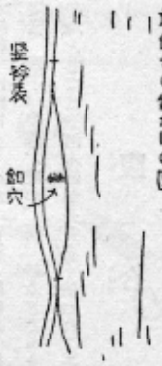
第十二図

合羽、コートの部

て挾み、別々に竪衿布とこの中布とを縫ひ合せ、竪衿布の方を四粍見返へるやうに中布の方に折をつけて返し平鏝をかけます、そして中布の奥の縫ひ代の出ないやうに竪衿布に綴ぢつけ、釦穴は裏竪衿の方へ明けるのでありますから、小衿先の直ぐ下に一つ明け、それから下前のポケットロの下に見合ふところに一つ、それから一五糎下つて一つ都合三つ明けて穴かゞりをし、穴と穴との間は一寸綴ぢ合せておきます。

下前の竪衿は表裏つゞいた別布がつくのでありますから表竪衿になる方を前身頃につけて道行衿と同じやうにポケットロを明けておきます。

小衿　先づ小衿芯を一枚裁つて、これを幅二つ折にした小衿布の上にのせて標をつけ、表は標通りに、裏は八粍内側を縫ひ、芯は縫ひ目の上を四粍裁ち落し縫ひ目は裏衿の方へ返して表に引き返します、すると表の衿が四粍裏の方へ見返へるやうになりますから、上からよく平らに鏝をかけてしつかりと衿を捨へておきます。



第十三図

衿附　まづ身頃の表布の上に小衿裏が重なるやうにし、小衿の先は竪衿の折山端に合せて針を打ちます、そして小衿表、小衿芯、小衿裏、表身頃の四枚を一緒に縫ひます、この衿附の加減は三つ衿の兩脇八粍ほどは出來るだけ衿をぴんと張り、衿肩廻りでは衿を心持ゆるみ加減に、胸明から小衿先へかけては平らにつけます、そして縫ひ込みは身頃の方へ返して鏝をかけ、肩當布を縫ひ目の上におきます。

九、帶の部

帶について

帶には丸帶、腹合帶、袋帶、輕裝帶、單帶などいろ〳〵の種類があります。

地質

木綿物では綿博多、小倉、更紗、綿繻珍、紙布等があり、絹物では羽二重、縮緬、繻子、博多、厚板、綿錦、縮織、緞子、鹽瀨、琥珀、絽、紗などあります。この他各種の交織、メリンスなども使用します。

芯地としては三河木綿が一番多く使はれ、その他眞岡木綿、ゴム芯なども使ひます。

腹合帶

仕立上寸法

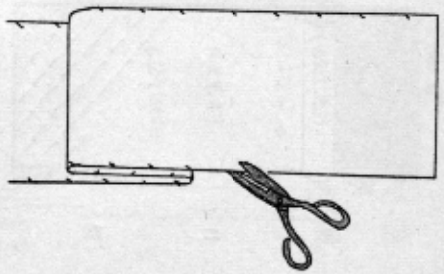
幅　二八糎——三二糎

丈　三四二糎——四九二糎

幅丈とも體格、年齡によつて加減いたします。

仕立方

地直し　帶の仕立て方の中一番大切なことはこの地直しで、これがよく出來て居りませんと折角よく縫つた帶も締狂ひが出て見苦しいものになります。その仕方は地質によつていく分づゝ相違がありますが要は布目を正しく、全體を平らにすれば宜しいのであります。



第一圖

繻子、博多などのやうに耳の吊れて居るものは裏側から鋏を當てゝ引伸しますが、尙ほ吊れて居る場合は耳へ第一圖のやうに一〇糎おき位に斜に淺く鋏を入れることもあり、時には耳だけを全部切り落すこともあります。又羽二重などによくある布目の弓なりに曲つて居るやうな時は、曲りと反對の向に幅を引張つて直し又織模樣の織糸が裏にういてゐる糸は眞中で糸を切り裏からアイロンをかけてよく平均させておきます。絞りの物は絞りの感じを失はないやうに注意して裏側から輕くアイロンをかけて幅を伸し、しばらくして絞りの戻りかけたところで布地全體に裏打をします。裏打布は表地と同色或は同色に近い色の新モスを用ひます。その仕方は第二圖のやうにまづ裁板の上へ絞の布裏を上にしておき、その上に裏打布を重ねて、表地と同色の羽二重糸で極く小針に、殆んど表に出ないやうに糸目を抄つて綴ぢます。

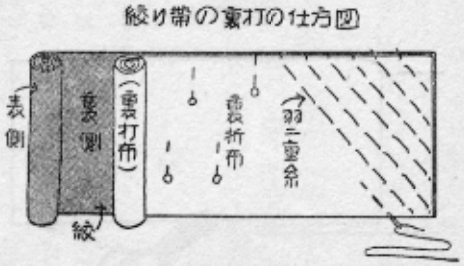
この縫ち糸はつゞけ手に幅の兩端で結び切にし、絞によつて四種――六糎おき位に斜に縫ちて參ります。

假縫　地直しが出來ましたら先づ垂の方を右にして地質の堅い物を下に、軟かい物を稍强り加減にして中表に合せ、模様や縞のある物は共の位置に注意する）て重ね、第三圖のやうに繰出しの位置をよく調べて凡そ一糎位先きの所を横の布目を通して假縫ぢをします。

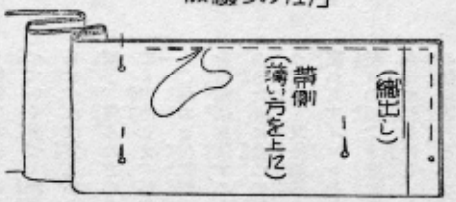
次に二枚の釣合を調べて中央に四〇糎おき位に待針を打ちます。この釣合にならつて耳の方へも針を打ちながら縫ひ代より淺い所を縫ぢ附けます。

芯地　三河木綿は丈の詰り易いものでありますから最初に充分地伸しをしておきます。

まづ布を擴げて一方の端から充分霧を吹きかけて、棒にぐる〳〵と巻き、暫くそのまゝおきますと湿りが全體に廻りますから、そこへ强いアイロンをかけると縮なだけ縮んでしまいます。



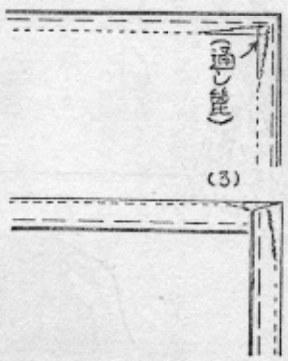
第二圖　絞り帶の裏打の仕方



第三圖　假縫ぢの仕方

標の附け方

出來上り幅より二粍廣くして輕く通し絞をします。兩端の角のところは縦横共に三糎程の間で二粍づゝ縫代を斜に擴げて標をつけます。（これは出來上りのきせ揚を角だけ多くきれいにする爲めであります。）



第四圖　（い）方向の標

注意

片側の特別長い時は繰出や模様の如何によつて、手の方七〇糎位の所で適當の縫揚をするのも宜しくあります。

縫方

丈の兩端は全部布目を通して返し針に、幅の兩側端の方は三〇糎位の間を細かく半返しに縫ひ、他は右端を斜にかけて抄ひ縫か、地質によつては丁寧に普通縫にしても宜しくあります。一方を丈の中央で引返し口の分に帶幅だけ縫ひ殘して他は全部縫ひます。

絞の帶側などは裏打がしてありますが、尚ほ丈の兩端はしつかりするやうに薄い日本紙を揉んで四糎幅位に切つたものを當て、一緒に縫ひ込みますと締めてゐて、絞が伸び出して見苦しくなるやうなことがありません。

縫ひ終りましたら縫目が詰らぬやうにぴんと張つて平烙鏝をかけ、兩端は四粍、幅の方は一粍づゝのきせで地厚の方へ折を掛け、角は幅を先に折り、次に丈の縫込をその上に折り返し、兩方の縫代をしつかりと綴ぢます。

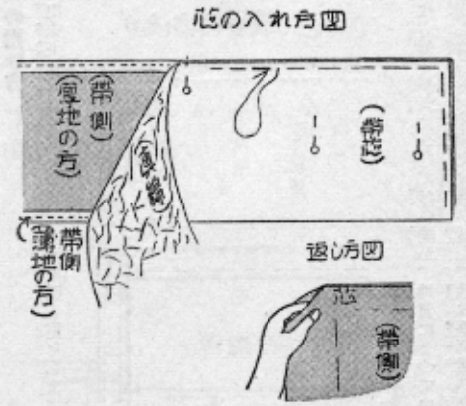
この時丈の折込を幅より心持内見るやうにします。

芯の入れ方

完全に地直しの出來ました芯地の一方の耳を眞直ぐに裁ち落し、それから出來上り幅と同寸に幅標をして又裁ち切ります。

芯の弛め加減は帶丈四〇糎に對して四粍位の割合に加へておきます。

帶の縫込の折り返つた方を上にして長く伸し、その上に裁ち切つた芯地を載せて一方の端に芯を待針で止め他の端から帶地だけを靜かに引張つて見て芯地のゆるみを定め、三〇糎おき位に待針を打つて芯を平等に綴ぢつけます。白の木綿糸で上を二糎、下を一、二糎位にいたします。芯に眞綿を入れる時には芯の一方に平らに眞綿を引き、アイロンで落ちつかせておいて、芯のぐるりを綴ぢつけ、又上側にも眞綿を引いて矢張りアイロンで落ちつかせて引き返します。そしてぐるりをつけましたらよく引合を見てからすつかり待針を抜き、糸屑などをもきれいにとり除けて引き返します。角々の所は第五圖下のやうに三、四糎位指尖で押込んでおいて、それから返し口から手を入れて押込んである兩角を一緒に摘んで幅を二つに折るやうな恰好で引返します。返しましたらまづ幅を引張つて芯を落ちつかせ、ぐるりに躾をかけ、前に縫ひ殘してある返し口の縫代へ芯地を綴ぢつけ、細かに縮けそれから飾躾として三糎位の針目に平躾を掛けます。



第五圖

仕上の仕方

縫ひ上げました帶の上に紙か布をのせ、その上から縫ひ目、角のところをよく引張つて火熨斗かアイロンを掛け、壓をおいて仕上げをいたします。

それから六つ折の屏風疊みか、二つ折りにして後三つ折にして紅白の糸で菱形に綴ぢます。

二枚芯の拵へ方

地薄の帶側の場合にはしつかりさせる爲めに芯を二枚入れます。つまり二枚芯を使ふのであります。この芯は一枚を上り帶幅に合せて裁ち、一枚は縫ひ代だけ狹く裁つて中央で綴ぢて、それを普通の芯のやうに入れます。

なほ薄地物で絽とか紗のやうに芯のすいて見えるやうな時には、二枚共同じ幅に裁つて中央を綴ぢておき、芯と芯の間に縫代を挾んで表に針目の出ないやうに注意して綴ぢます。

輕裝帶（その一）

名古屋帶又は文化帶などといつて大層輕便であり、且つ用布が經濟的でありますから日常用には適當な帶であります。

用布　並幅　四三五糎、芯布　三河木綿　一本分、ポケット布　並幅　三八糎。

普通の片側帶一本では少し短くありますからお太鼓の裏側に別布を五〇糎程足して作りますが、最近は名古屋帶地として普通の帶側より少し長尺で四三五糎位のものも出來て居ります。

仕立上寸法

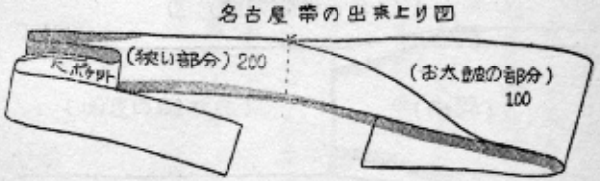
胴廻りの部分　丈　二〇〇糎内外（胴の二廻りに五〇糎位加へた寸法）
　　胴　一五糎
お太鼓の部分　丈　一〇〇糎位（丈お太鼓の結び方によつて違ひます）
　　幅　三〇糎

地伸し

帶側も芯布も前の腹合帶の方法と同じであります。

縫方

用布の裏側を上にして出來上り幅よりも四粍廣く全體に輕く通し篦をします。それから掛（手ともいひます）



第　六　圖

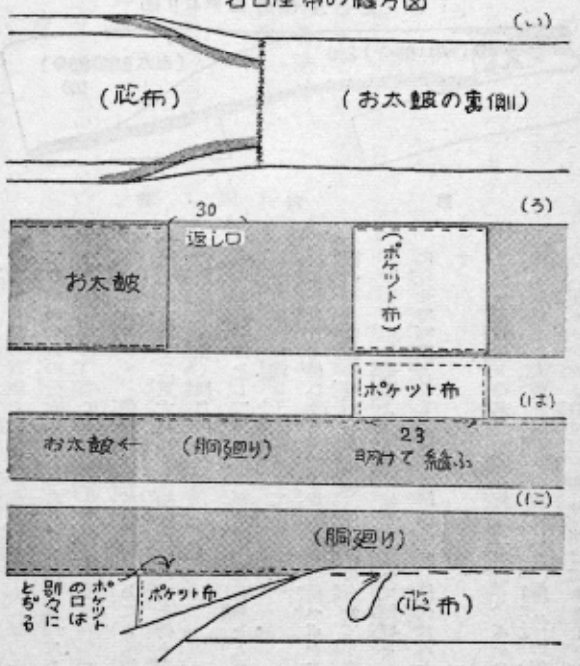
の方から二一五糎を計つて胴廻りの分とし、殘りをお太鼓の分とします。そしてこのお太鼓の分を丈を二つに折つて輪になつてゐる方を垂として一糎の縫代で摘み縫にし、次に幅を標通りに腹合せ帶のやうに縫ひ、折は裏側（短い布の方）に折ります。角の所の縫代を淺くすることも腹合せ帶と同じであります。若しお太鼓を二重太鼓にする場合は垂の端を折り返さずに別布を裏にして普通の腹合せと全く同じにします。

それから地伸をして出來上り幅に裁つた芯布を入れて表に引き返し、第七圖（い）のやうに布の端を千鳥掛にしておきます。

次に胴廻りを縫ひますが、丁度前になる所へポケットをつけますから、まづ（ろ）圖のやうに袖の端から八三糎位（體に合せて丁度前に來る寸法を計つてきめます）の所に帶幅よりも八粍ほどひかへて幅標をしたポケット布を合せ、中表に合せて幅標よりも二粍淺く縫ひ合せ、縫代はポケット布の方へ折つておきます。

それから胴廻りの殘分の幅を眞二つに折り、ポケット布は（は）圖のやうに上に上げておいてお太鼓と胴廻りの境目に三〇糎位の返し口を殘して他は端まで縫ひ、（但しポケット口は一三糎位明けておきます）次にポケット布の兩端を四

名古屋帶の縫方図



第七図

耗位の縫代に縫つて袋にします。

それから全體へきせをかけて（掛を右にして手前に折ります）おきます。

芯の入れ方

お太鼓の方からつゞいて居る芯をよぢれないやうに注意しながら幅を二つに折り、芯布で胴廻りの縫代を挾み、よく釣合を見ながら四枚を一束に綴ぢます。

（ポケット口は兩側別々に綴ぢます。）

それから芯を平らに重ねて端からぐる〳〵巻いておいて、引返し口から引出しよく芯を落ちつかせ角を整へて假躾をかけ、次にポケットの兩端に止めをし、引返し口を細かに綴け合せます。

仕上

以上で出來上りでありますから兩側からアイロンをかけて、お太鼓と胴廻りの境を三角に折つて半幅の方を帶幅丈に折り疊んでお太鼓の方で包むやうに疊んで綴ぢをします。

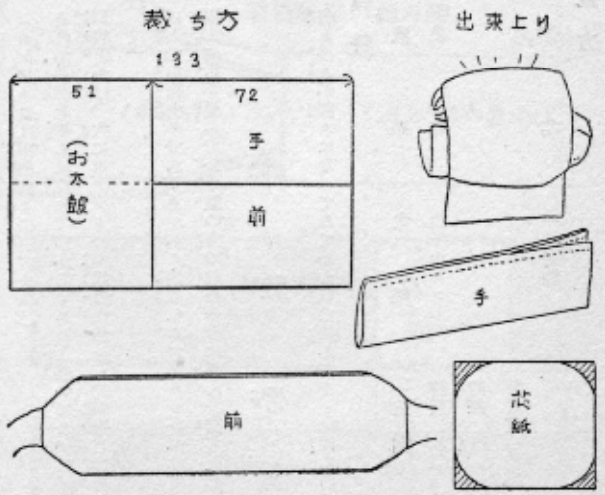
輕裝帶（その二）

前と後とが別々になつてゐてお太鼓は結んだまゝに作るのであります。

材料

表布	大幅	一三三糎
裏布	白キヤラコ	前裏 並幅 七二糎
		前紐 幅 一五糎 丈 六八糎 二本
		お太鼓の型裏 三〇糎角
帶芯	一八七糎	

裁方



第八圖

縫ひ方

お太鼓　一方の端だけをあけて他を普通の丸帶のやうに縫つて、芯布も普通に入れて表に返します。

前　前の表布と裏布とを合せ兩端をあけて腹合帶のやうに縫ひ合せます。但し出來上つてから幅を二つに折りますから裏布の方を少し釣り加減にいたします。芯を普通に入れて表に返し、芯を落ちつかせてから裏布の方を內側にして幅を二つに折り、兩端を三角に折つて圓のやうに紐をつけます。

手　一方の端を一七糎だけ中表に折り返し全體を半幅に折つて圓のやうに折返しのところも半幅のところも幅一ぱいに縫ひます、これにも帶芯を入れます、その入れ方は半幅になつてゐる方に芯を先にとぢつけ、折返しになつてゐる部分から表に返しますと折り返してあるところへ芯が開くやうになりますから、そこへ芯をとぢつけて表に返し、全體に芯が動かないやうに綴ぢつけておきます。

芯紙　二八糎角の厚紙を四隅落し、次にヤラコの型裏用の布のぐるりを縫つてその中へ型紙を包み糸をしめておきます。

まとめ方　手の端を裁目のまゝ芯紙にとぢつけて結んだ時の格好に作ります。次にお太鼓の裁目の方を結び上げた上の方にしますから少し丸く形よくして端を芯紙の裏側にとぢつけ、表の方は袖との格好を見て結び上げてしつかり芯に綴ぢつけて動かないやうにします。

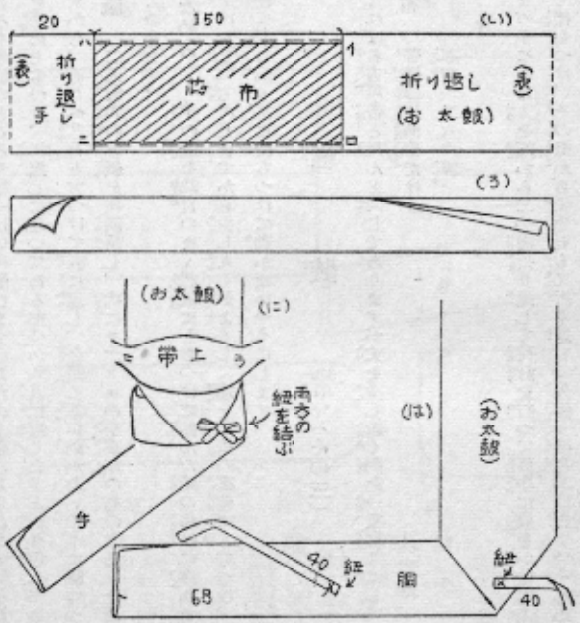
輕裝帶（その三）

これは名古屋帶と殆んど同じでありますが丈を少し短く胴を一重廻りにして途中に細い紐をつけて仕上げます。

用布　普通の片側帶だけ。
芯布　二六六糎。

縫ひ方

まづ手になる方を端から二〇糎折り返して待針を打つて眞中に線をかけておきます、そこから一五〇糎を計つて標をつけ、その標から先きをも又折り返して矢張り線をかけます。それから腹合帶のやうに全體に幅の極を



第九圖

つけ、初めと終りを半返しにして普通の帯のやうに縫ひ（但し端は輪になつてゐますから縫はなくても宜しい）折をつけて（胴廻りのところも折ります）芯布を入れて綴ぢつけ表に返し（胴廻りのところも芯を表側の縫代に綴ぢつけ）ます。兩端の折り返しの端は芯布にとぢ附けておきます。次に第九圖（い）のイとロ、ハとニを合せてしつかり四つ留をしてこの間を絎け合せます。次に（は）圖のやうにお太鼓の下の三角のところと手の端から六八糎入つたところに、四糎幅四〇糎の長さに絎けた紐をつけて出來上りとします。

結方

（に）圖のやうに帯上で先きに後に背負揚をして、それから胴廻りの部分を胴に一まわり巻いて後で兩方の紐を結んでしつかりしめ、それからお太鼓を格好よく結び上げます。

女物丸帯

材料

丸帯の材料には綴織、唐織、錦、厚板、綸子、羽二重、繻子、鹽瀬、絽などが主なものでありますが、この他なほ澤山の種類があります。

仕立上寸法

	幅	丈
大人物	二六糎—三二糎	三八〇糎—四二〇糎
小供物	幅	丈
十二、三歳用	二六糎	四〇〇糎内外
十歳用	二三糎	三五〇糎

七　歳　用　一八糎　二九〇糎

地直し

耳の余り厚くない物は腹合帶と同じやうにして差支ありませんが、耳の糸が特に硬くて厚く、然も釣れてゐる物はその部分だけ切り取ります。

又幅が廣いために品切によつては片側分だけが伸びてゐる様な事もあります、そんな時には裏から濕つた布を當てゝアイロンをかけ、又模様のうき糸は眞中で切つて平らに裏からかけて布を縮ませる事もあります。

假　綴

垂と掛の織出しは眞直になるやうに充分手で直し、幅を二つに折り、織出をよく揃へて假綴をします。この時地質の特別硬いものはずれ易いですから綴ぢ始めに二針三針返し針にして躾をかけます。

織出は普通一つだけ出しますが、然し好みによつて二つ出し、更にその先の無地の處をも三糎位出して仕立てることもあります。

又文字を織り出した物例へば糯子のやうなものは文字の隱れないやうに、且つ文字が帶幅の中央に格好よく出るやうに注意します。

掛の方は垂と同じやうに織出を普通は一つ出しますが、垂の方に無地のところを出した時は矢張り同じやうに垂に揃へて出す方が宜しくあります。

標の附け方

全體に假綴がすみましたら出來上り幅より二粍廣く幅の標を輕く通し筐にします。

縫　方

標通りにまづ丈から縫ひ始めますが、端の方四〇糎位の間は半返しに縫ひ他は一針拔に極く細かく、然も縫目の縮まないやうに縫ひます。

掛や垂の端は横の織糸を通して眞直に半返し縫にします。

そして縫目に平鏝を當てゝ幅に二粍のきせを掛けて一方へ折り、次に兩端を折つて角を綴ぢます、特別地厚の物は一方の耳だけを裁ち落すこともあり又、角の縫代だけが特に厚くなるやうな時には一枚だけを四角に切り落すこともあります。

芯の入れ方

芯は出來上り幅に裁ち切つて縫込の折れてゐる方に芯を重ねます。芯のゆるみは四〇糎に對して五粍位にします。重ねましたまゝ帶側だけを引張つて芯の落ちつきを見て待針を打ち、芯の丈を切つて兩端と一方の縦を綴ぢつけます。そして芯に眞綿を引きます。

丸帶は幅の縫目が一方ですから厚地のものでしたら輪の方へしのび綴を入れることもあります。その仕方は、輪の端から三、四粍ほど中へ入つた所で芯の上から、帶地と同じ色の羽二重糸で針目が表へ出ないやうに織目の上側だけを抄つて五、六糎の針目に綴ぢてゆきます。

それから表に返し角を整へ縫ひ殘してある引返し口を細かに縮けます。

仕上

平らに芯を落ちつかせ、假躾をかけ角を整へてアイロンをかけ壓をしましてから六つ又は八つの屏風折に疊んで紅白の絹糸で菱形に飾糸をかけます。

子供帶

仕立上げ寸法

幅一九糎位、丈二四七糎位より幅二三糎、丈三八〇糎位、その年齢によつて定めます。

布の整理

大人物と同じやうにいたします。

標の附方

帶地の幅を中表に二つ折りにして、正しく平らに置き、つり合をよく調べます。

端から五糎位入つた處に假躾をかけ、次に幅の標附をします。標つけは輕く通し筥をするか、或はチヨークの端を尖らせて輕く通し標にします。幅の標は仕立上寸法に二粍を加へた寸法にいたします。

次に丈も布目を通して正しく標をつけます。そして標のずらないやうに、筥臺に置いたまゝ標の少々奥を躾縫ひしておきます。

縫方

地厚のものは絎臺にかけて、小針に一針ぬきとし、地質の軟かいものは、抄ひ縫ひにします。中央を帶幅だけ殘して全體を縫ひ、兩端は半返し縫にいたします。縫ひ上りましたらば、前の躾を全部取り去つて、丈に四粍幅に二粍のきせをかけ、尚眞中の縫ひ殘した處にも折をつけておきます。

芯は芯地の耳を眞直ぐに裁ち落し、次に仕立上げ帶幅から二粍減した寸法に他の一方を裁ちきつて、丈は凡そ帶丈四十糎につき四粍の割合に芯の丈を長くしておきます。

芯のこしらへが出來ましたらば、帶地を長く平らにのばし、その上に芯地を正しくおき、下の帶地ばかりを靜かに引きのばしますと、その帶地に對して適當の弛みができますから、待針をして芯丈を裁ち切り、縫ひ目の方にとぢつけます。

帶地によつて眞綿を引く場合には、平らにとぢてある芯地をおこして眞綿を引き、芯をもとの位置に返し、その上にも亦眞綿を引きます。そして、火熨斗でその眞綿を芯地につけ、帶地の輪の方に引糸を三〇糎位おきにつけ、角を先に少し返しておき、次にゆるく帶を卷いて芯のねじれないやうにして表にかへします。

次に正しく全部に躾をかけ、それから中央の縫ひ殘しておいた部分を細かく本絎にくけます。

仕立上りましたらば火熨斗をかけ、二三時間壓をしておき、六つ折りの屏風だゝみにして飾り糸をかけます。

飾り糸は普通は紅白二筋の糸でしますが、祝儀用には五色の色ですることは大人帶と同樣であります。

男帯

材料

絹布には博多織、節糸織、綾織、絽博多等があり、綿布には小倉、瓦斯小倉、紙布等があります。

仕立上寸法

	幅	丈
大人用	一〇糎——一一糎	三八〇糎——四一〇糎
子供物	七糎——八糎	二五〇糎——三〇〇糎

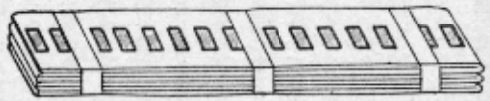
地伸

女物と同じやうに耳を伸します。男物帯地は横の布目がハッキリして居る物が多いですから、布目が正しくなるやうに裏からアイロンをかけて平らにし、巻棒に巻いて充分地伸しをします。

標の附け方

無地のものならば幅を首二つに、片側づゝ遠ふものたらばその境目を折山にし、獨鈷入りのものは帯幅の真中へ行くやうに二つに折り、縫代の邊を假綴します。但し地質によつてはこの綴を省きます。それから幅の標を出來上寸法より一粍位廣くして幅く通し筥をつけます。

縫方（縫ひ仕立）



第十一圖　芯の入れ方

兩端一五糎位づゝ殘して幅標の通り半返しに縫ひます。縫目に平鏝をかけ、輕く折をつけて尺度で表へ引返し、表から縫目の折を正して芯を入れます。

芯の入れ方

芯は物によつて一枚芯或は二枚芯にします。幅は出來上り幅より二粍狹く裁ち芯の片端に厚紙を圖のやうにつけ、その先に紐をつけ、紐の先に尺度をつけて一方から入れて靜かに引出し、芯が正しく幅一杯に含まるやうに整へながら入れます。

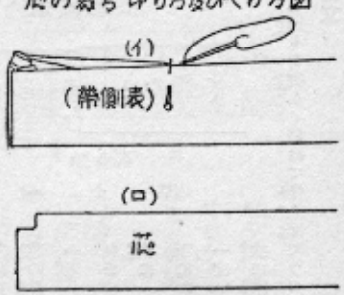
次に一方で帯側と芯とを持ち、他の一方で帯側だけ引張つて引合せ、それから下において兩手で帯側と芯との三枚を揃でながらよく釣合をたらし、芯布を丈一ぱいに裁ち切ります。

次に兩端を縫殘してある處から裏返して、半返しに縫ひ、芯を綴ぢつけて表に返し殘りを細かく綴けて仕上げにうつります。

紳仕立

男帯は縫仕立の他に紳仕立といふ仕立方があります。それは幅の標を出來上り寸法きつかりにつけ、標通りに

折をつけ、折山を鏝でおさへておきます。



第十二圖　芯の裁ち方及び切り方

次に帯芯の幅を出來上り幅より二糎位狹く、丈を二糎位長めに裁ち切ります。それから二つ折にして帯側を平らに開いて向側になる方の片側へ芯を心持ゆるみ加減にして拵せ、待針で纏かくとめておき、帯の兩端を裏返して合せ、布目を通して一針捨に細かく帯幅だけ縫ひ、きせを一拔ほどかけて折り、縫代は一糎五粍位殘して後は切り落し、芯布も角の縫代の折重なる分だけ切り落してしまいます。そして丈の兩端だけ芯をとぢつけ又表に返して角をよく整へておきます。

紐け方

芯を折山いつぱいにきつちりと折り込み、布目がよぢれぬやうに且つ針目が流れぬやうに二粍位の針目で紐けます。

伊達じめ

伊達巻はぐる〳〵と巻いて端を挾みますが、この伊達じめは兩端を結びますので纏長合よく使はれます。

材料

表布には羽二重、絽紗ちりめん、絹、メリンスなどを使ひ、芯布として三河木綿（一一〇糎位）とシンモスを入れます。ポケットをつける時はその用布として並幅四〇糎ほどを別に用意します。

仕立上寸法

丈　二二〇糎前後　　幅　一〇糎―一五糎

縫方

はじめ用布の裏側に薄い芯布をあてゝ、この芯布がつれないやうに加減しながら纏でとぢておきます。それから中表に幅を眞二つに折つて幅の標をつけ、丸帯のやうに全部概通り細かい針目で縫ひますが、引き返し口を一方の端から五〇糎ほどのところに一二、三糎明けておきます。

全部縫ひましてから折りをつけ角を整へ、出來上り幅に裁つた芯布を入れ、普通の帯のやうに綴ぢつけ表に返し、返し口を細かに紐けておきます。

ポケットをつけます時は、名古屋帯のやうに帯布とポケット布とを中表に合せてポケットの口明一七糎ほどにしてつけます。

十、袴の部

女袴

女袴の材料は綿木綿、メリンス、セル、サージ、カシミヤ、縮緬、絣、巧緞などいろ〳〵ありますが、主に毛織物が多く用ひられます。中でもサージが割合に丈夫で色もしつかりしにゐますので一般向には一番多く用はれます。

裁ち方は布の廣い狹いにより、又大中小によつて種々の方法があります。特に紐下の丈は着用者の年齢、體格又は好みによつて長短のあるものでありますから、各自適當な寸法を用ひます。裁ち切の丈は細紐と紐附の總代を少くとも十糎を見積つて裁ちます。

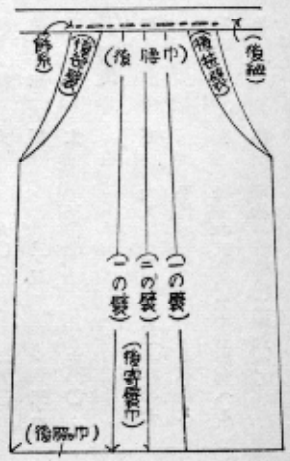
說廻し丈は後は後幅の四倍とし、前は五倍を普通の寸法とします。つまり後幅の九倍が總說廻しになるのであります。

紐丈は後は紐下の二倍、前は紐下の三倍とします。然し着用者の體格によつていく分の相異は止むを得ませんから、それ〴〵工夫することが肝要であります。

各部の名稱

第一圖を御參照下さい。

女袴各部の名稱（後）


（後紐）
（後腰當）
（後脇當）
（後腰當）
（後脇當）

	大人	十四・五歳	十二・三歳	八・九歳	五・六歳
前脇幅	一八寸	一七寸	一七寸	一四寸	一二寸
後寄襞幅 上下	四八	三・五七	三六	三六	五二・五
前寄襞幅 上下	三五・八	三五・八	二・八五・五	二・五四・五	二・三四・五
前腰幅	三二	三〇	二八	二六・五	二五
前筐襞幅	四・五	四	四	三・五	三・五
前重ね	四	三	三	三	二・五
後紐幅	五・五	五・五	五	四・五	四・五
後紐丈	一九〇	一八〇	一七〇	一五〇	一三〇
前紐幅	三・五	三・五	三	三	三
前紐丈	三〇〇	三〇〇	二八五	二六五	二三〇

寸法の割出

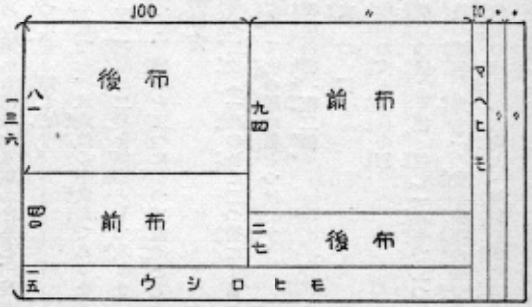
紐下　大人　着物着丈の十分の七
　　子供　同　十分の六
相引　紐下の三分の二に三糎加へる
後幅　着物の後幅に二糎加へる

後脇幅　後幅の四分の三
後寄襞幅　上は後幅の八分の一、下は後幅の四分の一
後腰幅　後幅と同寸
後筐襞幅　後脇幅の四分の一
前脇幅　後幅の五分の三
前寄襞幅　上は後幅の十分の一、下は後幅の五分の一より二粁減じる
前筐襞幅　前脇幅の四分の一
前腰幅　後幅より二糎廣くするか、或は同寸
後紐幅　後幅の五分の一弱
前紐幅　後幅の八分の一位
後紐丈　胴廻りの約二倍半
前紐丈　胴廻りの約四倍

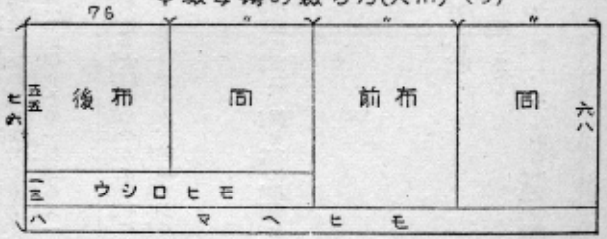
裁方

第二圖の(い)は最も一般に用ひられてゐる裁ち方で、まづ總尺から一〇糎幅の前紐を横に四本取り、殘りを四分して前後共二布づゝに取りますが、後布二枚つぎの時幅から一五糎落して後紐にします。(ろ)は三幅物の場合で、まづ總尺から九糎かき落して前紐とし、殘りを三分して、その二つ分から又一四糎をか

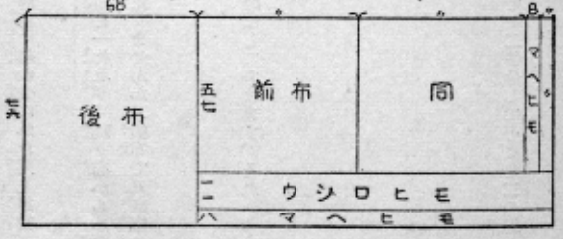
大人女袴の裁ち方(四巾)(い)



中裁女袴の裁ち方(大巾)(ろ)

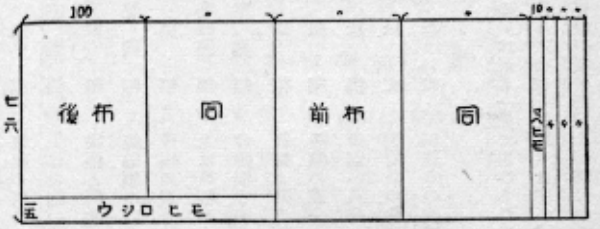


小裁女袴の裁ち方(大巾)(は)



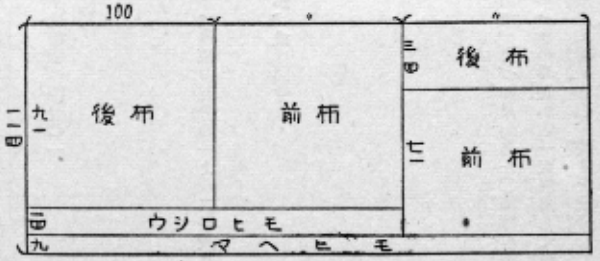
第三圖

大人女袴の裁ち方(大巾)(い)



公式　後布丈×4＋前袵幅×4－總用布

大人女袴の裁ち方(三巾)(ろ)



公式　後布丈×3－總用布

第二圖

第三圖(い)は四幅物の裁ち方で最初に一〇糎幅に三本横に前紐を取り、殘りの布から後紐を一五糎かき落します。そして圖のやうに裁ち合せて後布が廣くなるやうにします。

（ろ）は中裁即ち十歳から十一、二歳位の子供用で大幅物の裁ち方であります。紐の取り方は第二圖の（ろ）と同とではじめ全體から前紐を八掛かき落し、殘りを二つに切りその一枚から又一三糎後紐の分にかき落し後前共二枚づつに切り離します。

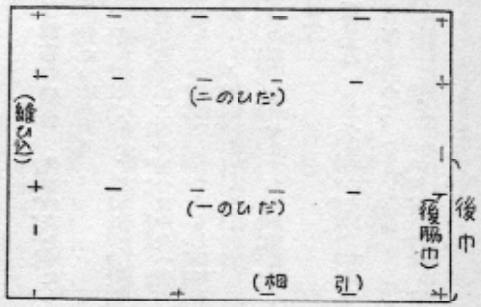
（はは小裁で七、八歳位の子供用であります。矢張り大幅物のやうに最初に後布を一枚取り、殘り布から八糎幅と、一一糎幅の二枚を紐布として取ります。これだけですと、前紐丈が少し足りませんから横布で八糎幅に二本取つて、殘りを二つに切つて前布とします。

標の附け方

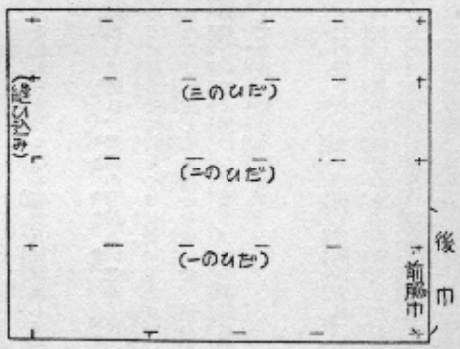
まづ後布二枚（一枚の時は二つ折にする）を中表に重ね、標を右に相引を手前にしておきます、それから各寸法に從つて次の順に標をつけます。

1、褄紐の標、幅二糎
2、丈の標
3、相引の丈と縫代の標
4、眞中の縫合標　但し一枚布で二つ折の時は不用
5、後の脇幅、即ち一の裾を後幅の四分の三に標します
6、相引の縫代から向ふへ後幅を假に計つて一寸標し、それから中央の標までを二等分してそこを二の襞とします。

（い）圖の方け附標布後



（ろ）圖の方け附標布前



第四圖

前布　矢張り後布と同じやうにおきます。

1、褄紐の標、幅二糎
2、丈の標
3、相引の丈と縫代の標
4、眞中の縫合標
5、一の襞を後幅の五分の三に標します。
6、後と同じやうに相引の縫代から假に後幅を計り、それから中央の縫合せの標までを三等分して、中央から
7、上の布一枚を取り除けて、重ね襞の標を後幅の寸分の一だけを中央へ寄せてつけます。

その三分の一の寸法の處を三の襞とします。

7、三の襞と一の襞の中央を二の襞とします。

縫方

後布及び前布の縫合　後布の表を中にして合せ、それから左脚になる布を五粍程出して縫合せ、折は着物の背縫と反對につけます。

前布も矢張り中表に合せ、左脚布を右脚布より五粍出して縫ひ、着物の背縫と同じやうに折りをつけ伏縫をします。若し前布が三布の場合は中央へ折のかゝるやうに縫合せて折をつけ伏縫にします。

裾紐　裾を三つ折縫にします。もし裾廻布をつけるならば裾廻し布と裾とを縫合せ、折を裾廻布の方へつけて襠襞をかけ、表布を五粍ほど折り返して裏側布の端を表布に縫けつけます。この裾紐は前布後布を別々にしますが後に相引を合せますから兩端は少しづゝ殘して最後に結けつけます。

襞の取り方

後襞の取り方　まづ後布の左脚、右脚の一の襞と二の襞を折ります。但し左脚の方は二本の標の中の中央に近い方の標を折つて、（これを重襞といひます）この折山を裏中の縫目の上四糎重たりに折り重ねると二の襞の標が丁度縫目に重なります。次に右脚の折山をその上に四糎重ねますと、重襞は中央より四糎右脚の方へ寄せて重ねるわけであります。

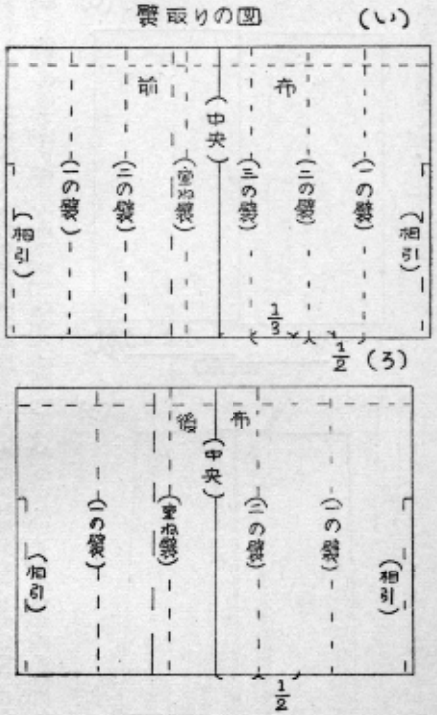
次に寄襞幅を上下共決めて一の襞を重ね、襞の上に飾紐を上、中、下の三ケ所に千鳥に掛けます。

前襞の取り方

一の襞、二の襞、三の襞を折ります。但し右脚の三の襞は重ね襞になりますから、二つの標の内中央に近い方を折ります。

次に右脚布の重ね襞を四糎中央より左脚布の方へ出して重ね、それから左脚布の三の襞の重なりを四糎にして襞をかけます。

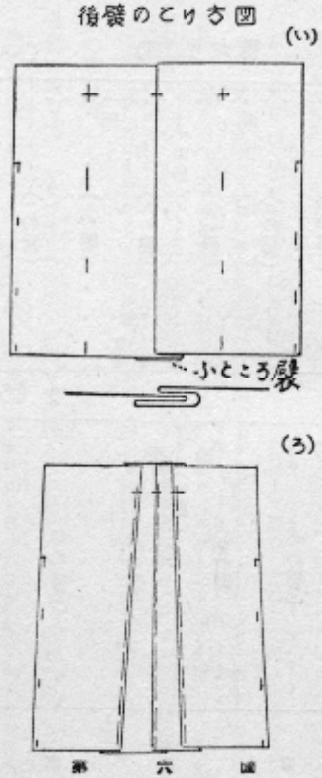
次の二の襞と一の襞は後と同じやうに寄襞幅を上下共きめて襞を取ります。この寄襞幅は上は後幅の十分の一、下は後幅の五分の一とありますが二糎位づゝ減しても差支ありません。それから襞の上に飾紐を上、中、下の三ケ所に後と同じやうに千鳥に掛けます。



第五圖　襞の取り方

笹襞の取り方

後笹襞　後腰幅の二分の一より八粍少ない寸法を中央の襞山から計つて丈標の上に標して、第七圖(二)のやうに(イ)から相引までを斜に、少し弓形に中表に折り返し、次に(ロ)か相引までを反對に(三)のやうに折り返し、こゝで輕く鏝をかけて折り目をつけ、又(二)のやうに開いて、今つけた折り目の二粍ほど内側を二糎五粍の針目で、外に出る針は極く小さくして綴ぢつけ（布を伸さないやうに）そして(ハ)を裏側へ折りますと(四)のやうに二粍ほど見返つて(イ)の折山と重なります



第六圖

から、そのまゝ絎け合せます。

前笹襞　前の腰幅は後腰幅より二糎廣いことゝ、襞幅が少し狭いだけて其の方法は同じであります。

相引、閂留及壓

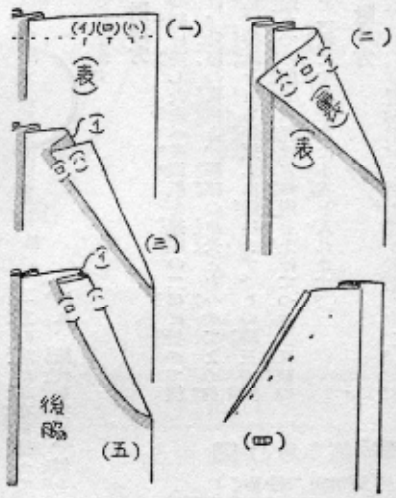
相引を縫合せ、始め終りとも十糎返し縫にして折は前布につけ、前に殘してある裾絎を絎けます。

閂留　相引の上の端に四粍位の大きさに閂留をします。その仕方は第八圖のやうに、閂留の幅に糸を二、三度渡して針をその糸の下をくゞらせて針の先に糸を掛けては針を抜く仕方を繰り返します。

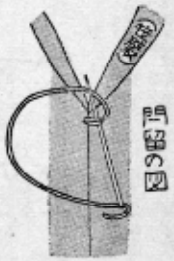
壓　三つに折疊んで壓をおきます。その疊み方は、はじめ裾を相引の留より四糎上まで持つて來て二つに折り、次に裾山から更に四糎上、つまり相引の留から八糎上のところから上部を裾の上に重ねるやうにするのであります。

紐の絎け方

紐を接ぐものはなる可く着用してから接目の目立たないやうな位置で接ぐやうにします。接ぎ方は半返しか、掛け接ぎにして割鏝をあてます。



第七圖



第八圖　門留の図

紐芯を裁つには前紐も後紐も紐幅の二倍に裁つて、若し接がなければならない物は突き合せ接ぎか、重ね縫にします。

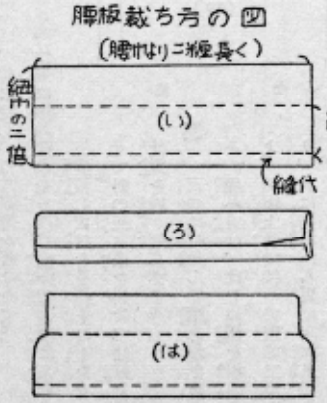
芯の用意が出來ましたら紐丈を二つに折つて眞中に糸標をつけ、紐の一方の端に芯布を當へて、芯布を心持弛め加減にして入れ、紐の端を縫ひ、紐代を折り、襞をかけて本紐にします。但し眞中で三七、八糎あけておきます

前紐の附け方

前紐の紐け殘した處へ美濃紙を紐幅の二倍に折つて綴ぢつけ、前幅の眞中と、腰幅の中央とを合せてよく釣合を見て待針を打ち半返しに縫ひます。この時三の襞から端までの間で穴糎ほど紐附を上げてつけ、又紐の厚さを一樣にするために小布を入れます。

後紐の附け方

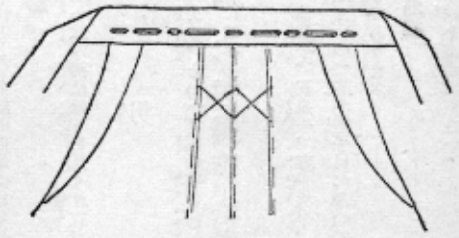
腰板紙を、幅は後紐幅の二倍、丈は腰幅より三糎位長く裁つて、第九圖(い)のやうに縫代を一糎にして通し筥をつけ、次は紐幅を計つて又通し筥をして(ろ)のやうに折り目をつけて兩端を一糎位丸く裁ち落し、內側の方を(は)のやうに少し丈を短く裁ち切ります。



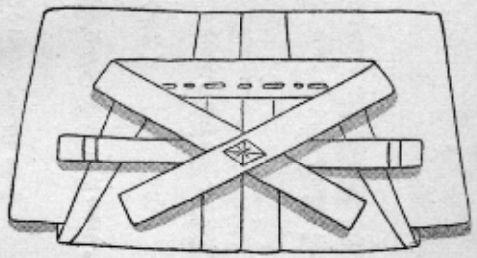
第九圖　腰板裁ち方の図

そして後幅の中央と厚紙の中央とを合せて後紐にとぢつけて飾糸を通します。

飾糸は太白の捻り糸の左撚右捻二本を下の角から一糎上つた處に第十圖のやうに雌針雌針に通します。(この飾糸は現今では殆んどつけ手にそのまゝ芯紙だけを入れてつけて居ります)後紐の中央と腰紙の中央とを合せ、筐襲の弛まないやうに注意して待針を打ち、腰板の縫代の折より五糎上つた所をあらく半返しに縫ひつけ、縫込をよく綴ぢつけて紐け殘した處を紐けます。



第十圖　飾り糸の図



第十一圖　仕立上りの図

仕上

以上出来上りましたらアイロンをかけ、襞をおいた時のやうに三つに折り畳み、第十一圖のやうに紐を組み合せて飾紐をし、前紐の兩端には半紙を二糎幅に切つて卷きつけます。

注意

申裁小裁の袴は紐下を長く仕立てて着用者の寸法によつて揚をしておきます。

男　袴（大人物）

普通に男袴といへば襠の有る袴（馬乘袴）でありますが、近頃は殆んど儀式用だけに襠の有る袴を用ひまして一般には襠の無い袴、所謂行燈袴を用ひるやうになりました。

地質

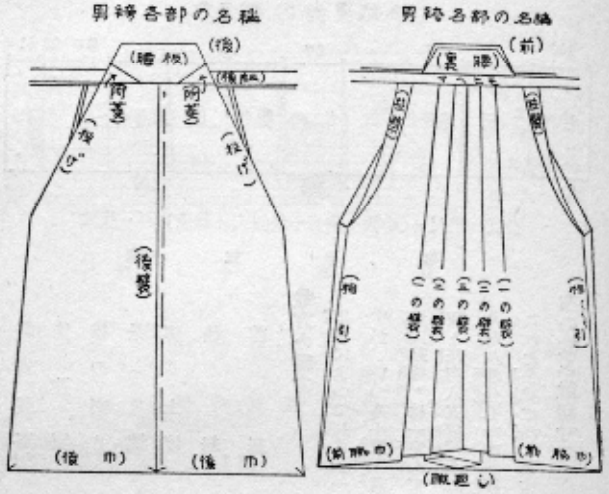
小倉、仙臺平、五泉平、嘉平次平、博多平、精巧、セル、アルパカなど絹、毛、木綿各種とも使ひます。近頃無双織といつて裏が縞子目になつてゐる袴地が出來ましたが裏が縞子地になつて居るのではき具合が大變宜しいやうであります。

各部の名稱

第十二圖を御參照下さい。

仕立上寸法と割出し方

男袴各部の名稱



男袴

本裁男袴の裁ち方

公式　総尺－(小襠＋腰布＋後紐丈＋裁違)÷8＝後丈

第十三圖

前寄裝幅	上 三糎	後幅の十分の一
	下 五・八	後幅の五分の一より四粍狹く
笹裝幅	四・五	前脇幅の四分の一
襠の高さ	四八	相引の高さより凡そ六糎を減じる
乘間	三六	後幅に凡そ六糎を加へる
切り上げ	六	後幅の五分の一
後紐	長 八五	
	幅 三	
前紐	幅 三五〇	
	三	

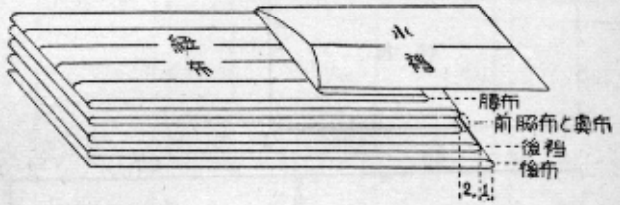
裁方と積方

用布によつて長さが一定して居りませんから自然裁切寸法も違つて來ますが、いつも小襠（前襠ともいひます）と腰布と、紐の長さと切り上寸法（裁違）は一定して居りますから、総尺から小襠の六一糎と腰布二三糎と紐布八五糎、それに裁違の分一四糎を加へた寸法を引き去つて、殘りを八等分した丈が後布丈になります。

これを公式に示しますと圖の下のやうな式になります。

布の数と裁切寸法

布の折り方図

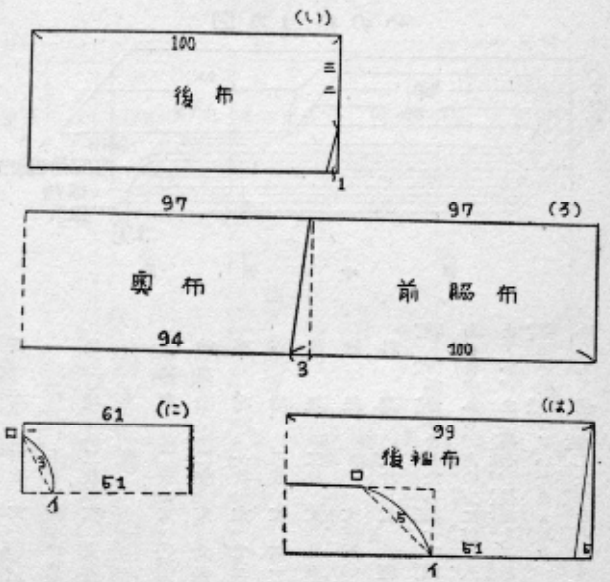


第十四圖

後布	二枚	丈一〇〇糎（裾で幅の三二糎のところから、切り上を一糎つけます）
後襠	二枚	丈　九九糎（切り上を五糎つけ、襠の高さは五一糎）
前脇布	二枚	丈一〇〇糎（切り上三糎）
前奥布	二枚	丈　九七糎（切り上三糎）
腰布	一枚	丈　二三糎（但し二つに切つて使ひます）
小襠	二枚	丈　六一糎（襠の高さ五一糎）
後紐	二枚	丈　八五糎
前紐		丈三五〇糎内外
附菱	二枚	丈　八糎　幅　一二糎

積り方が終りましたら第十四圖のやうに折り疊みますと、右の方が裾でありますから、左の方に鋏を入れて、前の布の数の通りに切るのでありますが、まづ後布、後襠を二枚づゝをつゞけて裁ち切り、次に前脇布と奥布を四枚つゞいたまゝ取り、それから紐、腰布、小襠を切り離します。

かうして切り離した布をそれ〴〵次のやうに又鋏を入れます。



第十五圖

後布　裾は眞直に裁ち、幅三十二糎の所から襠附の方へ一糎の切り上を附けます。

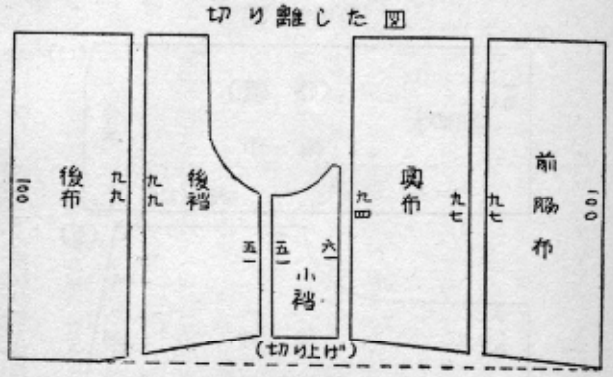
前脇布と奥布　四丈分つけて切り取つてある分を、第十五圖(ろ)のやうに丈を二つに折り、更に二つに折つて眞中に筋をつけて又元の二枚に返し、眞中の筋から奥布の方へ三糎切り上をつけますと、前脇丈は一〇〇糎で切り上が三糎つき、奥布丈は九七糎で切り上は三糎つきます。(は圖のやうに二枚を折り重ねて、裾に五糎の切り上をつけ、そこから襠の高さを五一糎と標し、次に襠刳の標をつけます。この刳の幅は大抵布幅の中央邊に當ります。そしてこの刳落した分から紐と附菱布を取ります。

小襠　中表に幅を二つ折にし、裾を右に輪の方を手前におき、輪の方で裾から襠の高さを計つて標し、上部の耳の方の奥布につける縫代を一糎取り、この間を(に圖のやうに刳ります。以上裁ち切つた各布は第十六圖のやうにたるのであります。

紐布と腰布　つゞいてゐるまゝ幅を五等分して前紐を一本とり、次に腰布を二三糎丈に取り、その殘り布の幅を四等分して二本を後紐に、他の二本を前紐の足し布にします。

標の附け方

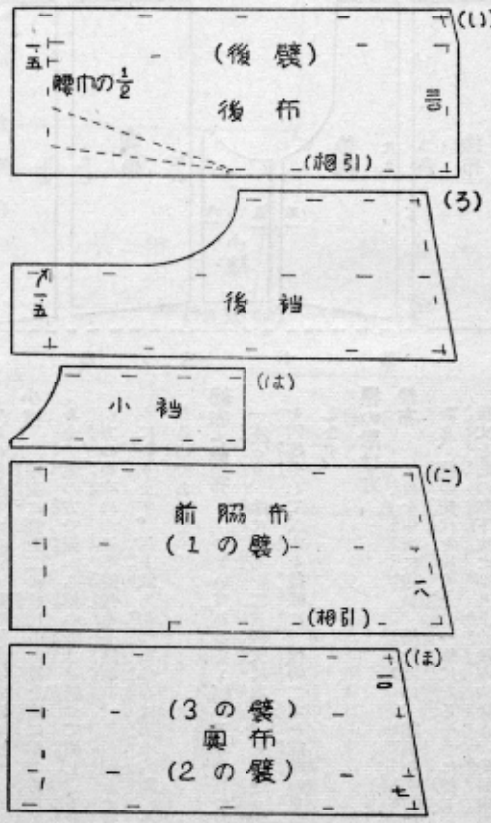
後布　二枚を中表に重ね、裾を右に、相引を手前にしておき、裾の縫代を出來上り一糎になるやうに標し、次に後丈を前の紐下丈に切り上寸法の六糎と、衿紐附の高くなる分の一糎を加へました寸法を標し、それから相引の



第十六圖

高さと縫代を標し、次に上下に後幅の標と後襠附の標をします。

□方付附標



第十七圖

今度は後丈の標の線の上で後幅の標から投の方へ寄せて一糎五粍の標をつけ、この標と裾の後幅の標とに尺度を當てゝ斜に後襞の標をつけます。次に又後丈の線の上に後幅標から投の方へ後腰幅の二分の一を計つて標をつけ、相引の所まで斜に折つて投とします。これを更に二つに折つて躾をかけ、それから上の一枚の布を取り除けて左脚の後布に、後重ね襞の標をつけます。その仕方は後丈の線の上に、後幅の十分の一、即ち三糎を後襞標より後襠附の方に計つてこれを重ね襞とし、左脚の方はこの標の通り下まで眞直ぐに折り、右脚の方は後襞標の通りに折ります。

後襠布　二枚の布を中表に重ね、裾を右にして(ろ)のやうにおき、後布の丈標にならつて丈標をつけ、つぎいて裾絞と小襠附の標をつけ、次に乗間の縫代を一糎五粍につけ、上の幅一杯の絞目を通して標をつけ、これを二の襞の標とします。

小襠　二枚重ねて絞絞と縫代の標をつけます。

前脇布　二枚の布を重ね、相引を手前にして後布のやうにおき、裾絞、相引の高さと縫ひ代、丈の標をつけ、次に脇襞幅の標をつけてこれを一の襞の折り山と定め、それから奥布附の縫代を標します。

奥布　矢張り二枚の布を重ね、裾絞の標をつけ、それから前脇布附の標をし、この縫代の標から七糎離して二の襞の折り山標をつけます。次に乗間の縫代を一糎五粍につけて、それから一〇糎計つて三の襞の折り山標をします、三の襞の深さ、即ち重ね襞の山はこの標よりも倘五糎乗間の方へよせてつけます。

注意

襞の折り目は糸標の方が宜しくあります。

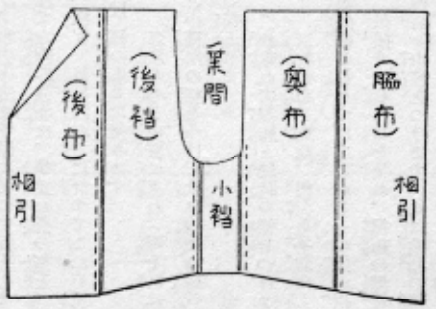
妻大圖

縫ひ合せ方

最初に先きに折つておきました投を三糎位の針目で、表には極く細く針を出して絎けます。この投は斜になつてゐる爲め伸び易いから伸さないやうに注意します。次にこの後布に後襠布を縫ひ合せ、兩脚とも襠の方へ折をつけます。

今度は前脇布の短い方へ奥布の長い方を縫ひ合せ、奥布の方へ折をつけ、この奥布に小襠の丈の長い方を縫ひ合せ、折は小襠の方へ返して二糎位の針目で隱躾をかけます。それからこの小襠と後襠とを縫ひ合せ小襠の方に折つて矢張り隱躾をかけます。（第十八圖參照）

次に乘間を袋縫にし、折は右脚に返し、それから相引を縫つて折は前布に返します。そして今度は兩脚とも裾絎の躾をかけて一糎の針目で絎けます。この時後布の後幅標の所に第十九圖のやうに襞を一つ取つて切り上の形を作ります。



第十八圖

襞の取り方

後襞

乘間のところで後襠の上部の縫目を眞直ぐに裾まで縫目を通して兩脚二枚を一緒に躾でおさへてこれを中襞の中心とします。次は裾口を右にして後布を出し、乘間の折は右脚に返しておきます。それから左脚の重ね襞を標通りに折つて、先きの中襞中心に腰幅の二分の一の標を合せて重ね、右脚は後襞の標通り折つて左脚の襞標の上に重ねます。すると後重ね襞は上で三糎、裾で一糎五粍としてその上にあらく躾をかけます。

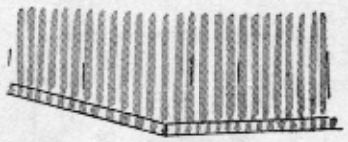
前襞

襞取をした後布を下にして前布を上に出し各襞の山に折をつけます。但し右脚は三の襞だけ折らずにおきます。

乘間の前の縫目を後の乘間の縫目に重ねて中心を定め、右脚の三の襞標を中心に重ねますと懐襞の折山が定まります。それから左足の三の襞標をこれに合せ、次から順に二の襞、一の襞を上下共寄襞幅の寸法通りに寄せて後躾をかけます。次に襞に上下共八糎程離れた處に、そこの寄襞幅と同寸に飾躾を千鳥掛にします。又中央にも同じやうにします。

笹襞の取り方

女袴と同じやうに笹襞を折り、一度開いて上から相引の處の笹襞の消える所までを二糎位の針目に一目落しのやうに縫つておきます。そしてから又折を重ねて裏を絎け相引留に閂留をします。

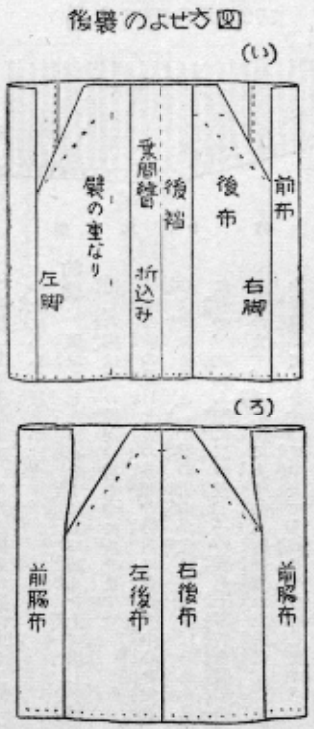


第十九圖

紐絎

後紐は丈八五糎に、幅三糎に縫ひ上げ、一方の端は一〇糎ほど縫ひ殘しておき、なほこの端で紐幅より三粍少なく切り込を入れておきます。これは腰板につく分になるのであります。

前紐は殘りの紐布全部（長いものを中央に）を接ぎ合せ（掛け接ぎにします）置中四〇糎ほどを殘して他を全部縫けます。



第二十一圖　後襞のよせ方

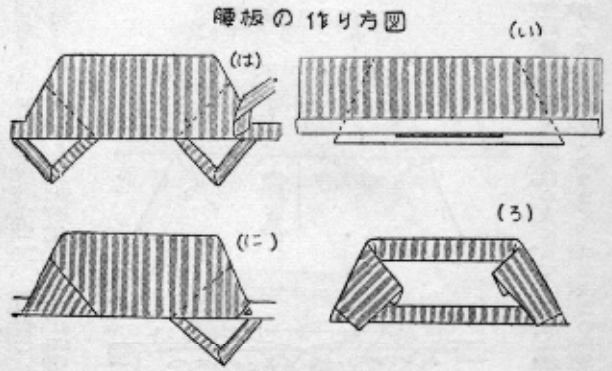
腰立

腰板の作り方

腰板紙は美濃紙二十枚位の厚みの板目紙を用ひ、寸法通りに裁ちます。

まづ腰板の幅と高さの寸法の長四角形を畫き、次に腰幅の六分の一を兩端から計つてその六分の一の處から下の腰板幅の處へ向つてそれ〳〵斜線を引き、その線を裁ち落します。後でこの斜をよく計つて狂ひのないかを試して見ます。

そして袴地が絹物である場合は上の左右の角を五粍程丸みをつけて裁ちます。（但し儀式用は丸味をつけません）



第二十二圖　腰板の作り方

又別に美濃紙を三糎幅に裁つて極く固く紙撚を作り、腰幅の凡そ二分の一の長さに切つておきます。

それから二三糎の腰布を丈一一糎五粍づゝに二つに切り一枚を表腰に、一枚を裏腰にします、この裏腰布と、附菱布との間に淺く淡い糊をつけ、美濃紙をかるく挟んで鏝で伸したもので裏打をします。

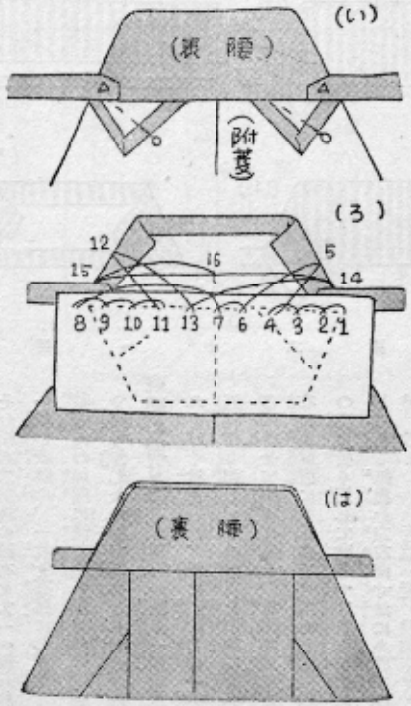
表腰の貼り方

腰板の表側一面に糊を平らに引いてそれを輕く拭きとり、次に表腰布の一方の端を中表に一糎五粍折り返し、その折目を腰板の下から二粍上つたところに合せて腰板に貼り、余儘が袋にならぬやうに且つ又布目を眞直に引張つてきちんと貼りつけ、上の方を腰板の裏に折り返して貼りつけます。次に腰板の下端に用意してある紙撚を左右同寸法にあけて貼りつけ、最初表に折り返してある腰布の端を裏側へ折り返してぴつたりと貼りつけます。次に腰布の兩端を、下の方を紐幅より二粍狹く布だけに切り込を入れ、あとは腰板の形通りにき

つかりと貼りつけます。(第二十一圖參照)

附菱　裏打のしてある附菱布を最初縦の縮目を通して四粍折り返しておきます。それから腰板の巾を計つてその二分の一に四粍加へたものを附菱の高さとし、腰幅の三分の一に八粍加へたものを幅として表腰に針を立てて標とし、前に折つた附菱の縦の折目を腰板脇の表に當て、先きに標をつけた通りに附菱の形を作つて折り、衫の崩れぬやうに裏側へ折つて錐をかけておきます。次に表腰の附菱標に合せ腰板脇と、附菱とを毛抜合せにして附菱の下方を裏側に

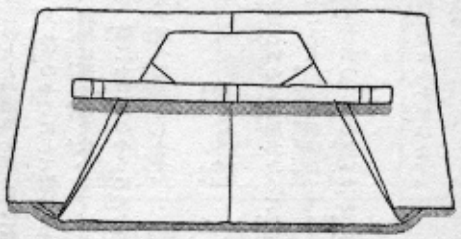
第二十一圖　腰板の附方



折り返して貼りつけます。

後紐の附け方　紐け殘してある後紐の端の切り込を第二十一圖(はのやうに、腰板脇の紐の所へ下から紐幅の高さに合せて挟み當て二本の撚り糸で紐の裏側から針を當し、腰板の脇と紐とを一緒に極く僅か抄つて糸を堅く結び、紐を起して裾下り加減にして前の糸で(にのやうに紐の下の方で、腰板の角に針を下し、表に返して紐幅を三角に折り、キの字又は△に糸を掛けて留めておきます。

第二十二圖



腰板の附け方　後布の丈標を更めて、そこに腰板を第二十二圖(いのやうに立てゝ重ね、正しく位置を定めて附菱を待針でまちんと止めておきます。次に裏腰布を表腰と縫目を合せて折り、後丈の裏側に當てゝ針を打ち、裏腰を見て(ろ圖のやうな針眼で裏腰布、後布、表腰の三枚を一緒に綴ぢつけて行きます。但し(5)と(12)との針は腰板を通して附菱の角は表に出ぬやう斜に抄つてもとります。(14)と(15)の針は腰板に通して表裏の腰布と、紐の上とを少し抄つて附菱の縦の折り込をも少し抄つて裏へ引出します。又(16)の針は一度表に抜き出して直ぐに元の針穴から斜に裏に通し、腰板にだけ針目の出るやうにして、裏で(14)から(15)に渡つ

た糸にかけて打留をします。糸は二本撚り合せて使ひ、表腰に出る針は極く小さく出します。腰立が終りましたら裏腰布の上と、兩脇を表より二粍位捻へて折り、内側の周圍に糊をつけて表腰に貼り合せます。

前紐附　女袴のやうにして附けます。

仕上　木綿物は薄く霧を吹いてアイロンをかけて皺を伸し、絹物は白布を被せてその上からアイロンをかけて仕上をし、第二十三圖のやうに丈を三つ折にして疊み、前後の紐を揃へて左右交互に折り重ね、左右の端と中央との三ケ所へ紙封をします。

男襠無袴

一名行燈袴といつて乘間がなくて兩脚が分れてゐないものであります。この袴は仕立が簡單で仕立直しの際は天地することも出來て經濟的でもあります。

普通の袴とちがつて襠の無いため着物の裾が下つて見えることがありますから、紐下を幾分長めに仕立てます。

地質

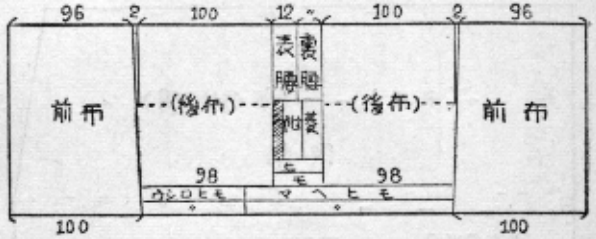
主に大幅物でセルを使ひます。

仕立上寸法

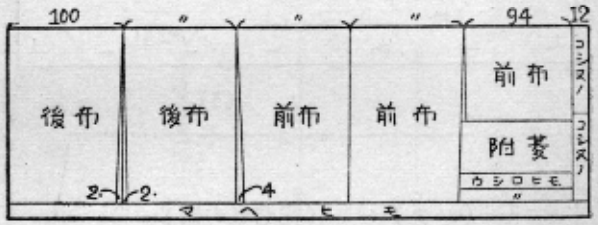
切り上　後　二糎——三糎

前　四糎

男襠無袴の裁ち方(一)



男襠無袴の裁ち方(二)



第二十四圖

外は普通袴と同じであります。

裁方

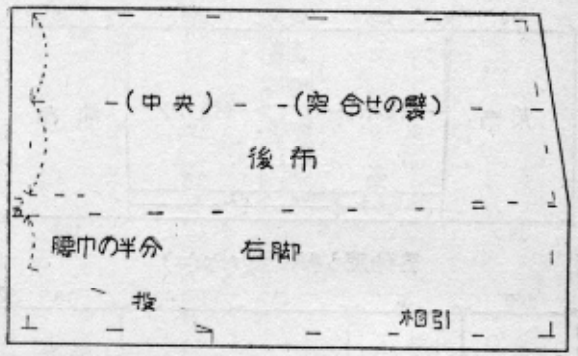
第二十四圖を御參照下さい。

標附け方

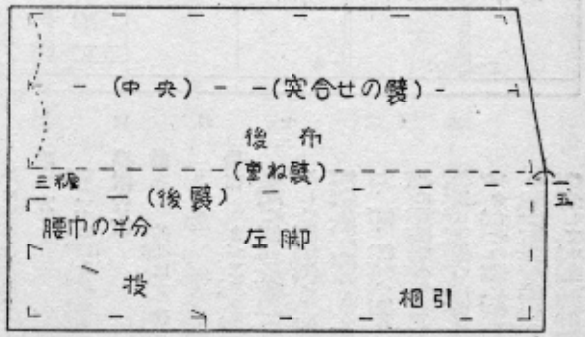
前布　前布は女物袴と同じであります。

後布　まづ二枚を中表に重ね、裾を右に相引を手前にしておきます。そして裾紐代を二糎と標し、馬乘袴(普通の襠のある男袴)と同様に丈、幅、相引、投の標をします。次に襞標でありますが、襠無袴の後襞は後襞の内側に尚ほ重なつて突き合せの襞を作りますので、この標は後襞の標をつけた殘りを二等分して中襞(突合襞)の折山標と

標附け方図（い）

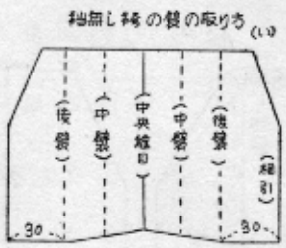


（ろ）



第二十五圖

（い）



（ろ）

第二十六圖

しまず。

それから上の布（右脚）を取り除け、（二）のやうに左脚布に重なりの襞標をつけます。即ち重なり寸法を馬乗袴と同じやうに後幅の十分の一（一糎五粍）を圖のやうに標します。

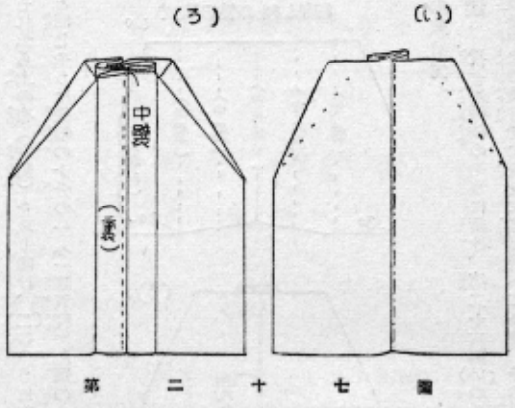
襞の取り方

後襞　捨を馬乗袴のやうに紐け、第二十六圖（い）のやうに攬げ、それ〳〵襞の折山を折り、（ろ）のやうに突き合せ襞を中央で突合せに合せて襞で押へておき、その上に左脚の襞標が中央に重なるやうにしますと、折山は自然右脚の方へ重なりの分（上三糎、下一糎五粍）だけ出るやうになります。次に右脚の後襞山を中央に重ね第二

縫方

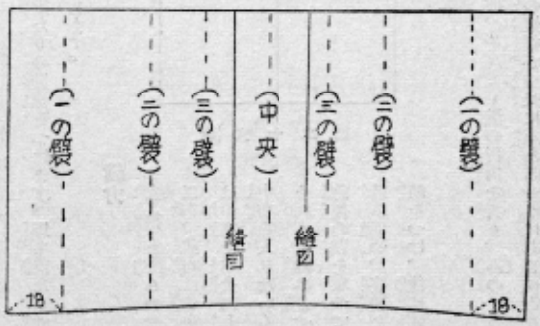
女袴と變りません、後布は二布、前布は前中布の入る物は中布を中央にして三布を、中布を入れないものは二布をそれ〳〵縫ひ合せ襠をくけ前後の襞を取つてから相引を縫ひ同せ、襞を作り前は前紐をつけ、後は腰立をします。

十七(い)圖のやうに上から被をかけておきます。これを裏から見ますと(ろ)のやうになるのであります。



第二十七圖

前襞のとり方



第二十八圖

前襞　第二十八圖のやうに女袴と同じであります。

腰立　馬乘袴と同じ仕立であります。

中裁、小裁男袴

仕立上寸法と割出し方

各部の名稱＼年齢	五・六歳	八・九歳	十二・三歳	十五・六歳	割出し方
紐下	四五―五〇糎	五七―六〇糎	六四―六八糎	七二―七六糎	着丈の凡そ十分の六
袖引	三二	四〇	四五・五	四九	紐下の凡そ三分の二
後幅	二〇	二五・五	二六・五	二八・五	着物の後幅と同じ
後腰幅	一七	二一	二二	二三	後幅の四分の三に二種加へる
後重ね襞	二	二	二・五	二・五	
腰板幅	一九	二一	二二	二三	下　腰幅と同じ 上　腰の三分の二
腰板高さ	六・五	七・二	七・六	八	腰幅の三分の一に七粍程加へる
附菱幅	五・七	七・二	七・五	八	腰幅の三分の一に八粍加へる
同高さ	三・五	四	四・五	五	腰板の二分の一に八粍加へる
前脇幅	一二・五	一五	一六	一七	後幅の五分の三

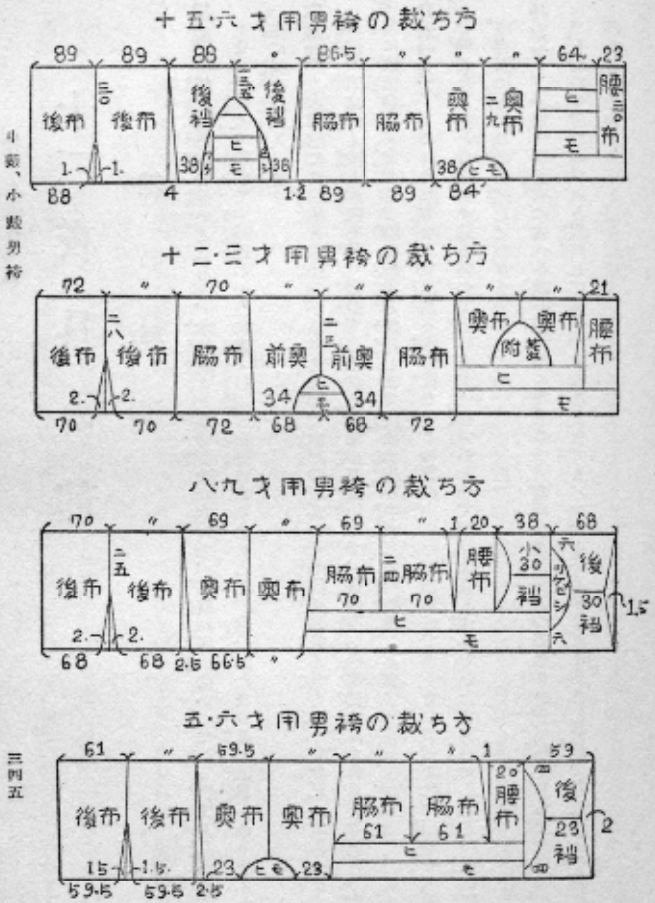
前紐附幅	二一	二四・五	二六・五	二八・五 後幅と同じか、二糎廣くする
前寄腰幅 上	二	二・五	二・七	二・九 上 後幅の十分の一
前寄腰幅 下	四	五	五・三	五・三 下 後幅の五分の一
笹襞幅	三	三・五	四	五 脇幅の四分の一
襠の高さ	二二	三〇	三五	三八 紐下の三分二より八糎減じる
乘間	二二・五	二四・五	二八・五	三〇 紐下の十分の四に二糎加へる
切り上	三	四	四・五	五・三 紐下の凡そ百分の七
後紐 丈	四九—五三	五七—六〇	六〇—六五	六五—七〇
後紐 幅	二一—二・二	二・三—二・六	二・六	二・六—三
前紐 丈	二三〇	二四六	二八五	三〇三
前紐 幅	二一—二・二	二・二—二・六	二・六	二・七—三

裁方

第二十九圖を御參照下さい。

縫方

中裁、小裁とも標の附け方、縫ひ方など大體は大人物と同じでありまして、たゞ寸法が違ふだけ位であります。但し附菱の中を大人物は三針でとめますが小裁の物は二針にして宜しく、又後襠布の上部の幅が狭い時、或は上までとゞかない場合は後のふところ襞が取れない事が多いのであります。そんな時は後襞はふところを取らずに、右脚の方に二枚一緒に折り込んでおきます。



第二十九圖

十一、夜具の部

綿の種類

絹綿　絹綿は眞綿の悪いところと、木綿綿とを混ぜ合せたもので、眞綿の澤山はいつてゐる物ほど品がよくなります。輕くて軟かで木綿綿のやうに度々打返す必要はありませんが、幾分かたまり易い缺點がありますから主に掛布團に入れます。

木綿綿　木綿綿には白綿と赤綿とがありまして、白綿の方がいく分纖維が長く色も白くてきれいであります。赤綿の方は色も少し赤味を帶び纖維も白綿に比べて少し短いので、質の悪いのは切れ易くありますから、掛布團には白の方が宜しく、若し兩方を使用します時は赤綿を中にして白綿で包みます。

カポツク　これは熱帶地方で出來る木の實で、この實の中に綿があるのでありまして、これに絹綿や木綿綿を混ぜたものをカポツク綿といつて居ります。彈力があつて絹綿よりも溫かでかたまりませんから、敷布團や座布團に入れるのに適しております。

バンヤ　バンヤは沼地に生へる蒲の穗で作つたもので、カポツクより劣つて居りますが早くから使はれて居りましたので、カポツクと混同してカポツクのことまでもバンヤといふやうになりましたが、本來は全く別なものであります。

近頃普通にはカポツク綿と絹綿とを混ぜたものをカポツクといひ、カポツクと木綿綿とを混ぜたものをバンヤといつて居ります。

羽根　これは一番上等のもので溫さからいつてもかたまらない點からいつても一番よい品でありますが、上等の品は寒國に住む水鳥の腹毛を使ひますので非常に高價で一般用としては不向であります。然し極く最近鵞鳥などの毛の硬い骨の樣な芯の部分を拔いて軟かい毛だけを集めて精製したものが出來ました。この方は從來の羽根に比べて價も非常に安く得られます。

藁　元は病人用の布團にのみ用ひられましたが、最近は病人に限らず一般にも敷蒲團用として用ひられるやうになりました。秋の天氣のよい日によく實つた稻を刈り取つて干したものが一番品がよく、これを根元の汚いところは殘ひ除けて凡そ三分程度に木の槌で打つていく分軟かくなりましたものを使用いたします。

布地

蒲團用の布地としてはいろ〳〵な地質が使はれますが木綿物で表用布としては瓦斯、紡績、新銘仙、新モス、などを使ひまして、裏用布には、置岡木綿、金巾、新モスなどの無地物を使ひますが、色は何れも表との配合のよいものを選ばなければなりません。

絹物では、銘仙、八端、紬、郡内、羽二重、縮緬等を用ひます。裏地は矢張り無地物で銘仙や八端には本瓦斯、絹紬、銘仙などを選びます。羽二重や縮緬物などの上等のものには羽二重か上等の銘仙の無地物を使ひます。

この他メリンス、レイヨン物なども多く使用されます。羽根蒲團には更紗模様の縮子地が使はれ、夏物には麻地の模様物や縞物が使はれます。

夜着類の肩當　夜着には掛肩當を當てますが、大抵の場合表地よりも柄もうつりのよい大柄の物を選びます。

掛衿　普通には黒か紺のビロードをかけますが、カバーを用ひます時は掛ける必要はありません。

夜具一組の仕立方

夜具は形の定つた物のやうでありますが地方によつて其の型にも大きさにも又仕立方にもいろ〳〵と異つた點があります。

普通の夜具一組といへば敷蒲團二枚、夜着一枚、掛蒲團一枚の都合四枚を申しまして、大きさは敷蒲團は三布に、夜具は中夜着、掛蒲團は五布に仕立てるのを普通とします。

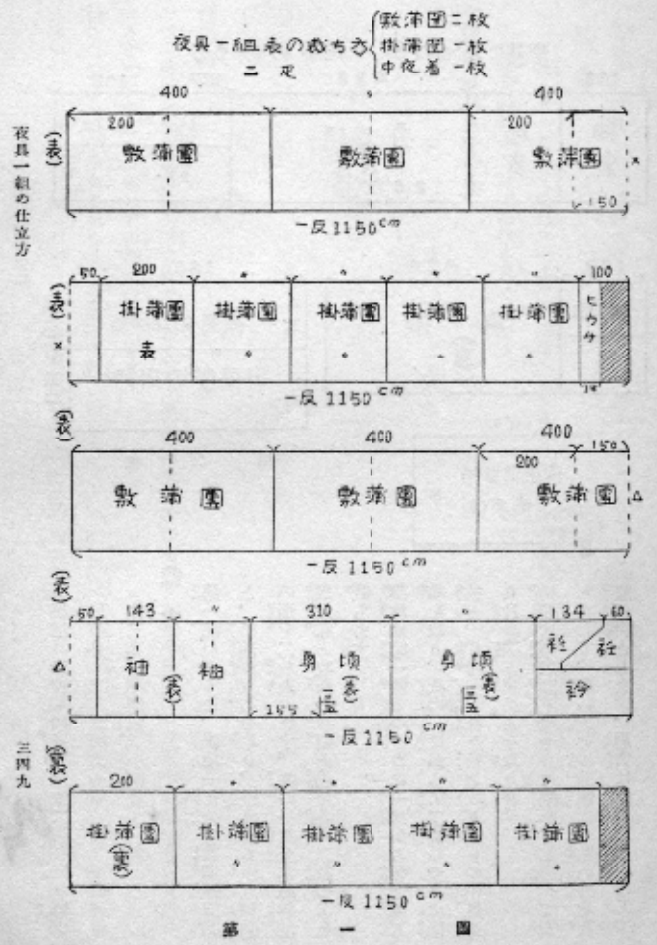
材料　一組の用布としましては並幅物で表用布四反、裏用布二反半、夜着の肩當布一四〇糎、掛蒲團の襟衿布一四〇糎を要し、綿は蒲團綿を七十枚ほど入れます。

これを各別に分けて見ますと、

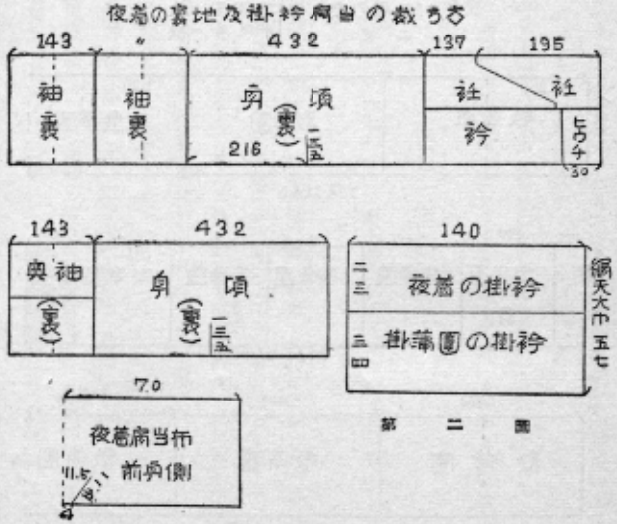
敷蒲團二枚　四〇〇糎（引返し）の丈六布　蒲團綿　四〇枚

掛蒲團一枚　二〇〇糎の丈に五布　裏地も同寸　蒲團綿一六枚

中夜着一枚　表地　身頃　三一〇糎丈二布　衽と衿と袖　一九四糎丈一布　袖　一四三糎丈二布



第　一　圖



第二圖

裏地　身頃　四三二糎丈二布　衽と衿と衽の分　三三二糎丈一布　袖　一四三糎丈三布　敷蒲團綿　一四枚

裁方

第一圖のやうに、表地一疋分で敷蒲團三布と、掛蒲團五布を取り、殘りから十五糎角の衽を二枚取ります。次の一疋分から敷蒲團三布と夜着の身頃と袖を各々二枚づゝを裁ちます。

裏地は第一圖下のやうに一反から掛蒲團五布を取り、次の一反から第二圖のやうに兩袖と、片身頃と衽と衿を取り殘りの半反から片身頃と奥袖とを取ります。

掛衿は第二圖下のやうに幅を少し遖へて裁ちまして、廣い方を掛蒲團に、狹い方を夜着の衿とします、肩當は丈を二つ打にして

$\frac{216}{155}$ $\frac{155}{61}$ 一枚　$\frac{155}{185}$ 一枚

紐の方を衿肩として圖のやうに衿肩明を斜に明けます。

注意

反物によつて一反の長さに多少の相違がありますから、丈の足りない場合は袖丈身丈共少し位づゝ詰め、裏用布を餘分につけて裾廻を多くします。

中夜着仕立上げ寸法

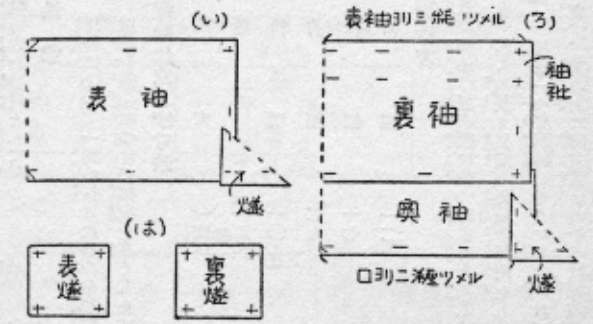
袖丈	一ばい	袖幅	三二糎
衽	一五糎角	身丈	一ばい
衿肩明	一〇・五	後幅	三二
前幅	二七	衽下り	二三
衽幅	一七	衿下	七六
衿幅	一二		

標附け方

敷蒲團及び掛布團は裁つ時に布を正しく裁てば別に標附の必要はありませんが、夜着は荒物に近いものでありますから矢張り長着の要領で標附をします。

紬

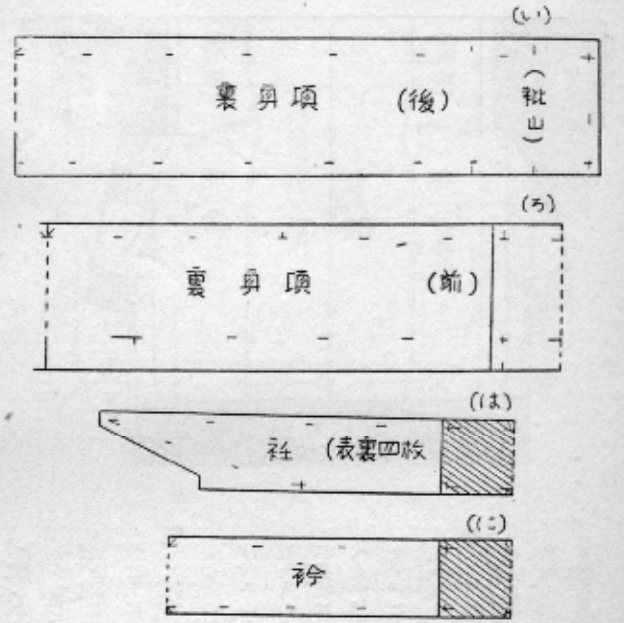
紬は一つ身裾紬のやうに全部明けて裾を出します。表紬は二枚共別々に中表に折り重ねて丈、幅の標をします、其の上に第三圖(いのやうに眞四角な晒布を三角に二つ折にしたものを二枚揃へて紐代分だけ重ねて、紬



第三圖

附と袖下側の標をします。裏袖は、奥袖を六、七糎の縫代だけ重ねてろ(圖)のやうに丈、幅の標をします。丈は附の方で口より二糎つめて袖下が斜になるやうに標します。それから表と同じやうに燧布を重ねて附及び袖下の標もします。

表身頃 (にのや

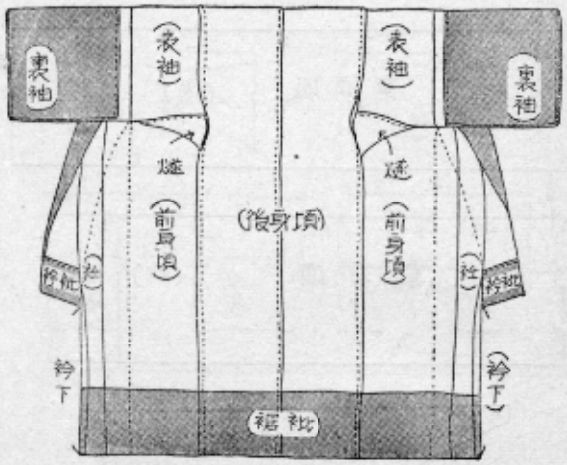


第四圖

うに二枚の身頃を申表に着物と同様に畳へて重ね、丈、幅、袖附、背縫の標をします。次に後身を左にはねておいて丈、附、脇縫の標をうつし、それから前幅の標と衽下りの標をつけて衽附の標をします。

裏身頃 表身頃と同様に重ね、身丈は表身丈と同寸に標し、それから下の方は褄被の二倍を布一杯に取り褄山を定めて被の長さを計つておきます。

袖附は裏袖の附寸法と同じに標し身幅は表と同じ寸法

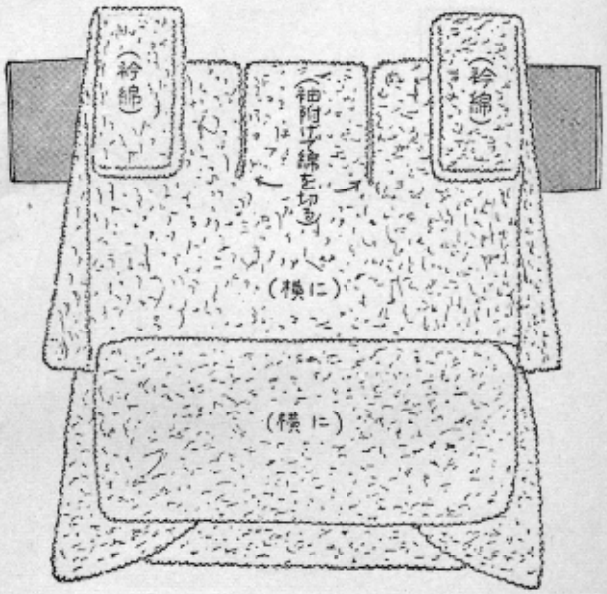


第五圖

に標します。次に後身頃を除けて脇の方の標をうつし、裾は裾山から左の方へ折り重ねて表と同じやうに衽附の標をしまして裾衽の部分は上につゞいて自然に斜に標します。

衽　衽丈が裏身頃の衽附寸法に合ふやうに、先づ裏の衽布二枚を中表に重ねて裾を折り曲げ、その上に表衽布二枚を矢張り中表に重ねたものを更に重ねて四枚にして標をしますが裾衽は後身頃、前身頃、衽とも皆寸法を描へます。そして丈、衿下、幅、衿附の標をします。この衿附は一つ身の衿附標のやうに少し丸味をつけますと恰好がよくなります。

衿　第四圖(に)のやうに裏衿を二つに折り、その上に表衿を二つ折にし衿山を揃へて重ね、衿の山から衿丈を計つて衿先から裾の分を折り返します。それから山、幅、及び各要所の



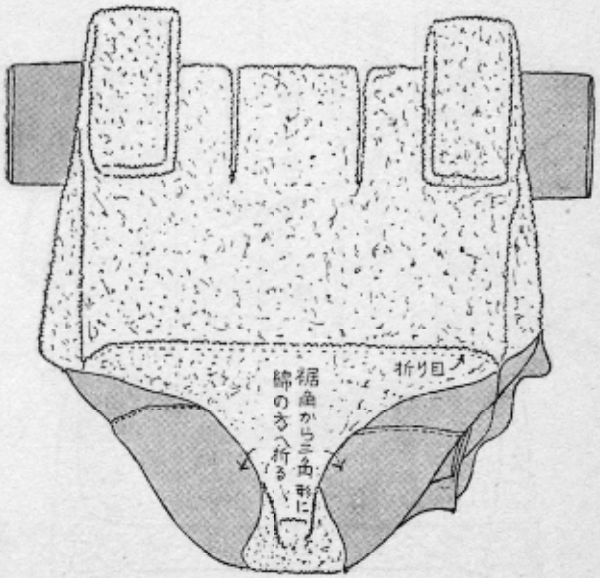
第六圖

標をして標附を終ります。

縫方

袖　最初に表袖の下に燧をつけます。縞物ならば成る可く縞を合せて縫ひ、袖の方へ折つておきます。裏袖は奥袖に燧を同じやうにつけておきます。次に表裏の袖口を合せて縫ひ表袖の方へ折つて隱躾をかけ、今度は袖下を裏袖の方から縫ひ合せ、折は前袖の方へ折つて全部隱躾をかけます。

表身頃　長着と同じやうに背縫、腋縫、衽附をし、次に袖をつけ何れも隱躾をしてお



第七圖

きます。

衿は先に裏衿と表衿の丈を接ぎ合せてからつけます。

裏身頃　表と同じやうに背、脇、衽附、袖附の順に縫ひ合せ、何れも表と同じやうに隱躾をします。

注意

裏袖と裏の奥袖とは綿を入れてから接ぎ合せますから殘しておきます。

かうして表裏全部が縫へましたら裾を合せて隱躾をかけ、それから裏衿を裏の身頃の衿附に合せてつけ、つゞいて衿下まで縫ひ、折りは表の方に

第八圖

返して矢張り隱躾をします。

次に衿先の衿の部分だけを表裏縫ひ合せ、他は其のまゝにして置きます。

綿の入れ方

先づ第五圖のやうに中表にして裾山からきちつと折つて裏身頃の上に表身頃を重ね、袖附のところまでは皺のよらぬやうにし、袖は中程までは下側へ折り疊んでおきます。

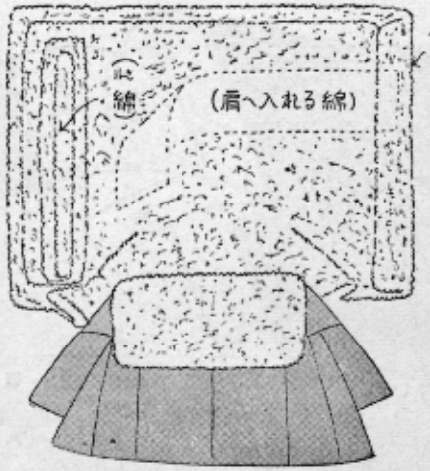
次に第六圖のやうに綿を縱横交互に重ね、裾口と衿下の側は二五糎位づゝ出して一枚通り入れ、なほ順に重ねて二枚、三枚と入れ、裾及び衿下、衿先の所に芯綿を入れ

て形を整へてから、更にその上に重ねて月そ綿が丸枚ほど入りましたら第七圖のやうに兩裾角を綿と一緒に三角に折り、又衿先のあたりの通りで上へ折り返し、布のづれないやうに注意しながら表に返します、そして周圍をよくたゝいて兩々まで綿を落ちつかせましたら直ちに第八圖のやうに衿下のところを一針綴ぢておきます。

裾がすみましたら今度は第九圖のやうに後身頃の裏布と綿を下の方へはねておいて、表身頃の裏を平らにひろげ、袖は口巾のところから折り返して綿を肩から四〇糎位、袖口と袖下側は二〇糎位出して綿を入れます。襠の部分は綿のつれないやうに注意して、先きに入れた身頃の綿と平らに重ね合せます、袖口巾にも裾山と同じやうに芯綿を入れて、つゞいて全體に平均に入れましたら裏身頃を綿の上に重ね、衿肩の中央に切り込みを入れます。

こゝで裏袖と表袖とを接ぎ合せ、表袖の方へ折つて、それから袖と前身頃へつゞけて綿を入れます。入れましたら袖口と同じ要領で袖の山と裾を三角に折つて前身の方から手を入れて返します。

次に上前の方から衿を折つて綴けます。



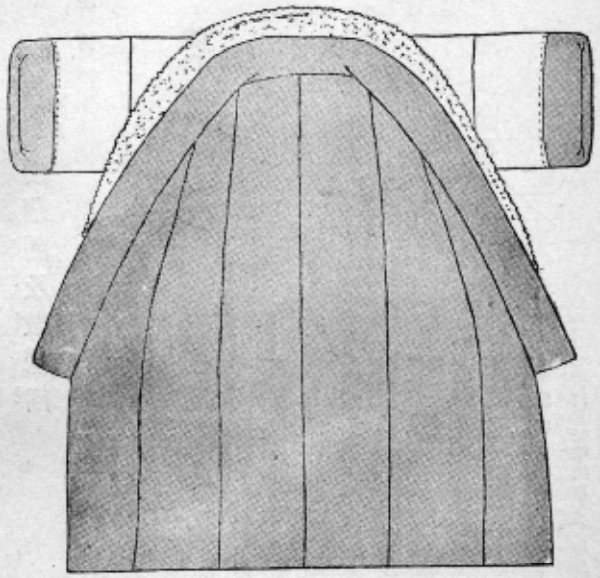
第九圖

綴ぢ方

衿を綴け終りましたら十ヶ三つ衿の部分へ五ケ所、つゞいて衽附、脇と順に綴ぢます。

肩當と掛衿

肩當布は左右の端を折り伏せ、肩明を合せ前側と後側は綴けつけ、衿肩明の部分の布は衿に被せたまゝ掛衿をかけます。



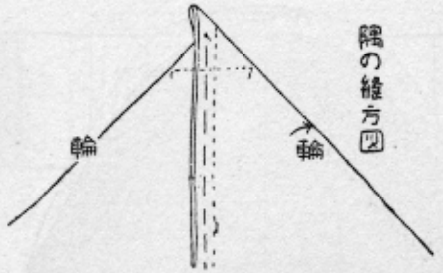
第十圖

夜具一組の仕立方

掛蒲團及敷蒲團

縫方

隅の縫方図



第十一圖

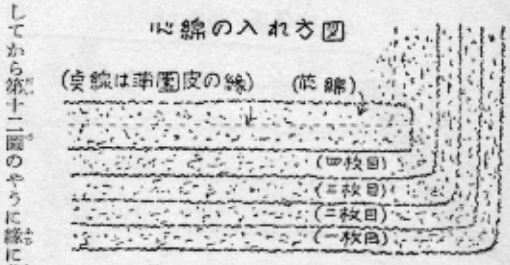
掛蒲團　正しく裁ちました物は褄をつける必要はなく布目を揃へて表裏共五布を縦に縫ひ合せ（縫代は表裏を比べて狭の方を標準にして一杯に縫ひます）折りは一方に向つて折る時と中央から両方へ向つて居る時とがありますが多くは片返しにします。折りましたら一糎五粍位の針目で隠縫をかけます、裏も同じやうに縫ひ隠縫をかけます。但し裏布は返し口として中央の縫ひ目を一一五糎位縫ひ殘してをきます。そして隠縫の際この部分は一枚の方を伏せ縫してをきます。表裏共縫へましたら中表に合せて周圍を毛抜合せに縫ひ表布の方へ折をつけて全部隠縫をしておきます。

敷蒲團　三枚の布を幅一杯に縫ひ合せますが、裏になる方の眞中で返し口を一一五糎ほどあけますことは掛蒲團と同様であります。折りも隠縫も掛蒲團と同じやうにいたします、そして中表に丈を二つ折にして輪になつてゐる以外の三方を一杯に縫ひ合せ表側になる方へ折つて矢張り隠縫をしておきます。

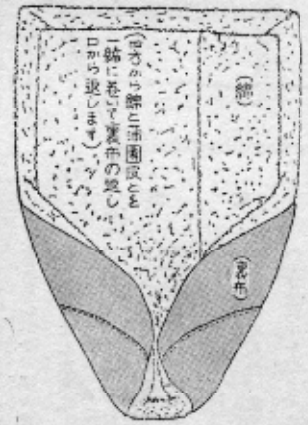
尚ほこの敷蒲團は四隅を第十一圖のやうに三角形に折つて細かく半返し縫で一糎五粍ほど縫ふこともあります。

綿の入れ方

掛蒲團、敷蒲團共縫ひ合せたものは、裏を出したまゝ表地の方を上に平らにひろげておきまして、その上に綿を一枚づゝ順に入れます。綿はいつも必ず縦横交互に入れませんと中で切れる恐れがあります。そして摑げます時は布の大きさよりぐるりを二、三〇糎位出して順に重ねまして



第十二圖



第十三圖

してから第十二圖のやうに縁に芯綿を細く入れ、それから蒲團皮の大きさだけにぐるりを折つて上に又平らに一枚重ねてから第十三圖のやうに隅を

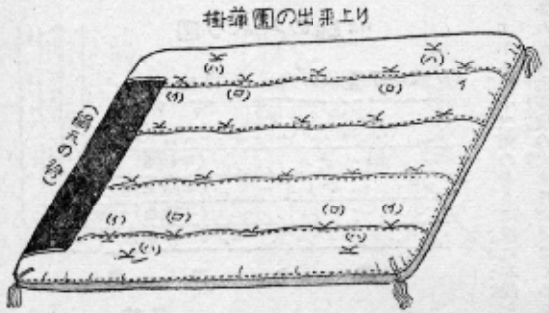
丸めるやうにして裏の返し口から引き返します。返しさしたら隅々によく綿の入りますやうに軽くたゝいて綿を落ちつかせ、隅々までゆき届きましたら返し口を綴けます。

入れ方の要領は敷蒲團も掛蒲團も同じでありますいく分掛蒲團の方はぐるりを厚目に入れ、敷蒲團の方は真中を厚くするやうな心持で入れます。

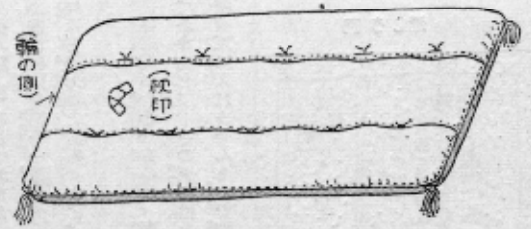
綴ぢ方

綴ぢ糸にはネリグリ、組糸、絹小町などいろ〳〵ありますが適當な糸を二本或は四本にして綴ぢます、上等のお蒲團は裝飾的に潔山の糸を使ふこともあります。

綴ぢ目は各綴目へ五針又は七針を（等分して）並行に綴ぢ、後は四隅を綴ぢます、針目は三厘か三厘五毛位にいたします。



第十四圖



第十五圖

注意

この綴は白綿や紺綿などを入れました時は前記しました位の針數にしますが、赤綿や打返しの綿を入れました場合はなほこの外に縫ひ目と縫ひ目の中間、つまり布幅の中央にも綴を入れます、但し縫ひ目の綴と平行せぬやうに各中間を針足は一糎位斜に綴ぢます。

紐

最後に紐をかけますが、表側は裏を見て狙く縫ひつけ、裏側で結けます。

敷布及カバー

夜具の類はすべて仕立直しが容易でありませんから成る可く汚れを防ぐやうにいたさなければなりません、それには敷蒲團には敷布を、掛蒲團には被ひを用ひまして、これ等を屢々洗濯する事によつて清潔を保たせます。

用布には洗濯がよくきゝ且つ汚れが目立ち易いキヤラコなど適當であります。

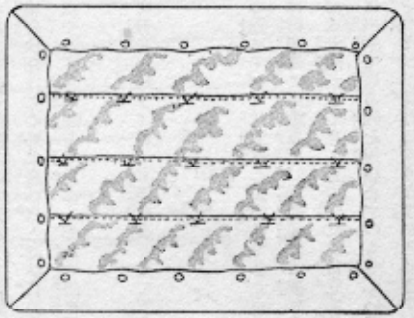
敷布は出來て居る物を用ひますのも宜しいのですが、いつも體の當る所が同じでありますと上下は丈夫であつても中央だけが切れるやうな事がありますから、蒲團全體を包む長さに用意した布を縦に縫つて時々ぐる〳〵

と謂しますと一部分の破れるやうなことがなくて長く使用されます。

又綻ひはぐるり表に少しづゝ返る位に袋のやうに縫つて第十六圖のやうに處々針で留めておきますと洗濯の際取りはづしが容易で重寶であります。

夜具は裏の方に雑な一重物のやうたものを縫つて當てゝおきますと便利であります。

方掛のカバー



第十六圖

鏡型蒲團

鏡型の蒲團は略して鏡蒲團といひ、又額縁型とも申しまして主に關西地方で用ひます型であります。然し關西に限りません他の地方でも使つて居りまして、裏布が表側へ折り返つて袱が出て居りますから、表布と裏布との色の調和によつてやさしく、又大きくも見えます。

大きさは布地の都合で大きくも小さくも作りますが、表布四布、裏布六布で丁度普通にいふ五布蒲團と同じ大きさになる布團で次のやうな材料が要ります。

材料

表布　並幅　一六二糎丈　四布
裏布　　二三八糎丈　六布
ビロード枠　一五五糎丈　一枚
綿　白綿　一七枚

仕立上寸法

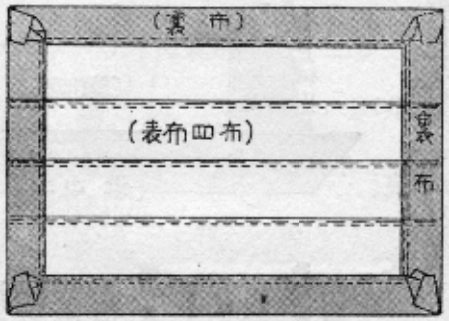
丈　約二〇〇糎　幅　約一六〇糎

縫方

標附をしませんで、布目を出來るだけ揃へて表布四枚、裏布六枚をそれ〳〵縫ひ合せます、但し裏布は三布づゝ縫ひ合せ最後に眞中を縫合せて、その時中央で返し口を一〇〇糎ほど明けておきます、そして折は一方に向けるか或は眞中から兩側へ向けるかして折り、縫目全部に一編五糎位の針目で疊縁をかけます。

かうして表も裏も布の接ぎ合せが出來ましたら第十七圖のやうに表布裏布の周圍を縫ひ合せ、一方を縫ふ毎に疊縁をかけます。次に四隅を斜に縫合せますが、その前に

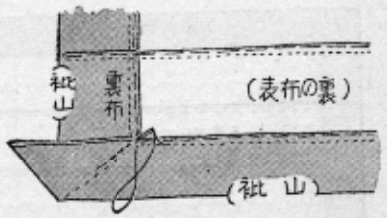
鏡型蒲團の縫方



第十七圖

裏布を下側にして平らにおいて、袱の寸法を正しくきめ、折山と縫の縫代とを決めます。そして隅の斜を細かく第十八圖のやうに縫ひ、この縫目は割つて第十七圖のやうに擴げて疊んでも宜し又第十八圖のやうに片返しにすることもあります。

第十八圖



綿の入れ方

綿の入れ方は普通の掛蒲團と全く同じでありますが、緣を幾分厚目に入れました方が出來上つた恰好がよろしいやうです。綿を入れました表に返し綿を落ちつかせて返し口を綴け、各縫目に綴を入れます。

衿の掛け方

掛衿布は表布に少しかゝる位にかけます。

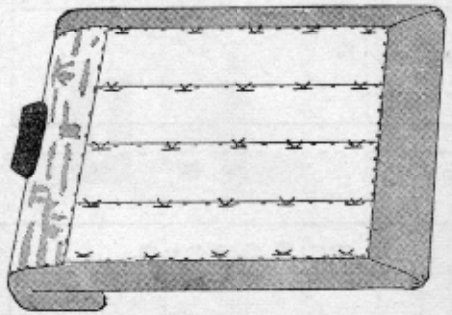
改良夜具

普通の夜具は寢む時肩を包むやうに着られますので暖かに寢まれますが、仕立が面倒である爲め儘劫がられます。この改良夜具はそれを改良して大體は蒲團の形にしてた前を五〇糎か六〇糎折り返し、衿肩明をあけて衿を夜着風につけたものでありますから、着具合は夜着のやうに暖かで仕立は蒲團のやうに容易で且つ材料も夜着より少なくて出來ます。

用布及綿

表地　並幅　八三二糎（二〇八糎四布）
裏地　同　一三五〇糎（二七〇糎五布）
肩當布　同　一六六糎
衿布　半幅　九〇糎
綿　白綿　十二枚位

第十九圖



裁方

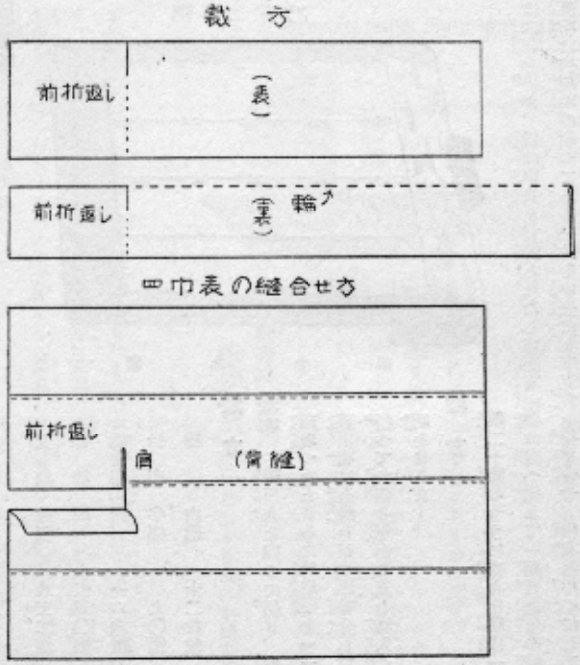
表布　總用布を四つに切り、中二枚だけは一方の端から五七糎取つたところに衿肩明を一一糎切ります。

裏用布は全體を五つに等分して眞中になる一枚の幅を二つに折つて矢張り端から五七糎入つた所の線の方に一一糎の衿肩明をきります。

縫方

第二十圖のやうに表布を縫代一杯に四布接ぎ合せ、大幅の時は二布を接ぎ、折は中央を背縫と見なして左右兩側の方へ返して一糎五粍位の針目で總縫をかけます。

裏布は衿肩明の切つてある一枚を中央にして五枚を接ぎ合せ、中布を中心にしてその兩側端の方へ片返しに折



第二十圖

り矢張り隱躾をかけます。

次に裏布表布を中表に合せ、左右兩端の前折り返りの布丈を揃へて表布一杯に縫ひ合せ（裏布丈の長い分は裾袱になります）表布側に折つて隱躾をかけます。

それから全體を平らにおいて左右の端の袱と衿肩明とをよく揃へ兩方の前折り返り分の裁目の端を縫ひ合せ表布の方に折ります。

最後に裾を合せます。こゝは鏡型蒲團の縫ひ方と同じ仕方で裏表の幅の中央を合せて縫ひ、表布の方へ返して隱躾をかけます、そして隅を鏡型に縫ひます。

衿附の部分だけを返し口として縫ひ殘しておきます。

綿の入れ方

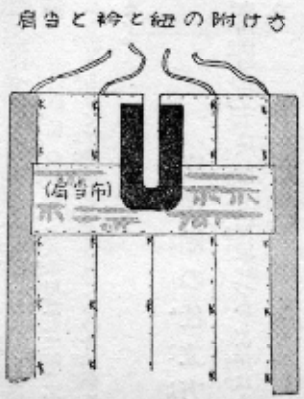
裏返しのまゝ表布を上にしておき、綿を縦横交互に重ねて掛蒲團の綿の入れ方の要領で入れます、そして四隅を卷くやうにして前側の返し口から表へ返します、返したらよくたゝいて綿を一面におちつかせ、返し口の兩側（衿肩明の部分だけ殘して）を裏表くけ合せます。

それから三つ衿の部には、着物の三つ衿へ衿芯を入れる仕方で衿肩明の足りない部分へ裏表引返しにつけ、芯綿を平らに入れて裏側で絎けつけます。

綴ぢ方

三つ衿をつけましたらすぐ三つ衿の部分を五ケ所綴ぢ後は出來上り圖のやうに全體を綴ぢます。

肩當と掛衿



第二十一圖

肩當布の衿肩明を切つて兩端を折り伏せ縫にしておきます。それを第二十一圖のやうに表から當てゝ前側と後側を紡けつけます、そして肩當布の三つ衿は身頃の三つ衿に重なつたまゝで衿をかけます。

紐附　三〇糎位の細い紐を八本用意して第二十一圖のやうに兩方の前側の端に二本づゝと、この前身側を肩から折り曲げて丁度紐が合さるところの身頃側に四本つけてこれを結び合せますと丁度袖のやうな格好になります。

座蒲團の仕立方

座蒲團の仕立方は、縫方に別段むづかしい所はありません、たゞ綿の入れ方一つで上手に仕上るものであります。

材料

地質は夜具の類に用ひます布地と殆んど同じでありますが、座蒲團用の布地は中幅物（五七糎位）大幅物（六八糎位）等が多く使はれます。

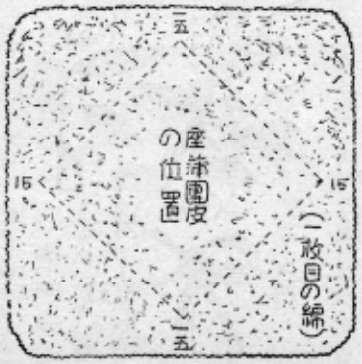
この座蒲團は大抵五枚又は十枚を一組として仕立まして綿は一枚につき白綿を凡次の割合位に入れます。

中判（五八糎幅位）	三枚
大判（六〇糎幅位）	四枚半
別大判（六八糎幅位）	六枚——八枚

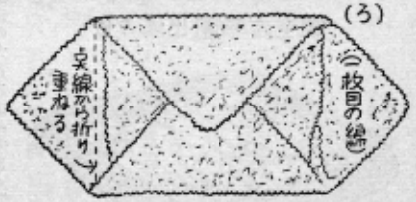
裁方

組の物を作るには用布を枚數だけに等分し丈の方が三、四糎長くなる位に裁ちますと出來上りの恰好が宜いのであります。然し模樣の定つた物、例へば定紋入などの場合は模樣が中心になる樣に裁たなければなりません。

座蒲團の綿の入れ方（い）



（ろ）



第二十二圖

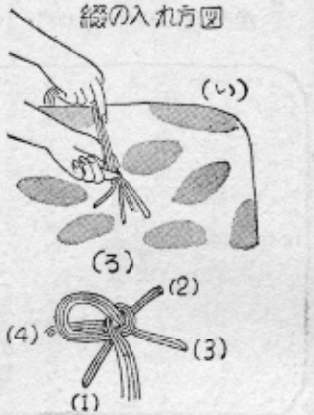
縫方

まづ中表に布を二つに折り、一方の耳の方で返し口を四〇糎ほどあけて縫ひ、表皮の方に折つて一糎五粍位の針目で隱縫をかけます。

それから四隅を三角に疊んで（兩側の縫目をよく合せて摘む）一糎五粍ほど縫ひます。

綿の入れ方

表皮の布裏を上にして擴げ、まづ一枚目は第二十二圖(いのやうに蒲團皮より四隅で一五糎位づゝ出る大きさとして、綿を斜に擴げます。次からは順に三、四糎づゝ小さくして縦横交互に入れてしまいます。それから最初の一枚だけを殘して二枚目の綿から(ろ)圖のやうに表皮の大きさより大きくならないやうに上下左右を順に疊んで、隅や縁に注意して最後に又殘した一枚でくるんでしまいます。丁度風呂敷に包むやうな具合にします。



第二十二圖　綿の入れ方

かうしてすつかり出來ましたら返し口に注意して綿を二つ折にして表へ返します。そして綿を隅々までよく入れましたら返し口を細かく縫け合せます。

第二十四圖　綿型座蒲團出來上り

綴ぢ方

綴は出來上り第二十三圖のやうに中央に一ケ所と四隅にいたします、この綴糸は綿の厚味よりもきゆうと締める位にしませんと、使用してゐる間に綴糸が弛んで見苦しくなります。

以上の綿座蒲團は用布の都合や好み、或は用ひます場所によつて、形をいろ〳〵に作ります、例へば第二十四圖のやうに綿型にしたり、四隅を丸型に縫つたりします。然し全體の要領としては變りません。

折り疊み式藁蒲團

この藁蒲團の中に入れる藁はよく乾燥した、きれいなものを、少し軟かくなる程度に木槌で打つて用ひ、目方は凡そ二十二キロ位入れます。

用布

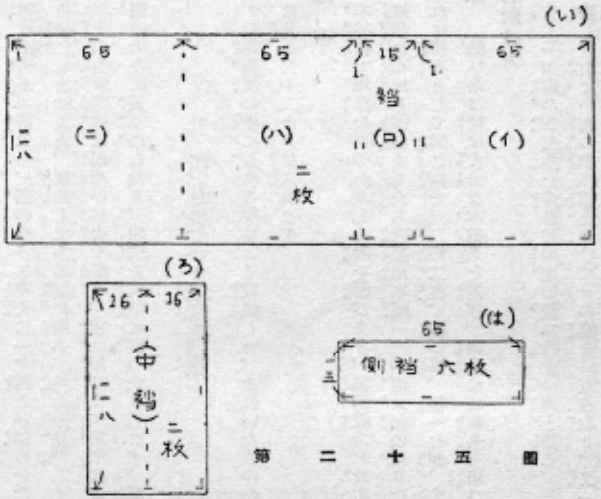
木綿物で地厚のしつかりした物を選びます、雲斑綾など最も宜しく生天竺などをも用ひます。

適當な布地を選びましたら表裏用布幅一二〇糎(幅の足りない時は適當に接ぎ合せます)丈二一四糎二枚、それに襟布として同じ幅で三二糎二枚、横の襠、幅一七糎、丈六七糎のもの六枚要ります。

糸　縫ひ糸は特に丈夫な木綿糸を選び、綴糸には麻糸を用ひ、綴針は二〇糎位の長さのものを用ひます。

標附け方

丈二一四糎の布二枚を重ねて周圍の縫ひ代を一糎と裁し、それより第二十五圖(いのやうに(イ)の長さを六五糎に標し、次に一糎の摘み標をつけて(ロ)の標を一五糎取り、又一糎の摘みをとつて殘りの一三〇糎の中央に折り目



第二十五圖

の襟をつけて(ハ)(ニ)とします。

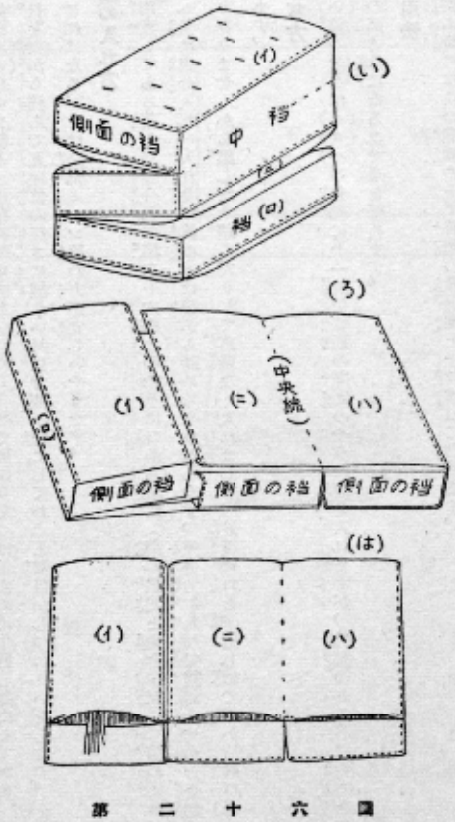
中襟　二枚の襟布を重ねて幅は一一八糎に標し丈を三二糎にして中央へ折り目の標をつけておきます。

側襟　六枚の側面襟を正しく重ねて、幅を一五糎、丈を六五糎として標します。

縫方

第二十五圖(い)のイロハニのつゐてゐる二枚の滑團皮を別々にして、(ロ)襟の兩側一糎の摘みを表から標通りに摘んで細かい針目で半返し縫にします。折は皆襟の方へ片返しに折り、次に第二十六圖(ろ)のやうに一枚は上側の左に(イ)を出し(ロ)を厚味とし(ハ)(ニ)を下側へ廻し他の一枚は反對に(ニ)(ハ)を上側とし(ロ)を厚味にして(イ)を下側へ廻します。そして側面の襟布を片側に三枚づゝ圖のやうに縫ひ合せます。

この襟をつけるには角を正確に接いで、折はどちらへもつけません。次に中襟布の一一八糎の側を上側も下側も同じやうに二枚の(イ)と(ニ)の間へ第二十六圖(い)のやうに接いで、兩端三二糎の方を側面の襟二枚分へつけて接ぎ合せます。



第二十六圖

かうして兩側面とも接ぎ合せますが、(ロ)圖のやうに上面の一方で襠の兩端六、七糎位づゝ縫ひ合せて中央で藁を入れる口を明けておきます。

尙ほ(ハ)(ニ)の中央線と、中襠布の中央をぴつたり合せて區限りをつけるために半返し縫にしておき、又全體の縫目を表から綺んで五粍位の深さに細かい針目で摑み縫にしておくと縫目がしつかりいたします。

これはなる可くは全部ミシン縫の方が宜しいやうです。

藁の入れ方

用意してある藁を三等分して第二十六圖(ロ)のやうに口から縱に(藁の根元と先を交互に)詰め込み、口の左右へ先に充分入れ、入れ易い眞中へは後から詰めるやうにします、充分力を入れて詰めませんと全部の藁が這入りきりませんから膝したり踏んだりして高過なく入れまして、最後に口を少返し縫で細かく縫ひ合せてしまひます。

綴ぢ方

(い)圖のやうに(イ)(ロ)(ハ)の各部に十一針位普通の蒲團のやうに綴を入れますが、針足のところに力布をあてゝ、襠の高さ位になるまで糸を締めます。

使用法

使ふ時にはこの蒲團の上に普通の敷蒲團を一枚重ねて寢ます。

膝蒲團（その一）

此の膝蒲團は普通の座蒲團だけで膝のあたりに寒さを感ずる時や、洋裝の婦人を日本座敷へ通して靴下一つで脚の冷える時などに用ひるのに相應しいものであります。

用布

普通座蒲團に使ひさす地質なら何でも適當であります。

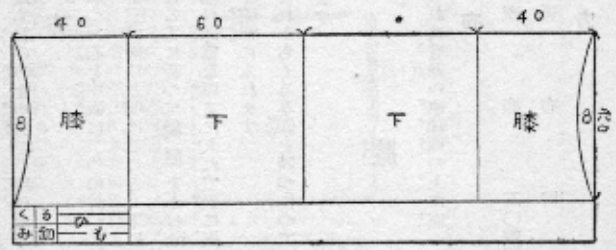
幅　六〇糎　丈　二〇〇糎

裁方

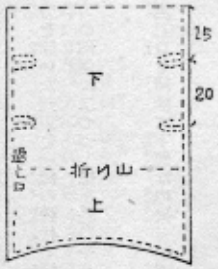
第二十七圖のやうに大幅から六〇糎幅だけを取つて殘り布から紐と卸布とを取ります。

六〇糎幅の布は丈を二つに折つて

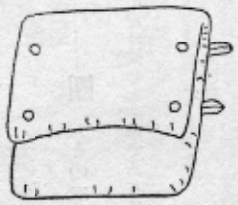
裁方圖



縫方圖



切上未出



第二十七圖

裁ち目の方を中央で八糎になる位の程度に丸く剃ります。

縫方

裁つた布を中表に二つに折つて輪の方を除いた三方を一糎の縫代で縫ひますが、兩側どちらかの一方で返し口を三〇糎ほど明けることゝ下になる方の兩側に二つづゝ紐を乳のやうにつけることであります。折りは上側になる方に折つて隱躾をかけます。

綿は適當な厚さに入れて表に返し、返し口を絎けて下側は中央と四隅に綴ぢを入れ、上側にも中央にかざり綴を菱形に入れます。

それからくるみ釦を四つ作つて上側の左右兩側に二つづゝつけて、前に下側につけた紐をかけて使ふのであります。

膝蒲團（その二）

これは普通の座蒲團の上に座つて膝にだけ被せる蒲團であります。

用布

表布　五〇糎幅　九〇糎

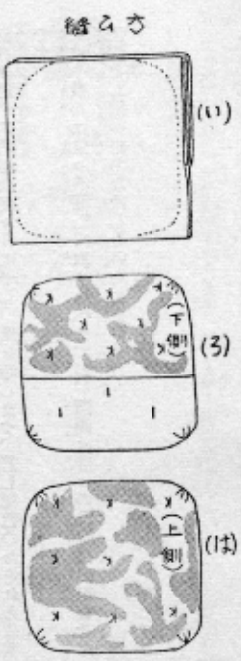
裏布　同　同

縫方

表裏の布を中表に合せて兩端の裁ち目を合せ（裏布の方を一糎づゝ兩端へ出します）て縫ひ、表の方に折りをつけ隱躾をかけます。但し一方は返し口として四〇糎ほどあけておきます。

次に返し口のあけてある一方の端の兩角を五糎位丸味をつけて端から一八糎縫ひました所で一寸針を返して止め、第二十八圖(い)のやうに他の一方の端を中に狹むやうに持つて來てこゝから四枚一緒に縫ひます。輪の方の端から一〇糎手前に來ましたら一〇糎の丸味をつけてこゝから表裏を別々に縫ひます。同じやうに片方も縫ひます。

縫ひ方



第二十八圖

綿の入れ方

綿は先きに大體出來上る寸法より少しづゝ大き目に形を作つておき、丈の短い膝の下になる方、つまり縫ふ時中に狹んだ部分に先きに入れて、それから長い方に入れて返し口から表に返し、綿をおちつかせて返し口を細かに絎けます。

綴ぢ方　綿がおちつきましたら(ろ)(は)圖のやうに上も下も綴ぢをします。

夜具の手入と保存法

夜具を蔵めるには必ず湿気のない所へなる可く積み重ねないやうに蔵め、時々風通しの宜いところへ出して風を通します。押入に蔵める時そのまゝ入れますと戸を閉めて置きましても長い間には埃がつきますから、大きな風呂敷に包んで入れるか或は上から風呂敷を被せておきます。

毎日使用する蒲團は度々日に干し、風を通します、若し褪色のおそれあるものは布を上に被せて干すと宜しいです。

上被や敷布は度々洗濯して取りかへますが、蒲團は度々の洗濯は出来ませんけれども、二年に一回位は皮の洗濯をし綿の打ちなほしをいたします。

一二、赤ちやん物の部

肌襦袢（その一）

嬰兒の着物、殊に肌につく物は度々お洗濯をしなければなりませんので、洗濯に自由な多でも暖かい白の綿ネルで作るのが一番便利であります。綿を多く用ひませんが、上からおくるみで包みますから決して寒いことはありません。

用布

表用布　白綿ネル　大幅五二糎

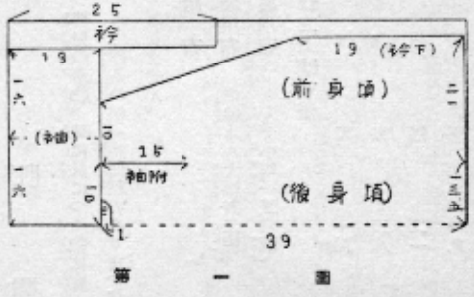
裏用布　ガーゼ小幅一五六糎

仕立上げ寸法

袖丈	一五糎	袖幅	一三糎
身丈	三八	後幅	一三・五
前幅	二二	衿幅	三
衿下	一九	衿	いつぱい

裁方

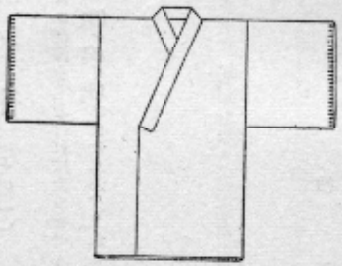
表用布を縦二つ折にして第一圖のやうに身頃と袖をとります。袖と身頃の縫り布から衿をとります。衿の總丈は四八糎を要しますから衿山で接ぎます。裏用布は小幅ものですから、背縫をいたします。從つて背縫代を八粍程とつておきます。その他は表身頃と同寸にいたします。袖には裏はつけません。

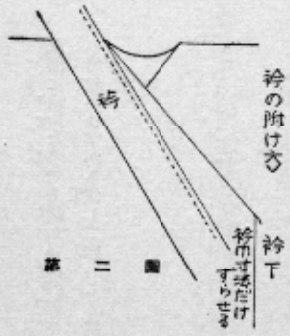


第一圖

縫方

袖　袖口の裁目に縁かゞりをし、袖下は眞直ぐに八粍位の縫代で小針に縫ひ、縫代をきつゝておきます。





第二圖

身頃　裏身頃は背縫をし、表裏ともに兩肩を接ぎ合せ、表裏を中表に合せて衿下から裾を續けて縫ひ、褄先をきちんと折つて表に返します。

次に袖をつけ、折は身頃の方に折つて、その縫目に裏身頃を被せつけて縫目をかくします。

衿附　衿は山で接ぎ合せ衿下の標から前身の方へ出來上り衿幅だけに標をつけ、そこから衿肩へ斜めに衿附の標をつけ、衿を縫ひつけます。（表、裏の身頃と衿と三枚一所に）衿先きを縫つて、裏身頃へ被せつけます。

肌襦袢（その二）

材料　白メンネル或はガーゼ、又は綿氣のない晒木綿等並幅一六〇糎

裁方

身丈を裁ち切り三八糎にして殘りから衿と紐を七糎幅に二本取り、その殘りから三つ衿布に四糎だけ取つて後を二つに切つて袖にします。

身頃は幅を二つに折つてから丈を二つに折り衿肩明を三糎あけます。

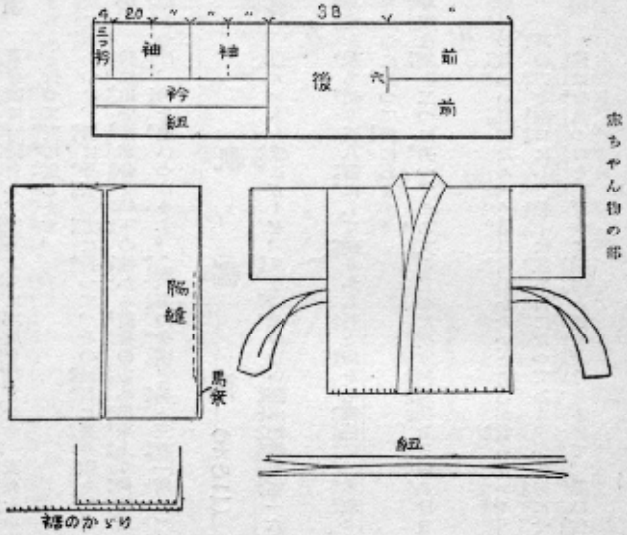
縫方

嬰兒の厭かい肌になるべく縫ひ目のかたいところが當らないやうに注意します。

袖　耳の方を袖口にし、袖下は裁ち目になつてゐますが袋縫にせず端はまつり縫にしておきます。

身頃　脇は身八つ口を明けずに袖附と馬乘だけをあけて、縫ひ代は附の下では一糎にしますが、馬乘の所は幅

赤ちやん物の部



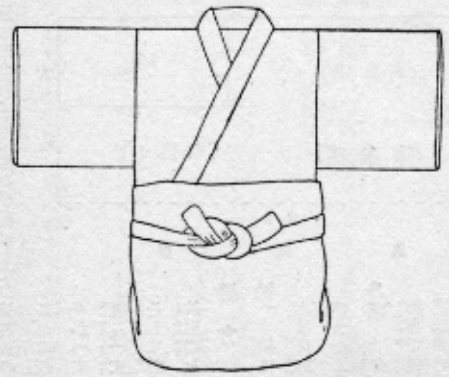
第三圖

一杯になるやうに斜に縫つて馬乘の耳紐の要のたいやうにします。（裾は三つ折縫の代りに裁ち目のまゝでかゞり縫をしておきます）衿は山で接いで下前の裾からつけますが、凡そ丈の三分の二位までは一重の縫ひ代につけ、そこから上で出來上り圓のやうにふくらみをつけて衿肩明の切り込まで密につけ、三つ衿芯を入れて出來上り幅二糎五粍に折けあげます。

袖附　身八つ口も振り八つ口も明けないで全部普通につけます。

紐附　丈の中程で幅を突き合せに折つてそのまゝを後身頃の袖附の下のところにあてゝ中央一二、三糎位をとぢつけておき、他はそのまゝ縫はずにおきます。

長襦袢



第四圖　長襦袢

用布

白縮ネル大幅九二糎、衿用布晒木綿八糎幅六〇糎（衿布は身頃のつゞきから横布に八糎幅に取つても宜しいのです）三糎幅テープ一六〇糎、後紐布及び斜布少々。

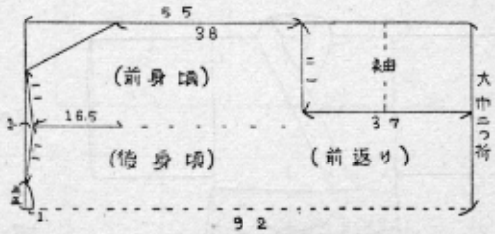
仕方上り寸法

袖丈	一七糎	袖口	一七糎
袖幅	二〇	袖附	いつぱい
身丈	五四	後身頃の前のかへり	三六
前幅	二二	後幅	一五
衿下	三八	衿幅	三
紐	いつぱい		

裁方

用布を縦に二つ折にして輪を手前にして、第五圖のやうに裁ちます。

四方裁ち方



第五圖

これは後身頃を長く伸しておいて、おむつを包むために、裾から折りかへすことの出來るやうにいたしますから、前身頃の丈より三七糎後丈を伸しておきます。

そして前身頃のかき落しから袖をとります。

衿肩明を一廻くり、肩で一糎づゝ前後とも下げておきます。

縫方

袖　袖は布の耳を口としますから絎けません。そして、普通の着物とは反對に、輪の方を袖下とし、裁目の方を肩にしますから袖は縫ひません。

身頃　先づ袖を擡げたまゝ裁目の方を身頃の袖附明につけ、縫代を斜布で包み、折は袖に返してまつり付けます。

斜布は身頃の方へ一所に重ねて縫ひますと簡單であります。

次に袖山から肩山を縫合せます、やはり斜布を前側にあてゝ縫ひ、折を後に返して裏でまつります。

衿下は布の耳ですからそのまゝとして、肌襦袢と同樣に衿を附けます。

前身頃の裾から後身頃の裁目全部にテープで見返しをつけます。最後に後身頃へ紐をつけて仕上げといたします。

綿入胴着（その一）

材料

黄木綿　並幅四一〇糎（無双仕立にしますから裏表づきにします）
青梅綿　二枚、眞綿少し。

裁方

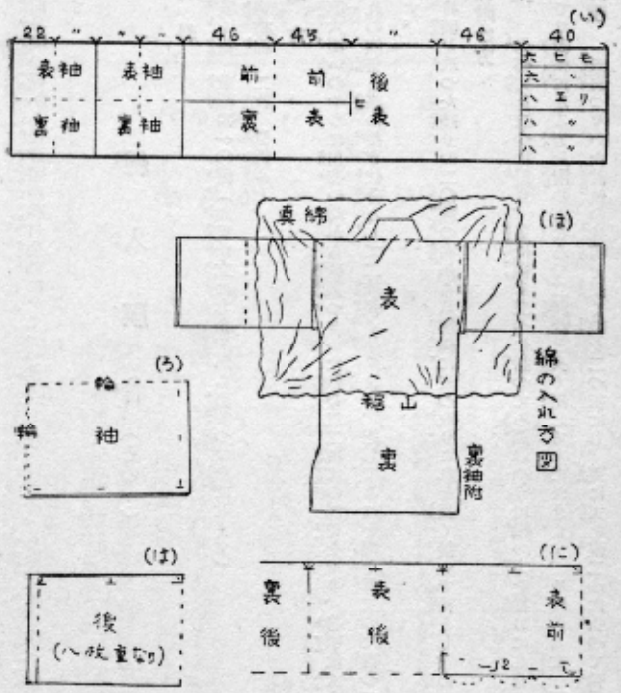
第六圖（いのやうに用布の端から表裏づいた袖を二二糎丈の四倍を取り、身頃は丈を四五糎にしますから、それの四倍と裏の接ぎ代分として二糎長く切ります、そしてこれを幅を眞二つに折つて衿肩明を三糎五厘切ります。

身頃を取つた殘りの二〇糎の布から八糎幅に三つ取りこれを長く接いで衿とし、あとの二本は紐布にします。

標附け方

袖　先づ丈を二つに折り、更に幅も二つに折つてろ圖のやうに（）縫の方を袖口にしますから向側におき、山の方では表袖になる方を附のところで二糎ほど長く出して左におきます、それから丈、幅の標を一所につけます。

身頃　表裏づいた前後の身頃を長く幅を二つ折にし、更に丈を直二つに折つて衿肩明を三糎五厘だけ切り込



第六図

みます。次に裏身頃の肩で接ぎ合せる接ぎ代を一緒取つて更に丈を二つに折つては圖のやうに重ねて描へます。

かうして八枚重ねたまゝで袖附、後幅、山の標をつけ次に肩接ぎの標をつけます。

それから(に圖のやうに一番下に重なつてゐる裏後身頃と一番上になつてゐる表後身頃を左に除けて前身頃の標にうつります。

衿附の標は裾で一糎にし丈を三分して下から三分の二の邊で縫ひ代を二糎とし、その間を斜に標します、衿肩明から丈の三分の一のところまでの斜の間で一糎ほどのふくらみを持たせてつけます。

縫方

袖　表裏つゞいたまゝ袖下を縫ひ、内袖の方へ折をつけて鏝をかけておきます。

身頃　まづ裏身頃の肩山を接ぎ合せ縫ひ目は割つておきます。それから表裏共衿山から眞二つに折つて脇を縫ひ合せ矢張り縫ひ目には鏝をかけておきます。

袖附　表袖だけを附け裏袖は綿を入れてから縫けつけます、先づ袖下の四つ留をしつかりして斜目を細かく縫ひ上げ縫ひ目は割つておきます。

衿　衿布は三枚を長く接ぎ合せ、表身頃だけにつけます。

綿の入れ方

(に圖のやうに後身頃の裏側を上に、袖は左右にひろげて平らにおき、表身頃の後から先きに肩と脇へ一三、四糎位出るやうに眞綿をひき、その上へ青梅綿を一枚通り入れます、この時は袖口や裾へも一〇糎位餘分に出します。そしてその上へもう一枚重ねますが、二枚目は少しぐるりを控へて小さくします。その上に眞綿をひき、それから裾山の折り目に尺度をあてゝ裏身頃を綿の上へ、つまり表身頃の上へ重ねます、すると裏の前身頃が上に出ることになります、同時に裏袖も口明から折つて表袖の上へ折り返し、それから袖下の留へ斜に綿

を切り込み、後身頃からつゞきの綿をこの上に引きのばし、真綿を引いてから後身と同じ厚さに左右の前身頃と袖に綿を入れます、足りないところは別の綿を足して平らに入れ真綿を引いて表の前身頃をかへします。全部綿が入りましたら軽くたゝいて綿をよく落ちつかせまづ袖口、裾口にもよく綿を含ませて假綴をしておき次に衿附をも綴ぢて衿先を縫ひ、衿にも軽く綿を入れて衿幅二糎五粍上り位に細かに綴け上げます。裏袖の附は袖下をしつかり留めて細かく綴けます。

紐附　二本の紐布を割り接ぎにして幅一杯に縫つて、背の中央で袖下の高さに當て、中央一三糎位を綴ぢておきます。

綿入胴着（その二）

用布

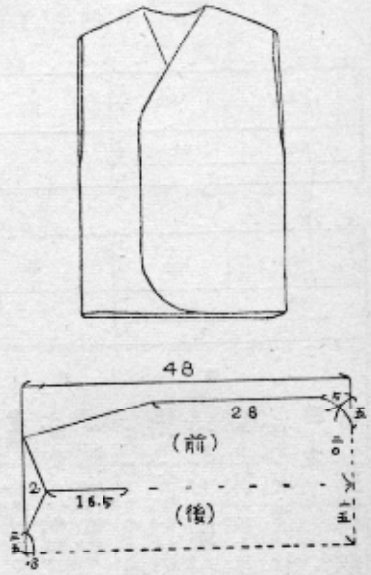
白新モス大幅　一〇〇糎
青梅綿　一枚

仕立上り寸法

身丈　四八糎
前幅　一九糎
後幅　一五糎

裁方

用布を縦二つ折とし、それをまた横に二つ折として、圖のやうに線を手前と右とに置き裁切り身丈を四八糎とし、肩の切下げは二糎、裾先きは五糎の丸味として、第七圖の通りに裁ち切ります。



第七圖

縫方

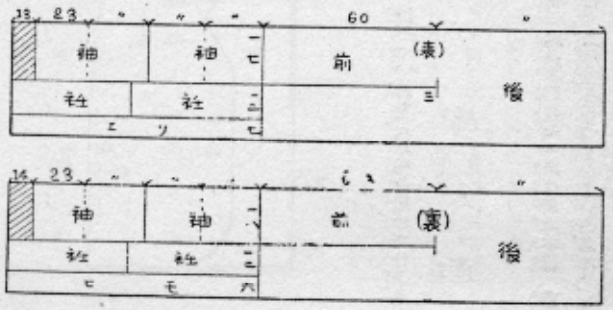
表裏の隅肩を別々に縫ひ、表裏の脇明を縫ひ、袖先の丸味から衿下を縫つて、綿を入れ衿を綴けて仕上りといたします。

綿入産着

用布

表用布　麻の葉形新モス或は無地木綿　並幅　二二五糎
裏用布　表用布とうつりのよい色無地。

裁ち方図



第八圖

裁方

第八圖のやうに表裏とも同じ裁ち方でありますが、たゞ裏用布は袱の分を長くすることゝ、裏衿が要りませんから衿になる分を紐布にいたします。

標附け方

袖　幅も丈も一杯にして袖附は一三糎五粍にします。

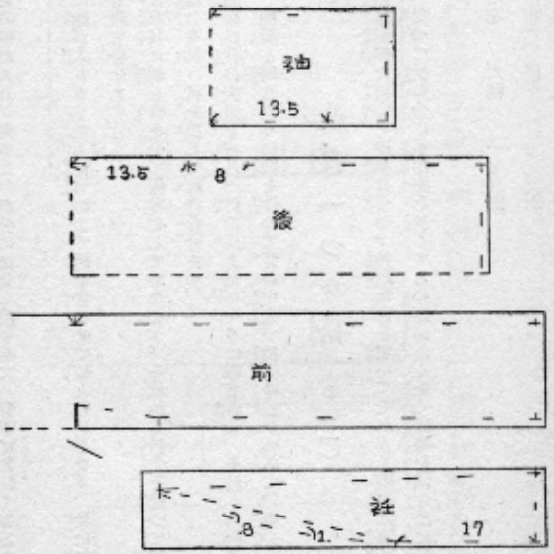
身頃　普通の一つ身と同じやうに揃へて重ね、丈、袖附、身八つ口、後幅、山の標をつけてから、後身頃を左に除けて前身頃の標にうつります、衽下りをつけ、幅は裾で一杯に、衽下りのところで二糎として斜の標をつけます。

衽　丈の標をつけ、幅は裾で一杯にし、合褄は裾より四粍つめ、上の縫ひ代は二糎にして斜の標をつけ、衿附は圖のやうに斜の線を三分して八粍――一糎とふくらみをつけて弓形に標します。

縫方

袖　表裏の袖を各別々に縫つて裏袖口には含み綿をして綴

標附け方図



第九圖

ぢておきます。次に振八つ口を裏表合せて縫ひます。

身頃　表も裏もそれ〳〵脇、衽附を縫つて表身頃にだけ衿をつけます。それから裾を合せて身八つ口を縫ひ合せてから袖をつけます。

綿の入れ方

まづ綿を入れる前に身八つ口の縫ひ代の裏側へ薄く含み綿をして裏の縫ひ糸でおさへておき、全體を裏返して前を合せ、その上に袖を重ね、裏身頃はくる〳〵と卷いて表の後身頃の布裏を上にして綿を入れます。胴着と同じ要領で眞綿、木綿綿、眞綿の順に入れます、裾は袱の分に七、八糎幅の綿を入れて裾口か

ら裏身頃を折り返して綿の上に重ねます。さうしますと裏の前身頃が上になりますから後からつゞきの綿をのばし前身頃に入れ、足りない部分には足し綿をして一番下になつてゐる表前身頃を返して綿をすつかりくるみます。

全體に綿が入りましたら裾口によく綿を含ませて假とぢをします、次に衽附の縫ひ目を裏から綴ぢつゞいて衿附をも綴ぢ合せます。

衿下は裏衽に綿を含ませて綴ぢをしておきます。それから衿先を縫つて衿を二糎五粍幅に細かく縮上げます。

次に袖口も袖口裾を出して縮け合せます。

綴　脇縫ひ代の表裏を、外へ針の見えないやうに綴ぢ合せ、それから裾の袱綴をいたします。

紐附　調着と同じやうに紐を作つて背の中央で袖下の通りへあて、中央一三糎ほどをかゞつておきます。

改良一つ身袷（その一）

この袷は面倒な裾合せや袖口合せ、袖附などを省いてそれ〴〵の口は裏表を揃へてテープで縁取りをして作ります、從つて袱の分に裏用布を長くする必要がなく全く表裏を同寸法に裁ち切ります。

用布

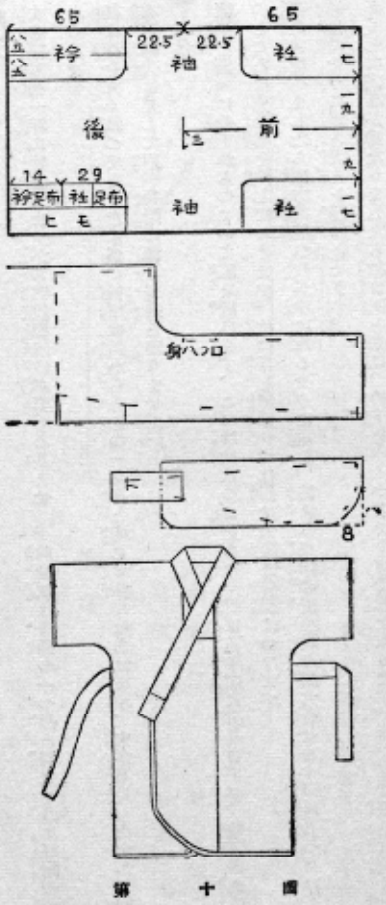
表用布　大幅　一七五糎

裏用布　同　上

バイヤステープ　二五〇糎

裁方

表用布の幅を眞二つに折り、更に丈を二つに折つて衿肩明を三糎切り込み、次に身幅を一九糎に標し、袖丈を



第十圖

二二糎五粍に標してこの二つの標の出會ふところ、つまり腋下は二糎位の丸味をつけて脇を裁ち落します。この裁ち落した脇の布の二枚を衽に、一枚を衿に、殘りの一枚は衽と衿の足し布とします。なほその殘りを紐

布に使ひます。それから衽の裾は八糎の丸みに裁ち切ります。
裏用布も全く同じでありますが、紐布だけは要りません。

標附け方

丈も幅も布一杯に仕立てますから別段標附の必要もありません。前身頃は普通の一つ身と同じやうに衽附の標をつけます。
衽は褄を丸く裁つてありますが、衿下は角から普通の一ツ身と同じ寸法だけあけます、丈が不足しますから別布を縫先に足して附、衿附の標は普通と變りません。

縫　方

裏表を別々に袖下からつゞいて脇を縫ひます、この時身八つ口をあけ、折は前身頃に折りますが、腋下の丸味のところは充分布を伸しておきます。次に衽を標通りつけ折は矢張り普通につけます。
裏表共縫へましたら兩方共縫ひ代が中にたるやうに重ね、脇及び衽附の縫ひ代を綴ち合せます。身八つ口は普通袷のやうに裏と表とを縫ひ合せます。
かくして表裏が重なりましたら袖口明と裾口、衿下をバイヤステープで緣を取ります。テープは表側に薄く縫ひ合せ、裏側できつり絎にしておきます。
ぐるりが緣取れましたら衿をつけます、衿は普通の袷と全く同じで衿幅は三糎上りに絎けつけます。

紐附　嬰兒には後紐にしますが少し大きくなりましたら前紐につけかへます。

改良一つ身袷（その二）

用布

白綿ネル大幅一一七糎、七糎幅の紐布一五〇糎、斜布及び折伏用々布少々、緣かゞり用刺繍糸少々。

仕立上寸法

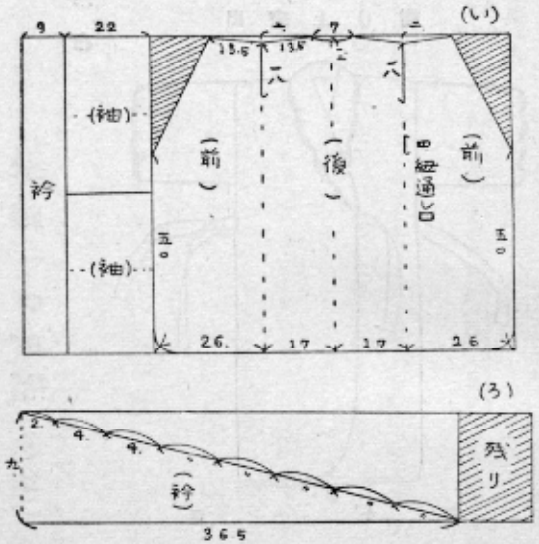
身丈	用布いつぱい	後幅	三四糎
前幅	二六糎	衿下	四二
袖幅	いつぱい	袖丈	一八
袖附	一八		

裁方

身頃は横布で作りますから大幅の用布を横に倒げたまゝ端から第十二圖(い)のやうに、衿、袖、身頃と取つてゆきます。
衿は九糎幅にとります。これを(ろ)圖のやうに、端から三六糎五毛を計つて輪とし、左の上と、右の下とを斜線

第十一圖　出來上り圖

でつなぎ、この線を四細位づゝに割つて適當の丸味の曲線をつけ、縁かゞりをしてその曲線の通りに裁切ります。



第十二圖

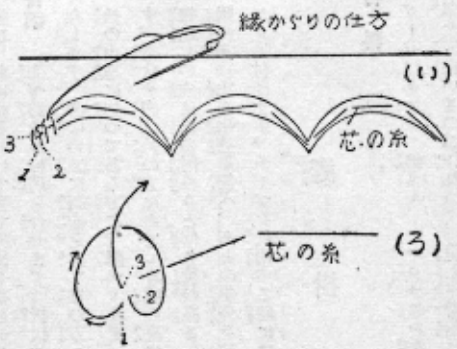
袖　二三糎をとり、縦に二つ折にして切つておきます。そして袖口も衿のやうに縁かゞりの曲線をつけておきます。

身頃　殘りの布を眞二つに丈を折り輪を手前にし、輪の方から後幅を一七糎、前幅を二六糎五粍として襟をつけます。

衿肩明は左端手前で、背の中心へ一廻二粍の割りをとり、衿肩は三糎五粍あけます。次に肩山の端で肩下りを二糎とり、衿肩明から斜線を引きます。前身頃の肩線も同様に致します。布の向側で右から衿下五〇糎を

とりこの標から、前の肩線まで斜めの線を引いて衿附の標をつけます。

次に肩山から一八糎の袖附の切込みを裾線に入れ、前裾に五糎の丸味をつけます。



第十三圖

縫方

寸法通りに裁つてありますから直ぐに縫ひます。

袖　袖口の曲線の標通りに縁かゞりを致します。第十三圖(い)のやうに曲線の下へもう一本同様の曲線を標し、線と線との間は三粍乃至四粍位といたします。次に刺繍針に刺繍糸を通して、曲線の中間に芯ぬひを致します、大針に三四針、上に出る目を大きく、抄ふ目は小さく、そして、最後の針を(ろ)圖の内側の曲線1に出し、圓い輪を書くやうな氣持に糸をまわして、針を内側の曲線2へ入れて外側の線3へ出し糸を引きしめ、また同様にこれをくりかへしてゆきます。終りまで出來上りましたれば、糸をかゞり目の中の方で留めて、かゞり目から先きの不要な布を切りとります。

凸凹のない眞直ぐの裁目をかゞるときには、先きを切る必要がありませんから、内側の針目だけを拵へて外側

には針をかけずに糸の輪へ針を拔いて同樣にかゞります。

縁かゞりが出來ましたらば袖下を縫ひます。地薄な二糎幅位の折伏せ布を外袖側にあてゝ三枚一所に袖下を縫ひ、前に折をつけて裏で折伏せ布をかゞります。或は折伏せ布を用ひずに斷目をかゞり付けてもよろしい。

身頃　先づ前後の衿肩を合せます。折伏せ布は後身の方にあて、前に折つてかゞつて置きます。次に袖附をいたします。身頃の方に斜布を當て袖の方へ折り返して裏へまつります。

衿の山型に切つてある方に、縁かゞりをいたします。衿布の眞中と背の中心とを合せて、小針で身頃につけます。折伏せ布は衿の方にあてゝ身頃の裏にまつり附けます。衿下及び褄にも斜布をつけます。

紐通しの穴は衿の附際りと同じ位の高さに左袖附の下にあけ、斜布で周圍を包みます。

附紐布は丈の半分を後へ、あとの半分を二つに切りて、左右の衿の下に付けますから、各々適當に結けてしつかりと付けます。テープを代用する時には三糎幅位のものを用ひます。

涎掛け

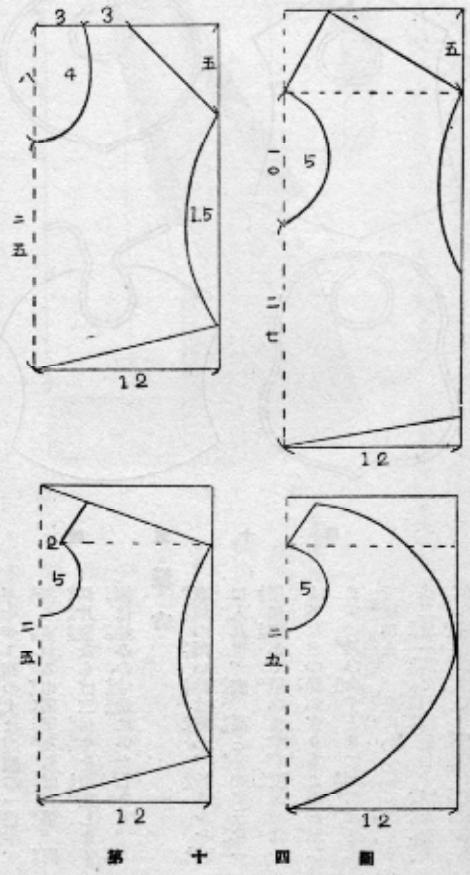
材料

ガーゼ、タオル、綿ネル、キヤラコ等を初め、富士絹、羽二重など小布を利用して、型も自由に工夫したら簡單に面白いものが作れます。但し平常用は度々洗濯をするものですから、白無地の木綿物が適します。

裁方

第十四圖のやうな色々な形を作つて見てそのうちから撰ぶのも面白いものです。このうち二三の裁方を掲げて見ます。

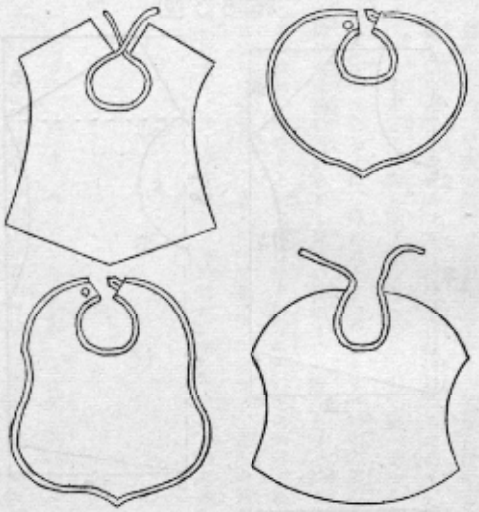
圖方ち裁



第十四圖

圖のやうに幅二十三、四糎、丈二十五糎乃至八糎の布を縱に二つ折して、先づ腰ぐりの標を縱橫圖の寸法位の

圓形を作り、周圍はそれぞれ、好みの恰好に標をつけて裁ちます。



第十五圖

周圍へギヤザーをつける場合は、ギヤザー布の丈は周圍の一倍半、折り重ねる巾着襞ならば三倍。同様片襞ならば二倍半を用意します幅は好みの寸法にいたします。

縫方

表地の薄い時は晒か、綿ネルを芯に入れて、表、裏と合せて三枚一所に細かく縫ひます。夏ものはレースなどの縁かざりもよいと思ひます。縫ひ合すときに間にはさんで縫ひます。表にかへして認ぐりは二枚一所に假縫をし、紐布を表から縫ひつけて、裏側で絎付るか又はテープで包み縫ひにします。

地厚のものは一重で、周圍をテープ、バイヤスでくるんでミシンをかけておきます。

裝飾として、花や小鳥などの型を模様ものゝ小布で切つて、前にかゞりつけたり、又は簡單な刺繍を入れたりするのも可愛らしいものです。たゞあまり褪めたり、色の散るやうなものはさけます。

搔卷型おくるみ

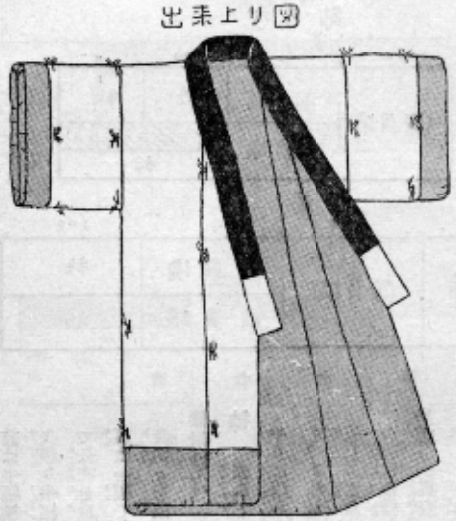
用布及綿

表布。並幅三四〇糎、裏布四四〇糎、掛衿一二糎幅九五糎、どてら綿三枚、眞綿少々。

仕立上寸法

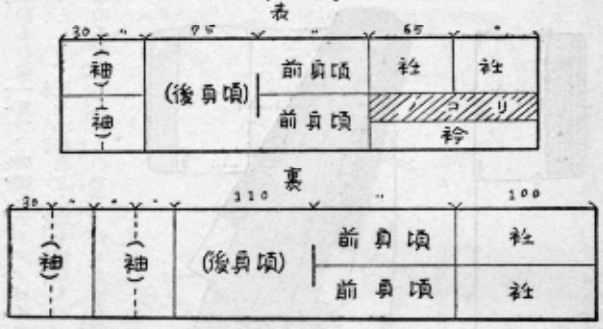
袖丈	二八糎	袖幅	二四糎
絎	四二	身丈	九一
衿肩明	四	衽下り	一一
衽幅	一七	衿幅	四
裾裁	一五		

裁方



第十六圖

裁ち方



第十七図

表は半幅袖にしますから袖丈の二倍を取つて、其の後から矢張り半幅で衽丈の二倍を取り裾りを身頃にします、そして衽布を取つた残りの半幅から衿を取ります。

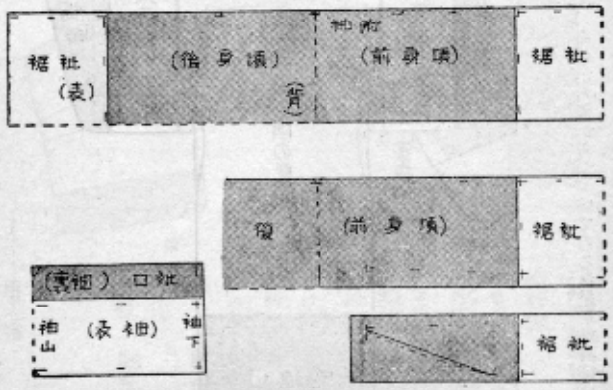
裏は一幅で袖を取りますから袖丈の四倍を取り、次に衽と身頃とを圖の通り取ります。

標附け方

袖　表裏とも左右各二枚づゝを中表に折つて、第十八圖のやうに附の方をよく揃へて裏袖を下に、表袖を上に重ねます、それから裏袖の幅の廣い分は袖口袱にしますから折り返して重ね代を二種にして待針を打つて、丈、幅、重ね代の縫代の標をつけます。

身頃　裏表とも中表に幅を二つ折りにして肩明を合せ、背(輪)を手前に前身頃を右に表布を下、其の上に裏を重ねておきます、そして羽織の標と同じ仕方で丈を定めて表布の折り返りを裏布に重ね、裾裁の寸法を定めて接ぎの標をします、それから肩から眞二つに丈を折つて前身頃の上に後

標の附け方



第十八圖

身頃を重ねて、袖附、後幅の標をします。

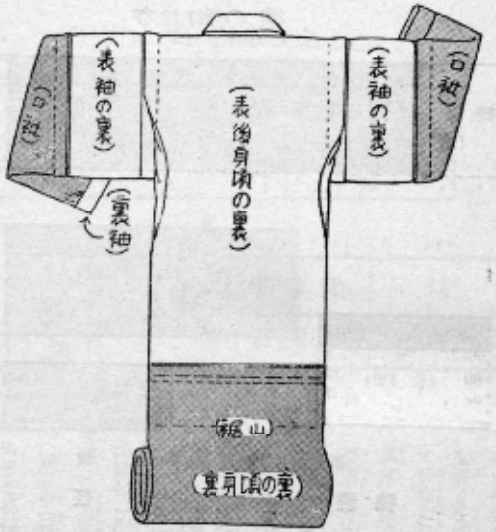
今度は後身頃を左に除けて前身頃に衽下りを標し前幅を裾口で一杯にきめ、胸幅を附標のところで一五糎として肩廻りから斜に衽附の標をします。

衽　圖のやうに衽を裏も表も二枚づゝ中表に合せて、表衽を上にして重ね、身頃と同じやうに裾批の分を折り重ねて接ぎの標をつけます、それから衽丈を標し、裁目の方で衿下の標をつけ、幅は裾口で一杯にし、上の方では附の縫代を二種とつて斜に衿附の標をしますが、この時上から三分の一のあたりで一種ほどふくらみをつけます。

縫方

袖　表裏の袖口を縫ひ合せて縫代は表袖の方へ折つて縫襞でおさへておきます。

それから袖下を表裏揃げて、表は標通り、裏は丈を四粍つめます、しかしこれは口袱のところだけ



第十九圖

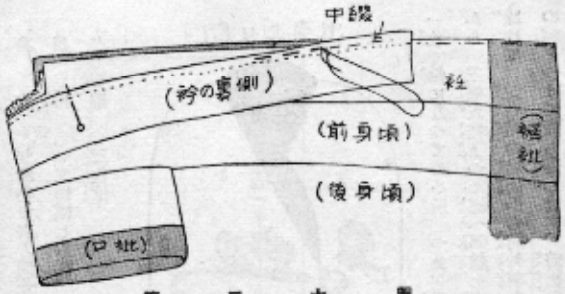
で曲げるやうにします。

身頃　胴接を全部しましてから脇を縫ひ、衽をつけ、衿もつけます。

袖附　袖下をしつかり四ツ留して表袖だけをつけます。それから袖口袱及び裾袱の山に縫標を小さく所々につけておきます。

綿の入れ方

全體を裏返してきつちりと前を合せて第十九圖のやうに疊み、まづ眞綿をひいてその上にどてら綿を周圍より十二、三糎出して適當の厚さに入れ、衿肩明と袖下へ斜に切り込を入れてから裏身頃に眞綿を引きながら折り返して、表身頃、綿、裏身頃の順に三枚正しく重ねます、それから後からつゞいてゐる眞綿を前身頃に引いて又綿をも入れ眞綿を引いて引き返します、兩方共



第二十圖

同様に返して綿を落ちつかせます。

絎け方

まづ身頃を裏返して衿附側の裏身頃を綿からはなして布の裏を出し、袖下の奥で身頃で袖を挾んで四枚の折山を極く淺く抄つて四つ留をしその糸は切らないで裏袖附の標を合せて絎けつけます。

裏表の脇や衽の縫目をきつちりと合せて、綿を裾の山によく入れ、衿下のところは裏に綿を含ませて躾でおさへておき、それから細かく絎け合せます。

衿は縫目の際を中綴して衿先を縫ひ、折は表の方へ返してとぢつけ、心綿を入れて絎けつけます。

綴　二糎位の針目で第十六圖出來上り圖のやうに各縫目を縦綴します。

掛衿　長着の共衿と同じ仕方で絹天の衿をかけます。

釣鐘型おくるみ

用布

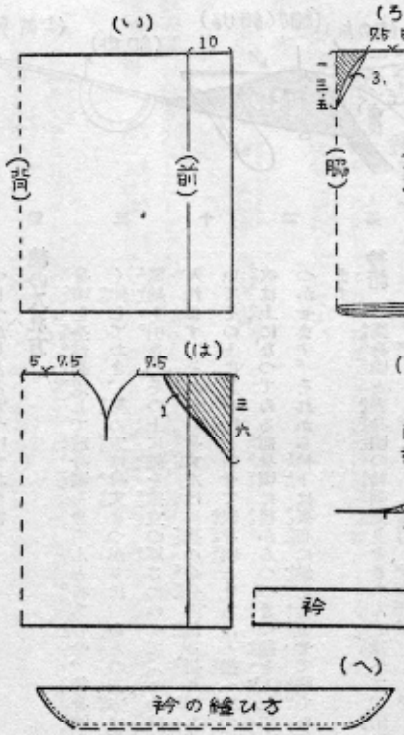
表　布　大幅（七六糎）一三六糎
裏　布　無地物で表と同寸
掛　衿　一二糎幅七六糎、下衿（新モス）同寸
どてら綿　三枚位

第二十一圖

裁方

表裏とも同じ裁ち方であります。まづ一三六糎の布の丈を二つに折りますが、その時一方の端（上前になる方）を第二十二圖（い）のやうに一〇糎だけ長くしておきます、次に又これを二つに折るのでありますが、今度は下前の短い方に揃へて折ります、すると一枚だけ長くて後の三枚は同じ長さになる筈であります。さうしましたら（ろ）圖のやうに一枚で輪になつてゐる所、つまり背から左へ衿肩明を五糎と標し、そこから肩幅を七糎五粍取り、脇の上の方から一三糎五粍下つた標へ斜線を引き、肩の丸味を三糎つけて裁ち落します、次に（は）圖のやうに後身頃を左に除けて、前身頃の肩山から前衿剃を三六糎下げたところまで斜に標し、途中肩山から七糎ほどの所で一糎ほどの剃をつけて裁ち落します、前裾の角は（に）圖のやうに一〇糎位の丸味をつけます。

縫方

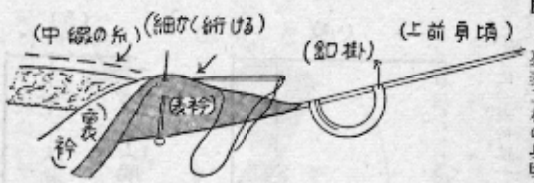


第二十二圖

最初に表裏共肩を接ぎ合せ縫代は後身頃へ倒して縫躾をします。

衿附　衿を（ほ）圖のやうに端を丸く裁ち落して直ぐな方を附側として他のぐるりを縫ひ合せ（表衿が四粍内見るやうに、表衿は一杯に、裏衿は八粍標より縫ひ込む）薄く綿を入れて表に返し、附側をあらく襟で假縫をし裏身頃一枚だけに衿附をします。

胴　裏表二枚の身頃の裾口をきつちりと中表に縫合せて縫代は裏の方へ折つて襞をかけ、次に綿布で細かく釦掛を二本作つてそれを裏身頃の上前の衿先止りと、裾口の丸味の上とに一つづつしつかりととぢつけておきます。



綿の入れ方

身頃を全部裏返して前身頃をきちんと打ち合せ、後身頃を上にして表、裏を長く伸しておき、裾の方は身丈きつかりに、あとの三方は何れも一〇糎位出して置綿を引き、その上に綿を適宜の厚さにのせて（この時は裾口にも出します）入れます、それから身丈だけに裾の余分の綿を折り返し、もう一度置綿を引いてその上に裏身頃をのせて表身頃ときちんと揃へます。

次は上にかつてゐる前身頃に後からつづきの綿を入れて表に返し綿をよく落ちつかせます。それから衿下は裏布に綿を含ませて縫でおさへ、細かく絎け合せます。

衿絎　裏身頃と表身頃の衿刳廻りをきちんと揃へて、刑の縫目の際を抄つて中綴をして第二十三圖のやうに衿幅を表側へ折二つに折つて、中綴の糸のかくれるやうに細かに絎けます、針は裏へ出ぬやうに綿をも抄ひます。

釦附　表の裁ち落し布で飾釦を二ケ作り上前の釦掛とよく合せて下前へよくとぢつけます。

紐　表の縫糸を二本にして一二、三糎の間隔で一糎五粍位の針目で縫縮をします。

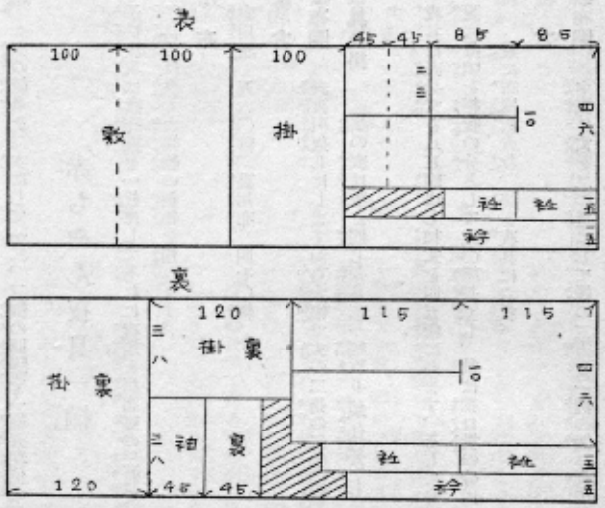
赤ちやん夜具一揃

子供夜具は敷布團を一枚にしてそれに夜着と掛布團の三枚で一組にします。
子供物は多く大幅物の柄物を用ひます。

用布
表用布　五六〇糎、裏用布　四七〇糎。

裁方
敷布團　表裏引返しにしますから大幅で丈の二倍の二〇〇糎取ります。
夜具及掛　掛の表は敷と同じ長さに一幅取り鐵仕立にしますから、裏は一幅半で丈も二〇糎宛長く取ります。
夜具は表身丈を八五糎にし袖丈を四五糎にします、そして身頃から衽と衿を取ります。
裏は身頃を裾廻の分として三〇糎長くし、袖は袖口廻の分に一五糎廣く取ります。
綿　敷に布團綿五枚、掛と夜具に六枚。

縫方
敷布團　中表に丈を二つ折にして縁の三方を一糎の縫ひ代で縫ひます、但し返し口として耳の一方で六〇糎ほ



第二十四圖

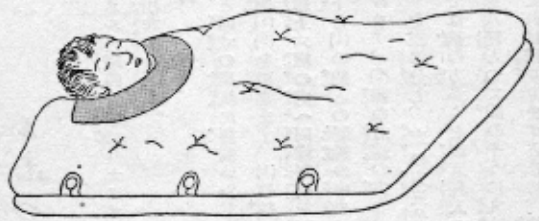
どあけておき、表になる方の側へ折をつけて襷鉄をかけ、それから紐を入れて返し、紐を入れることは大人物と同じであります。

掛布團　これも綿型掛布團の仕立方と同じにいたします、裏が一幅半で表が一幅でありますから、この半幅の分が縁になるのであります。

夜着　矢張り大人物と同じ要領で仕立てますが、綿の量が大人物より少なくなりますから、裏袖のつめる寸法を一糎位にします、なほ袂袖がありませんから裏の袖附を縫ひ合せずにおいて紐を入れてから縫ひ合せます。

改良夜具

出來上り圖



第二十二圖

寒い時には前のやうに二枚を掛けますが暖かい折は掛布團一枚だけにします、そんな場合にはこの改良夜具は夜具と掛とを兼ねて具合のよいものであります。

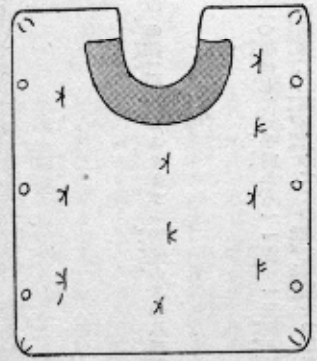
用布

大幅物一幅ならば鏡型に、毛坡合せの時は三布にします。丈は一二〇糎位。

縫方

第二十六圖のやうにたゞ衿の方を少し剩つて仕立てるだけで他は普通の布團と同じにいたします。

なほこの掛布團の左右兩端に釦をつけ、敷布團に釦掛の紐をつけておいて子供を寢させてから第二十五圖のやうに紐を釦



第二十二圖

にかけて止めると子供が動いても布團が離れなくて具合が宜いものであります。

おむつカバー

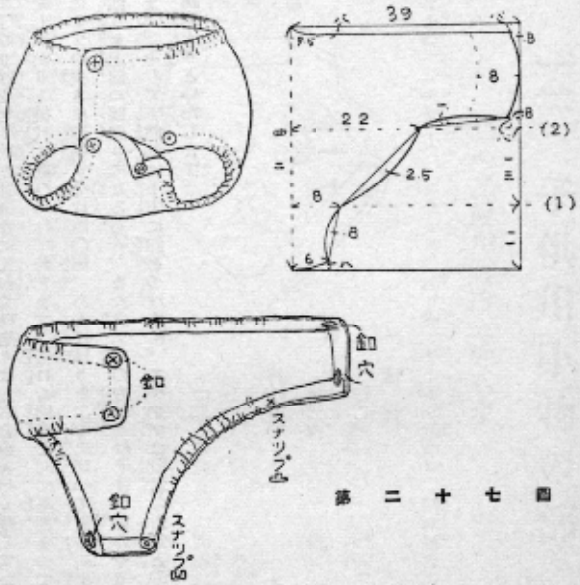
用布

白木ネル大幅四二糎、スナップ大型一組、一糎五粍乃至二糎位の釦二個、ゴムテープ二糎幅のもの八五糎、斜布用布少々。

裁方

用布と同寸の型紙に裁圖いたします。第二十七圖のやうに幅を二つ折にして、手前から一一糎、一三糎と計つて線點(1)(2)を引きます、(1)の線では輪の方から八糎、(2)の線では同樣二三糎を計つてこの間を斜線でつなぎ、下の線上六糎の處へ同樣斜線を引きます。

次に下と(1)の線との斜線の中央で、輪の方へ八粍の丸みをつけ、(1)と(2)との中央では反對側へ二粍五粍の丸みをつけます、(2)線の右端の方で、上へ八粍上つた處と(1)(2)間の斜線の端とへ斜線を引き、右の端から八粍とつて殘りを三等分し、左の方三分の一の中央で內側の方へ一糎丸みをとりあとは圖のやうに自然に消します。上部では輪の方から七糎五粍入つた處で八粍の深さになるやう自然に剃つてそのまゝ右端まで通します。そして角を八粍とつて圖のやうに丸味をつけます。この曲線にならつて八糎入つた處に點線のやうな線を引きます。これは裁切りますときに、片方だけはこの點線で裁ち下前とし一方は實線の通りにたつて上前とします。



第二十七圖　おむつカバー

下の端も穴糎の處で、八糎の丸味をとります。

以上のやうにして型紙を作りましたらば用布を裁ちます。

このおむつカバーは一丈半の用布がありますと、裁ちちがひにすれば二つ取れます、但し一つは中央で接がなければなりません。

縫方

まづ地薄の布で二糎五粍乃至三粍位の斜布をカバーの周圍の寸法だけ作つておきます。

この斜布を裁ち目に中表にあて五粍位の縫代でぐるつととつけ、裏にかへして一糎五粍位の幅になるやう折り伏せてまつるのですが、全部まつつ

て了ひますとテープが通りませんから腰廻りは左右を少々づゝ殘しておいてゴムテープを通し、テープの兩端をしつかりと縫代に縫ひつけておきます。裾口も同樣にして全部まつておきます。

テープの長さは腰廻り分は四〇糎、あとは殘りを二つに切つて左右の裾口にいたします。

釦穴を上前の腰廻りになる布と、また當て布の左にあけます。圖のやうに上は横に、下と股當布とは縱にあけます。そして下前には上下に釦をつけます。スナツプは股當の右端と、それが合ふ部分の腰廻り布とへつけて出來上りといたします。

一三、子供用小物の部

一、二歳用寢冷え知らず

タオルのハンカチーフ、メリンスの殘り布、ガーゼ、綿ネル、晒木綿など有合せのもので作ることが出來ます。

材料

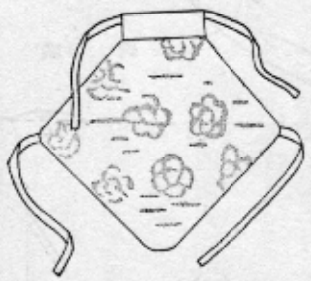
晒、表裏共三十糎四角、胸布、幅十糎、丈八糎、紐布（衿紐、幅三糎、丈二十三糎二本、脇紐、幅四糎、丈五十糎、二本）

作り方

三十糎の晒布の一つの角を胸布の寸法だけに切り落して、他の三つの角は三、四糎位の丸味をつけて裁ちおとしますと出來上り圖に見るやうな大體の形が作れます。

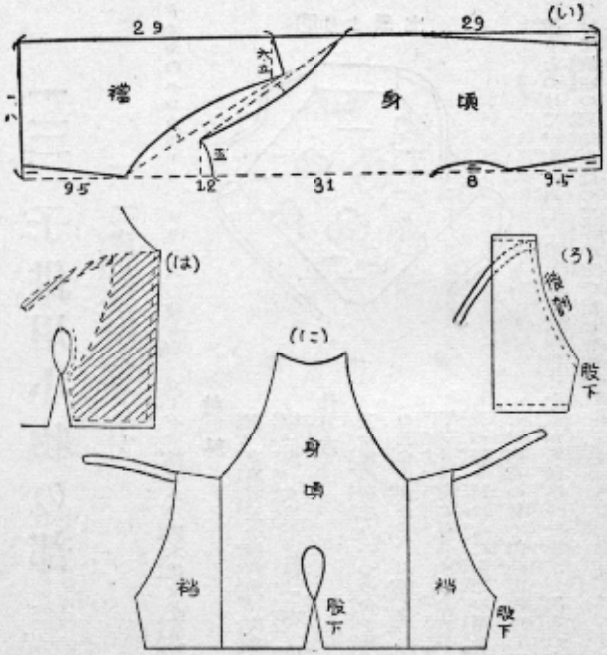
先づ紐を結け次に胴布の兩脇角に紐を挾んで、表裏の布を合せ、胸布の付く部分だけ殘して、三方を縫ひ廻し、表布の方に折りをつけて、引き返し、形を整へて、胸布を表から縫ひつけます。

つけて胸布の兩端を縫つて裏の方で結けます。



第一圖　出來上り圖

二、三歳用　寝冷え知らず



第二圖

用布

表裏共並幅六五糎
外に紐布四糎幅四五糎　丈二本
テープ四五糎丈一本

裁方

用布の幅を實二つに折つて第二圖(い)のやうに標附して裁ち切ります と身頃一枚、褄二枚が出來ますから、裏布も表布と同じやうに裁ち切ります。

縫方

褄　褄布の表裏を重ねて（左右向き合になるやうに注意）合せ、後剣の上部に紐を挟んで待針を打ち、(ろ)圖のやうに上部と下部と後剣の三方を縫つて表に返します、左右とも同樣に褄に紐をつけます。

身頃　表裏の身頃を合せて裾口を縫つてから、(は)圖のやうに身頃の脇で褄の脇を挟んで四つ縫にします。次に身頃の股下で褄の股下を挟んで四つ縫にし、つゞいて前剣の部分を小針に縫ひます、それから胸の左右の剣のところを小針に縫つて上の衿剣のところから表に引返しますと(に)圖のやうになりますから表裏を平らにして衿剣にテープをつけて出來上りとします。

三、四歳女兒用寝冷え知らず

材料

メンネル、タオル、晒木綿等、三十八糎幅長さ八十五糎の表布
裏褄用晒木綿三十糎四角。

裁方

表布から裁ちます。第四圖(い)のやうに、布の端から幅を三十糎と標して、これを實二つに折ります。そして輪の方を手前にして圖の寸法に從つて、表布をとります。
裏は大褄を除いて他は全部表と合せて圖のやうに裁ち切ります。

第三圖

縫方

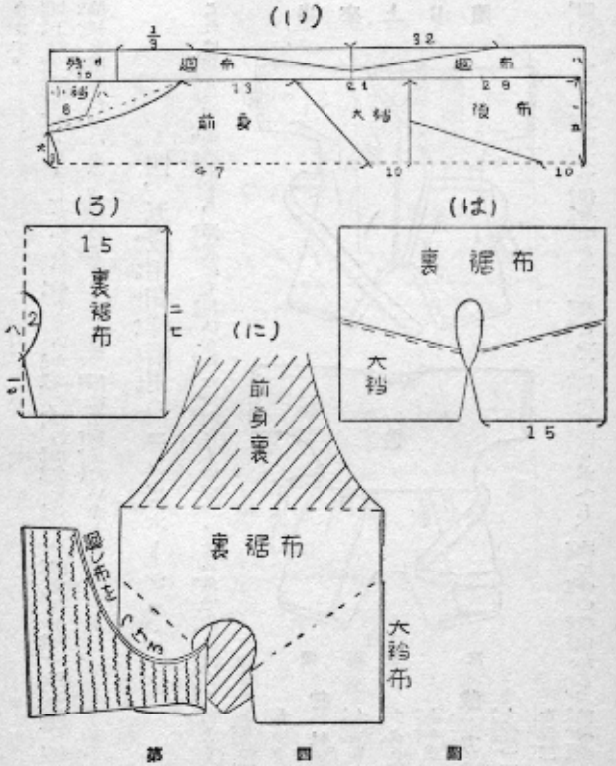
大褄の裾十五糎幅の所を裏裾布の裾と合せて縫ひ合せ毛抜き合せにして襞をかけておきます。次には圖のやうに、裏裾布の上に、大褄布の斜の部分を折り曲げて級ぢておきます。

身頃布は表裏を中表に重ねて褄の方、即ち裾れの部分と兩脇にりの部分とを縫ひます、いづれも毛抜合せにして襞をかけます。

大褄をつけた裏裾布は身頃の裏側の方へ(に)圖の如くにのせて、脇丈が二十七糎位になるやうに揃へて綴ぢつけて置きます。

小褄の裾は表裏を縫ひ合せ、これも毛抜き合せにしてこの小褄の八糎丈の所で挟んで四つ縫にして表に返してきます。

小褄の十糎のところを後布の股の部分の十糎の所にはさんで、四つ縫にします。次に後布の眞直ぐ二十八糎の丈で身頃、脇をはさんで四つ縫にします。



第四圖

褄し布は斜に裁つた方で、幅の狭い方を前股ぐりの處へ、幅の廣い方を後布の上端の處へ揃へて、四つ縫ひにして引き返し、褄し布の裏を三粍程控へて縮けてお

きます。

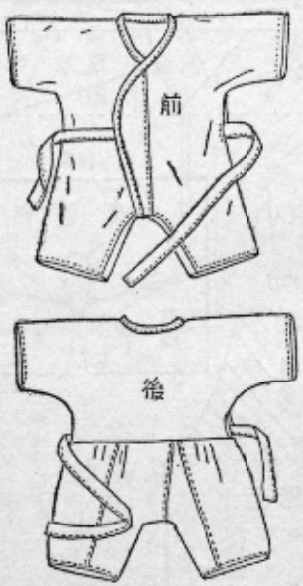
以上で大體出來上りましたから、衿ぐりの中央に紐の中央を合せ、紐丈五十糎、幅一糎五粍の紐をつけ、次に襟紐を兩脇につけます。襟紐丈は五十五糎、幅は二糎位にいたします。

四、五歳用和洋兩用のコンビネーション

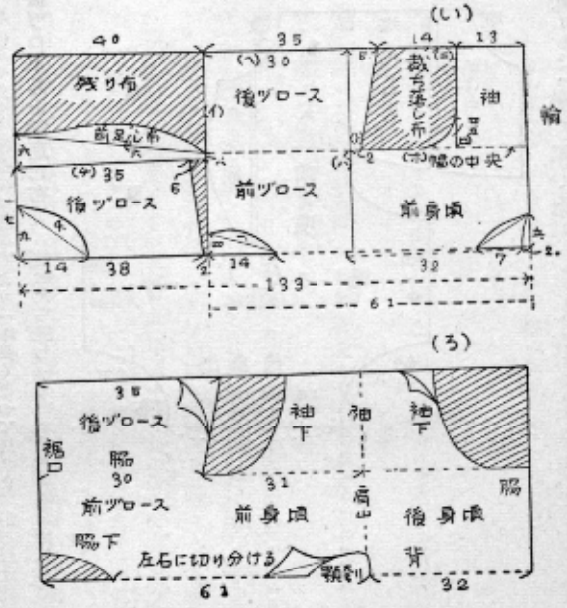
これは男女兒の和服にも、洋服にも用ひられる便利なもので、タオル地で作れば夏向によく、ネルを用ひますと冬の下着や寢衣によろしい。

材料　大幅もの一三三糎、斜布少々と附紐用のキヤラコ少々。

裁方　大幅一四二糎の用布の幅を實二つに折つて、第六圖(い)のやうに右の方で後身頃を三二糎とつて肩から折りかへし、次に今の折山から、前身頃の丈六一糎をとります。つまり、身頃の上半身の分だけ布が四枚になつて居ります。



第五圖　出來上り圖



第六圖

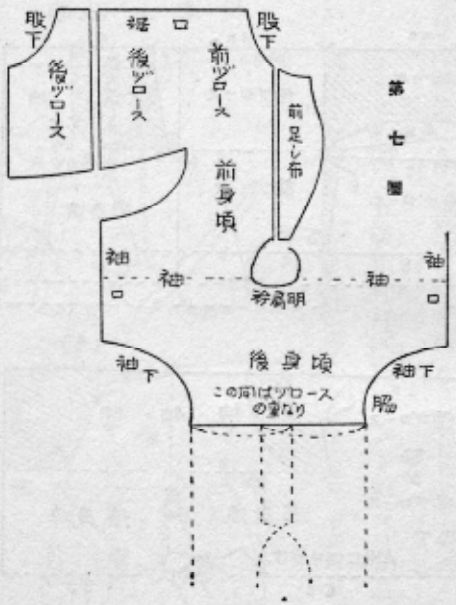
圖中の(イ)の線から左は後のツロースの足し布となりますから、こゝで布を切り離します。

身頃　手前の輪の傍で衿肩明を圖の寸法通りに割り、袖口は一二糎として、布幅の中央(ロ)で四糎五粍の丸味をつけて(ニ)、(ロ)、ホに標を通します。かうして順次裁方圖の通りに標をつけ、太い線だけを切つて開きますと、(ろ)圖のやうに後身頃、袖、前身頃、前ツロース、後ツロースと續いたも

のになります。後身頃は前身頃より一糎長くなつて居りますがこれは縫代になります。

後ヅロースと前足し布　前にたち縫した布で、ヅロースの足しと前布の足し布を裁ちます。

第七圖



初め輪の方から一七糎と幅を標して、後ヅロースを(い)圖のやうにとり、その殘りから前の足し布をとります。

全部の裁斷がすみましたらば霜刺から股下までを左右に切りはなします。後ヅロースも輪のところから、二枚に切つておきます。

縫方

まづ前身に足し布をつけて、次に後ヅロースの足し布を接ぎ合せ、股下を縫合せ、前足し布と後ヅロースとを續けて緣をとりながら衿廻りまで一遍して袖口、裾口をかがり、附紐をつければ仕上りとなります。

すべて縫代はいつぱいに、伏せ縫又は折伏ぬひにすればお洗濯にもたえて丈夫です。

前足し布は第七圖に見えますやうに、幅の廣い方を下に左右前身の顎刳の下につけ、縫代は前足し布の方へ折りかへします。

次に後のヅロースに足し布（後ヅロースの）をつけますのには、後ヅロースの(へ)と(チ)とを合せ、縫代は脇の方へ片返しにして伏せます。後前の股下は、刳の部分では布を伸し加減にして縫ひ合せ、縫代は前身側へ折り伏せにします。

次に後ヅロースの端から前へ、衿刳、前足し布として後ヅロースまでの布の裁ち目を、續けてバイヤスで包みます。絲の幅は八粍位が適當です。

次に後身頃と後ヅロースとを接ぎ合せます。このとき左右のヅロースの重なりを十一糎位と見て、その二分の一に後幅の半分を加へた寸法に、ヅロースを左右共に縫ひ縮め、平らに裁でおさへておきます。そしてヅロースの左右を脇からきちんと折つて、後身頃へ曲線通りにヅロースを縫ひ合せます。（第七圖點線）、前の合せが男女兒ともに和服のやうに左身を上にするやう、後の縫合せを注意いたします。縫代は上に折り返しします。

次に脇を合せます、袖口の下から脇下の丸味（伸し加減にしながら）脇と縫ひ合せます。縫代は後へかへします。

左身の脇（第六圖い圖中の(ハ)點參照）の處から二糎下つた處へ六糎の附紐を通す穴をあけ、裏にとぢつけておきます。

袖口、裾口は三つ折にして細かく紩け、附紐は上前用のものは、一糎乃至一糎五粍幅で二十糎位の丈に、下前紐は五十糎内外に作つて各衽の裏側に縫通し孔と並行の處へつけます。

一、二歳用の夏着

材料

タオル手拭　一筋
バイヤス　三〇糎
テープ　一二〇糎

裁方

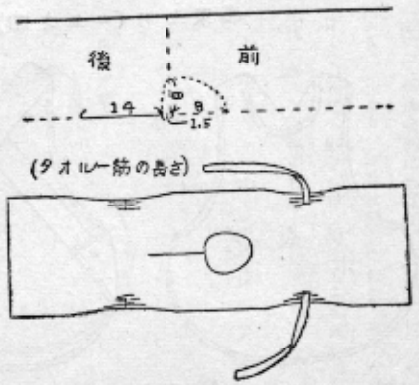
手拭の幅を真二つに折り、更に丈を二つに折つて肩山を決め、そこで衿肩明を四糎にして後身頃に一糎五粍繰り越し前は八糎位刳ります。これだけでは着るのに窮屈でありますから背を開けます。この衿刳はいつでも頭廻りを計つて、それに少しのゆるみを入れた寸法だけ明けます。

第八圖　出來上り圖

縫方

最初に前衿刳廻りの表側にバイヤスをつけ、裏側へまつり紩けます、それから後明に持ち出しと見返しをつけてスナップ留にします。次に肩山から二〇糎下つた左右の前後（腋下にたる處）で耳から一〇糎ほどを縫ひ縮めてギヤザーを取ります。そしてこゝに長さ三〇糎のテープをつけて脇紩とします。これで出來上りでありますから着せますには脇紩を解いておいて頭から被せ、着せてから脇紩をしめてやります。脇が全部明いてゐますから着易くて涼しい着物であります。

第九圖



公式　衿刳＝頸廻＝刳衿

二、三歳用エプロン（その一）

材料

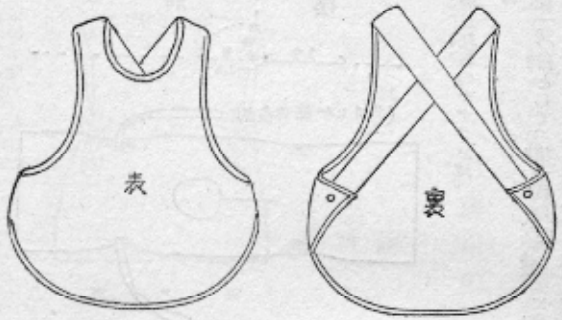
丈四十一糎、幅四十糎、別にたすき布丈三十二糎、幅四糎五粍程のキヤラコ地。

裁方

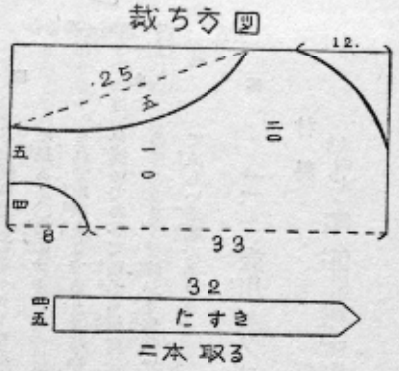
用布を二つ折として、第十圖の寸法通りに襞をつけて裁ち切ります。たすき布は圖のやうに一方の端を三角に恰好よく裁つておきます。

縫方

出来上り（二三才用）



裁ち方図



第十図

先づたすきの先へ、三糎位の力布を付けて、釦又はホックを附けます。

次に肩を合せます。身頃の肩布を五粍出し、たすき布の方は、五粍ひかへて、身頃の肩と縫ひ合せ、縫目はたすき布の方へ返して折伏せ縫にします。

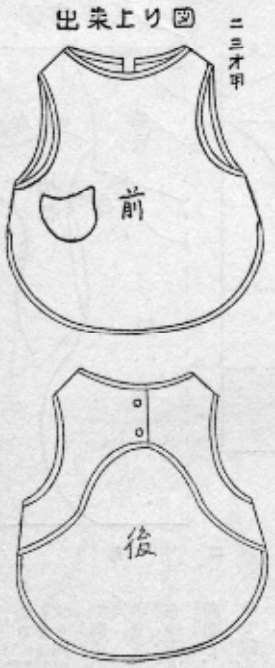
衿ぐり、腮ぐり、裾等は裁目の部分へ斜布を縁につけます。

たすきの兩端へ釦をつけ、身頃左右の端へは釦穴をあけてかゞつておきます。釦の代りにホックでもよろしい。

これに好みの装飾をほどこせば可愛らしいものになります。

二、三歳用エプロン（その二）

出来上り図



第十一図

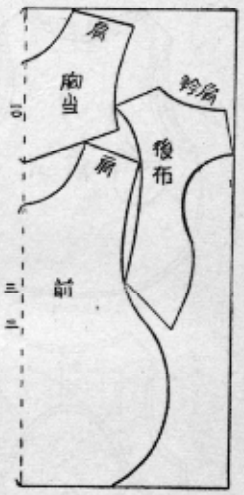
材料

幅四十七糎、丈五十五糎、（型紙三十八糎一枚を用意します）

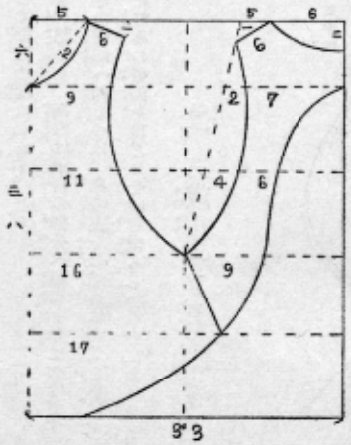
裁方

第十二図によつて、先づ型紙を作り、それを用布にあてゝ型通り裁ち切ることにします。

裁ち方図



型紙の取り方図



第十二図

型紙を縦に二つ折にして圖のやうにおき、腮ぐりを六糎と標し、殘りの丈を四等分に點線を引き、各線の部で圖中の寸法通りの標をして裁ちきります。この型紙を用布の上に當て布の裁方圖のやうに、後布、胸當布、前布と、順次に各々一糎の縫代をつけて裁ちきります。

縫方

胸當布　下部を細い三つ折縮にして腮ぐり、脇明を前布に合せて、假躾をかけておきます。

後布　裁ち殘りの布で脊に力布をつけます。

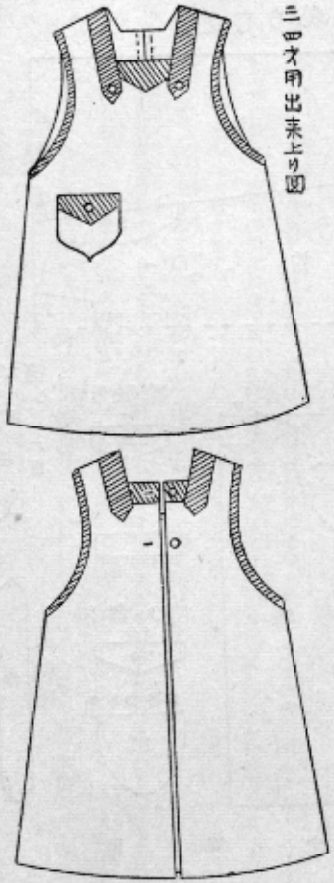
前布　前布の肩と、胸當の肩とで後布の肩をはさんで三つ縫にし、脇は後布の方を五粍先へ出して前布と縫合せ、折を前に返して折伏せ縫にします。次に衿肩、脇明、裾の廻り等には全部斜布で縁をとります。

三、四歳用エプロン

材料

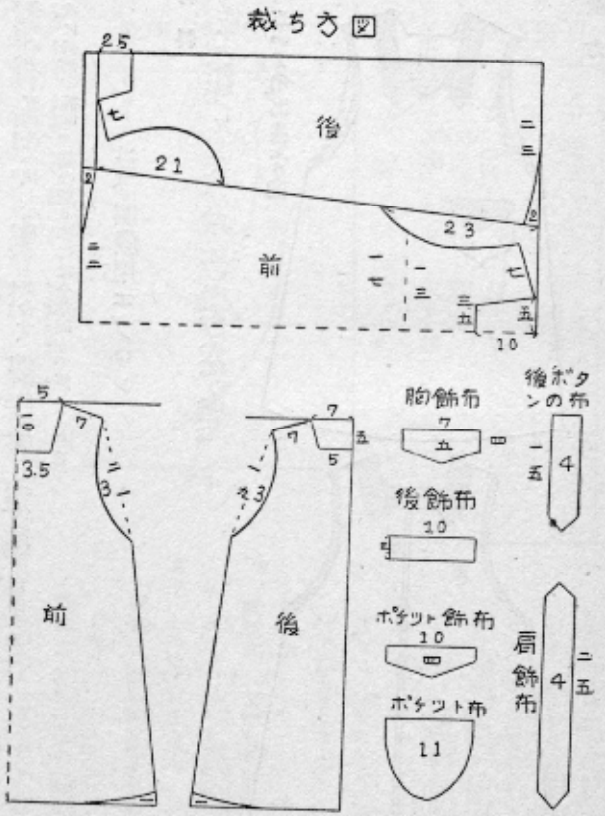
七十六糎幅、五十五糎の丈、別に縞或は模様の飾布。

三四才用出来上り図



第十三図

裁方



第十四圖

第十四圖裁方圖に示しますやうな寸法で、身頃、ポケット、飾布等を裁ちます。

縫方

背裏に釦掛の力布を三糎幅、十五糎丈位に付けて置きます。次に後衿肩の角を斜に八粍ほど切りこみ、背に飾布をつけます。幅三糎、丈十糎を横に裏から縫ひつけ、表に返して飾布の下の端を深く縮けるか、ミシンをかけておきます。

前胸にも七糎の飾布を後の飾布のやうにつけて表に折り返し、上り幅を一ぱいに折つてまつり縫又はミシンをかけます。

前後の肩を合せます時は後身を四粍ひかへて縫ひ、縫代は後身にまつり附け、二十五糎の飾布の周圍を上り幅一ぱいに折つて置き、身頃の肩にのせ、兩端を前後の飾布の先に同寸に出るやうに假鉄をかけておき、まつり縫ひ又はミシンをかけて置きます。

脇は袋縫として、裾を上り幅二糎に三つ折にして縮けるか、ミシンを掛けます。

脇明は、二糎幅の飾布で縁をつゝみます。初め六粍の縫代で縫ひ、縁を包んで裏の縫目にまつり附けます。

ポケット口にも飾布をつけます。初め飾布はポケット布の裏に當てゝ縫ひつけ、表に折りかへして上り幅を一ぱいにしてまつり縫ひ又はミシンをかけます。周圍は折代一ぱいに折をつけて、身頃の脇下四糎の處で脇縫より四糎入つた處へつけます。

最後に出來上りの後圖のやうに上前に釦穴をあけてかゞり、下前に釦をつけて仕上げます。

四、五歳用エプロン

材料

キヤラコ六十糎。

裁方

第十五圖裁方圖のやうに裁ちきります。

縫方

胸と背の十一糎折返し布の端に飾りレースの幅の狭いものをつけてミシンをかけます。

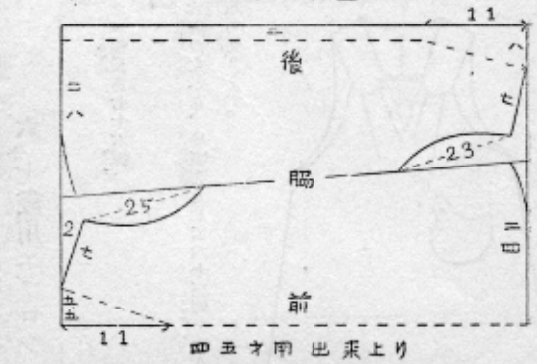
次に肩を接ぎ合せ後を四粍ひかへて折伏縫にします。

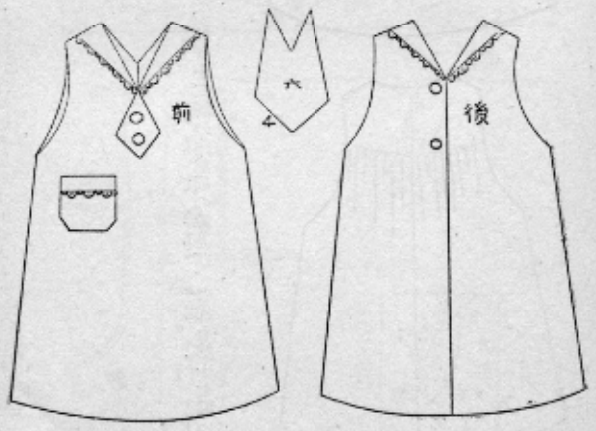
腰は後布を四粍ひかへて縫ひ合せ、後布の方へ折り伏せて紐をつけます。褶襞をして腰明に斜布の身返しを附けるか、又はテープでくるんでミシンをかけます。

この型は胸に共布を折返しましたので、下部の角に少々無理が出來てゐますから胸に飾布をつけます。なほ圖のやうに裁つた力布を折返した角の折山に合せて裏側につけます。

最後に釦及びポケットを付けて出來上りといたします。

裁ち方圖



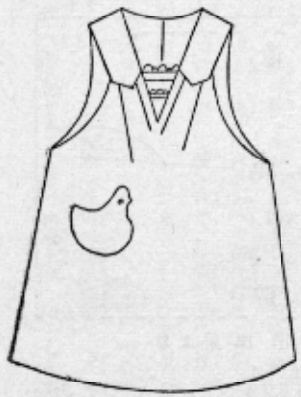


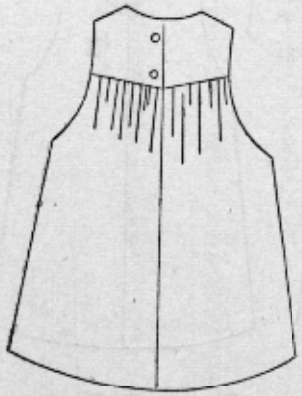
第十五圖

六、七歳用エプロン

材料　キヤラコ幅長さ七十六糎。

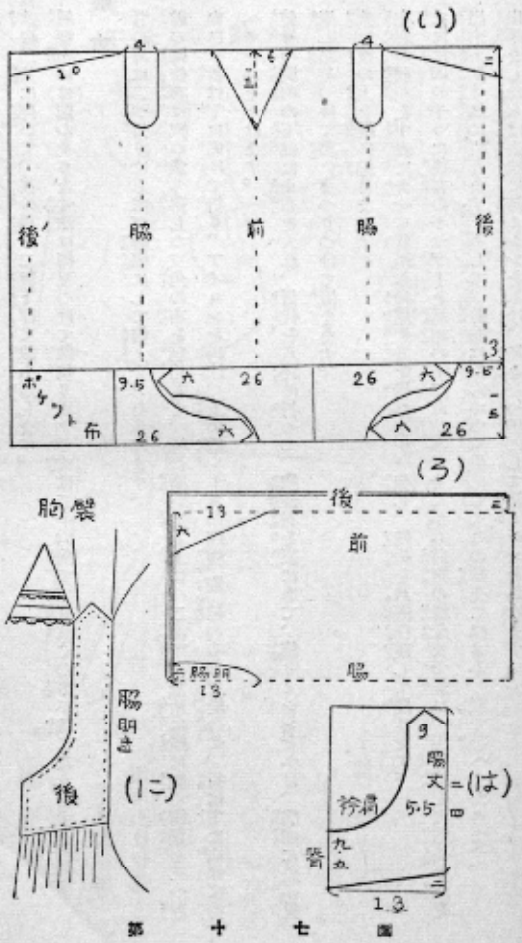
裁方　七十六糎の丈から、身頃布として六十三糎を取り、殘り十三糎の内を肩の襞及び、背布を第十七圖(い)の寸法通りに裁ち切ります。





第十六圖

身頃布は(ろ)圖のやうに布を四つ折りにし、耳の方の二枚は三糎先きに出してたゝみ、腋明は十三糎、幅は二糎



第十七圖

だけ刳る標をつけます。
胸ぐりは、幅六糎、丈十三糎に標をします。
次に二枚に開いて、後の肩を二糎下げて裁ち落します。
肩の布は(は)圖のやうな寸法に標をつけて裁切ります。丈は二十六糎で、眞直ぐの方が瞭になります。

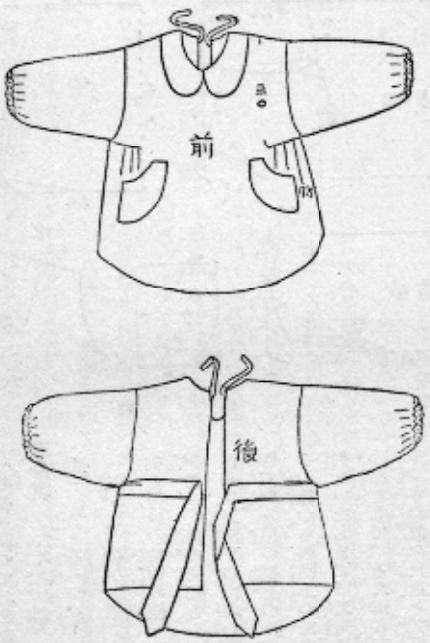
縫方

背の耳は二つ折りにして二糎幅にして飾ミシンをかけます。
前の胸飾布は胸の裁ち落しの三角の布を利用して、幅の廣い方を上に、二糎下つた所に横に細く飾襞を三つ程ぬひ、折は下に向けて折り、アイロンを掛け、上に飾レースの四糎幅位のものを縫合せ、折は下に向けて押へミシンをかけます。
前身の胸明の下部に止布を入れ、折代を八粍に折つて、胸飾布を裏にあて、飾りミシンをかけ、胸明に斜の見返し布をつけて裏にまつりつけて置きます。
次に後の上を縫ひ縮めます。
左右の肩布を中表に合せて背から衿肩廻りを縫ひます。但し、鍬先を八糎程殘して縫ひます。
次に(に)圖のやうに後布のギヤザーを肩布の下部に狹み、そこから前胸の鍬先まで縫ひ、引き返して鍬先の幅を出來上り寸法に折ります。そして、前布は摘んで巾着襞にしてこの鍬先にはさみ、躾で押へておきます。
出來ましたらば全體に飾ミシンをかけ、裾を三つ折にして飾ミシンをかけます。

ポケツトは圖のやうに小鳥型や、その他の變つた型に切つてつけるのも面白いと思ひます。後に穴かゞりをしてボタンをつけるか、又はスナツプを附けて出來上りとします。

七、八歳向男女兒用の上被

出來上り圖



第十八圖

材料

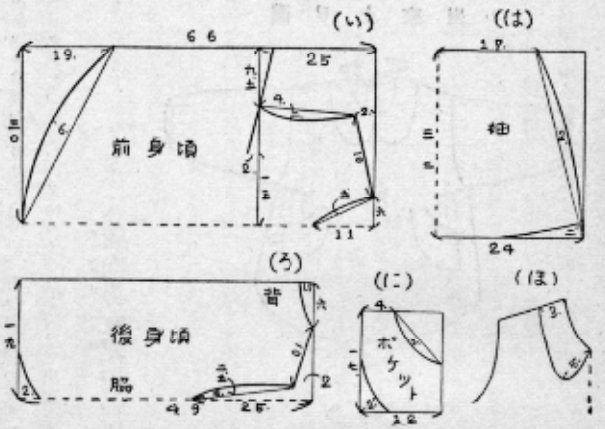
ギンガム一四〇糎、ゴムテープ一糎幅三八糎、飾衿用布として適當の色斜布を少々。

出來上り寸法

身丈　六四糎
衿　四五糎

裁方

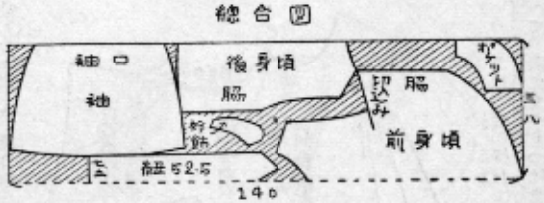
第十九圖(い)のやうな寸法によつて先



第十九圖

づ型紙を裁つておきます。

前身頃　六六糎の丈、六〇糎の幅の紙をたて二つ折として、輪を手前にして衿明を五糎、刳刻を十一糎とし、両方を結びつけた斜線の中央で五糎の刳を付け、衿刳の線を引きます。肩は二糎下りの斜め一〇糎の肩幅としします。次に裁目の方で右端から二五糎下つた處で縦線を引き、その線上へ九糎五糎と脇の標をつけ、その標から肩へ斜線を引き、脇から四糎上つた處へ二糎の刳りをつけて脇刳をいたします。又同じ線上に輪の方から十三糎の標をして、それから左に二糎寄つた點から脇の十文字の點に尺度を當てゝ斜に裁目までの線を引きこれを脇の切り込みとします。左端の裁目から十九糎を計つて下の輪の左端へ斜線を引き、中央で六糎の丸味をつけて褄口の丸味といたします。
（第十九圖參照）



第二十圖

後身頃　三八糎幅、四九糎丈の紙を縦二つ折として、(ろ)圖のやうにおき、裁目の方で右端から横に一糎五粍をとり、衿肩明六糎として、圖のやうに丸味をつけて刳ります。肩幅及び肩下りは前身頃と同寸にいたします。

袖刳は輪の方で、右端から二五糎の處に標をつけ、これと幅肩標へ斜線を引き、脇の方から四糎上つた處で斜線の内側へ二糎五粍の刳をつけ、自然に肩の方まで丸味を持たせながら曲線を引きます。褄脇では二糎を上げて、褄の方へ丸味を持たせながら自然に消してゆきます。

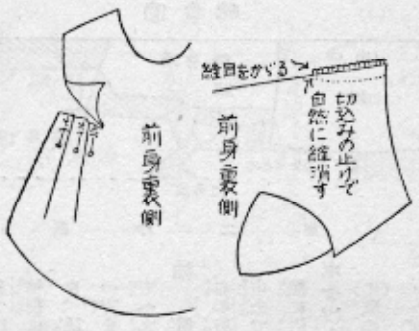
袖　縦三二糎、横四八糎の紙を(は)圖のやうに縦二つ折とし、輪を左にして袖口の方で一七糎、附の方で二四糎を採り、此の二點を斜線でつなぎ、斜線の中央で二糎のふくらみをつけます。次に、附の方で斜線を二糎切り上げて自然に附の方へ丸味を持たせながら曲線を引きます。

ポケツト　型を自由に工夫すると變化がありますが、第十八圖のものは、(に)圖のやうに、縦一七糎、横一二糎とし、左上で四糎と右の方で縦線の二分の一の處とへ斜線を引いて、中央で二糎を刳ります。底の方は、左角で二糎の丸味をつけます。左右二個をとります。

衿　前身頃の衿刳に合せて、(ほ)圖のやうに衿刳をつけ、肩は肩線に合せて下りをつけ、幅を三糎とし、前の方

は二糎廣くして、恰好よく丸味をつけて裁ちます。

裁ち合は第二十圖のやうにするのが便利です。殘布から圖のやうに紐を取ります。



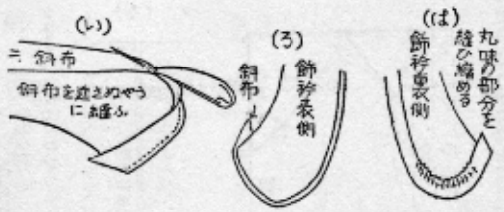
第二十一圖

縫方

縫代はいづれも幅いつぱいにいたします。ミシン縫ならば全部縫代を折り伏せ、表から飾ミシンをかけますが、手縫ひでしたらば小針の袋縫といたします。

身頃　前身頃の左右の脇の切込みの處を第二十一圖のやうに襞又はギヤダで縫ひちゞめます。つまり前の弛みを脇幅と同寸になるやうに縮めてしまふのです。そして脇の切こみと合せて縫ひます。手縫の時には襞の切口が解けないやうにかゞるか、バイヤスで包んでおきます。縫ひ合せましたらば折目は上に折つて縫ひ躾をかけます。

次に飾衿をつけます。初めに飾布の周圍に顎刳の處だけ殘して緣に二糎布の斜布をつけます。バイヤスのつけ方は第二十二圖(い)のやうに四粍の縫代で、小針にぬひ、表にかへして(ろ)のやうに二粍周圍に持ち出して、緣をとり、鍋でおさへて、裏にまつりつけます。丸味の處は、(は)のやうに、縫ひちゞめておいてまつります。これを顎刳の下で、圖のやうに左右の衿先で突き合せになるやうに縫ひつけますときは、身頃の裏側に飾衿の表をあてゝ、小針でぬひ、折をつけて前身の方に衿をかへし、縫目に縫躾をし、周圍は身頃にまつり縫します。



第二十二圖

後身頃には、殘布で、幅四糎、丈二十糎位の布二枚で肩紐を作り、別に三糎幅の見返しを後衿肩明の裏側へつけます。紐は表布と見返しではさむやうにすると奇麗に出來ます。左右の肩は袋縫とし、前に倒します。

袖附も同樣袋縫にして袖側へ倒し、脇縫は袖下から、脇へ通して袋縫をし、折を前身に倒して、裾廻りを三つ折にしてまつります。

袖口は耳ですからそのまゝゴムテープの通るやう一糎五粍位裏側に折りふせて小針で縫ひ、テープを通すのに都合のいゝ丈穴をあけてテープを通しておきます。

胴紐は一方の山形に裁つてある方を三つ折にしてまつり、平の方は三糎位の幅に折つて、後の衿肩から、二十五糎下つた處に、表側からしつかりと附けます。別に幅四糎五粍、丈二十三糎の布を三糎幅に折つて、胴紐の附目を蔽ふやうにしながら、後身頃へ平らにまつり付けます。(第十八圖の後參照)

ポケツト

口を三つ折にくけて、出來上り圖のやうに、肩から三十糎、脇から七糎五粍位の處につけます。

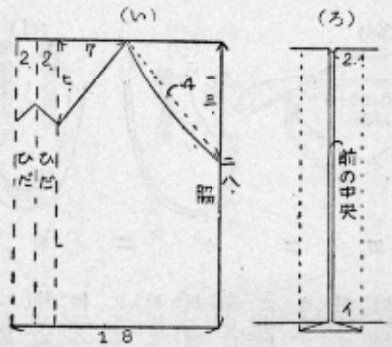
子供の食事用エプロン

タオル、手拭、ハンカチ、その他の小布を利用して、小さい食事用のエプロンを作ります。

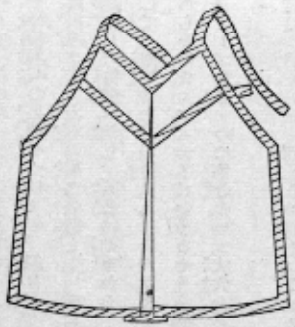
材料　並幅二八糎丈の小布、淺黄色のテープ少々。

裁方　第二十三圖(い)のやうな寸法に標をつけて裁ちます。下の恰好はこれにとらはれずに自由にいたします。

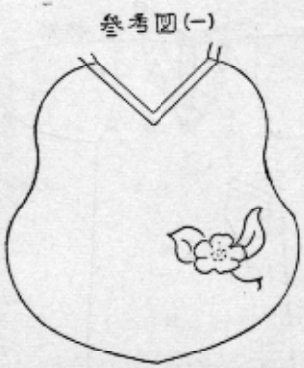
縫方　まづ領刳の下五糎位の處に用意してある淺黄色テープを圖のやうに入れて、胸のかざりといたします。テープの兩側をミシン又は細針で縫つてから領の刳を除いた他の三方をも同じ色のテープで表に緣をとります。前の衿襞は(ろ)圖のやうに、前の中央から右へ二糎の標を折山として、二糎の襞(イ)を作り、これを中央の標に重ね、左も同樣にして平らに落ちつかせ、領刳の所は、襞で押へておき、キヤラコの裁落し布で三糎位の斜布をつくり、



出來上り圖



第二十三圖



參考圖(一)

參考圖(二)

第二十四圖

領刳の後を見返しにつけます。見返しは衿刳に合せて中表に重ね、細かく縫つて後でまつります。

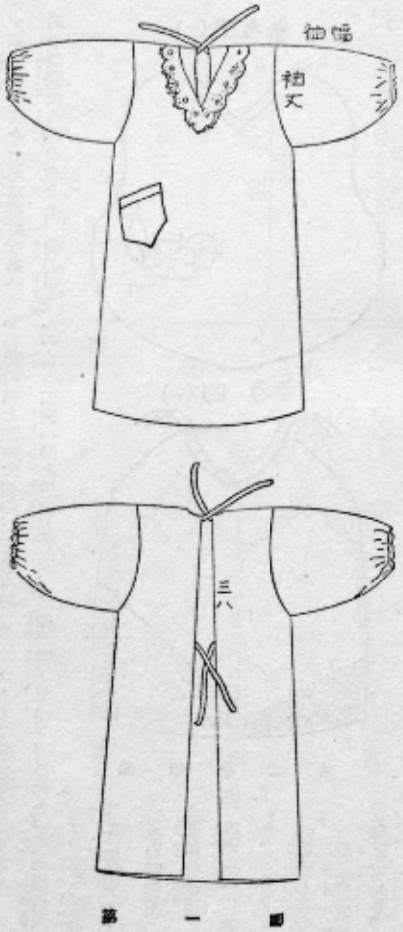
終りに左右の紐を裏から衿刳の端にしつかりと附けて仕上げます。

附　圖を一寸かへますといろ〳〵面白いものになります。一二參考圖を附しておきましたから御參照下さい。

第二十四圖(一)は簡單な刺繍を入れ、(二)は小布を接ぎ合せたものであります。

一四、雑の部

割烹前掛



第一圖

最も基本となる普通のかたちのものを記しましたから、これを標準として、少々づゝ形をかへるやうにいたします。

材料　キヤラコ幅（九一糎幅）丈二二二糎。

裁方　第二圖（いはキヤラコ幅の裁方、（は）は天竺木綿幅（七十六糎）ものゝ裁方を示しました。兩方とも袖の裁方は同様です。（ろ）圖參照）

普通裁切り寸法

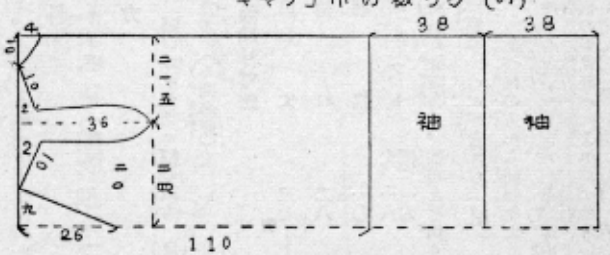
袖丈	三七糎―三九糎	袖幅	三八糎―四〇糎
袖口	二八	身丈	一一〇―一五
肩幅	一〇	衿肩後胸	九八―一〇
ポケット	丈一八 幅一六		

袖丈から身頃布と、袖布とを切り放して身頃布を縦に二つ折にして、キヤラコたらば（い）圖のやうに、天竺ならば（は）圖のやうに標をつけます。

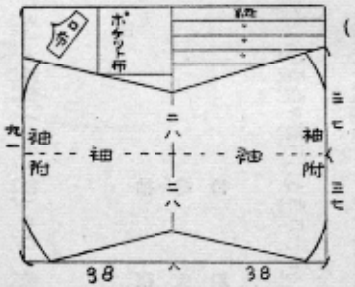
身頃　先づ輪の方から前幅標は左端から三六糎（袖附剤）下つた處につけ、この前幅標を袖附剤りの中心といたしますから、圖中の點線のやうに、端までつけておきます。

胸剤の形は好みによつて、色々いたしますが丸形と角形の裁ち方を第三圖に記しておきましたから、適宜にと

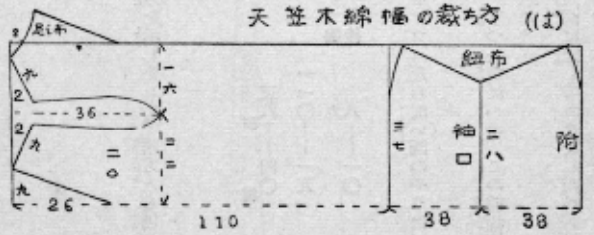
キヤラコ巾の裁ち方 (い)



(ろ)



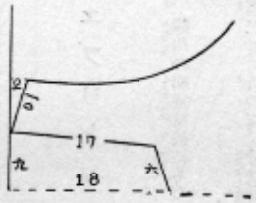
天竺木綿幅の裁ち方 (は)



第二圖

丸衿の剡方 (い)

角衿の剡方 (ろ)



第三圖

ります。そして、肩幅は一〇糎として下りを二糎として圓のやうに標をつけ、肩幅標から脇明標までの三分の二は肩から眞直ぐに、それから下へ丸味をもたせて、前幅標の處まで曲線を引きます。これが脇剡になります。後も同樣にいたします。後衿剡はキヤラコならば剡は四糎に、明一〇糎といたしますが、天竺は幅がせまいので足し布をいたします。足布幅は四、五糎でよろしい。そして、衿剡に合せて圓のやうに剡つておきます。

袖　第二圖(ろ)のやうに袖布から袖をとり、殘り布から紐、ポケット布をとります。

縫方

袖　袖口先の外袖五糎の處に、五糎の切込みをつけ、この五糎の間を細くまつり絎にします。

次に袖口先五糎を殘して袖下を縫ひます。縫目は內袖の方に折つて、內袖の縫代を四糎ほど切り落して外袖の縫代で包んでまつりぐけにします。そして縫ひ殘してある處をまつり、袖口には一糎幅のゴムテープを通して一糎五粍位の幅に折つてまつります。

身頃　後肩を五粍程ひかへて肩を縫ひ合せ、折は後に折り伏せてまつります。

胸廻りには見返し布をつけるか、又はレースを付けます。いづれも斜布を用ひます。衿廻りに衿紐を付ます。

裾ぐけは出来上り幅二糎の三つ折りぐけにします。

袖附　身頃の縫代四粍をひかへて袖の山と肩の山とを縫合せ、折りを身頃の方に返して袖の方で包んでまつりぐけにします。

ポケット　好みの型に形を作り、位置は右袖附から五糎下げて、脇から六糎ほど前に寄せてつけます。

紐　衿紐は出来上り幅一糎位、後紐は二糎位にします。後紐の位置は肩から三八糎下つた處で丈は二七糎、衿紐は三〇糎位が適當です。

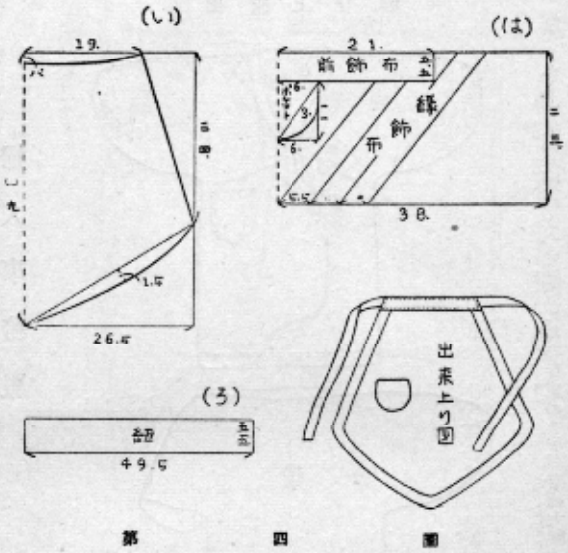
サロンエプロン

材料

白キヤラコ（九〇糎幅）五三糎、縁用の縞或は模様もの（地質はギンガムなどがよろしい）二三糎。

裁方

第四圖(い)のやうに、用布を縦に二つに折つて、寸法通りに標をつけます。そして殘り布から(ろ)圖の寸法の紐布をとります。長さが足りない時には接ぎ合せます。次に縁布も(は)圖のやうに、縦に二つに折つて輪の方で前の飾布とポケットを取り、あとは縁布に寸法通り縁に三本切つておきます。



第四圖

縫方

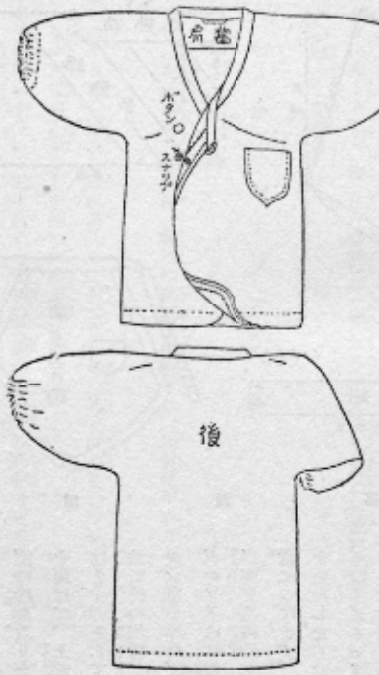
出来上り圖のやうな簡單なものですから、まづ三本の縁布を接ぎ合せて、周圍に縁を取ります。次にヤヲラコの紐を結けて、上部の兩端に確つかりとつけます。そして縁布のつけ方と同じ方法で前の飾縁をつけます。縁には飾ミシンをかければ更によろしい。

ポケットは口元を三つ折にして誰ひ、周圍を八粍通りに折り伏せて適當の位置につけます。これでアイロン仕上げをいたします。

このエプロンは給仕用の氣のきいたものです。形はいろ〳〵に工夫すると面白いものになります。

婦人事務服

出來上り圖



第五圖

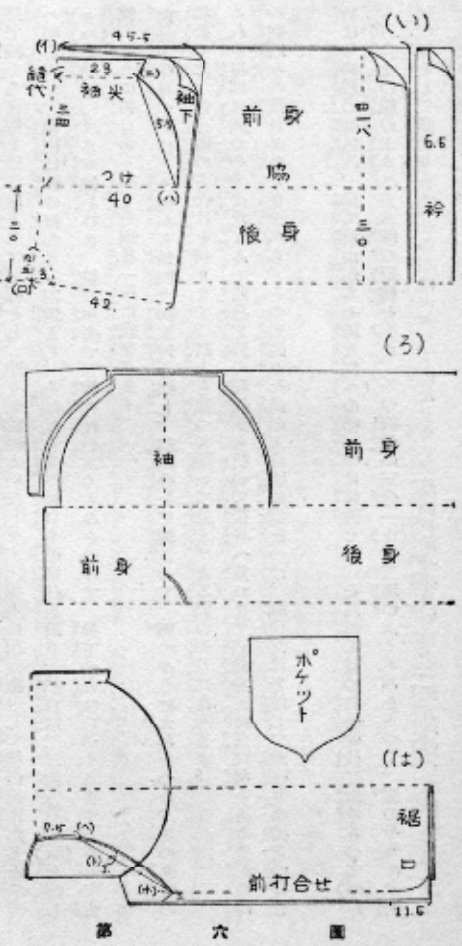
材料

ラシヤ幅（一六六糎）一五五糎、肩當布、ステッチ二組、二糎五粍の飾釦一個。

この事務服はラシヤ幅もので裁つ時には身丈と、袖丈とを如何た寸法があればよいのですから背丈の長短によつて適宜に用布を定めます。普通大幅ものでしたらば身丈と袖丈とを加へたもの二倍を要します。

裁方

用布を第六圖（い）のやうに縦に二つに折り、輪を手前にして平らにおきます



第六圖

先づ右の端から六糎五粍幅に衿をとります。

次に左端から耳の方で袖丈の分として四五糎五粍(イ)と標し、輪の方では、四二糎(ロ)を標して、二つの標を通して折り返しますと、布端が少々斜になつて、(い)圖のやうに、後前の身頃の上に重なるやうになります。次に右端で輪から後幅を三〇糎として脇標をし、縫りを前幅といたします。袖附は四〇糎として袖の折山からとつて(ハ)標をつけ、袖幅は脇の標から三四糎とし、それから先へ袖口先の縫代を取り、袖口は二三糎として(ニ)を標し(ホ)(ハ)を結びつける直線をひき、線の中央で五糎五粍のふくらみをつけて、袖下の丸味をつくります。そして太線の通りに袖口から袖下を四枚一所に裁切ります。

前身上半身の方は、(ロ)標から衿明丸糎五粍と標し、剃の分を三糎とつて、圖のやうに丸みをつけ、その丸味の標通りに、後身頃の方だけを切ります。以上を裁つて開いて見ますと(ろ)圖のやうになります。

これを再びは圖のやうにたゝんで前身を脇の點線から折つて後身へ重ねます。前身には前に袖をとりました時の剃込みの裁目がありますから、その形通りを前の上身頃に標をつけ、縫代だけを伸して裁切りの標をつけます。

衿は、衿肩の切込み、即ち肩山から七糎五粍(へ)の標までは眞直ぐに、それから前の打合せ代二糎をとつて(へ)から打合せの線の上ホへ三八糎の斜線を引き、その斜線の三分一(ト)で三糎のふくらみをとつて、圖のやうに、衿剃の標をして裁切ります。この布はポケットになります。最後に前身褄口では十一糎五粍位の丸味をとります。これで全部裁てました。

縫方

この事務服は背と縫目がありませんから、袖下と前を合せて衿をつけ、周圍の始末を付ければ仕上ります。

前身　前の上下を合せ、縫代は割つてまつります。

袖　袖口下から縫ひはじめて脇下に縫ひ廻し、脇の輪になつてゐる處で縫目を消し、縫目は前へ折つてまつります。袖口は三つ折にして細くまつり、テープを通す穴を一糎か一糎五粍もあけておきます。

褄と打合せ　前身の左右の端(打合せ)と、褄口は二糎の折返しをつけて、びつたりと裏へ折つておき、なるべく同じやうな色合のモスリンか新モスで四糎位の斜布を作り、これを見返しにつけます。褄先の丸みはさきに、細針に縫ちゞめておいて見返しをつけます。そして見返し布も亦同樣にちゞませ、折目は見返しの方に折り、見返しの幅は一ぱいに折つて細かくまつり縫にいたします。

肩當　肩當は有合せの布で普通コートの肩當のやうに大きくとるのもよく、また衿廻りにだけつけることもありますので各自の好みにいたします。

衿　先にたつてある衿を中表に身頃と合せ、縫代は八粍にして衿先から肩山まで平につけ、肩廻りでは衿をゆるめに、背の兩側四糎位の處は思ひ切つて衿をつらせて付けます。縫目は衿の方へびつたりと片返しにして端布で吊を作つて背の中央へしつかりと縫ひつけます。衿幅は二糎にして餘分を折り伏せますと、衿に一枚芯が這入つたやうになつて、しつかりとします。

兩方の衿先は打合せの縁山を並行するやうに縫つて衿をまつります。このとき、上前の方に細斜をつけておき

ます。

釦かけは、共布で細い撚りぐけとし、衿先を縫ふときに、しつかりと縫ひつけます。

ポケット　衿刳の布で好みの恰好を切り、口元は細い三つ折のまつりぐけとし、他の三方は八糎に折つて上前の左、都合のよい位置へ口元のほころびないやうに半返しに縫ひつけます。

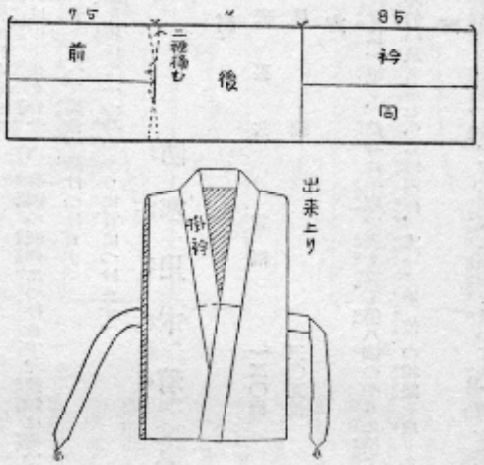
釦とスナップ　以上で大體仕上りましたから、アイロン仕上をして上前の衿先から十七糎ほど下つた處の打合せと、これと丁度打合ふ下前にスナップをつけます。次に下前の衿先きと上前の脇、これも前を合せて出合ふ處にスナップをつけます。或はコートのやうに細い紐をつけてもよろしい。次に、釦は、先につけた釦かけと出合ふやうにしつかりとつけます。釦及びスナップをつけますとき、布の一重の處に付くものは、小切を二枚位合せて、力布をつけておかないと、丈夫になりませんから、裁出しの小布を小さく丸く切つて當てゝおきます。

防寒用下着（その一）

材料

表用布	並幅	二三五糎
裏用布	同	二二五糎
紐布	八糎幅	一四〇糎

裁ち方



仕立上寸法

身丈	七〇糎	總寸法 三五五位
前幅	裾で一杯	
衿幅	五糎五粍	

第七圖

表は第七圖のやうに一つ身の身頃のやうに裁つて衿肩明は丸糎切ります。裏は衿布がないだけで身頃は表と同じやうに裁ちます。

縫方

最初に表裏の肩下りを縫つて折は前に折り隠袋をかけ、次に前後の脇接ぎをして矢張り裏の方に折つて隠袋をかけます、今度は衿肩明をよく揃へ揃へて表の長い分だけ裏に返らせて、周圍を縫ひます。この時は前後の身頃を合せるのでなく表と裏を合せるのです。

脇が縫へましたら裏返し裏身頃を上にして全體を長く平らに、伸して綿を入れます。
眞綿はよく伸して平らに入れ、アイロンでおちつかせ、前身から手を入れて表に返し、衿附のところを鉄でとぢ合せておきます。
衿は山で捲ぎ合せて、身頃の表側につけます、前幅は裾で一杯にして肩から自然に斜につけ三つ衿心を入れ、衿先を整へて裏側で縮けつけます。
紐を縮けて一つ身のやうに背につけます。

防寒用下着（その二）

材料

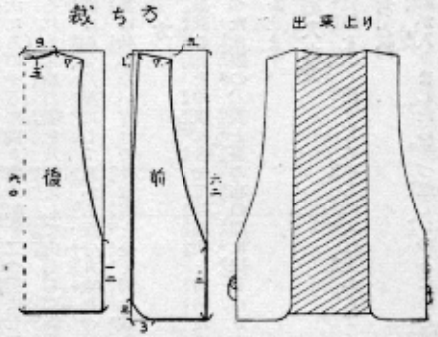
表裏共　並幅　一二〇糎
眞綿　三〇瓦位

裁方

後身は一幅で、前身は半幅で表も裏も第八圖のやうに同じ形に裁ちます。
脇剤の裁ち落しから幅四糎、丈一三糎位の襠紐を取ります。

縫方

襠紐布の表裏を合せて二糎幅に兩側を縫つて表に返しておきます。



第八圖

身頃　前身裏表の布を中表に合せ、脇の裾から一〇糎ほど上つたところへ襠の紐を挾んで、周圍を縫ひ合せます、但し返し口として前脇で一五、六糎ほどあけておきます。
裏に折をつけて全體に眞綿を入れ表に返し、返し口を細かく縮けておきます。左右とも同じやうに縫ひましてから後身にうつります。後身も中表に二枚を合せて周圍を縫ひ合せますが矢張り脇裾から一〇糎上つたところに前身につけた襠紐をつけますから兩方の前身頃が中に這入るやうになります。
返し口は裾で二〇糎ほどをあけておいて、前身と同じやうに裏に折をつけ、眞綿を入れて表に返し、返し口を細かに縮けつけます。
それから前後の肩は絹糸を四本位撚り合せた太目の糸で千鳥にかゞつてつなぎ合せます。

防寒用下着（その三）

材料

表用布	並幅	一六〇糎	
裏用布	同	九五糎	
眞綿	二〇瓦	紐布	半幅　五〇糎

裁方

第九圖(い)のやうに全體の用布から衿布を六五糎だけ取り、これは半幅にして二枚接ぎ合せて使ひます。

次に(ろ)のやうに殘り布の幅を二つ折にして後丈を七五糎にして丈を折り、そこで衿肩明を八糎五粍切り込み、それから肩の幅を八糎にして山から二糎落します。裾の角も八糎位丸く落します。

前は裾で八糎にして肩から幾分丸味をつけた斜に裁ち切ります。

裏は衿がないだけで外は表と全く同じ裁ち方にいたします。

縫方

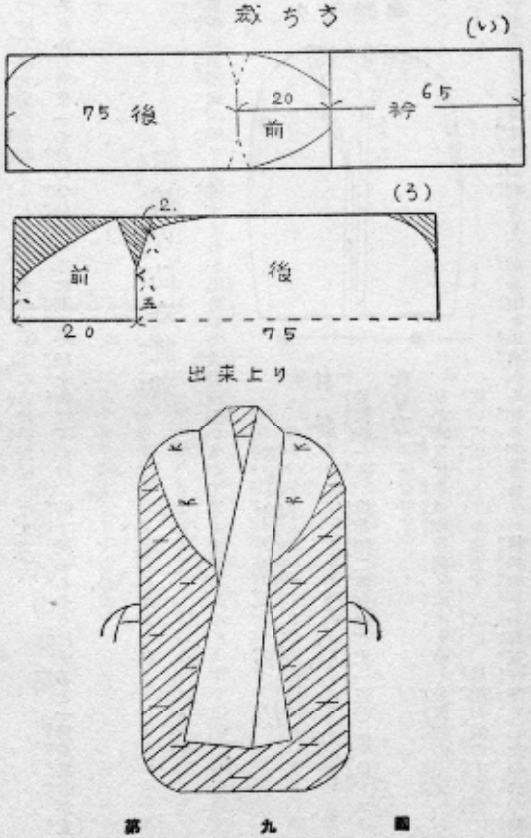
裏表の布を中表に合せて衿肩明と前明だけを殘して他をぐるりと縫ひ合せます、この時肩山から三五糎ほど下つた兩脇の、表と裏の布の間に紐をはさんでしつかりと附けます、折は裏の方に折つて全體に隱躾をかけておきます。

綿の入れ方

眞綿をよくほぐして平らに入れ上からアイロンをかけて綿を落ちつかせて表に返します。

綴ぢと衿

綿が入りましたら先づ返し口のところを裏表綴ぢ合せ、それから胴に出來上り圖のやうにところ〴〵飾綴を入れて綿の動かぬやうにしてから衿附にうつります。



第九圖

衿は廣衿でも、バチ衿でも宜しいのであります、衿の下の方は胴がなくて衿だけになりますから衿が細いと胸の合さりの具合が惡くありますから下の方はいくらか廣くしておきます。

つけ方は普通の着物と少しも變りませんが下の方は衿だけになります。

それから背に一つ身の背紐のやうに別布で紐を縮けてつけ、前で締めるやうにすると一層着具合が宜くなります。

眞綿の防寒肌着

眞綿の肌着は、輕くて着ぶくれがしないで大變温かいものであります。

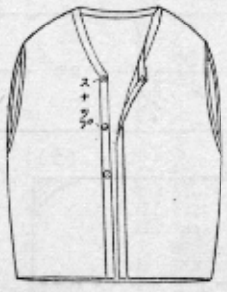
袋眞綿の襦袢の作り方

材料

袋眞綿一枚、緣布幅二糎五粍、丈一五〇糎位、スナツプ三個

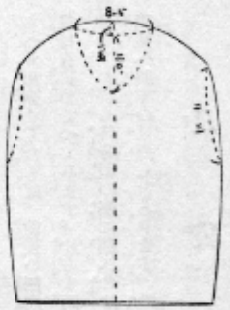
作り方

ひめ糊又は生麩糊を薄く水にとき、袋眞綿の兩面から霧吹きで吹いて乾かしておきます。次に、眞綿の袋の方を肩にして第十一圖のやうな寸法に衿刳をし、前身頃を中央から切り開きます。後衿刳を一糎五粍深くしたのは、衿がのぞかない爲めで、これは着物の繰越しに合せて刳りますと更によろしい。前の衿刳も好みによつて適當にいたします。



出來上り

第十圖



裁ち方

第十一圖

脇は兩手が樂に通る位に袖刳をいたします。凡そ二三糎位で間に合ひます。

裁目は糸でかゞつてもよいのですが、細い緣布でくるんで置きますと、仕上りが美しく見えます。斜布か緣布は有り合せの布を接ぎ合せて用ひて結構です。そして前にスナツプをつけて出來上りといたします。

また第十二圖のやうに衿をつけて肌襦袢の型にいたします。衿幅は下に着るものですから矢張り狹めにいたします。袖ぐりは緣布をつけるか或はかゞつておきます。そして圖のやうに身頃の全體を縱横に刺しておきますと、眞綿の伸びちゞみを防ぐことが出來ます。

出來上り

第十二圖

角眞綿の羽織下

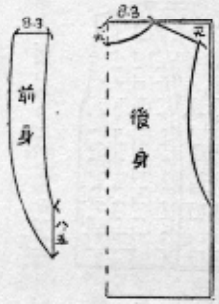
材料

角眞綿　三〇瓦、斜布　三五〇糎位。

作り方

角眞綿を後身頃の分として幅三四糎、丈五〇糎位の（この丈は各自の寸法に合せて適當に致します）長方形に伸し、前身頃として第十三圖のやうな形に丈四四糎位に作り、糊を吹いてアイロンをかけて乾かし、十文字又は菱形に刺しておきます。（ミシンをかければ尚よろしい）

裁ち方



出来上り

第十三圖

下ごしらへが出來ましたらば、前後の兩肩を合せ、前身の肩に斜布をあてゝ一所に縫ひ合せ、折目は後身にかへし、裁目を斜布でつゝみます。片方も同樣にします。

次に前身の下の斜も後身頃の脇に縫ひ合せます。それから、一方の裾の角から前明、衿肩明を通つて、裾まで全部の周圍へ斜布の見返しをとります。袖刳も同樣にいたします。

材料

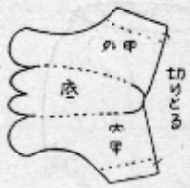
足袋下

袋眞綿　一枚、斜布少々。

作り方

足袋型紙を作るのは面倒ですから、古い足袋をといてそれを原型にいたします。然し、全部といて型を作りますと、縫目が多くなつて履心地がよくありませんから、第十四圖のやうに、甲の中央と爪先踵をはなして、あとはそのまゝつけておき、こはぜかけ、と足袋の足首の方を切りとります。この深さは好みによつて定めます。

裁ち方



出来上り

第十四圖

原型が定まりましたらば、周圍五粍位の縫代をとつて眞綿をたちます。

袋眞綿は先に開いて糊を吹き、乾かしてミシン、（又は刺ぬひ）をかけておき、それから型に合せて縫代を加へ左右兩足をたちます。（注意しないと同じ足ばかりになりますから、片方は型紙を裏かへして裁つことを忘れないやういたします）

初め内甲と外甲との眞中を中表に合せて縫ひ、縫目を割つておき、裁目はまつつておきます。次に、甲の後を縫ひ合せ、底と合せます。爪先きの縫ひ合せは指の先の方へ甲布のゆるみを寄せるやうにして縫ひ合せます。縫目は全部まつつて置きます。足首のところは斜布で包みます。

パンツ

材料

袋眞綿一枚、ゴムテープ腰廻り及び兩足廻り、（但しゴムテープを伸して計る、）それにテープの重り代二、三糎を加へた丈。

作り方

出来上り

第十五圖

袋眞綿に糊を引き、全體に刺し縫ひ又はミシンをかけ、袋の方を下にして兩側に足口をあけます。この寸法は體格によつて適宜にいたします。

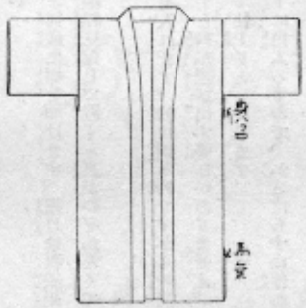
次に、ゴムテープを足口に入れ、眞綿で包んでぐるりとミシンをかけ、腰も同樣テープを通してミシンをかけます。手縫のときには斜布の見返しをつけるとしつかりいたします。

袋眞綿の丈の長すぎるやうなときには適當に丈を切つて身體に合ふやうにいたします。

防寒用長胴着

裁ち方

出来上り



第十六圖

材料

表用布　五八〇糎位

裏用布　同

眞綿及び紐布

裁方

身丈は長襦袢より三、四糎短く、袖は半幅の筒袖といたしますから袖丈は二〇糎位、（袖付寸法によつて定めます、袖を全部つけますから長襦袢の袖付よりはやゝ小さくいたします。）衿は別衿でもよくまた第十六圖のやうに摘み衿としてもよろしい。

裏も同樣に裁ちます。

標附け方

長襦袢を標準として

身幅　同寸

身丈　三、四糎つめる　袖丈　袖付と同寸乃至二糎つめる
袖附　全部つける　身八つ口　一二、三糎
馬乗　二〇糎乃至二五糎　衿幅　肌襦袢と同寸
袖丈　一ぱい　袖幅　一ぱい
裄　一ぱい

以上の寸法によつて、長襦袢と同様に裁をつけます。衿口は裏表袷の場合には毛抜き合せでもよいのですが、その他の場合には、表布を一糎程見返して置くと裏がのぞかなくてよいものです。袖口も同様にいたします。

縫方

普通袷入と同様に縫つて直線を入れます。衿は掛け衿ですから衿肩の處に足し布を入れます、また着物や襦袢と同様に衿肩を刳つておきますと衿が飛び出す憂ひがありません。出來上りましたらば、後に長襦袢と同様に紐をつけ、適當な掛衿をかけて仕上りといたします。

これは極寒の季節に長襦袢の下に用ふるもので、かさばらずに温かいものであります。

汗よけ兼用のお乳おさへ

着物を澤山重ねる秋冬には、その必要を感することも少いでせうが、初夏から盛夏にかけては肥つた人はお乳おさへ、汗よけの必要を感じ、痩せた人は、背中や胸部の痩せた骨格をそのまゝに見られるやうな感じがするものです。その兩者のいづれにも用ひられる汗よけと乳おさへを記します。

材料

ガーゼ並幅一八〇糎、たすき用木綿テープ、斜布及び紐用布少々、スナップ二組。

裁方

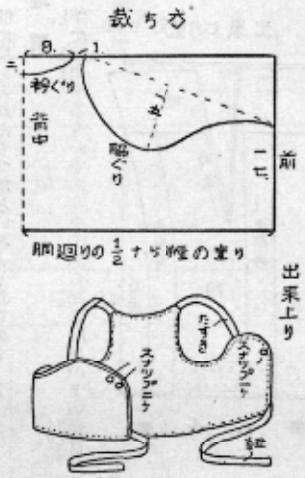
出來上り圖のやうに、背中から前にかけて全體をおほふやうな形のものですから體格によつて多少の相違はありませうが表裏とも第十七圖のやうに裁ちます。

縫方

表裏を合せて、斜布で周圍にぐるりと緣をとり、肩から前に體に合せてたすきを付けます。次は左右の前の上部にスナップをつけます。この乳おさへは前で合せ目が重なる筈ですから下前の方は重なりだけ奥につけます。但しスナップは二個並べてつけておきます。これは、川ふる時の氣分で弛くりしたり、つめたりすることが出來て重寶です。

倘下端には背中を一と廻りして前で結べる長さの紐をつけます。

以上で出來上りましたが用布は晒、メンネル等季節によつて用ふることもよろしい。夏は汗よけとなり冬は肌



第十七圖

着代用となつて温かなものであります。

繻附裾除け

裾除けには洋服のスカート式にぐるつと輪に仕立てたもの、長襦袢の裾のやうに衿をつけたもの、上前下前の間に襠を入れたものなどいろ〳〵あります。

地質

下に着用するものでありますから裾さばきのよい地質が適當でありますが、冬向などには防寒の點をも考へて地質を選擇します。メリンス、モンパレス等適當であります。

仕立上寸法

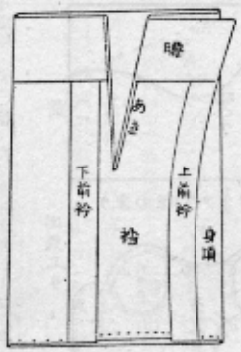
表用布　ヤール幅一五〇糎（共裾の時はこの他に二〇糎位要ります）

晉通の大幅物（七二糎幅）一七〇糎と外に並幅七二糎）

裏用布　七二糎幅　一五二糎

腰廻り布　並幅　一三三糎

第十八圖　出來上り圖

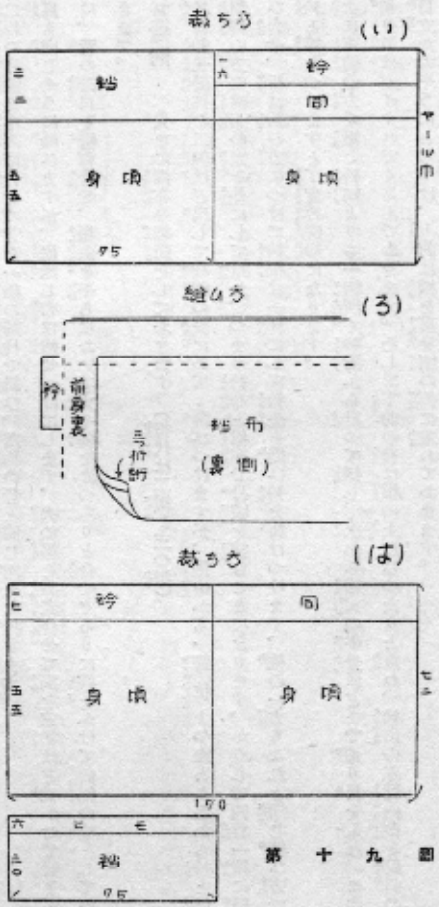


丈　九五糎

裾廻し　一三〇糎位

裁方

第十九圖（い）のやうにヤール幅の時は一身頃から襠を取り他の一身頃から衿を取ります、晉通の大幅の時は（ろ）（は）



第十九圖

のやうに兩身頃から袴を一つづゝ取り、襠は別布を並幅から三〇糎丈だけ使ひ殘りの細い布は紐にします。

縫方

二枚の身頃を中表に合せて背を一糎の縫代で縫ひ、着物の背と同じ向きに折ります。裏も同じやうに縫ひますが、裾廻し布は縫せづけにします、次に襠を裏表合せて裏を三粁ほど殘かせて襞をかけ、背の縫目を綴ち合せ、裏表を平らにおいて丈や幅をきつちりと合せぐるりに襞をかけて前幅の褶をしておきます。

衿及襠附　先きに襠布の褶折をしておきます。（折代は二糎を三つ折）

衿は衿先縫代を二糎ほど出して身頃の表にあてゝ縫ひつけますが、褄山から一糎位上つたところから衿と反對側の方に襠布の表を外にして重ね、つまり衿布と襠布で身頃を挟むことになります、かうして四枚一緒に縫ひ合せ、折は衿の方につけて衿幅は一杯にして衿先を縫ひ衿を綴けつけます、他の一方もこれと同じ縫ひ方で衿と襠をつけますと丁度行燈形になります。

次に下前の方で襠を衿幅よりも一糎廣く衿附から計つて摺し、上から褄丈の半分ほどきで切り目を入れ、この切り目はバイヤスでくるんでおきます。そして下前の衿は襠の上にぴつたりと重ね、衿山の五粍内側を針目の目立たぬやうにとちつけ、上前は襠を裏身頃の側に重ねておきます。

腰廻り　腰廻り布の幅を二つに折つて、身頃の幅に合せて兩端を縫ひ、身頃と中表に合せて縫ひつけますが、下前の方は衿と褄とを重ね、上前は褄を裏身頃に重ねたまゝつけます、そして裏側で綴けつけます。

裾綴　普通の長襦袢と同じやうに裾綴をして仕上げをします。

股引

股引といひましても男子用もあり女子用もあり又半股引といつて丈が短く膝の所までのものなどあります。その裁ち方にも本裁、中裁、小裁があり又仕立方にも單仕立、袷仕立の別がありますが、これを更に次のやうに分けます。

前通し　身頃と襠を袷にして脇廻りを單にする仕立方。

筒、裏　裾口から膝頭のあたりまでを袷にし、それから上と襠を單に仕立てるもの。

第二十圖

地質

口裏　裾口の一〇糎ほどを袷にするもの。

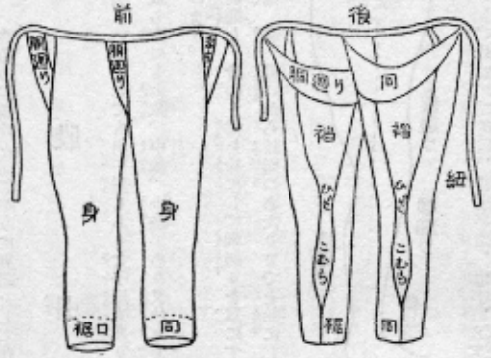
膝裏　膝裏に一五糎—二〇糎角の布を當てゝ刺しつぎにするもの。

股引にする地質には絹布では筏父絹、甲斐絹などを用ひ、木綿物では晒綿、藍色木綿、金巾、天竺、縞物、カスリなどでも作ります。その他毛織子、フランネル等をも用ひます。

各部の名稱

第二十一圖を御參照下さい。

裁切寸法と割り出し方



第二十一圖　袴の部名及仕立て上り

丈	九五糎	腰骨の上から踝まで
跨上	三〇	胴の附根から腹部まで（凡そ丈の三分の一）
跨下	六五	脚の附根から内踝まで（凡そ丈の三分の二）
膝	三六	跨下の中央から四―八糎上つたところ
股廻り	五五	股の廻りに凡八糎を加へた寸法
膝廻り	四〇	膝廻りに約八糎を加へた寸法
裾廻り	三二	裾廻りを計つた寸法に一糎五粍―二糎を加へた寸法
脛廻り	四一・五	脛の廻りを計つた寸法に凡八糎を加へる

身	上	二三糎―二四
	股、膝、脛	三六
	裾	三二
襠	股	一九―二〇　股廻りから
	膝	四　膝廻りから（身幅を引いた寸法）
	脛	六　脛廻りから（身幅を引いた寸法）
	裾	一・五―二
胴廻し丈		七六　跨上の二倍に一五糎―二〇糎を加へる
胴廻し後幅		三〇　跨廻りを二倍した寸法の凡そ三分の一
胴廻し前幅		一二　胴廻し後幅の三分の一
紐	丈	二〇八
	幅	並幅五つ割

裁方

裁つ時には中表に丈を二つ折にして袷の時は裏布を下にして綸を右にして左の方の裁ち目を揃へて第二十二圖のやうに標をつけて各用布を順に裁ち切ります。

縫方

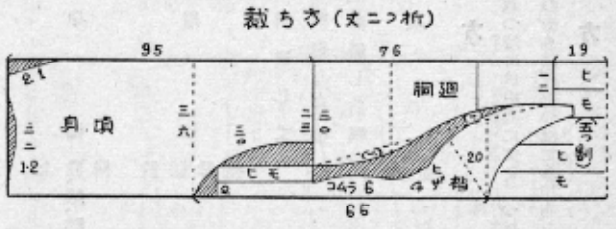
縫ひ方は總べて二本の撚糸を用ひて一針抜に縫ひます。（撚糸は針に糸を通して糸の撚通り（右撚或は左撚）一本づゝ撚を強くくれ、次にそれを二本一緒にして反對に撚ると一本の太い撚糸になります）

裾合　裏を四粍多く縫ひ込んで折は裏の方に返し、表を二粍被かせます。身頃の裾の刺りのところは布のつれないやうに適當に切り込を入れておきます。

内股　第二十三圖（は）の内股は表裏の身で襠の内側の方つまり直ぐな方を挟んで四つ縫にし表に引き返して折を正しくします。

外股　（い）に示したやうな鉤合で裾口から四つ縫にし、引き返して折をよくつけ、次に前股上の表と裏を合せて假縫をしておきます。

胴廻し附　（ろ）の胴廻りの裏表布で身から襠の上部を挟んで四つ縫にしますが、胴廻し布の幅の狭い方を身に當て、廣い方を襠に當てゝ脇上を縫ひます。次に胴廻し布



公式　（表身丈＋胴廻丈＋紐）×2＝總丈

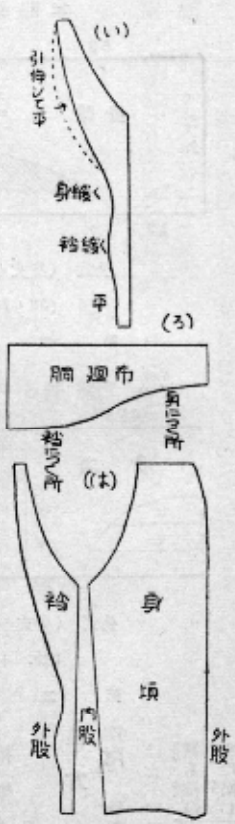
(95＋76＋19)×2＝380

（裏身丈＋胴廻丈）×2＝總丈

(95＋76)×2＝342

第二十二圖　襠の部

の上の眞直ぐなところを裏表合せて縫ひますが、裏がふかないやうに裏の方を二粍深く縫ひ込みます。



第二十三圖

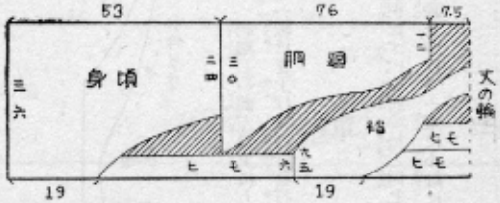
紐附　胴廻しの前左を上にして、一五糎乃至一九糎重ねて假縫をし、左脚の方に三〇糎ほど紐を出し身頃の兩端を一糎ほど上げて待針を打ち、紐を縫ひつけ、紐幅を二糎にして裁け上げます。

單股引

單股引はすべて前の袷と同じでありますが、縫代を凡そ四粍ほどづらして伏縫にし、裾口には凡そ七、八糎幅の口裏をつけて一束に小針に縫ひます。

半股引

半股引の裁ちち (一)

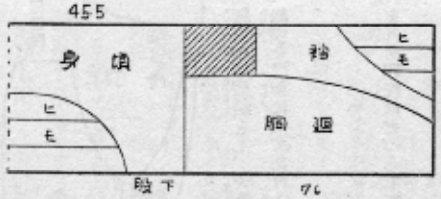


公式 (身丈＋胴廻＋裾布)×2＝総丈

(53＋76＋7.5)×＝273

第二十四圖

半股引の裁ちち (二)



公式 (身丈＋胴廻丈)×2＝総丈

(45.5＋70)×2＝231

第二十五圖

裁切寸法

丈		五三糎
股上		三〇
身幅	上	二四
	下	三六
胴廻丈		七六
胴廻幅	後	三〇
	前	一二
紐丈		二〇尺
襠幅	上	四
	股	一五
	下	一九・五

縫方

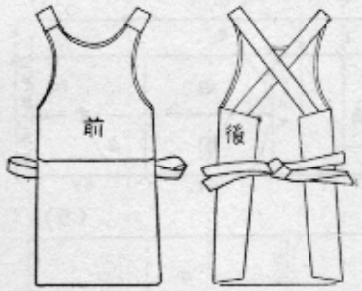
襠附 身頃に襠をつけますのに外襠も内襠も襠の方を四粍先きに出して縫ひ合せ折を身の方に返して折り伏縫をします。

胴廻し布附 胴廻し布の斜の方で幅の廣い方を後に、狹い方を前に、そして廻し布の方を四粍控へて縫ひ合せ、折は廻し布の方に折つて矢張り折り伏縫にします。

裾絎 裾口を三つ折絎にします。

紐附 袷股引のやうに前を重ねて紐をつけて仕上とします。

江戸腹掛



第二十六圖

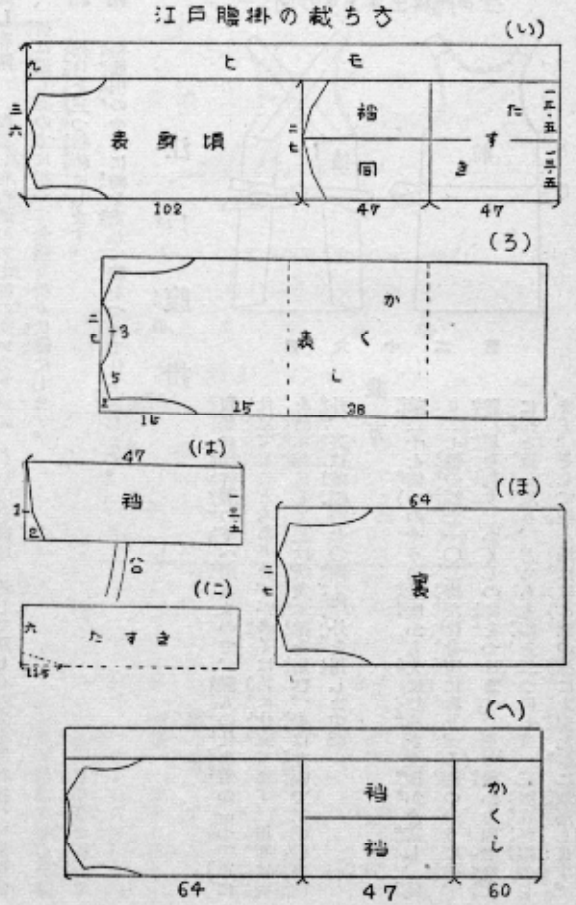
江戸腹掛出来上りの図

腹掛は印袢纏の下へ着るもので、職人の仕事着の一つで單に仕立てることもありますが多くは袷に仕立てます。用布は表を紺木綿にして裏は淺黄木綿を用ひ、表は並幅で二〇〇糎内外、裏は並幅一七〇糎内外を用します。

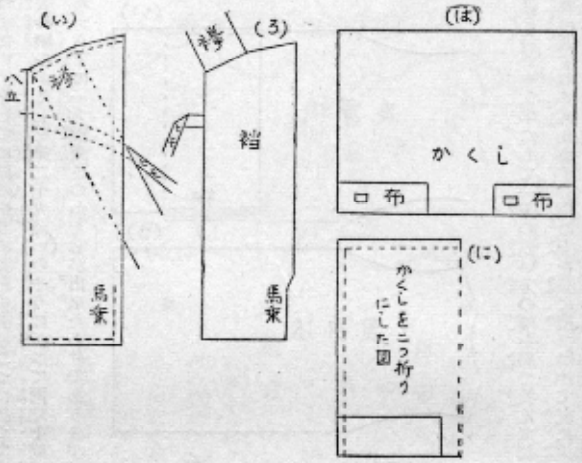
裁方

第二十七圖(い)のやうに並幅から先に紐布を九糎かき落し、殘り二七糎の幅で一〇二糎だけ身頃に取り、(ろ)圖のやうに衿、腋、肩を刳り、かくしの標をつけます。その後から四七糎丈に襠と襷を取り、どちらも幅を二つにして一三糎五粍幅にします。そして襠と襷は(は)(に)圖の様に上部を斜に裁落します。

江戸腹掛の裁ち方



第二十七圖



第二十八圖

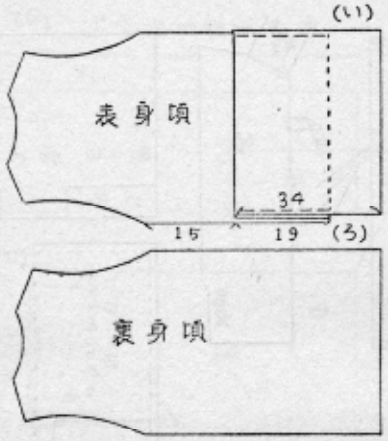
裏は丼をつけませんから(ほ)のやうに身頃の丈は六四糎で足り、襷も紐も要りませんが隠布を六〇糎取り、外は表と同じやうに裁ちます。

縫方

紐に芯を入れて絎けておきます。次に襷も芯を入れ輪の方を摘み縫して一方は絎けておきます。但し兩方の端はそのまゝにしておきます。次に第二十八圖(い)のやうに表裏の襠布の間に紐と襷とを挟んで(襷は上の斜めに幅の廣い方をはさみ、紐は上角から八糎五粍下つたところにはさみます)三方と馬乗とをつゞけて縫ひ、表に返しますと(ろ)圖のやうになります。これを左右向き合になるやうに二つの襠に紐をつけておきます。

それから隠し布には(は)圖のやうに表布で口布を

つけます。そして(に)圖のやうに丈を中表に二つに折つて上部を縫ひ合せておきます。表身頃のかくしを第二十九圖(い)のやうに折つて兩端を縫でとめておきます、つまり脇刳から一五糎下つたところから下に一九糎深さのかくしが出來たわけであります。



第二十九圖

そして今度は口布のついた隠布の口と、表身頃の右脇の刳から八糎下つたところとを合せて、そこから隠の口明一五糎を縫ひ合せて表に返します、次に襠を表裏の身頃で挾んで上から八糎のところまで縫ひ、一針しつかり返してそれからは隠布と裏身頃で襠を挾んで縫ひますと口が出來ますから一五糎のところで又針を返し、つづいて馬乘まで縫ひます。

左脇は隠口を明けませんからずつと表裏の身頃で襠を挾んで縫ひ、馬乘にうつるところで針を返して身頃だけで馬のりを縫ひ合せます。次に襟を背で十文字にして一方の狹い方の端を肩で挾んで縫ひ、衿刳もつゞけて縫ひ裾口だけ縫ひ殘してそこから表に返すのであります、隠の上を裏に縫ひつけて表に返し、返し口を紡け、衿刳と袖刳に細く縁をとります。

脚袢

脚袢には大津脚袢、山附脚袢、鳥足脚袢などありまして、地質は木綿、甲斐絹などを用ひます。

用布

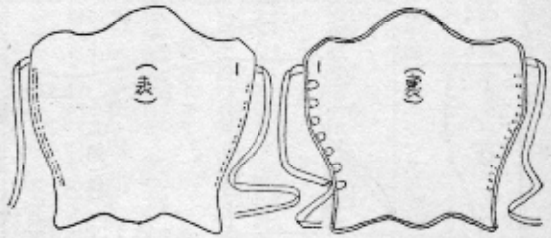
表	並幅	一一〇糎
裏	同	七五糎
コハゼ		一四ケ

裁方

表裏とも別々に丈を二つ折にして輪の方を左において表布の方は紐布の分だけ左に出し右の方の裁ち目を四枚揃へて重ねておきます、そして別に裁つた型紙に合せて襠、身を四枚一度に裁ち、殘りの表布から紐布を七つ割に裁つて七五糎二本と二〇糎二本とを取ります。

型紙の裁方

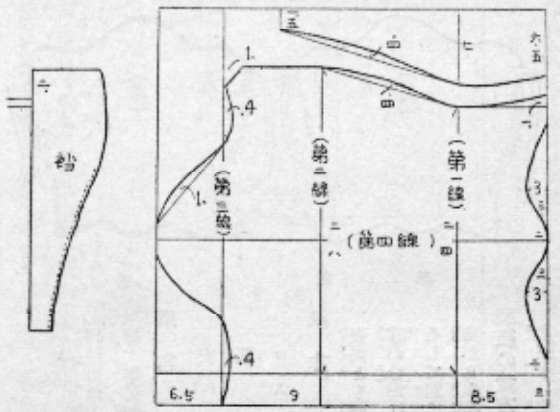
第三十一圖のやうに並幅三六糎の紙を用意して、はじめ右の下角から左へ八糎五粍に標し、左の角からは六糎五粍、次に九糎と二つを標し、この三つの標から眞直ぐに線を上



第三十圖

脚袢仕立上りの圖

に伸します。それから打合せの分を下から三糎の所へ標し、この打合せの標と、第一線の交叉點から二四糎を標し、その二四糎の中央に圖の通り眞直ぐに第四線を横に引きます、次に第二線と第三線を二八糎に切つてこの三線をつなぐ線を引き、つゞいて右端へ眞直ぐにこの線を伸します。そして第二線と第一線の間で四粍外へ丸味をつけてふくらませ、右端では一糎上へ出して斜に線を引きます。



第三十一圖

裾口の方は第四線を中心にして向ふと手前へ一糎づゝ取り、それから又三糎づゝを標し、この標の通りで左の方へ又三糎を標し兩端二糎だけは眞直ぐにして各標を目當に圖のやうな形に線を引きます。

次に上部(左)の方は第四線のところで矢張り裾口のやうに向ふ手前へ一糎づゝ眞直ぐにし、それから第三線を四分した點を通つて圖のやうに曲線を引きます。上の角は圖のやうに一糎斜に裁ち落しておきます。

襠は上の右角から左へ丈を二四糎と標し、そこで幅を一糎五粍に標し右の角から幅を六糎五粍と標し、第一線のところで七糎と標してこゝと一糎五粍の標へ尺度を渡してその中央で四粍入つたところに又標をつけ、この四つの點を圖のやうにつないで線を引きますと全部出來上りですから線に添つて型紙を裁ち切ります。

縫方

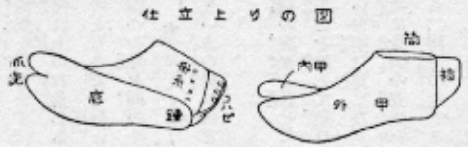
長い方の紐は接ぎ合せて寸法通りに二本、短い方も矢張り二本、それ〴〵一方の端を殘して外を縮けておきます。

襠の裏表を合せて眞直ぐな幅の廣い方に、上から二糎下つたところへ短い紐を挾んでよく留め、斜の方と下の方とを殘して縫ひ合せ、裏の方に折つて表に返します。左足右足は向ひ合せになるやうに注意して紐をつけないと同じ足になります。

次に身頃の表裏を合せ、裏の方を二粍出して裾を縫ひ、それから身頃の外側となる方、つまり曲つた方の上から二糎下つたところに長い紐を挾んで、下の方から縫ひ始めます。縫ひ方は三針毎に一針返して縫ひます。かうして紐をよく留め、つゞいて山の方を縫ひ、次に身頃の内側、つまり眞直ぐな方で裾から七糎上つたところから襠の曲つた方を挾み（この時襠の斜がゆるくて附け難い時は少し縫ひ縮めても宜しいが皺にならぬやうに氣をつけます）一針拔に縫ひます、この時返し口として九糎ほどの間裏を一枚あけて縫ひます、そしてそこから表に返して返し口を縮け合せます、次に紐附と同じ位置に外側から六糎入つたところからコハゼを一糎づゝ

離して七枚つけ、襠の方に内側三糎のところに二本の撚糸で掛糸を附けます。次に紐通しの穴をあけます、その位置は長い紐をつけたところと同じ高さで、七糎入つたところに縦に凡そ三糎位あけ穴かがりをして、閂留をしておきます。

足袋



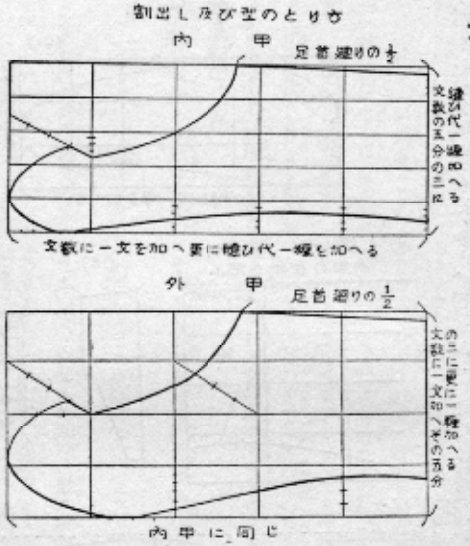
第三十二圖

地質　表地には木綿、キヤラコ、毛繻子、コール天、ビロード、綾、羽二重などを用ひ、裏地には木綿、綿ネル、紋羽などを用ひ、底には雲斎か石底を用ひます。

各部の名稱　第三十二圖を御參照下さい。

裁方と割り出し方　第三十三、三十四圖のやうにして型紙を作りますが面倒ですから、擧め銘々の足に合ふ足袋がありましたら、それに依て型を取つておいて裁つのが便利であります。

縫方

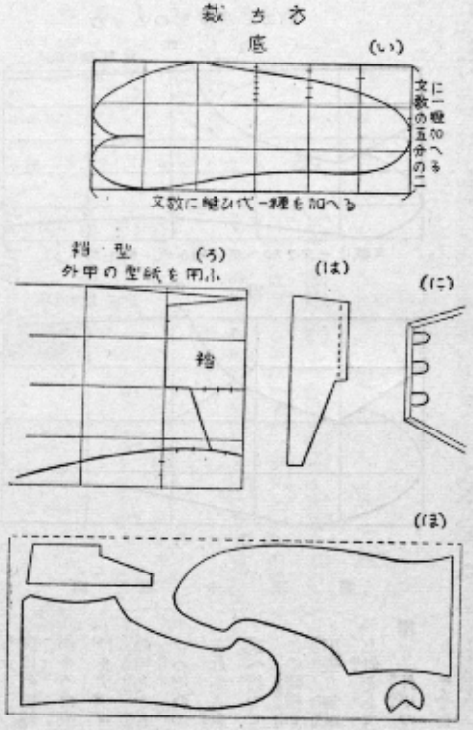


第三十三圖

コハゼ附　裏の襠布を第三十四圖（は）の點線のところで折つて、（に）のやうに裏地の表側にコハゼをつけます。コハゼを中にして表と裏の襠布を合せて二本糸で一針拔にコハゼのつく部分を縫ひつけますそれから表を見返りの折り山から裏へ折つて襠布の上下を縫ひますこの時襠布の下斜の部分は縫糸を引張り加減にして四、五針毎に返し針をして縫ひます。

甲　外甲の筒の上を縫つて裏に折り、きせをかけて表に返します。次に内甲の筒の上と襠附のところとをつけて縫ひます。但し下の方から三糎位縫ひ殘しておきます。そして裏の方にきせをかけて表に返します。

裏表の筒口を縫ひ合せた外甲で内甲を挾んで四枚一緒に一針拔で甲から鈎型のところまでつゞけて縫ひ表に返して襠をつけます。



第三十四圖

外の襠附のところに襠全體を挾んで下の方三糎半程殘して縫ひ、こゝに（襠の裏と外甲の裏との間）内甲の縫ひ殘した三糎をも挾んで六枚一緒に縫ひます。この時は襠布を少し弛めて外甲の襠附の部分を張り加減にします。外甲と襠布とをつゞけて一枚に裁つことがあります、その時は底附をする前に内甲外甲をよく重ねてその所を竪に二糎ほど四枚一緒に返し針で縫つておきます。

底附　甲の底につく部分のぐるりを躾糸で押へておきます。次に底地に甲布を合せて踵と爪先きの内外の切り込みの所を一針通して止めておきます。踵の方は少し甲布を張り目にし、爪先きの方は甲布を縫ひ縮ませながら一針拔きに甲と底とを撚糸で縫ひ合せます。この時五、六針毎にその針で縁を卷きながら縫つて參ります。

掛糸　表に返して形を整へ（木箆や木型を用ひますときちんと出來ます）足首に合せてコハゼの掛糸をつけます。掛糸は少し太目の撚糸をつかいます。この糸で序に内側の爪先きにも洗濯して乾かす時の用意に紐をつけておきますと大變便利であります。かうして全部出來上りましたら内甲を折り左右を重ねて帶封をします。

足袋底の拵へ方

底布の裏へ薄い生麩糊を塗つてその上に裏布をおき壓をして乾いてから型紙の通りに裁ち切ります。

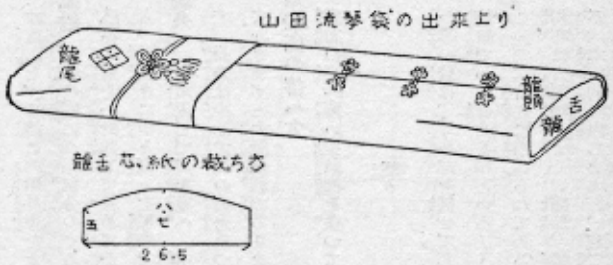
琴の袋

お琴の袋は、琴全部を被せてしまふのと、表面と兩端だけ被ふのと、袋のやうに仕立てるのと、開いたまゝで飾紐でかけ合せるのといろ〳〵あります。また山田、生田たどゝその流儀によつて多少異る點もありますのでこゝでは普通に用ひられてゐる兩流の仕立方を記します。

用布は大幅物がよく、繻珍、緞子、羽二重、縮緬、富士絹、モスリンなどお琴の種類によつて用布を撰びますが、本格的に申しますと、羽二重や鹽瀬に定紋を染拔いたものを用ひます。

裏用布は表布に應じて絹物、モスリン、金巾など適當なものを撰びます。

山田流の琴袋



第三十五圖

材料

表布、大幅二九二糎、裏も同樣用意しますが、もし小幅ものゝ時は倍を要します。

裁方

表用布から横布で十一糎かきます。これは圖中に示します、龍舌用布になります。裏用布からも同樣のものをとります。但し小幅ものゝときは、小幅で十一糎をとつておけば間にあひます。

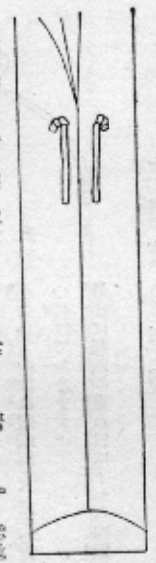
縫方

龍舌の芯に入れる厚紙を第三十五圖の寸法に裁ちます。

この厚紙へ用布を貼りつけ、裏側へは青梅線一枚を當てゝ、裏布と合せ、周圍を表と綴ぢ合せておきます。

表用布と裏用布とを合せます。但し裏布が小幅ものゝ時には、丈を二つに切つて幅を接ぎ合せて割ごてを當てゝおきます。そして表と合せて、一方の端を縫ひ、裏に折り、表へかへして、表布が二粍出るやうに折つておきます。次に幅を一杯に合せます。然しこれも亦表の方が裏へ二粍ほど見かへるやうに縫上げますから、裏布をそれだけ多く縫込んでおきます。幅が縫へましたらば他方の縫も同樣に縫ひます。縫縫のとき、出來上つた右側、即ち上前になる方を縫ひますときには、中途で十九糎程縫ひ殘しておきます。

龍舌の處は、先きに厚紙を芯にして作つておいた龍舌布を表裏で挾みづけにします。この時表布の幅の中央と龍舌の平らの處の中央とを合せ、周圍を全部縫ひ合せます。龍舌の周圍よりは、胴布の幅の方が廣めになつて居りますから、餘分の分は龍舌の方から見て右が上になるやうに重ね　一針ぬきで縫ひ縫代の餘分は揃へて切ります。そして表へかへし、縫殘しておいた處を綴けます。



第三十六圖

紐のつけ方

表、又は裏用布の殘り布で幅二糎、丈三〇糎位の紐二本を作り、琴に合せて龍尾から十一糎程入つた處の合せ目へ第三十六圖のやうに結んで綴ぢつけます。

飾紐は八粍丸位の絹の打紐で梅結びと釋迦結びを三紐作り、別に一糎五粍丸の紐で大きい梅結びを結び、外にこれと同じ太さの紐で第三十七圖のやうに房をつけたものを梅結びの下につけます。

この紐も、一方は輪に、一方は釋迦結びにしておきます。紐の長さは、お琴の寸法によつて多少異りますから正確には、各々の琴に合せて定めますが普通は三十八糎位づゝの長さで充分です。

第三十七圖

飾り紐は大きいのを出來上り圖のやうに、袋の端から十九糎の處で、梅結びをその中央につけますが、先づ初めに房のついた紐を縫ちつけ、その上へ梅結びをつけます。

小さい方の飾は龍頭から二十六糎のところへ一つ、あとは三十四糎おきに二つ付けておきます。

最後に龍頭の重ね目は下から四糎程まつりつけて門留めをしておきます。

生田流の琴袋

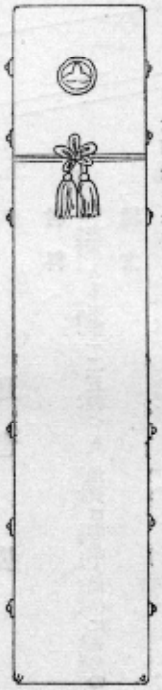
材料

表、裏とも並幅三四〇糎、芯用金巾同上。

縫方

初めに八糎丸の組打紐で釋迦結び十二個、それに合ふ輪十二個、山田流と同樣の梅結びに房つきのもの一個を作ります。

裏用布に芯布をあて、表と裏を中表に合せて端を縫ひ合せます。他方の端も同樣に心持裏をつらせ氣味にして縫ひ合せ、どちらも裏へ折ります。次に幅の兩側を合せます。これも裏をつり加減に待針をうちます。そして一番端の縫初めへ先に結んでおいた釋迦結びを一つ付け、次に二五糎おきに二つ付け、三〇糎おいて輪を一つ、



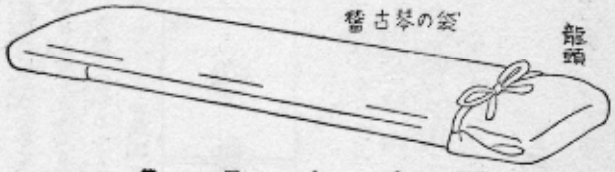
第三十八圖

生田流出來上り

二五糎おきに輪を二つ、つけながら縫ひ合せてゆきます。縫終りの方では一番終りへ釋迦を一つ、それから二三糎おきに二つづゝ、三〇糎おいて輪を一つ、二三糎おいて輪を二つつけます、かうして紐をつけながら芯と表裏と三枚一所に縫ひ合せ、紐の處ではしつかりと返し針しながら兩側を縫ひます。たゞ一方の側で返す口を十五糎ほどあけておき、縫目をとゝのへて表へかへし返し口を綴けつけます。飾り紐は出來上り圖の樣に、二五糎おきにつけた上から二番目の輪と輪の中間に綴ぢつけます。

稽古琴の袋

材料



第三十九圖

裏表とも並幅二六五糎づゝ、外に紐用布六糎幅四二糎丈二枚。

縫方

第三十九圖のやうに、極簡單なものですが、表裏を合せ、兩方の端を縫ひ、龍尾の折返しは三〇糎位として表面に出る方の表裏で挟んで、引返し口を少々あけて置き、兩側とも裏布をつらせ氣味にしてぬひます。折返しの角は零の厚みだけ角を三角につまんで縫ひ、折目は中央に向けて折り返し、表にかへして開きを裕けます。頭の方の布の兩端には紐をつけ、紐の餘留は⊠型にしておきます。

琵琶の袋

第四十圖

材料

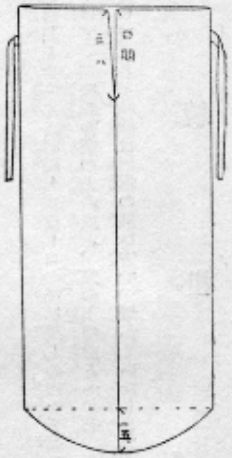
表裏とも大幅一二五糎づゝ、地質は琴袋と同様に各自の好みに應じます。

縫方

一二五糎の用布を、幅六七糎に裁ちきります。そして圖のやうに、口明三八糎、下の丸味は一五糎の間で丸める樣をつけます。

先づ口明を合せて兩方を縫ひ、一方の縫終りの處で着物の袖口下のやうに、一方を挟んで四枚を束にぬひます。そして下の丸味を縫ひ、縫代の餘分は切りとつて、丸味の格好を調へ表にかへします。返し口を細く、表布が少々見返るやうに折けて表側に打紐か紐紐をつけて出來上りといたします。出來上りは後丈は一一四糎、幅三三糎となります。

三味線の袋



第四十一圖　出來上り

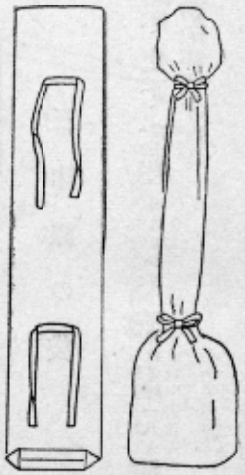
材料

友禪縮緬、羽二重、富士絹、モスリン等、用布は並幅一八九糎乃至一〇〇糎、表裏とも同寸、別に紐布を横布で四個五糎幅のもの四枚。

縫方

これは長棹のさゝ入れる袋ですから、表裏共に丈を二つ折にして山をそろへ、丈標は布一杯に標をつけ、一方の端にだけ、その標から六一糎に標をつけます。次にこれを中表に表布と裏布とを合せて、別々に兩端で六一糎を縫ひ合せ、裏布を四糎ひかへて裏に折り、四枚合せて、袖口下のやうに眞直ぐに下まで普通の縫代で縫ひ、

次に底から、他の一方の横へと縫ひ廻します。その時、横の裏布を二つ、三つ縫ひのこして、返し口といたします。次に底の厚みを出しますために、底の山と横の縫目とを合せて、第四十一圖のやうに、底の幅を二つ、奥行を一つ位として點線のやうに兩端を縫ひますと三味線の厚味と同樣な角形の底が出來ます。



第四十一圖

各々の縫目をきちんと整理して返し口の縫ひ殘しの處から表にかへします。そして、その口を締けておきます。紐はくけて、三味線の胴の上の處と、頸の下の處とへ、七、八寸だけ中央を縫ひつけておきます。棹の接いである三味線は同樣の縫ひ方で、短かくいたします。

鏡掛

用布の積り方

鏡の丈を計つて鏡の緣の厚さと、後の折返し寸法（普通には一三糎位）に上下の縫代一糎づゝを加つた寸法が用布の丈になります。幅は鏡の幅に兩側の縫代を加へた寸法であります。

第四十二圖

縫方

表裏を中表に合せ、ぐるりを一糎の縫代で縫ひます。但し返し口を一方の端で一五糎ほどあけておきます、折は裏に折り角を揃へて表に返し、返し口を綴けておきます。次に第四十二圖のやうに折り返しの分を後に折り、鏡の厚さだけの間をあけて調和のよい色の細い打紐で千鳥掛にかゞります。

このかゞりは千鳥掛に限らず、リボンで蝶結びしても宜しく、又襷を入れる仕立方もあります。

暖簾

暖簾は、昔から商店で、家號、町名、商品名などを染め出して、店頭に掲げたもので、商賣の隆盛を祈る心からいろ〳〵の縁起を稱へたものであります。

材料

地質は木綿、麻などが主に用ひられ、色は紺、茶、赤、淺黄などの色無地ものを多く用ひます。

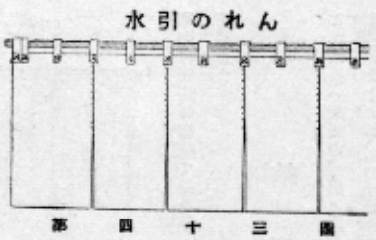
種類は水引暖簾、日除暖簾、蛸足暖簾等があります。以下各暖簾について、作り方を述べます。

水引暖簾

地質は河内木綿で布數は奇數を用ひます。假令ば間口二間なれば十二布でよいものを十三布とするやうに、偶數は絶對にさけて居ります。

水引暖簾には必らず假名と漢字で屋號或は苗字、家印又は家紋を染めぬきます。それ等の位置は、家印又は紋は暖簾の中心に入れ、假名文字は假名頭と申して暖簾の右の方へ、漢字は左の方へ入れます。若し屋號と苗字を入れます場合は屋號を假名書として右へ入れ、苗字を漢字で左へ入れることになります。

布擦きが十三布の時には、中央の三布に家印をそめ、この三布に別に二布を加へた五布を全部の布數から引くと八布殘ります、これを四に割りますと二布づゝになりますから、右から無地二布、次に假名文字、次に無地二布、次に家印、また無地二布、次に漢字、次に無地二布といふことになります。



萬一布數の丁度に割りきれない場合には、殘りの一布を掛け繰りにつまり左の方へ入れておき、餘あまりますときには右の端へ入れることにします。結局左右が三布づゝになることになります。

文字、家印が上位置になることはよろしいのですが、下に下りますのは厭ひますから、拔ちます時に注意して下らないやう、眞中になるやうにいたします。

この暖簾は丈五七糎乃至七六糎を通常として丈の半分を縫ひます。即ち布丈を二つ折にして中央から上を二枚づゝ合せて縫ひ、縫目は手前にかへしますと、左り前にならないやうになります。縫ひ初めは念入りに留め、縫目には隱し縫をかけ、縫はない部分の兩端の耳は二つ折にして耳からげをし、下端の切目は三つ折縫とします。

乳の付け方は兩端は玉乳と云つて二つづゝ並べてつけ、中は、縫目と布幅の中央につけます。乳の寸法は出來上り幅四糎、丈十九糎を普通とします。乳かゞりは、商家のものは⊠にかゞりますが、芝居、角力等の茶屋の暖簾などは✕の型にかゞります。（第四十三圖參照）

日除暖簾

第四十四圖のやうなもので、一名太鼓暖簾とも申します。地質、色合は水引暖簾と同樣で、布遣ひは三布、五布、七布などを用ひます。丈は大體一間にしますから二〇〇糎ばかりになります。これにも町名、屋號、苗字及び商品名を染出されてゐます。

縫方は、全部縫つて、縫目の上を更に伏縫いたします。次に眞田紐を十文字に縫付けます。右の肩から左の裾へ、左の肩から右の裾へと斜めに縫ひます。

第四十四圖

周圍は同樣眞田紐で緣を取ります。乳は上部は水引暖簾と同樣にして、下部は兩端の竝乳と、縫目にだけつけて置きます。

蛸足暖簾

これは長い暖簾で、奥と店の境や、店と臺所口の境につるものであります。地質は中形木綿麻などで一定しては居りませんが、一一五糎以上一五〇糎位が適度であります。布數も一定いたしませんので、掛ける場所によつて適宜にいたします。

仕立方は水引暖簾と同樣ですが、丈の三分の一だけを縫ひます。乳は上にだけつけておきます。

浴場の入口にかけます蛸足には縫分けた股に黑天鵞絨又は紅縮緬の八糎幅位の文結びをつける習慣があります。

袱紗

袱紗には祝儀に使ふものと凶事に使ふものとありまして、昔はむづかしい形がありましたが、現在は大幅、中幅、並幅などの袷であります。模樣も色も祝儀用には華かなものを使ひますが、凶事用には淺黃とか白で模樣も紋も淋しいものを付けます。

地質は錦、鹽瀨、羽二重、縮緬などを用ひまして、寸法は普通幅寸法に比べて丈寸法を一割長くするのがきまりでありますが、染模樣の都合では少し位の相違の出來ますのは止むを得ません。

普通寸法

	丈 糎	幅 糎		丈 糎	幅 糎
大袱紗	七六	六八	中袱紗	四六	四二
小袱紗	三八	三四	茶袱紗	二七・五角	

縫方

染めの物は染め分けのところから二つに折つて、帶の仕立のやうに躾をかけて一方の中央で返し口だけ殘して

ぐるりを縫ひます。（正しくは全部を縫つて糸を留めずにおいて返し口の糸をゆるめて、そこから返し後に糸を引きしめます）折は表布の方に折り角を整へて表に返し、返し口を細かに綴り、周圍に雄針雌針で鋲をかけます。隔のところに半端な針の出来ないやうに注意してかけます。それから鍛をかけて仕上げとします。絞り物の時は共色の裏打をして絞りの伸びないやうに裏から目立たない針目で刺しておきます。

鯨幕

第四十五圖

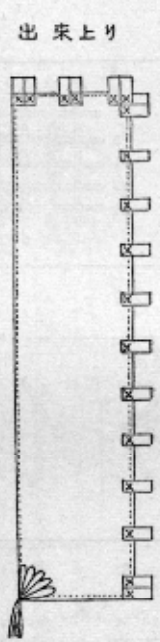
鯨幕

昔は軍用のものでなか〳〵むづかしく物見穴などにもきまりがありましたが、今はたゞ縫つて乳をつけるだけであります。丈に五布で幅は五間が並でありますが縣ける間口によつて多少相違があります。

色をかへて紅と白、黒と白など接ぐものがありますが紅と白は祝儀用、黒と白は寺院などに用ひます。又白無地に紋所を染めることもあります。五布の中白の段を多くするのが雌幕であります。

縫ひ方は各縫目を普通に縫つて折は雄幕は下に雌幕は上に折つて伏せ縫にいたします。

乳の丈は三八寸で幅は並幅を四つ割にして、これに芯を入れ綿け目が乳幅の裏中央になるやうに綿け、兩端を折つてつけます。綿け方は圖のやうに兩端と間につけ⊠のやうにかゞつておきます。數は正しくは雄幕雌幕によつて違ひまして雄幕には二十八、雌幕には三十六つけます。



第四十六圖

幟

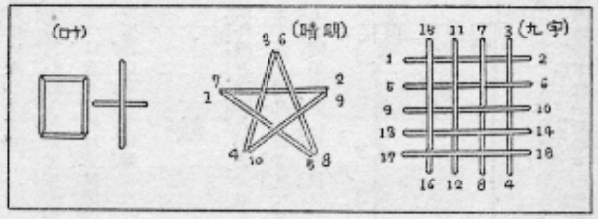
幟には外幟と内幟とがありまして、地質は木綿、メリンス、金巾、綿絽などをつかひます。大きさもいろ〳〵ありますが、普通には並幅で丈が三〇〇寸から三八〇寸位であります。

乳は上の幅が四寸位で長さは竿の太さにもよりますが二三寸位にします。

乳は第四十六圖のやうに上に二つづゝならべて三所に、横は上下に二つならべて、間は三〇寸おき位につけます。

縫方

上は四寸、下は一寸の三つ折にして細かく縫ひます、それから兩方の耳は平に二通り縫ひますが針目はたがひ



第四十七圖

逢ひに出るやうにします。次に下の乳をつけない方の端は圖のやうに二本糸で縫ひ、糸の端を二〇糎位殘して一度結び房のやうにしておきます。

乳　乳は裏側の中央に紐け目がくるやうに紐けて第四十七圖のやうに丸字、晴明、叶を先の方の裏表へ縫ひつけるのが正しい仕方でありますが、たゞ止めておくこともあります。

附け方は字の染めてある時は讀みはじめの方へつけます。

國旗の縫ひ方

國旗の寸法は竪二に對して横は三の割合でありまして、目の丸の直徑は竪の五分の三の割合であります。

大きくても小さくても右の割合に出來るやうに兩横の縫代だけ長く裁ち切ります。普通の國旗は一方を八糎の幅に三つ折縫にし、竿につける方は下折を一糎に、次を四糎幅に折つて細かに縫ひ、上下を丈夫に留めて袋乳にします。これへ打紐を通して上下に三〇糎ほど出して端をよく留めておきます。

大きな國旗は幾布かを接ぎ合せて寸法の割合通りに裁ち、接ぎ目の折は上に返して折り伏縫にし、兩面から見て表裏のわからないやうに縫ひます。竿につかない三方には強い糸を入れて風にあふられても切れないやうに縫ひしておきます。

目の丸も矢張り寸法通りに仕上るやうに裁つて折り伏縫にして表裏のないやうにつけます。

人形着物の寸法割出し方

第四十八圖

人形着物の寸法割出し方。

人形は普通の人と比べまして大分體の割合が違つて居ります。すのと、生きた人のやうに上手に着こなすといふことが出來ませんから、着物の寸法を餘程上手にしつくりと縫ひ上げませんと恰好のよい着附が

出來ません、それで人形の着物は次の諸點で寸法を決めてそれから割り出して參ります。

（一）身丈、（二）首の廻り、（三）胴の廻りであります。

身丈	背中心から足底まで	衿肩明	首廻りの八分の一
繰越	衿肩明より四粍少なくします	後幅	胴廻りの四分の一
前幅	後幅と同寸にして衽下りずつと斜にします	衽幅	前幅の三分の二より一糎廣くします
衽下り	首廻りの三分の一	衿下	着丈の三分の一
袖丈	着丈の三分の二	袖附	首廻りの三分の一
袖口	袖附より八粍多くします	袖幅	後幅より二糎廣くします
衿幅	首廻りの十分の一		

縫方

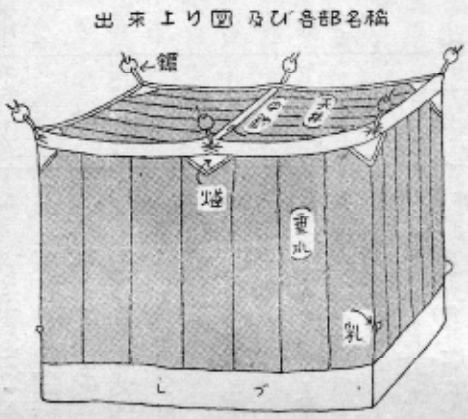
普通の着物と同じでありますが人形は胸が張つて居りますから胸幅を餘程廣くしませんと、前の合さりがよくいきませんから衽下りの間の斜を多くして衽附は殆んど眞直に近い位にし、なほ衿附の時衽を充分にふくらませて置きます。それから袱は袖口も裾も普通の着物に比べて割合に大きく八粍から一糎位にします。

腰揚が餘り少ないと貧弱に見えますから充分揚の出來るやうに身丈の裁ち切りを長くしておきます、そして揚の位置は丈を四と六の割合にして上から四のところへ縫ひ糸がいく位の位置にいたします。

肩揚は縫ひ糸が衿附から四粍位離れた邊に出る位が恰好が宜しくあります。

蚊帳

蚊帳に用ひます布は、紗、絹、麻織、木綿、麻と木綿の交織などで、縁布には縮緬、紅絹、緞子、麻織、金巾、更紗などを使ひます。



出來上り図及び各部名稱

第四十九圖

大いさ

室の大きさ	蚊帳の布數	蚊帳の丈
三疊	五、六	一九〇糎
四疊半	六、七	一九〇
六疊	七、八	二一〇
八疊	八、十	二二七
十疊	十、十	二二七

名稱

第四十九圖を御參照下さい。

裁ち方積り方

例へば五、六の蚊帳を作るとしますれば、丈を一九〇糎として、横布五布に竪布六布を加へて之れを二

の部

倍した数を丈の一九〇糎に掛けますれば廻り即ち垂れの用布が出ます。天井は五布にしてその丈は竪布幅から縫代を引いた殘りの寸法を六倍して、更にこれを五倍しますと出ます。これと垂れの用布とを足せば全體の用布が出ます。これを公式にしますと、次のやうになります。

丈×{(廻り數＋縫代數)×2}＝廻りの用布

190　5　6　4180

（竪幅－縫代）×廻り數×竪布數＝天井の用布

36　2　6　5　1020

垂布＋天井布＝總用布

4180　1020　5200

附屬の積り方

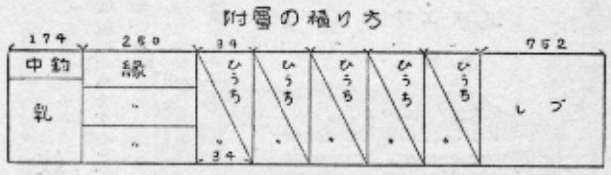
緣は三つ割（上仕立は半幅）、中釣は四つ割、總は一幅か、半幅を斜に三角に切ります、鎭は一幅にします。

（竪幅－縫代）×上下布數＋縫代＝緣

36　－　2　×　2　＋　4　＝752

上下布幅×5＝緣

34　×5＝170



附屬の積り方

第五圖

第六圖の寸法

緣＋緣＋中釣＋緣

759　170　174　250＝1346

縫　方（蚊帳の縫ひ方は裁し方といひます）

乳　中釣の殘り布から、上り幅四糎、丈一七糎＝二〇糎の乳を四つ縫つておきます。

垂　垂の布を裾から縫ひ合せ、折は一方に返して、四隅のところには下から四糎ほど上つた所に乳（摘み）布を挾んでつけます、この乳布の縫目は下向にして丈を二つ折にします。

天井　五布を縫ひ合せ折は何れか一方に返し、四隅に斜に切つた總を共色の紙か布で裏打をしてつけます。

總及び中釣のつけ方　天井につけたと同じやうに總に裏打をして垂の四隅と六布の中央とに綴ぢつけます。それから天井の幅の中央に中釣を一文字につけます、一方は縫ひつけ他の一方は紐でつけるのであります。

垂と天井　垂布と天井布との裏と裏とを合せ、つまり外表に合せてよく釣合をとつて表から假綴をしておきます。

緣布の附け方　まづ先きに緣布を接ぎ合せて裏打をし、緣幅の三分の一を天井の方に當てゝ縫ひ隅の所は襞をとります、そしてこの縫込の端に三つ捻の細い麻絲を大針にまといつけ、緣布を垂れの方へ折り返し、緣幅をきめて天井の四隅の總布を除けて他は天井布と一緒に紐でつけます。

鎭のつけ方　裾口に鎭を凡そ八粍ほど差へて縫ひつけ、折を鎭の方へ返して縫ひ込を包んで紐でつけます、

第五十一圖

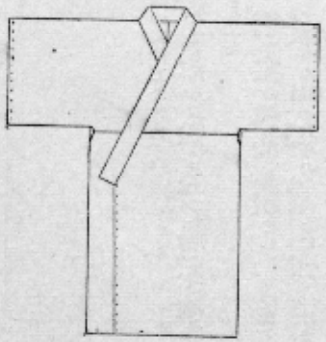
この鐶の接ぎ目は隅の所にしてその折りは廻し布と同じ方に折ります。

釣手　四隅と六布の方の中央に釣手をつけます、まづ釣手留布を紐のやうに絡けて丈夫そうで三〇糎位の打紐（釣手）を鐶に通し、紐端を合せて縒ぢ、これを釣手留の中程にして、緣の角の廊糸にかけてしつかりと留め、それから釣手留を第五十一圖のやうに折り合せて縫糸をかけます。

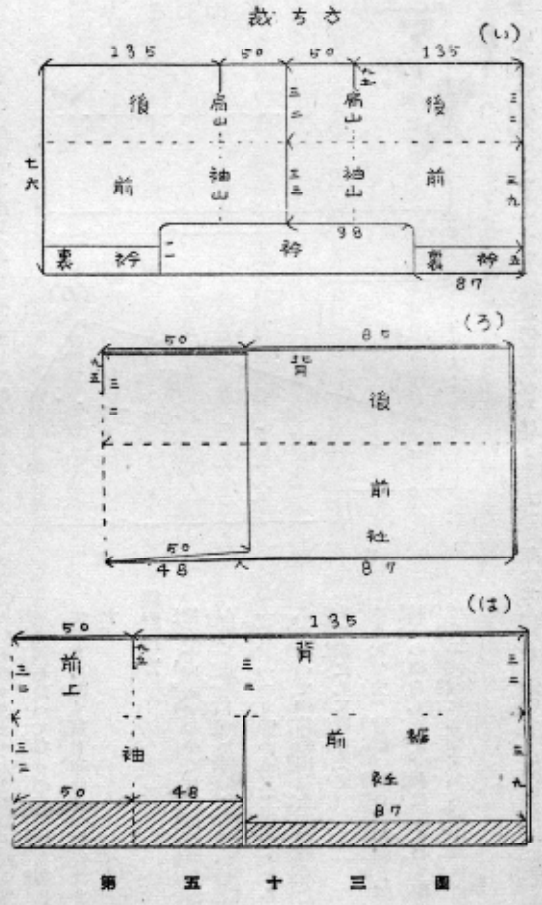
改良裁ねまき

タオル、綿ネル等の大幅物は次のやうに仕立てますと、鐶ふ手數も省け、用布の節約にもなつて大層經濟的な仕立方であります。

裁方　先づ大幅のまゝ用布の丈を二つに折り、第五十三圖（ろ）のやうに輪の方を更に五〇糎だけ折り返します。そして輪の二枚重なつてゐる一方の耳から衿肩明を九糎五粍切り込み、又は圖のやうにひろげて前身頃の接ぎ合せになるところ、つまり袖と前身頃との切離しをします。後幅は肩から裾



第五十二圖



第五十三圖

で同寸にしますから背幅を三二糎にしてそこまでの深さに、袖丈は肩の折山から四八糎（一方の袖は五〇糎に

しますが、これは前の接ぎ代が含まれてゐます）のところに鋏を入れて二枚一緒に切ります。

次に袖幅を三三糎にして殘りの幅を裁ち落して衿布にします。つゞいて衽の幅も廣すぎますから前身と衽とで三九糎を取つて殘りの幅を裁ち落して、この裁ち落し布は裏衿に使ひます。

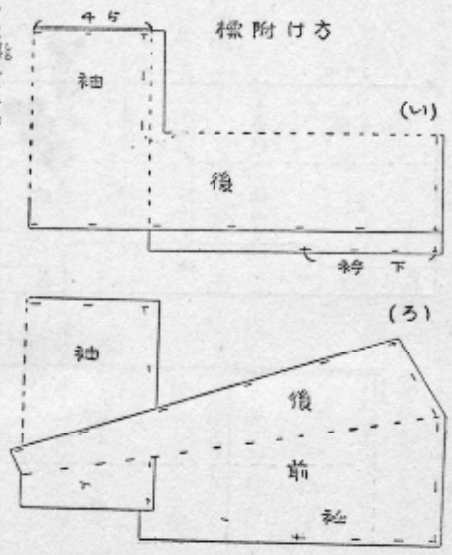
標附け方

第五十四圖(い)のやうに肩山の通りから袖と前身上部を折り、前裾も後幅一杯、つまり背から三二糎のところから折つて、後身頃を上に、衿肩を右手前にして置きます。

さうして丈、背縫、袖口、袖幅及び袖下の標をします。袖は附も口も同寸法の濶袖にしますから袖下は眞直ぐに標します。

次に前身頃の標附にうつりますが、後身頃は全部をはぐることが出來ませんから(ろ)圖のやうに端を向ふにおこして、先づ胸の接ぎ標をし、次に衽下りをつけ、それから裾で前幅と衽幅とを合せた幅を標すのですが、裁つ時幅は一杯にしてありますから、先に衿下の標をします。衿下絎の幅は一糎五粍にして衿下の標の十文字から衿肩へ斜に衿附の標をいたします。

衿は先きに裏衿を接ぎ合せて普通の單衣と同じやうに標附します。



第五十四圖

縫方

普通の單衣と同じやうに先づ背を二重縫にし、肩當、居敷當も普通につけます。

それから前の接ぎ合せをいたしますが、この接ぎ合せは標よりきせ代だけ淺く縫つて、折は上胴に返します、そして上胴の縫代一枚を四粍ほど裁ち落して折伏縫かまつりぐけにしておきます。

次に袖下を標通り普通に縫ひますが、附の奥から脇へつゞくところが少し明きますから、第五十三圖(い)の點線のやうに少し脇剤したやうに縫つておきます、それから內袖の縫代が深くなつてゐますから、これを外袖の縫代より四粍短く切つて矢張り折伏縫にしておきます。

つゞいて袖口を三つ折絎にいたします。

次に衿下絎、裾絎を普通に絎け、衿も普通に附けて絎け上げます。

最後に脇剤のところに表からバイヤステープか共の斜布で緣取をしておきます。

一五、繰廻しの部

上手な繰廻しの仕方について

和服は繰廻しが自由に出来て、最も経済的であります。例へば羽織としては柄が派手になつて着られないとか、肩が擦けてそのまゝでは着られないといふ時着物に仕立換へて又しばらく着るといふことや、又反對に着物で長く着たら膝がいたんでそのまゝでは用ひられない物を、傷んだ箇所を裏に廻して羽織に仕立てなほすとか、或は大人物を子供物にしたり、揃ひの子供物を一緒にして本裁にしたりなど隨分工夫すればいろ〳〵と變化させて役立たせることが出來ます。

着られなくなつたからといつてそのまゝ箪笥の中へ藏ひこんでおかないでそれ相當に役立たせることは女のつとめであります。

又衣類はどんな地質のものでも着用の間にだん〳〵と汚れたりいたんだりすることは止むを得ない事でありますが、これもその間の手入の仕方で餘程地質のいたみを防ぐことが出來て、同じ物でも長く使用することが出來ます。

又一面衣類の手入を怠つて汚れたりいたんだりした物をそのまゝ着用するといふことはその人の品性にも關係しますから衣類の手入は手まめにすると同時に上手な繰り廻し方を工夫して出來る丈よく利用することが大切であります。

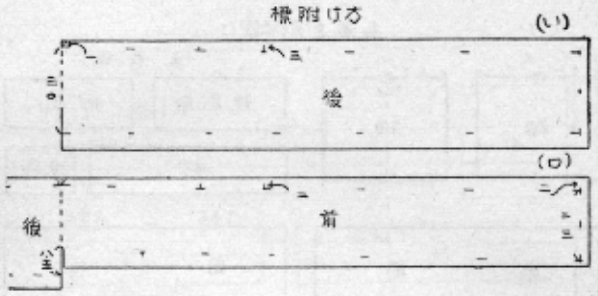
羽織を長着に

羽織を着物になほすとかいふ場合は大抵そのまゝ羽織なり着物たりとして着られない物をするのでありますから、よく全體の布地を調べて布の縞みや、色の褪せ具合、丈の具合などを見て工夫しなければなりませんから、その裁ち方も一樣には出來ませんが大體次のやうな方法によります。

裁方

袖　第一圖のやうに元の袖をそのまゝに袖とします、時には元の衿を袖にすることもあります。その場合には元の袖を衽と衿にいたします。

身頃　元の身頃を矢張り身頃としますが、羽織は大抵前後の差がついてゐて、後身丈が少し短かくなつて居ますから、前身から繰り布を取ります。そして後身頃はそのまゝで身丈の足りない時は裾下になるところへ足し布を入れます、この足し布は元の衿から取るか、或は前身頃の殘し布から取るやうにします。衿肩明は元のまゝですと前身頃の幅が普通寸法に出來ませんから、(二のやうに衿肩明を普通より少し大きく、つまり肩幅の縫ひ代を一糎位取つてそこから肩幅を計つて背の縫ひ代をきめ、その縫ひ代から肩明を八掛五糎切り込みます。かうしてもまだ前幅は普通寸法には出來かねますから、(ほ)圖のやうに裾の下になる位置で斜めに布を摘んで下前の方を少し手前の方へ寄せて、裾の縫ひ代を淺くして衽附の標を斜につけるやうにします。また(へ)



第二圖

圖のやうに前身を一旦切り離して幅を少しづらして接ぎ合せる仕方もあります、又これとは違つて第二圖(ろ)のやうに前袖附の斜を、後袖附の斜より少なくして脇の詰ひ代を淺くする仕方もあります。

衽　元の衿から必要な丈だけを取ります、若し袖を衽にするやうな場合には丈が不足しますから、その時は帶の下にかくれる位置で足し布をいたします。この足し布は幅が狹くても足りますから、元の襦布或は袖口布から取ります。

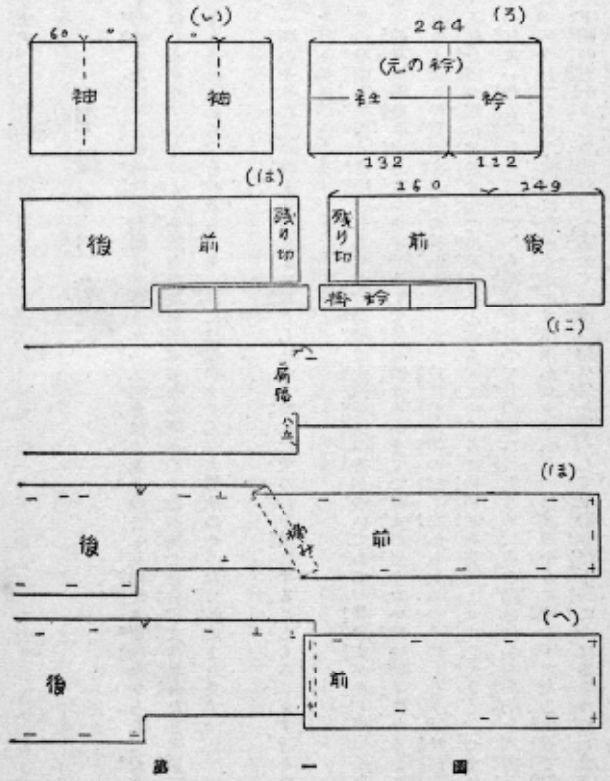
衿　衽を取つた殘りを衿にして衿山で接ぐやうにします。若し丈の短い時は襦布を足します。

掛衿　元の襦布を掛衿として用ひます。

以上のやうな繰り廻しが出來ましたら普通の長着のやうに仕立てます。

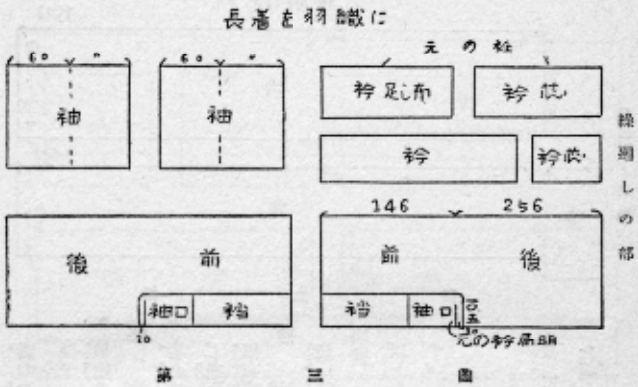
長着を羽織に

長着を羽織にする時は多くは膝がいたんだり身丈が短くなつたりした場合であります、身丈の短くなつた物は裏を多くつけるだけで別



繰廻しの部

第一圖



第三圖

段工夫は要りませんが痛んだ所のある物はいたみの場所を目立たないやうにしなければなりません。

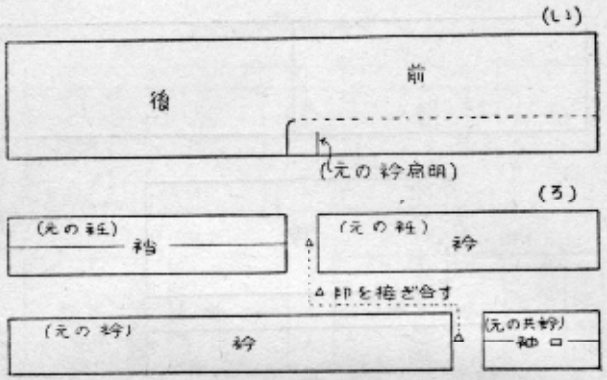
裁方

袖　元の袖をそのまゝ袖にします。

身頃　元の身頃を身頃にしますが前後の丈が同じでありますから差をつけるためと、肩の位置をかへる爲めに一〇糎ほど後へ繰り越しますと具合が宜しくあります。そして衿肩明を一〇糎五粍切りこんで前を裁ち落し、それから襠布と袖口布を取ります。

時には第四圖のやうに前の裁ち落しをしないで、そのまゝ縫ひ込みとして衿肩明だけを少し深く丸味をつけて切り込むこともあります、この場合には襠布や袖口布は(ろ)のやうに元の衽や掛衿から取つて、芯布には別布を使ひます。この裁ち方にいたしますと又後に他の物に仕立てかへるのに便利であります。

衿　元の衿を衿としますが丈が少し足りませんから衽布から不足分を取つて接ぎ合せます、接ぐ位置は縫附の少し下のあたりになるやうにして、殘りの布は芯にいたします。



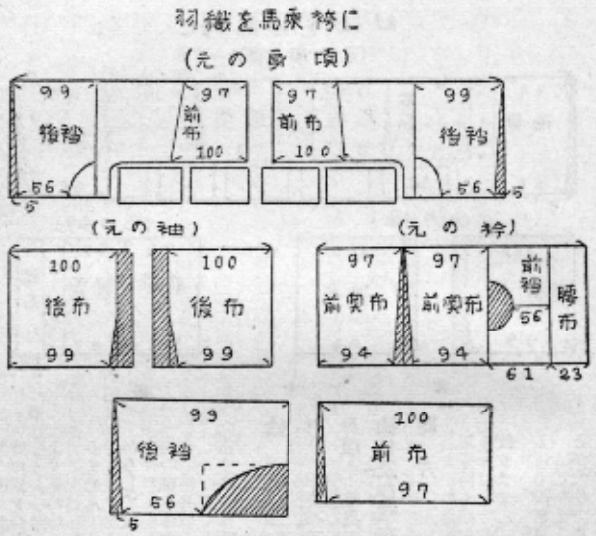
第四圖

古帶皮の利用法

派手になつてしめられなくなつた帶皮、又は色が褪せたり耳がいたんだりした爲めに締められなくなつた帶皮は次のやうに利用すれば又役立たせることが出來ます。

長襦袢の裾に　全體を四つに切つて割合にきれいな部分を前に使ひます、後幅は三〇糎にして脇縫ひ代は前布と不揃でもかまいませんから前布は脇の縫ひ代を一杯にして幅を二五糎とし衿は摘み縫にします、若し衿幅の狹い時は裏衿を少しつけます。

長襦袢の胴に　第五圖のやうに衿肩明を普通寸法より大きく切ります。これは前幅を廣く使ふためでありますから肩幅を一杯にしてそこから後幅を計つて背の縫ひ目



第六圖

羽織を袴に

羽織を袴に仕立てかへますにはそのまゝでも適當な縞物などはそのまゝに、色褪けした物などは袴に相應しい色に染め上げてから次の方法で裁ち換へますと立派な袴として役立たせることが出來ます。

馬乘袴の布の取り方

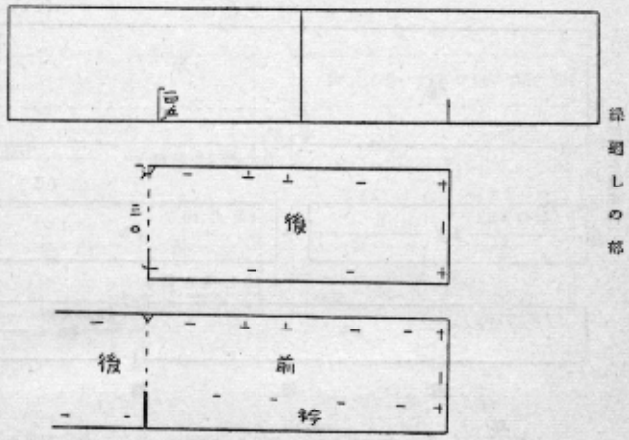
兩袖　後布二枚。

袴　前裏布二枚、前袴二枚、腰布一枚。

身頃　前布二枚、後袴二枚。

袖口及び襠布　紐布。

この外附屬は殘り布から取り紐の不足分も殘り布から取つて必要寸法だ



第五圖

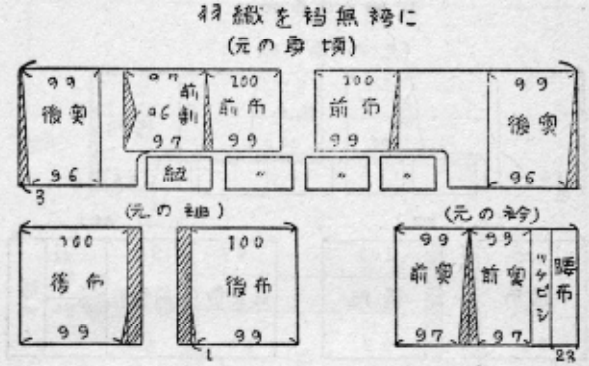
を決めて衿肩明を切り込みます。かうしますと背の縫ひ代が深くなりますから自然前身頃の布を廣く使ふことが出來ます。

又メリンスや羽二重などの丈帶は胴抜の長襦袢にもなります。

羽織裏に　羽二重の帶皮は羽織の裏として用ひられます。羽織裏として一番目立つ前裏のところは肩から眞直ぐにかき落しますので、きれいな歪が出るやうになつて立派に羽織裏として役立たせることが出來ます。

身丈によつて長さが足りない樣な場合は一番目立たない袖の山に別布を接ぎます。

改良帶に　又地のいたんだところや、色の褪せたところを上手に工夫して、先きに帶の部で說明しました樣な改良帶に仕立てますと、又一代新らしい帶として締められます。



第七圖

けに接ぎ合せます、若し布にいたみの有るやうな場合はよくそのいたみの箇所を除ぞくやうに工夫しなければなりません。

かうして取りました各布の切り上や、襠の割り方は前の袴の部を參照して裁つて下さい。

襠無袴の布の取り方

軸　後布二枚。

衿　前裏布二枚、附紐、腰布。

身頃　後裏二枚、前布二枚、前劇布一枚。

袖口及び襠布　紐布。

縫方　馬乘袴も襠無袴もその仕立方は何れも前に說明した袴と變りません、たゞ紐の接ぎが少し多くなりますから、なる可く接ぎ目を目立たない位置に入れる樣に工夫することが大切であります。

上手な布の繼ぎ方、接ぎ方について

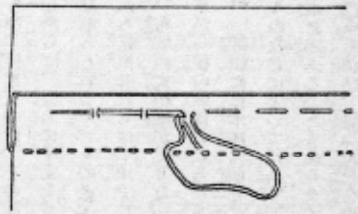
和服でも洋服でも、着物を長く保たせるのには、布地の繕ひ方が上手でなければなりません。着物の膝がぬけたり、袖口、袂の先などが痛んだり、大抵損づる部分は定つて居りますが、それを體裁よく繕つたり、繰り廻したりすることが上手でしたらば、一枚の着物でも、いつも新らしい物と同じやうに、若返へらせて三ふることが出來るものです。以下その場合々々による繼ぎ方、接ぎ方をお話いたしませう。

繼ぎもの、接ぎものは、その技巧を上手に練習することは勿論大切でありますが、それと同時に損じた箇所を見出したらば、直ちに手當をするといふことが尙更ら大切のことであります。小さい虫孔だから、一寸した鉤ざきだからと云つて、そのまゝ放つて置きましたらば、いつか知らない間に、大きな孔となつてしまひます。ですから見出したらば、すぐにその時機劫がらず に適當な手當をすることが必要です。

また、布地の丈や幅が足りない場合などに接ぎをして一つの役に立たせるとか、また物によつては、その接ぎや繼ぎが一種の裝飾となるやうに工夫することも必要でせう。

糸と針　繕綴には木綿と絹とにかゝわらず針は細目の針を用ひ、糸は地色と同色の極く細い糸を用ひます。然し色ものなどによつては全く同色の糸を手に入れることが困難の場合もありますので、そんなときにはその布の繼糸を用ふることもあります。また、模様ものなどで各種の色が用ひてある場合には、一番多く用ひられてゐる色糸を撰び、異つた色合の處へは針目を加減して多く出さないやうに注意しながら繼いでゆきます。

片返しの図



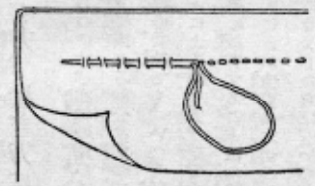
第八圖

片返

接ぎ合せやうとする二布の布の縞目、布目をよく合せ、縫代一糎位として、極く細かい針目で縫ひ、平鏝をあてます。そして縫ひ込みを適宜な一方へ折り返し、上から隠し躾をいたします。

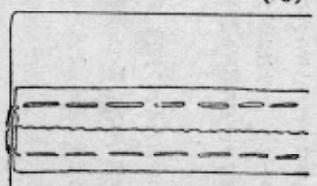
これは極簡單な接ぎ方ですが、木綿ものにも、絹物にも、非常に多く利用される仕方であります。

割り接ぎの図(い)



(ろ)

(は)



第九圖

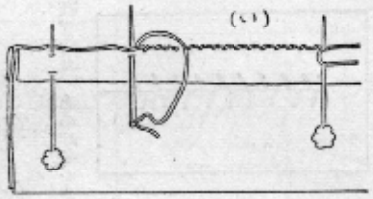
割り接

接ぎ合せる布の縞目、布目をよく合せ、出來るだけ小針に縫ひ平鏝をあてゝ縫ひ目を兩方へ割り、兩端に隠し躾をします。この縫代は矢張り一糎位にいたします。

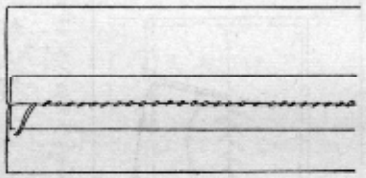
この仕方はどんな地質のものでも接ぐ場合には用ひられます。

掛け接ぎの図

(い)



(ろ)



第十圖

掛け接

接ぎ合せる布を、各七粍位の縫代として各々裏側へ折り、布目を通して折山を揃へて縞柄を叮寧に合せ、共色の糸で山から糸目二本ぐらゐの深さに、手前から向ふへと眞直ぐに針をぬきます。この接ぎ方は、針を決して斜にならないやうに、出來るだけ細くすれば、手際よくゆきます。

縫ひ終りましたらば、縫目を開いて鏝をかけます。これは表面に接ぎの見える場合にするもので、羽織の衿とか、着物の袖とか、表になる處に用ひます。

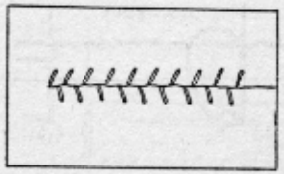
用ひます糸も、その布の横糸を抜いて見て丈夫でしたらば、それを使ふのが一番です、上手に接ぎますと、一

寸位見たのでは接ぎ目を見出すことが出來ない位の程度に接ぐことが出來るものです。

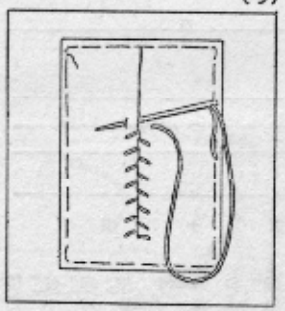
突合せ接

この接ぎ方は、布の切端をそのまゝ二枚突きあわせますので、端に凹凸があると、奇麗に出來ませんから、布の端を正しく裁ちきり、四粍位の深さで、約四粍の距りで第十一圖のやうに接ぎ合せます。針は、一方の布端の裏から表へ出して、これを向側の布の裏から再び表へ出します。これを交互にしてゆきます。

突合せ接ぎの図（い）



（ろ）



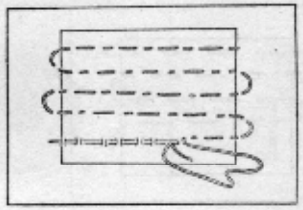
第十一圖

これは厚地の芯などの接合せに用ひられるものです。また、洋服地などのかぎざきの應急手當として用ひられることもあります。その場合には（ろ）圖のやうに、損所の後へ厚紙（辨書でもよろしい）をあてゝ、破れ目を平らにし、周圍を紙にぶつ〳〵と縫ひつけます。そして、共糸で前のやうに突合せて細かくかゞつて置きます。接ぎ終りましたらば、端書は除いておきます。勿論本式の方法ではなく、臨時の手當法として用ひこともあります。

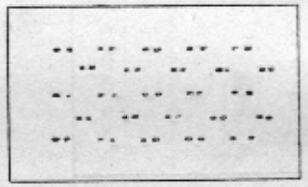
色紙繼

和服の繼ぎ當には一番多く利用される方法です。地質の損じた處、自然に薄くなつた處に、共布の布目や、縞目を合せて、それよりは稍大き目の布を當て、周圍を鞵でおさへ、共色の細い糸で刺してゆきます。

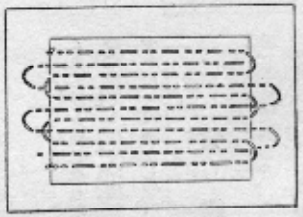
色紙繼ぎの図（い）



（ろ）



（は）



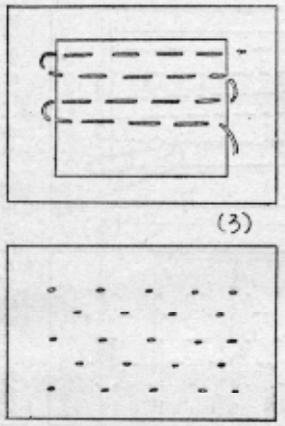
第十二圖

針目は木綿ものは二目落し、（表へ小針が二目出るやうに）絹物のときは三目落し（三目表へ小針を出す）にして、第十二圖（い）のやうに上の段の大きい針目の處へは次の段の小針がゆくやう段毎に交互に繼ぐのを普通としますが、晶物により、また傷みの程度によつて、二目、三目の落し方は適宜に用ひます。尚傷みのひどい處は（は）圖のやうに細かく、間も狹くさしますが、さほどでない處は荒くても差しつかへありません。然し表へ出る針目はいづれ

の場合でも叮寧に目立たないやう細くいたします。縞や模様の上へ、針目が出ると、どうしても繼ぎが目立ちますから、出來るだけ地色の處へ針目が出るやうに工夫することも必要です。

尚糸はつれないやうに注意し、兩端に幾分の弛みを見て置きます。絹物は共糸か羽二重糸、木綿のときは二子糸を用ひます。

刺繼



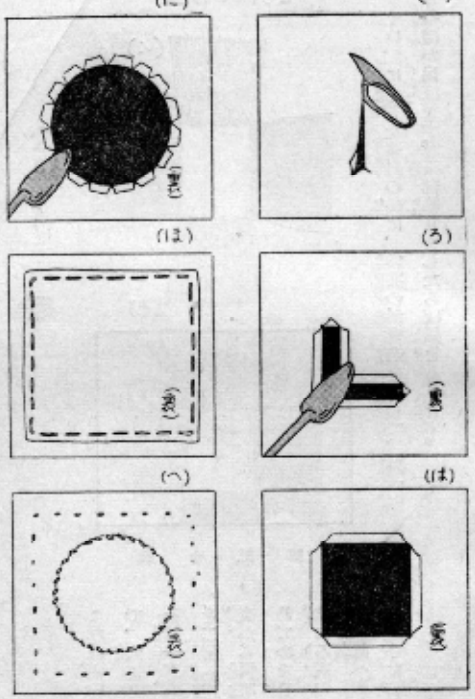
第十三圖

これも前と同じやうな處に用ふるもので、その繼ぎ方も殆で同樣ですが、たゞ第十三圖のやうに一目おとしで刺します。

穴繼ぎ

布に燒穴、鉤ざき、などの出來たのを上手につぐことは一寸六つかしい事ですが、また非常に必要な技術です。

鉤裂のつぎは、眞一文字の場合には、第十四圖(い)のやうに、裂目の兩端へ、四粍位の切り込みを入れて（この場合は圓のやうに鋏を斜に用ふと、手際よく切れます）燒鏝で兩方へ伏代を折ります。



第十四圖

またろ(圖)のやうに、本當の鉤裂の場合には、矢張り角々へ前のやうに斜に切り込みを入れて各々鏝で伏代を折つておきます。

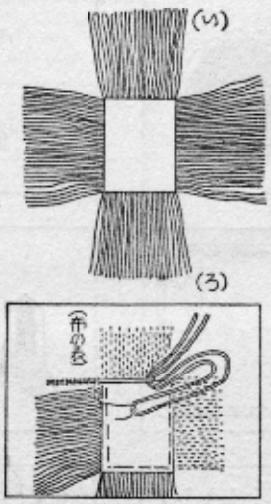
また四角の場合は(は)圖の如く、四角に切り込みを入れて四方に折り伏せ、丸い時には(に)圖のやうに、穴の周圍に五粍か六粍おきに切込みを入れ、伏代も四粍位として周圍にふせます。

かうして、穴よりも周圍一糎位大きめの共布をあてゝ、縞目、布目をよく合せて、(ほ)圖のやうに周圍を躾で

止め、表にかへして、穴の周りを出來るだけ目立たないやうにまつりつけます。(へ)圖は說明を解り易くするために、針目も大きくなつて居りますが、實際は針目の分らないやうに細かく、叮嚀に注意を要します。

をり繼

圖のごとをり



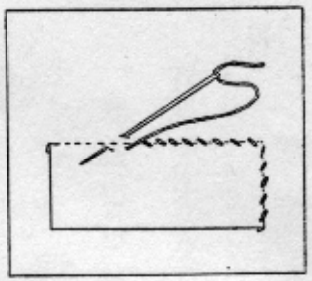
第五十圖

これは主に毛織ものに用ひるもので、穴よりも三糎位大きく共布を第十五圖(い)のやうに、四方の縁を二糎位解きましたら、これを表から損所へあてゝ周りを糸で止めておきます。

次に(ろ)圖のやうに別な糸を輪にして、針へ通し、これで地布の織目をすくひ、に通した糸針の輪に、當布の解き糸を通して、裏へ引きますと一寸見ても見分けの付かない位の巧みな補綴が出來ます。全部終りましたらば襞をとります。

ふせ繼

圖のごとふせ



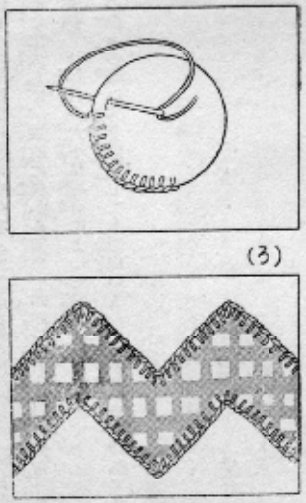
第六十圖

これは一名被せ繼ぎとも申しまして、傷んだ上から布を當て周りを出來るだけ細かく同色の糸でかゞる仕方であります。和服などにこんなことをしておきますと、いかにもぞんざいな見苦しい感じがいたしますが、これも應用のしかたで裝飾化させることが出來ます。子供服などに試みますと面白いものです。

普通には、洋服の裏などに多く用ひられて居ります。

かゞり繼

圖のごとかゞり



第七十圖

これは全面へ別布をあてゝ、織ぎそのものを一つの裝飾としたもので、工夫のしやうによつては決して繼ぎの感じなどはなく、苦心してつけた切張細工藝のやうに見えるものであります。子供上手な布の繼ぎ方、接ぎ方について

婦人畫報

の洋服とかエプロン、袖無しなど、すべて子供ものには面白い趣向であると思ひます。第十七圖のやうに適當な色合の布を、色々の形に工夫して、損所に裏から當て、四粍位の深さに内から外へと掬ひ、二粍位に左方から右方へとかゞつてゆきます。針目の大小は場合によつて適宜にいたします。このかゞり方は、一色のみでなく、數種などの色々の掬ひ方を應用しても面白いものだと思ひます。かゞり糸も地の色合によつて調和をとります。

附

衣服の仕立方の急所と秘訣

羽織について

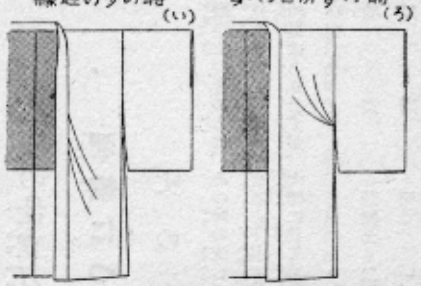
丈の定め方

羽織の丈のきめ方は、その時の流行で、長く着るときと、短い時とがありますが、一般に長すぎると背が短かく見えますし、短かすぎると下品に見えます。着る人々の各の好みにもより、又布地の地質にもよつて多少の相異はありますが、大體に於て着物の着丈の四分の三に四糎加へた位が適當です。その他の寸法も次の標準にいたします。

袖　丈　着物より二糎つめる。
同　附　同　一糎多く着ける。
同　幅　同　同　寸。

前身の皺のとり方

羽織の前身の皺は非常に見苦しく目立つものです。皺の寄り方にも種々ありますが、第一圖(い)のやうに、乳から下へかけて大きな斜皺の出るのは繰越しが少ない爲めですから、着物に繰越を付けない人でも一糊乃至二糊（體格によつて定める）の繰越しを必要とします。特に肥滿した體格でしたらば四糊位にします。又後幅は着物と同寸に、褄幅の上部を痩せた人は心持狹く、肥えた人は少し廣目にします。身八つ口は十糊位が適當です。身八つがあまり多くあき過ぎると(ろ)圖のやうに、身八つの處がだぶついて皺やたるみが出ます。



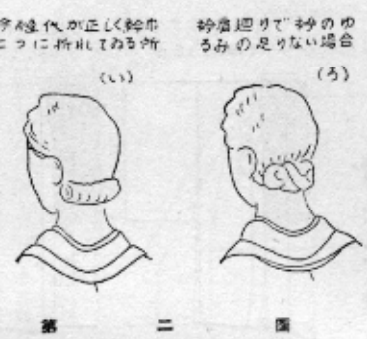
第一圖

衿のぬひ方

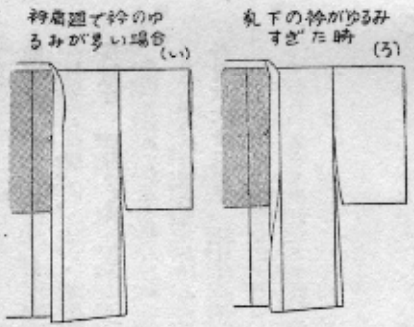
羽織の衿はやゝもすると、拜み衿になつたり、そり衿になりたがるものですから左の諸點に注意いたします。

衿附縫代は三つ衿の所を一糊とし、衿肩廻りの所は八糊、それから褄上三十糊までは八糊、裾では身頃縫代二糊にして褄から三十糊の間で斜にします。

この三つ衿から衿肩廻りの間で衿のゆるみが足りないと第二圖(い)の如く衿幅が裏二つに折れないで、(ろ)の如くに衿付が見えて來ます。それから乳の上四糊迄は心持ち衿をゆるめにします。然しあまり弛み過ぎると、第三圖(い)のやうに肩から衿幅が廣くなつて、衿付が見えて恰好が悪くなつたりします。弛みが不足すると衿肩廻りから前身へかけて硬な皺が出たり、衿が三つ衿の處で二つに折れません。



第二圖



第三圖

衿の返へりをよくする仕方

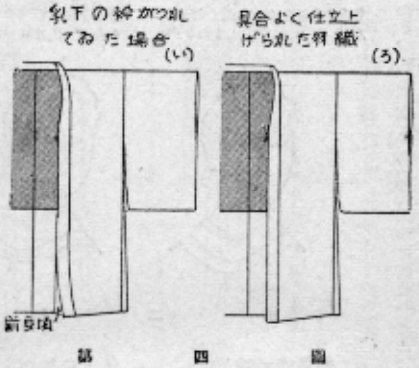
羽織の衿はやゝもすると、拜み衿になつたり、そり衿になりたがるものですから左の諸點に注意いたします。

衿附縫代は三つ衿の所を一糊とし、衿肩廻りの所は八糊、それから褄上三十糊までは八糊、裾では身頃縫代二糊にして褄から三十糊の間で斜にします。

この三つ衿から衿肩廻りの間で衿のゆるみが足りないと第二圖(い)の如く衿幅が裏二つに折れないで、(ろ)の如くに衿付が見えて來ます。それから乳の上四糊迄は心持ち衿をゆるめにします。然しあまり弛み過ぎると、第三圖(い)のやうに肩から衿幅が廣くなつて、衿付が見えて恰好が悪くなつたりします。弛みが不足すると衿肩廻りから前身へかけて硬な皺が出たり、衿が三つ衿の處で二つに折れません。

乳の上下八糊の間は、衿を釣加減にし、乳から下は褄から二十糊乃至二十二三糊までは平に附け、裾から二十

二三糎までの間は二糎位衿を弛ませて附けます。乳の下で衿の方が弛みすぎるとろのやうに衿先が起きて来ます。また身頃が弛み過ぎると第四圖（いのやうに身頃が出て来ます。



第四圖

前下り　また、衿は前下りの縫ひ方にもよることが多いので衿付から四糎位の間で、裏身頃を充分弛めておきます。

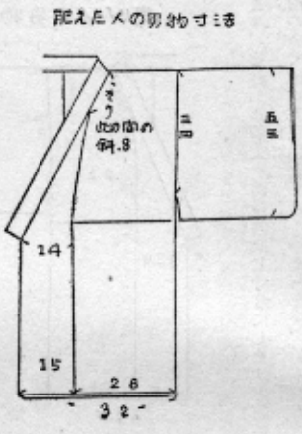
襟附け　襟附でも衿の具合は非常に異ります。襟の方でも裏身頃を弛めて置きませんと裏がり込んで表の返りが多くなりますから裏身頃を弛めかげんに襟をつけます。

針目は大き目に　針目は心持ち大きめに縫ひ、糸のつれないやうに充分に注意します。ことに袷羽織の衿附は四つ縫ですから、あまり細針だと半襟をかけてもきれいに仕上りません。

着物について

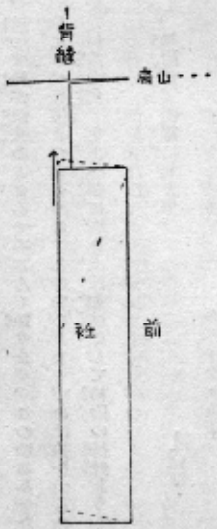
肥えた男物長着

肥つて首の短いお腹の大きい人の寸法は第五圖のやうに後幅を三二糎、前幅を二八糎にして、裾口から七〇糎位まで前幅を真直ぐにします、そして衿肩明から衽下りの標までの間で前幅の斜を八糎にして、下から七〇糎位真直ぐにした所から衽下りの標までの間で前幅の斜をゆつくりと少し外側に丸味をもたせてつけます。かうしますと圖のやうにお腹の出てゐる所で斜がゆつたりとつきますので前の合さりが宜くなります。



第五圖

なほ衽下り寸法も衿の合さりがよくなるやうに普通より少しつめて一九糎にします、そして衿肩明は普通より四糎大きく裁ち切り、三つ山縫ひ代は一糎二糎にし、衿肩廻りで衿をゆるめ加減に、袖先から八糎位下つた所と衿先から六糎位上つた所との間、つまり帯の下になる所で一糎位衿をつらせてつけます、これは前幅を裾から七〇糎上まで

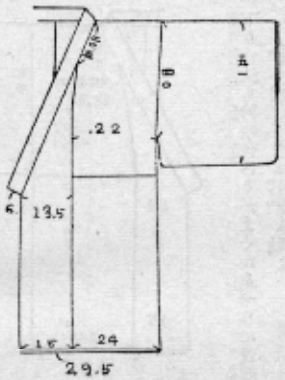


第六圖

眞直ぐにした爲に上部が急に曲りますので、隆つて衿が觀先のところでゆるんで餘ります、このゆるみをなくする爲めに一糎づらせて前を合せた時に衿が胸にぴつたりとつくやうにするのであります。なほ衿をつらせる時は第六圖のやうに衽布上部の角（衽の附でない方の角）を上へ斜に引き上げ加減にして衿附の待針をうちますと釣らせることが出來ます。

衿幅は出來上り五糎五粍を少しつめ加減にし、袖附は三四糎にします。

法寸物男の人た痩せ

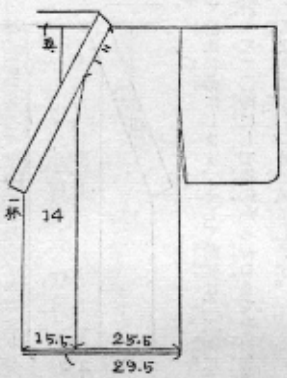


第　七　圖

痩せた男物長着

痩せて背が高く、自然前かゞみの人の着物は第七圖のやうに後幅で標準寸法より五粍つめて二九糎五粍に前幅を二四糎にします、このやうに前幅の寸法をつめます時によくあることですが、觀先から褄まで眞直ぐに曲りのない前幅になることがあります、それで脇縫を後の縫込より前の縫込を八粍多くして縫ひますと前幅も曲つて格好よくなり附の方で四、五粍脇より多くつまみます、衿も第五圖の時のやうにつらせ加減にします、衽幅、合褄幅は普通で宜しく、袖附は痩せた人は胸がうすく、すつぺりとしてゐます爲め胸のところがだぶつきますから胸幅を狹くきつちりとさせる爲めに衽をつける時に袖附の所で袖幅をはかつてせまくすると同後に袖附寸法を普通より二糎少なくつけます、臨つて人形が長くなりますから袖丈を短くします。

法寸物女の人た肥



第　八　圖

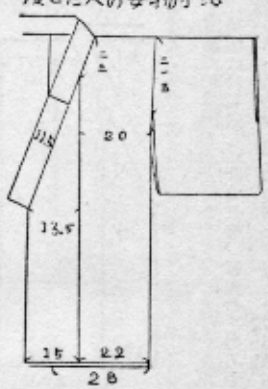
肥えた女物長着

肥えて肩の厚い體格の女の人の着物の仕立方は、衿肩明を普通寸法より少し多く一〇糎五粍の裁ち切りにし、後幅は二九糎五粍に、肩で繰越を三糎にします、前幅は肥えた男物の時のやうに襟口から衿下寸法の所まで眞直ぐにし、衿肩明から衽下りの標までの斜を六粍にして、その點と下から八〇糎上つた所の前幅の標との間で矢張り男物の時のやうに、ゆつくりするやうに少し丸味をつけて褄をつけます、衿附も男物と同じ方法で、三つ衿山の縫ひ代は二糎にし、衿幅は衿肩廻しの間で五糎、觀先のところで五糎五粍、衿先の所で一杯になるやうに被衿にします。肥えて肩の厚い體格の人には廣衿よりもこの方が胸がすつきりと形よく見えます、なほ衽下りは肩の繰越の山から

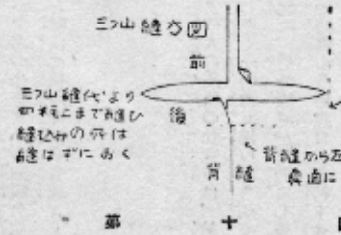
二一糎にし袖附は後より前を二糎ほど多くつけます。

痩せた女物長着

痩せてすつきりと首の長いなで肩の人の着物は身幅を普通よりつめて、後幅を二八糎にし、肩幅は普通より四糎つめその分を補幅で補ひ、そこから肩明の角までは自然に丸味をつけて衿をつけます。



第九圖　痩せた人の女物寸法



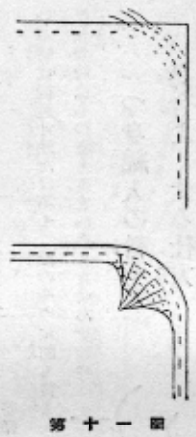
第十圖

出して衿は普通にします、そして前幅は二二糎にし胸をきつちりさせる爲め抱幅を計つて二〇糎にして抱幅から裾口までを自然の斜にします、袖附も普通の體格の人よりは少しつめ加減にします。

衿幅は衿と胸にやはらかみの出るやうに廣衿にし、繰越は別につけ寸に三つ衿山で三糎縫ひ込むやうにします。なほ三つ衿山で二糎以上縫ひ込む場合には縫ひ込が中でつれますから第十圖のやうに縫ひ代より四、五粍上まで背縫をし、その上は縫寸におきます。衿附の時は背縫から左右四糎位づゝ位は眞直ぐ縫ひ、そこから肩明の角までは自然に丸味をつけて衿をつけます。

袂の丸味の上手な作り方

袂の丸味を上手に作るには丸味の間は他より針目を少し小さく、糸は少し釣り加減に縫ひます。そして縫目から四、五粍離れた外で丸味の間だけを一回縫ひ、今度はそれに三粍位づゝ離してもう一、二度縫つてその糸をひきしめて折目が角ばらないやうに襞をよせて鍛をかけます。この縫ひ縮めの針目は第十一圖のやうに必ず針目を揃へることが秘訣であります。針目がよく揃ひますと襞が正しく取れて出來上りがきつと角ばりません。元禄袖の丸味もこの要領でいたします。

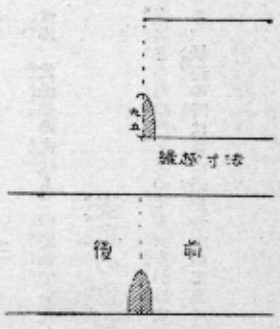

第十一圖

表裏の色が極端に違ふ時の裁縫の仕方

表裏どちらの色を使つても一方が目立つて見苦しいやうな場合には、はじめ表の糸で表にだけ襞をしておき、裁縫の時は裏の糸をつかつて裏にだけ針を出し、表は中の縫込だけを抄つて縫ちます。

男長着の衽にも揚を

普通には男物は身頃には内揚をしますが、衽は身頃の揚をした丈に合せて裁ちます。これを衽にも揚をするやうに丈を長く裁ちますと仕立直しの時都合が宜しい。



第十二圖

繰越をつける着物の衿肩明

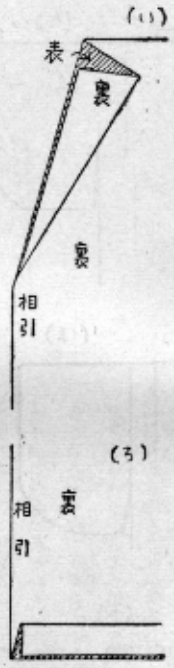
普通には衿肩明は眞直ぐに九糎五粍程を入れますが、繰越をつける時は繰越寸法だけ第十二圖のやうに前も後も（四枚一緒に）刳り落してしまひます、かうしても仕立てなほしの時はちつとも差支へありません。

一つ身綿入の衿を具合よくする仕方

一つ身の綿入で棒衽の時はどうしても衿が厚くなつて仕末が仕苦いですが、その時は第十三圖のやうに衽の縫込を前身の方へ折り返しておきますと差分衿を薄く仕立てることが出來ます。

第十三圖

無双織袴の仕立方



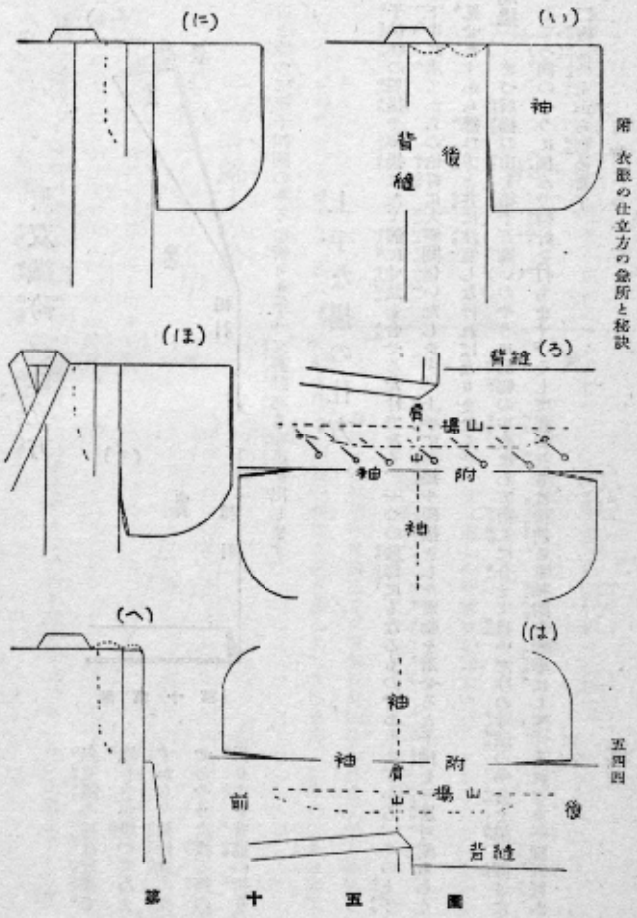
第十四圖

無双織の袴は表裏で織り方が違つてゐますから、裾仕立に見せるやうに投と褶の折り方を普通の折り方と變つて第十四圖のやうに折ります。又裏腰布も布裏を出します。

上手な揚の仕方

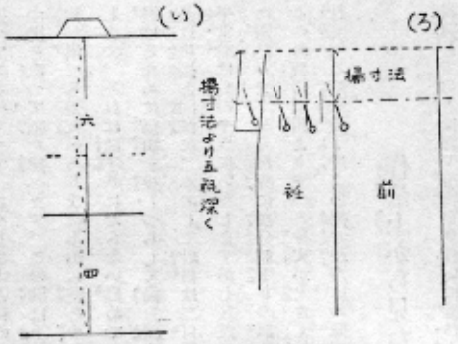
子供物の肩揚や腰揚はたゞ體に寸法を合せるだけでなく、一つの裝飾にもなるものでありますから、その上手下手は着てからの恰好に大變關係いたします。上手に肩揚や腰揚をした着物を着せると子供を一層可愛らしく見せますから縫ひ方と共に注意しなければなりません。

肩揚　まづ肩揚の山を第十五圖いのやうに肩幅の中央にして耐丈に合せて長いだけの寸法の半分を揚の深さにしてろ圖のやうに摘んで待針を打ちます。そして揚の長さは後前とも袖附を標準にして、それより一糎五粍か二糎位上から初めます。



第十五圖

深さは全部同じ深さにしないで圖のやうに前は肩から下までの長さの三分の二位のところから深さの三分の一位を斜に淺くし、後は下の一針で三粍か四粍位を淺くします。そして糸は二本で針目は二目落しにして、はじめ終りとも糸をきちんとしめてしまひますと着てから引張られて揚が起きるやうなことがあり又布地をいためることにもなりますからそれを防ぐためであります。(ろ)圖のやうにゆるくしておきます。この糸を


(い)
(ろ)
揚す
揚す
揚す
前
袖
揚す
揚す
揚す

山を定めてそれから揚寸法だけを摘んで(ろ)圖のやうに待針を打ちます。この時背、脇、袖附の縫目はきちんと揃へて針を打ちます、さうしますと衽のところで一方の幅が廣くなつて衿が出ますから圖のやうに衽に二つ三つ襞を取つて幅を揃へます。この襞は上前の方だけは衿を揃へる爲めに襞を餘計取りますが下前の方は少し位衿が出ても差支へありませんから襞を少なくいたします。そして深さは衽幅の間で婦の方を五粍だけ深くいたします、それは前下りにならない爲めであります。かうしますと表に出る針目が五粍斜になりますからそれを避けるために揚山を少しづらして揚を深くする仕方にもいたします。

袖は肩揚と同樣に二本にして針目は二目落にします。

平常着は右のやうにいたしますが七五三のお祝着などの時は胸に縮緬を入れたり又下着の揚があつたりして前に着込みますから反對に幾分前下りの氣味に揚をしませんと餘り前が上つて見苦しくなります。

このお祝着は慣よりすつと身丈が大きく仕立てられてありますが餘り長い着物は揚の恰好が悪くなりますから仕立てる時大體丁度よい揚寸法だけの餘裕を見てその餘分は内揚に仕立てます。

作法上から見た着物の着方

裁縫をする者はたゞ着物をきれいに縫ひ上げるといふだけで完全だといふことは出來ません、美しく縫ひ上げた着物を上手に又儀禮にかなつたやうに着る事の心得も一通りなくてはなりません。

和服は次の三樣に別けます。

1、平常着　平常着は衛生的である上に日常の仕事をするのに最も便利なものでなければなりません。然し衣服は自分の身に着けるものではありますが、人に對して不快の念を起させないやうにきちんとしなければなりません、殊に婦女子は着物によつて少しでも心を引締めその美しさを增すことにつとめ、家の中を明るくするやうに心掛けることも大切であります。地質はどんな物でも丈夫であつて經濟的な物を選び、色合柄合等は各人に相當する物を選ぶのが宜しい。

2、外出着　外出の時は多くの人の目に觸れるばかりでなく、いつ目上の知人に會ふやうのことがあるかも知れませんから、平常着よりも幾分心して着用しなければなりません、餘り時の流行に囚はれることはその人の品格を落すものでありますが、さりとて又餘りにも舊式な服裝はこれ又人目についてあまり見よいものではありませんから、それ〴〵の身分に相應した服裝をしなければなりません。

3、儀式用　我が國では儀式の時は昔から嚴格な服裝規定がありますが、たゞ今は宮中の諸儀式にだけ用はれて一般は大層略されて參りました。

男子　普通男子の儀式服は羽織袴であります。正式には着物と羽織は黒の五つ紋で、地質は盛潮羽二重で、袴は縞のものを使ふことになつてゐますが略式には着物は縞を用つて、羽織だけ黒の五つ紋を着ても宜しいのです。又袴を着用する時は角帶をつかふのが正式であります。

下着は白が正式でありますが、暗して若い人々は淺ねずを、老人には茶色を用ひます。これに重ねる襦袢も地質は羽二重で色は同色が似寄のものを用ひ、衿は下着と同色の羽二重を掛けます、足袋や羽織の紐は白であり

ます。

女子　男子と違つて女子は正式には羽織を着ません。吉禮には裾模様のついた着物を用ひ、地質は矢張り男子と同様に羽二重が正式でありますが、只今では略してちりめんの黒五つ紋の裾模様を用ひます。色の紋附はなほ略式のもので、小紋とか紬交着などはこれにつぎます。之等の時に用ひる帯は厚地繻の模様のある丸帯を用ひます。

凶禮の場合は地方によつて多少の違ひがありますが、一般に近親者は白無垢を用ひ附屬品も白、その他は黒無地紋附を用ひ、その時の附屬品、帯上、帯〆、草履などは多く黒を用ひます。

汚點拔の仕方

汚點の新らしいものならば大抵水でとることが出來ますが、古くなつて然も何の汚點か判らない物はまづ最初に揮發油で拭いて見ます、それで取れません時はアルコールで拭いて見ます。脂肪類ならばこれで大方取れる筈ですが、それでもなほ取れない時は、アンモニア、次は石鹸、次は醋酸、蓚酸といふ順に試して拭いて見ます。それでもどうしても取れないやうな汚點はもう素人の手にかけると却つて生地をたいめるばかりですから專門家の手に任せます。そしてこれ等の汚點を取る時には、板の上にタオルなら二三枚、普通の木綿地なら四五枚位の厚さに折つて敷いたその上に、汚點のついた布をのせて、それ〴〵の藥品や液を脱脂綿かガーゼにしめして拭ひます、地質によつては齒ブラシなどを使ふこともあります。

汚點の性の判つた物は次の方法で試します。

脂肪、油類　ベンヂンで大概取れますが、若し取れない時は一寸温めてその上に白布をおいて上からアイロンをあてゝ吸ひ取らせます。油類はキハツかテレビン油で洗ひ、あとをベンヂンで洗ひます。

青インク　馬鈴薯を卸したものを度々とりかへては塗つて水洗します、又牛乳でも宜しいし、醋酸とアンモニヤとを交互に塗つても宜しい、白い物は漂白すればよく取れます。

赤インク　アルコールで洗ふか薄か鹽の煮汁で洗ひます。

醤油　醤油や食物の煮汁など大抵石鹸の薄い液で取れます、又大根卸の汁も宜しい。

酒、ビールの類　アンモニヤ水で拭くか石鹸水で洗へば大抵取れます。

乳　まづベンヂンで洗ひ、乾いてから細砂の薄い液で洗ひます。

汗、尿　汗と尿は同じ性質ですから同じ方法でします、アンモニヤを薄めて液を作りこれで汗のしみの箇所を拭ひます。

墨　ご飯に粉石鹸を少しまぜて練つたものをぬりつけて揉むか、米糠七に重曹三の割合で混ぜて水でどろ〴〵に煉つた物を汚點の上に塗つて暫くそのまゝにおいてから、棒で徐かに叩いても宜しい。又小鳥の糞をどろどろに溶いて墨の部分の兩面から塗つて一時間位おいてから水洗して更に石鹸洗をします。

血　少しばかりの時は口に水を含んでそれで洗つても取れます、又大根おろしの汁をつけても宜しい、血は決してお湯につけてはなりません、必ず水でいたします。

錆　金物の錆は蓚酸の液（五勺の湯に蓚酸茶匙一杯）で除れます。

泥はね　よく乾いてからビロードのやうな軟い布で擦つて、その後に汚點が殘つてゐましたらベンヂンで拭きます。

果物の汁　新らしくついた汚點ならば薄い鹽水で除れます。

すべて汚點を脫きましたらあとをよく水濯ぎして、いろ〳〵た藥品の殘らぬやうにします。直接水につけられない物は濡れタオルで叩くやうにして取ります、さうしてアイロンをかけるか、小さい部分ならば手伸で仕上げます。

昭和九年三月二十五日　印刷
昭和九年四月一日　發行

現代裁縫全書奥附

定價金參圓五拾錢

著者　大妻コタカ
東京市本郷區元町一丁目十三番地

發行者　橘口景二
東京市神田區鎌倉町二十番地

印刷者　川瀬丙午郎
東京市本郷區元町一丁目十三番地

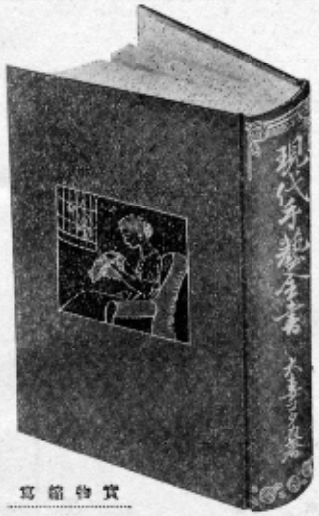
發行所　研文書院
電話小石川〇一九五番
振替東京五九五七五番

◀文部省認定▶

現代手藝全書

大妻技藝學校長
大妻高等女學校長
大妻コタカ先生著

菊判總クロース裝幀箔美
紙質優良六百十五頁
定價金參圓
特價金貳圓四拾錢
送料二十二錢

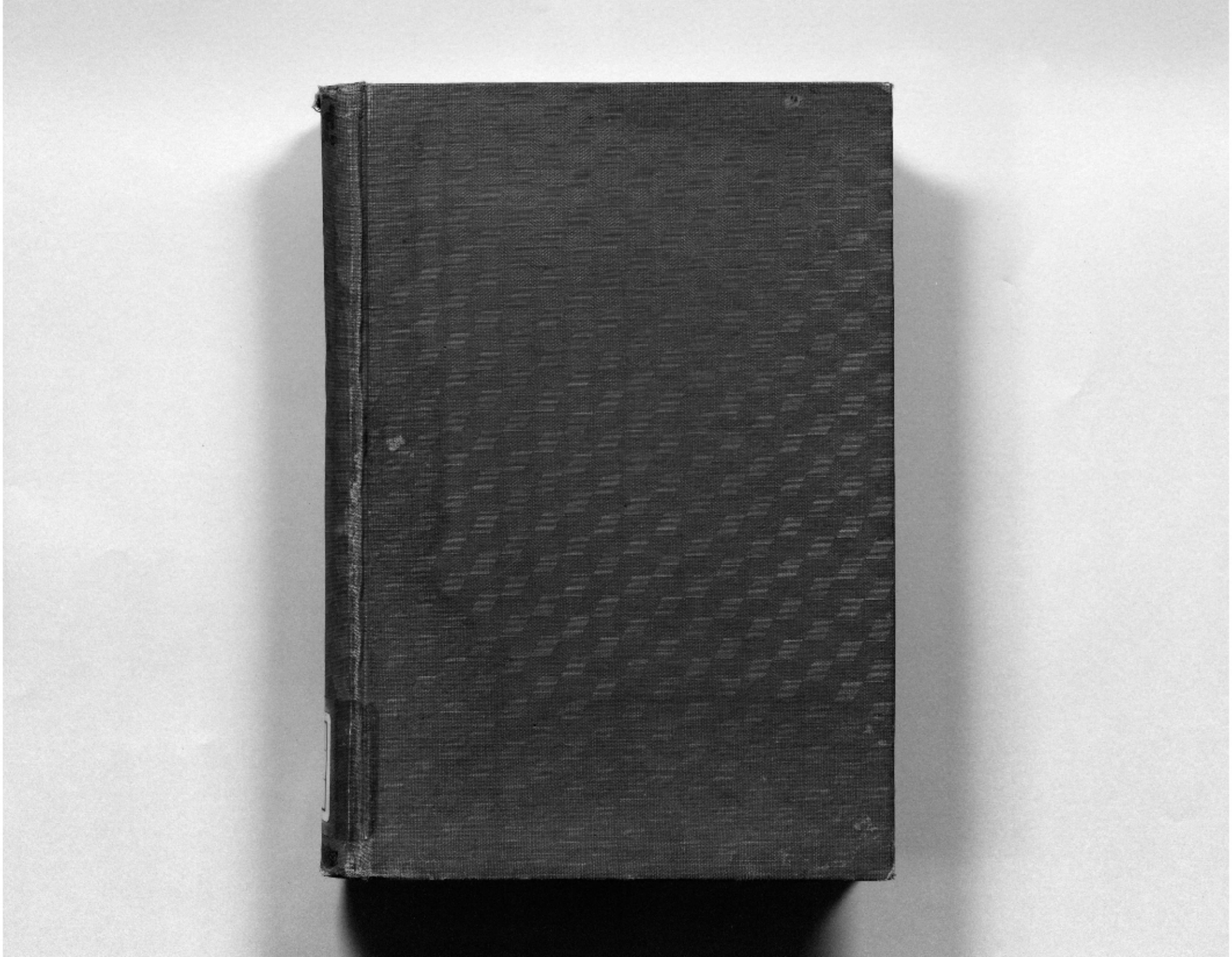


實物縮寫

文部省認定の光榮に浴せる本書は教師にも獨習者にも絶好の親切な參考書である

本書は編物・刺繍・摘畫・縫細工・人形細工・折紙水引其の他手藝の各科に渉りて、初歩の技術から其の應用に至る迄、著者多年の研究と教授上の經驗とに基き、一つ一つ實物を作りながら、要所々々には無慮一千四百の圖解を施して親切叮嚀に記述せるもの、其の場限りの無責任な雜誌の附錄等と異り組織的に統一せるものなれば、初心者には絶好の師友であり、相當心得ある方は本書によつて、其の奥儀迄極める事が出來る。

文部省認定の光榮に浴せる事實は、本書の内容を最も雄辯に證明してゐる。

鯨尺をメートル尺に換算した表

一分	0.4	二分	0.8	三分	1.2	四分	1.5	五分	1.9	六分	2.3
七分	2.7	八分	3.	九分	3.4	一寸	3.8				
一寸一分	4.2	一寸二分	4.5	一寸三分	4.9	一寸四分	5.3	一寸五分	5.7	一寸六分	6.1
一寸七分	6.4	一寸八分	6.8	一寸九分	7.2	二寸	7.6				
二寸一分	8.	二寸二分	8.3	二寸三分	8.7	二寸四分	9.1	二寸五分	9.5	二寸六分	9.8
二寸七分	10.2	二寸八分	10.6	二寸九分	11	三寸	11.4				
三寸一分	11.7	三寸二分	12.1	三寸三分	12.5	三寸四分	12.9	三寸五分	13.3	三寸六分	13.6
三寸七分	14.	三寸八分	14.4	三寸九分	14.8	四寸	15.2				
四寸一分	15.5	四寸二分	16.	四寸三分	16.3	四寸四分	16.7	四寸五分	17.	四寸六分	17.4
四寸七分	17.8	四寸八分	18.2	四寸九分	18.6	五寸	19.				
五寸一分	19.3	五寸二分	19.7	五寸三分	20.	五寸四分	20.5	五寸五分	20.8	五寸六分	21.2
五寸七分	21.6	五寸八分	22.	五寸九分	22.3	六寸	22.7				
六寸一分	23.1	六寸二分	23.5	六寸三分	23.9	六寸四分	24.2	六寸五分	24.6	六寸六分	25.
六寸七分	25.4	六寸八分	25.8	六寸九分	26.1	七寸	26.5				
七寸一分	26.9	七寸二分	27.3	七寸三分	27.7	七寸四分	28.	七寸五分	28.4	七寸六分	28.8
七寸七分	29.3	七寸八分	29.6	七寸九分	29.9	八寸	30.3				
八寸一分	30.7	八寸二分	31.	八寸三分	31.5	八寸四分	31.8	八寸五分	32.2	八寸六分	32.5
八寸七分	33.	八寸八分	33.3	八寸九分	33.7	九寸	34.				
九寸一分	34.5	九寸二分	34.8	九寸三分	35.2	九寸四分	35.6	九寸五分	36.	九寸六分	36.4
九寸七分	36.7	九寸八分	37.1	九寸九分	37.5	一尺	38.				
一尺	38.	二尺	76.	三尺	114.	四尺	151.	五尺	189.	六尺	227.
七尺	265.	八尺	303.	九尺	340.	一丈	379.				
一丈一尺	417.	一丈二尺	455.	一丈三尺	515.	一丈四尺	530.	一丈五尺	568.	一丈六尺	606.
一丈七尺	644.	一丈八尺	682.	一丈九尺	719.	二丈	757.